

仙台市文化財保護監査委員会

茂 庭

1983年3月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

仙台市文化財調査報告書第45集

も

に わ

茂庭

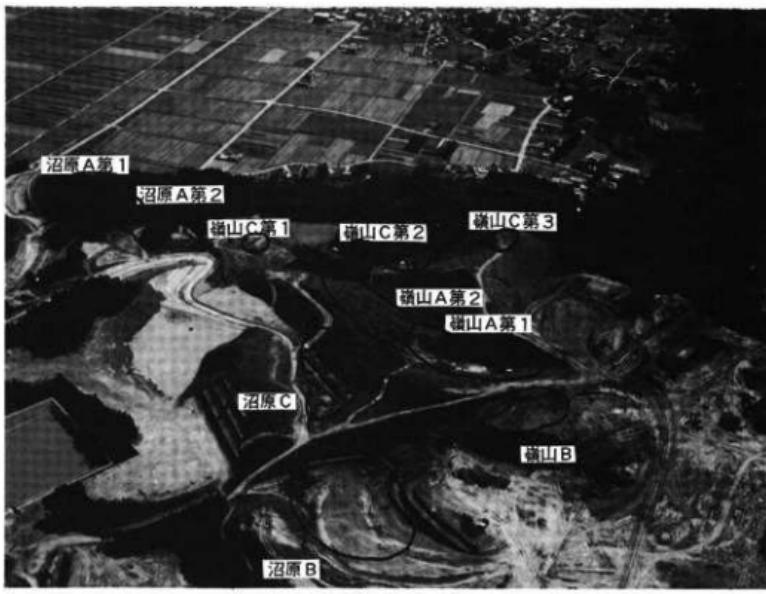
茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告

なし 梨 れり	A	跡
ぬま 沼 ぬま	A	跡
ぬま 沼 ぬま	B	跡
みね 嶺 みね	C	跡
みね 嶺 みね	A	遺
の 野 の	B	遺
はら 原 はら	C	遺
はら 原 はら	A	遺
やま 山 やま	B	跡
やま 山 やま	C	跡

1983年3月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

表紙題字 藤井 翠 筆



茂庭造成団地遺跡群航空写真（北西上空より）



梨野A遺跡 2号住居跡



岩山C遺跡 製鉄遺構

序 文

名取川の中流にある小さな河谷盆地、ここ茂庭は、古来、二ツ越え・笹谷越えや閑山越えとの連絡路、茂庭道等の街道筋にあって、物資移入の中継地として伝え聞く、由緒深いところであります。「仙台領・古城書上」という古書には茂庭氏の居城と伝える茂庭東館、けんとう城、峯館、茂庭（西・大・小）館等の遺跡もあって、この地は、さながら中世の世界を髣髴させるところともなっています。

このようなここ茂庭地区に、昭和48年、仙台市は、将来の人口増加や住宅難解消に備えて、新しい住宅団地の造成計画を立案し、生出集落の北方、標高100～200m内外の丘陵森林帶約130haが対象となりました。仙台市開発局と同教育委員会は再三にわたる協議を重ね、昭和51年、文化財分布調査、昭和53年、その予備調査を実施、そして、昭和54～57年の3ヶ年を費やす本調査・整理調査となったのであります。調査の結果、とりわけ、梨野A遺跡は縄文時代中期頃の住居跡が良好な保存状態で発見されるに至り、文化財保存活用の立場から、約4,000m²については、このニュータウンのコミュニティーパークとして保護・保存・活用に資するということで協議が整い、本市初のサイトパークの誕生となったのであります。

さて、本報告は、茂庭ニュータウン建設に伴うこれまでの発掘調査の成果を詳細にわたってまとめ上げた、貴重な記録保存のための報告書であります。文化財の保護・保存・啓発に大きく貢献するものと確信してやみません。これまでの発掘調査・整理作業に係わっていただいた大勢の方々をはじめ、御助言、御指導をいただきました学識者の方々に対し、深心なる感謝と御礼を申し上げますとともに、本書が大いに活用され、文化財保護・啓蒙と愛護精神向上の一助となることを念じて序とする次第であります。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は仙台市茂庭字梨野東、大堤、立石、嶺山、沼原地区茂庭住宅団地造成工事事業に伴う梨野A遺跡、沼原A遺跡、沼原B遺跡、沼原C遺跡、嶺山A遺跡、嶺山B遺跡、嶺山C遺跡発掘調査に関する本報告書であり、すでに公表された略報告書に優先するものである。尚、梨野C遺跡に関しては昭和55年度略報(仙台市開発関係遺跡調査報告T)をもって本報告とした。
2. 報告書作成のための整理は佐藤甲二、柳沢みどりが担当し、斎野裕彦、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗、荒井格がこれを補佐した。また、直接整理に参加しなかった職員からも全面的な協力を得た。また、編集は、整理参加職員の協力を得て、佐藤甲二、斎野裕彦が行った。
3. 本文の執筆は佐藤甲二、斎野裕彦、柳沢みどり、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗が担当した外、下記の方々、諸機関にお願いした。(敬称・略)

梨野A遺跡の花粉分析	竹内貞子	斎藤報恩会自然史博物館
梨野A遺跡 6号ピット出土の接合資料	後藤秀一	多賀城跡調査研究所
梨野A遺跡出土土器底部圧痕	松岡敦子	
鉄滓分析	鶴田勝彦	宮城県立古川工業高校 教諭
骨の同定	高橋　理	東北大学考古学研究室大学院生
リン分析、C ₁₄ 年代測定	パリノ・サーベイ社	

上記部分外の本文執筆担当者名は文末に記した。

4. 報告書の作成は、埋蔵文化財整理室(仙台市福田町一丁目15の1、高砂公民館内)で実施し、下記のとおり分担した。

図面整理：佐藤甲二、斎野裕彦、木戸春夫、熊谷信一、叶文俊、佐藤栄作

遺物実測・トレース：柳沢みどり、佐藤甲二、斎野裕彦、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗、荒井格、後藤秀一、横山裕平、阿部朝衛、佐川敏行、佐藤広史、宍戸美智子、佐藤幸子、石黒伸一郎、斎藤秀寿、山田しょう、上藤久美子、柿沼敏朗、阿部多津子、吉田康子、山田富士子、松岡敦子、平照子、皆原美智子、千葉ひろみ、千葉きよ子、木村繁子、石垣純子、佐藤真貴、松本純子

造構写真：佐藤甲二、斎野裕彦、篠原信彦、渡部弘美、加藤正範、結城慎一

造構トレース：佐藤甲二、斎野裕彦、斎藤秀寿、大場拓俊、佐藤栄作、熊谷信一、相沢浩二、松木仁、大友透

遺物写真：佐藤甲二、田中則和、吉岡恭平、斎野裕彦、柳沢みどり、小島真弓

5. 発掘調査及び遺物整理において、下記の方々及び機関に助言協力を賜った。(敬称・略)須藤隆(東北大学助教授)、丹羽茂、阿部ひろし(宮城県文化財保護課)、庄子貞雄、山田一郎(東北大学農学部)、藤沼邦彦、岡村道雄(東北歴史資料館)、後藤秀一(多賀城跡調査研究所)、阿部朝衛、桑月鮮、梶原洋、佐川敏行、佐藤広史、柳沢和明、田中敏(東北大学大学院)、野崎準(金属博物館)、長谷川真(姫路市教育委員会)、長谷川徹(苫小牧市埋文センター)、横山裕平(石器談話会)、石岡憲雄(埼玉県立歴史資料館)、樋村友延(いわき市教育文化事業団)、宮城豊彦(東北学院大学講師)、松井章(奈良国立文化財研究所)、東北学院大学考古学研究部、鶴川勝彦、三宅宗義(古川工業高校教諭)、中島正一(多摩市教育委員会)、柏崎彰一(名古屋大学教授)、馬目順一、中川高、山口博之(山形市立第七小学校教諭)、本堂寿一(北上市立博物館)、佐藤庄一(山形県教育委員会)

6. 石器の材質の同定は仙台市科学館佐々木隆氏にお願いした。

炭化種子の同定は大阪市立大学教授粉川昭平氏にお願いした。

炭化材の同定は奈良国立文化財研究所光谷拓実氏にお願いした。

鉄滓の定光分析、化学分析、X線回折は東北金属工業株式会社にお願いした。

7. 本報告書中の土層の土色については「新版標準土色帳」(小林、竹原:1973)を使用した。

8. 本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は図中に示した。

9. 本報告書中使用の用語として

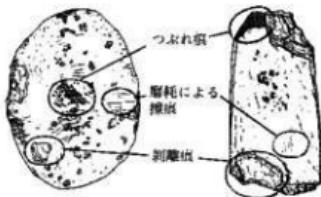
- (1). 「埋土」という用語は明らかに造構構築する際に人為的に埋め戻されたものに用い、それ以外のものに関しては「堆積土」という用語を用いた。
- (2). ローマ数字使用の層位名は基本層位を表わす。それ以外の層位名(算用数字、カタカナ等)は堆積土、埋土の層位を表わす。
- (3). 「復元土器」とは、①口縁部から底部まで連結するもの ②口縁部から体部の円周が連続して復元し得るものである。
- (4). 造構名の略語として1号住居跡は「1住」、1号土壙は「1D」、1号ピットは「1P」、1号風倒木痕は「1風」等とした。
- (5). 土器観察表内の()付法量は、図上復元数値である。
- (6). 土器接合表内の「+」は接合、「-」は同一遺物関係を示す。
- (7). 第Ⅷ～Ⅹ群土器の分類基準・説明・観察表・考察において「深鉢」「浅鉢」…は各々「深鉢型土器」「浅鉢型土器」の意味で使用しており他の器形においても同様である。

10. 本報告書中図版内の表現として

- (1). 方位は全て磁北を北としている。
- (2). 斜面部に関しては、傾斜角ほぼ30°を基準として、末溝のものは $\overline{\overline{A}}$ 以上のは、 \overline{A}

を使用した。

- (3). 「P」は土器、「S」は石器・自然礫、「F」は鉄津を表わす。
- (4). 転回して器形の復元実測を行ったものについては、中心線を1点鎖線で示した。
- (5). 磨製石斧・礫石器の実測図の範例



打撃痕の分類

11. 全資料は仙台市教育委員会にて一括保管してあるので活用されたい。

本文目次

序文

例言

調査経過	1
I. 調査に至る経過	1
II. 調査概要	2
立地と周辺の遺跡	4
I. 地形と地質	4
II. 歴史的環境	12
石器の分類基準	19
梨野A遺跡	25
I. 遺跡の立地	27
II. 調査の方法と概要	27
1. 調査の方法	27
2. 調査の概要	28
III. 基本層位	32
IV. 縄文時代の造構と遺物	35
1. ピット・土壙の分類基準	35
2. 土器の分類基準	37
3. 造構と造構内出土遺物	41
(1) 縄文時代早期	43
1号土壙	43
2号土壙	43
1号ピット	43
2号ピット	43
(2) 縄文時代中期・後期	45
1号住居跡	45
2号住居跡	54
1号埋設土器	80
2号埋設土器	80
4号ピット	89
5号ピット	89
4号土壙	96
5号土壙	96
1号炉跡	79
3号埋設土器	80
3号土壙	89
6号土壙	96
(3) 縄文時代晚期	105
7号土壙	105
8号土壙	112

9号土壙	112	10号土壙	112		
(4) 時期不明	121				
4号埋設土器	121	6号ビット	121	11号土壙	123
12号土壙	123	13号土壙	123	14号土壙	123
15号土壙	123	16号土壙	142	17号土壙	142
18号土壙	142	19号土壙	142	20号土壙	142
4. 出土遺物	156				
(1) 土器	156				
(2) 土製品	230				
(3) 石器	236				
V. 古墳時代の遺構と遺物	275				
1. 遺構と遺構内出土遺物	275				
2. 出土遺物	275				
VI. その他の遺物	278				
VII. 考察	279				
1. 繩文時代の遺物と遺構の分布 —出土土器を中心として—	279				
2. 繩文時代中期の土器	289				
3. 第Ⅶ・Ⅸ群土器—後期初頭の土器と前葉の土器—	296				
4. 繩文土器の底部	312				
5. 接合資料について —6号ビット出土の接合資料について—	320				
6. 出土石器について	323				
VIII. まとめ	324				
 沼原A遺跡	325				
I. 遺跡の立地	326				
II. 調査の方法と概要	326				
1. 調査の方法	326				
2. 調査の概要	326				
III. 基本層位	331				
IV. 遺構と遺構内出土遺物	335				
1. 繩文時代	335				
1号土壙	335	2号土壙	336	3号土壙	337

4号土壤	341	5号土壤	342	6号土壤	343
7号土壤	345	8号土壤	345	9号土壤	346
10号土壤	346	11号土壤	347		
2. 平安時代					348
1号住居跡					348
3. 時代不明					358
12号土壤					358
V. 出土遺物					359
1. 土器					359
2. 石器					359
3. 鉄滓					360
VI. まとめ					375
沼原B遺跡					
I. 遺跡の立地					377
II. 調査の方法と概要					378
1. 調査の方法					378
2. 調査の概要					380
III. 基本層位					381
IV. 造構					383
1号土壤					383
V. 出土遺物					384
1. 土器					384
2. 石器					384
VI. まとめ					391
沼原C遺跡					
I. 遺跡の立地					393
II. 調査の方法と概要					394
1. 調査の方法					394
2. 調査の概要					394
III. 基本層位					396

IV. 遺構	397
1号土壙	397
V. 出土遺物	401
1. 土器	401
2. 石器	401
VI. まとめ	404
嶺山A遺跡	405
I. 遺跡の立地	406
II. 調査の方法と概要	406
1. 調査の方法	406
2. 調査の概要	406
III. 基本層位	410
IV. 縄文時代の遺構と遺構内出土遺物	412
1号土壙	412
2号土壙	412
3号土壙	413
4号土壙	413
5号土壙	414
6号土壙	414
7号土壙	415
8号土壙	415
9号土壙	416
10号土壙	416
11号土壙	417
12号土壙	417
13号土壙	418
14号土壙	418
15号土壙	419
16号土壙	419
V. 出土遺物	420
1. 土器	420
2. 石器	420
VI. まとめ	425
嶺山B遺跡	427
I. 遺跡の立地	428
II. 調査の方法と概要	430
1. 調査の方法	430
2. 調査の概要	430
III. 基本層位	430
IV. 遺構	433

1号土壙	433
V. 出土遺物	435
1. 土器	435
2. 石器	435
VI. まとめ	438
嶺山C遺跡	439
I. 遺跡の立地	440
II. 調査の方法と概要	440
1. 調査の方法	440
2. 調査の概要	440
III. 基本層位	444
IV. 遺構と遺構内出土遺物	447
製鉄遺構	447
V. 出土遺物	461
1. 土器	461
2. 土製品	461
3. 石器・石製品	462
4. 鉄製品	462
VI. まとめ	473
分析・同定結果	477
沼原A・嶺山C・梨野各遺跡出土炭化材樹種同定結果	478
仙台市嶺山C遺跡出土鐵滓の分析調査	479
梨野A遺跡包含層の花粉分析	495
沼原C遺跡出土の骨片	504
梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC ₁₄ 年代測定結果	506
梨野A遺跡試料リン分析結果	507
周辺遺跡の表採資料	509
1. 門野山廻遺跡	510
2. 嶺岸遺跡	515

考察・まとめ	517
沼原・嶺山地区の層位関係と土壤・土壌群について	518
沼原A・嶺山C遺跡の土師器、赤焼土器、須恵器	540
茂庭造成団地工事地内遺跡群について	543

挿図目次

調査に至る経過			
第1図 仙台市域地図	1	第25図 2号住居跡出土石器(3).....	74
立地と周辺の遺跡		第26図 2号住居跡出土石器(4).....	75
第1図 地形区分図	5	第27図 2号住居跡出土石器(5).....	76
第2図 対象地区地形図	7	第28図 2号住居跡出土石器(6).....	77
第3図 対象地区地質図	9	第29図 2号住居跡出土石器(7).....	78
第4図 仙台市付近の地質層序概略	10	第30図 1号炉跡平面図.....	79
第5図 周辺の遺跡	15・16	第31図 1分・2号埋設土器平面図.....	81
石器の分類基準		第32図 1分埋設土器.....	82
第1図 石器の計測基準	24	第33図 2号埋設土器.....	83
梨野A遺跡		第34図 3号埋設土器平面図.....	84
第1図 地形・グリッド配置図	26	第35図 3号埋設土器・出土土器.....	85
第2図 遺構配置図	28	第36図 3号埋設土器.....	86
第3図 基本層位K-13(b)東壁セクション図	33	第37図 3号埋設土器出土石器(1).....	87
第4図 上坡の分類基準	36	第38図 3号埋設土器出土石器(2).....	88
第5図 遺構配置図(1-Q・6~9グリッド)	41	第39図 4号ピット平面図.....	90
第6図 遺構配置図(J-P・9~15グリッド)	42	第40図 4号ピット出土土器・5号ピット平面図	91
第7図 1号土塙出土遺物	43	第41図 5号ピット出土土器.....	92
第8図 1分~3号ピット・1分・2号土塙平面図	44	第42図 3号土塙平面図.....	93
第9図 1号住居跡平面図	47	第43図 3号土塙出土土器(1).....	94
第10図 1号住居跡炉・P ₄ 平面図	48	第44図 3号土塙出土土器(2).....	95
第11図 1号住居跡炉内出土土器	51	第45図 4号土塙平面図・出土土器(1).....	97
第12図 1号住居跡出土石器(1)	52	第46図 4号土塙出土土器(2)・石器.....	98
第13図 1号住居跡出土石器(2)	53	第47図 5号土塙平面図.....	99
第14図 2号住居跡・炉平面図	57・58	第48図 5号土塙出土土器・石器.....	100
第15図 2号住居跡埋設土器	59	第49図 6号土塙平面図.....	101
第16図 2号住居跡出土土器(1)	65	第50図 6号土塙出土土器(1).....	102
第17図 2号住居跡出土土器(2)	66	第51図 6号土塙出土土器(2).....	103
第18図 2号住居跡出土土器(3)	67	第52図 6号土塙出土土器(3)・石器.....	104
第19図 2号住居跡出土土器(4)	68	第53図 7号土塙平面図.....	106
第20図 2号住居跡出土土器(5)	69	第54図 7号土塙出土土器(1).....	109
第21図 2号住居跡出土土器(6)	70	第55図 7号土塙出土土器(2).....	110
第22図 2号住居跡出土土器(7)・土製品	71	第56図 7号土塙出土土器(3).....	111
第23図 2号住居跡出土石器(1)	72	第57図 7号土塙出土石器・8号土塙平面図	113
第24図 2号住居跡出土石器(2)	73	第58図 8号土塙出土石器.....	114
		第59図 9号土塙平面図.....	115

第60図	9号土壤出土土器	116	第98図	第II群土器(4)	165
第61図	9号土壤出土石器(1)	117	第99図	第II群土器(5)・第III群土器(1)	167
第62図	9号土壤出土石器(2)・10号土壤平面図	118	第100図	第III群土器(2)	168
第63図	10号土壤出土土器	119	第101図	第IV群土器	169
第64図	10号土壤出土石器	120	第102図	第V群土器(1)	171
第65図	4号埋設土器	122	第103図	第V群土器(2)	172
第66図	6号ピット平面図	124	第104図	第V群土器(3)	173
第67図	6号ピット出土石器(1)	125	第105図	第V群土器(4)	175
第68図	6号ピット出土石器(2)	126	第106図	第V群土器(5)	176
第69図	6号ピット出土石器(3)	127	第107図	第V群土器(6)	177
第70図	6号ピット出土石器(4)	128	第108図	第VI群土器(1)	179
第71図	6号ピット出土石器(5)	129	第109図	第VI群土器(2)	181
第72図	6号ピット出土石器(6)	130	第110図	第VI群土器(3)	182
第73図	11号土壤平面図・出土土器	133	第111図	第VI群土器(4)	183
第74図	12号土壤平面図	134	第112図	第VI群土器(5)	185
第75図	12号土壤出土土器・石器(1)	135	第113図	第VI群土器(6)	187
第76図	12号土壤出土石器(2)	136	第114図	第VII群土器(1)	189
第77図	12号土壤出土石器(3)	137	第115図	第VII群土器(2)	190
第78図	13号土壤平面図・出土土器(1)	138	第116図	第VII群土器(1)	193
第79図	13号土壤出土土器(2)・14号土壤平面図	139	第117図	第VII群土器(2)	194
第80図	15号土壤平面図	140	第118図	第VII群土器(3)	195
第81図	15号土壤出土土器	141	第119図	第VII群土器(4)	198
第82図	16号土壤平面図・出土土器	143	第120図	第VII群土器(5)	199
第83図	17号土壤平面図・出土土器	144	第121図	第VII群土器(6)	200
第84図	18号土壤平面図	145	第122図	第VII群土器(7)	202
第85図	18号土壤出土土器・19号土壤平面図	146	第123図	第VII群土器(8)	203
第86図	19号土壤出土土器	147	第124図	第VII群土器(9)	207
第87図	19号土壤出土土製品・石器	148	第125図	第VII群土器(10)	208
第88図	20号土壤平面図	149	第126図	第VII群土器(11)	209
第89図	20号土壤出土土器(1)	150	第127図	第VII群土器(12)	210
第90図	20号土壤出土土器(2)	151	第128図	第VII群土器(13)	211
第91図	20号土壤出土土製品・石器	152	第129図	第VII群土器(14)	212
第92図	第I群土器(1)	158	第130図	第VII群土器・突起(1)	214
第93図	第I群土器(2)	159	第131図	第VII群土器・突起(2)	215
第94図	第I群土器(3)	160	第132図	第IX群・X群土器	216
第95図	第I群土器(4)・第II群土器(1)	162	第133図	第XI群土器(1)	219
第96図	第II群土器(2)	163	第134図	第XI群土器(2)	220
第97図	第II群土器(3)	164	第135図	第XI群土器(3)	221

第136図 第Ⅳ群土器(4).....	222	第137図 出土石器20.....	268
第137図 第Ⅳ群土器(5).....	223	第138図 出土石器21.....	269
第138図 第Ⅳ群土器.....	224	第139図 出土石器22.....	270
第139図 第Ⅳ群土器(1).....	226	第140図 出土石器23.....	271
第140図 第Ⅳ群土器(2).....	227	第141図 出土石器24.....	272
第141図 第Ⅳ群土器(3).....	228	第142図 出土石器25.....	273
第142図 第Ⅳ群土器(4).....	229	第143図 出土石器26.....	274
第143図 土製円盤1).....	233	第144図 35号土壤平面図.....	276
第144図 土製円盤2).....	234	第145図 35号土壤出土土器.....	277
第145図 土製円盤3)・土器.....	235	第146図 上部器・中世陶器.....	278
第146図 各グリッド石器出土状況.....	237	第147図 接合関係図・	
第147図 石器の型式分類及び出土数量.....	238	山線部資料グリッド別分布図.....	282
第148図 石器とポイントの長軸及び型式相関図.....	239	第149図 群別資料グリッド別分布図.....	284
第149図 石器の長軸関係図.....	240	第150図 第Ⅳ群土器.....	299・300
第150図 ポイントⅢ類と石器βⅢ④類の 幅／厚／長／厚相関図.....	241	第151図 六反山遺跡後期初頭土器.....	299・300
第151図 「不定形石器」長軸関係図.....	242	第152図 岩千葉八天造跡出土遺物.....	303
第152図 刃片の長軸関係図.....	243	第153図 東北各地の	
第153図 磐石器 長軸／重量関係図.....	245	人木10式上器～後期前垂土器.....	303
第154図 出土石器1).....	249	第154図 第Ⅳ群上器分布図.....	308
第155図 出土石器2).....	250	第155図 編物模式図.....	313
第156図 出土石器3).....	251	第156図 底部拓影1).....	316
第157図 出土石器4).....	252	第157図 底部拓影2).....	317
第158図 出土石器5).....	253	第158図 底部写真1).....	318
第159図 出土石器6).....	254	第159図 底部写真2).....	319
第160図 出土石器7).....	255	沼原A遺跡	
第161図 出土石器8).....	256	第1図 地形・グリッド・トレンド配置図.....	327
第162図 出土石器9).....	257	第2図 淋漓配賦図.....	330
第163図 出土石器10).....	258	第3図 基本層位.....	
第164図 出土石器11).....	259	第4図 1分土壤(1).....	
第165図 出土石器12).....	260	第5図 1分土壤(2)・2号土壤.....	336
第166図 出土石器13).....	261	第6図 3分土壤(1).....	337
第167図 出土石器14).....	262	第7図 3分土壤(2).....	338
第168図 出土石器15).....	263	第8図 3分土壤(3).....	339
第169図 出土石器16).....	264	第9図 3号土壤(4).....	340
第170図 出土石器17).....	265	第10図 4号土壤(1).....	341
第171図 出土石器18).....	266	第11図 4号土壤(2)・5号土壤.....	342
第172図 出土石器19).....	267	第12図 6号土壤(1).....	343
		第13図 6号土壤(2).....	344

第14図	7号土壠・8号土壠	345	第2図	土層柱状図	396
第15図	9号土壠・10号土壠	346	第3図	1号土壠	399・400
第16図	11号土壠	347	第4図	出土土器(1)	402
第17図	1号住居跡	349・350	第5図	出土土器(2)・石器	403
第18図	1号住居跡出土土器(1)	353			
第19図	1号住居跡出土土器(2)	354		嶺山A遺跡	
第20図	1号住居跡出土土器(3)	355	第1図	地形・グリッド配置図	407
第21図	1号住居跡出土石器(1)	356	第2図	遺構配図図	408
第22図	1号住居跡出土石器(2)・鐵滓	357	第3図	基本層位	411
第23図	12号土壠	358	第4図	1号土壠・2号土壠	412
第24図	出土土器(1)	361	第5図	3号土壠・4号土壠	413
第25図	出土土器(2)	362	第6図	5号土壠・6号土壠	414
第26図	出土土器(3)	363	第7図	7号土壠・8号土壠	415
第27図	出土土器(4)	364	第8図	9号土壠・10号土壠	416
第28図	出土土器(5)	365	第9図	11号土壠・12号土壠	417
第29図	出土土器(6)	366	第10図	13号土壠・14号土壠	418
第30図	出土土器(7)	367	第11図	15号土壠・16号土壠	419
第31図	出土土器(8)	368	第12図	出土土器(1)	421
第32図	出土土器(9)	369	第13図	出土土器(2)・石器(1)	422
第33図	出土石器(1)	370	第14図	出土石器(2)	423
第34図	出土石器(2)	371	第15図	出土石器(3)	424
第35図	出土石器(3)	372			
第36図	出土石器(4)	373		嶺山B遺跡	
第37図	出土石器(5)・鐵滓	374	第1図	地形・グリッド・トレンチ配置図	428
			第2図	グリッド配置図	431
			第3図	基本層位	431
			第4図	1号土壠	434
沼原B遺跡			第5図	出土土器(1)	436
第1図	地形・グリッド・トレンチ配置図	378	第6図	出土土器(2)・石器	437
第2図	基本層位	382			
第3図	1号土壠	383			
第4図	出土土器(1)	385			
第5図	出土土器(2)	386		嶺山C遺跡	
第6図	出土土器(3)	387	第1図	地形・グリッド・トレンチ配置図	441
第7図	出土土器(4)	388	第2図	基本層位	445・446
第8図	出土石器(1)	389	第3図	製鉄遺構	448
第9図	出土石器(2)	390	第4図	製鉄炉	450
			第5図	1・2号土壠	453
沼原C遺跡			第6図	西平坦面	454
第1図	地形・トレンチ配置図	395	第7図	製鉄遺構出土土器(1)	457

第8図 製鉄遺構出土土器(2).....	458	第2図 上塘の上端長軸と深さの関係.....	522
第9図 製鉄遺構出土土器(3).....	459	第3図 上塘の長軸方向.....	527
第10図 製鉄遺構出土土器(4).....	460	第4図 形態分類.....	530
第11図 出土土器(1).....	463	第5図 配列と土壤群(1).....	534
第12図 出土土器(2).....	464	第6図 配列と土壤群(2).....	535
第13図 出土土器(3).....	465		
第14図 出土土器(4).....	466		
第15図 出土土器(5)・羽口(1).....	467		
第16図 出土羽口(2)・石器(1).....	468		
第17図 出土石器(2).....	469		
第18図 出土石器(3).....	470		
第19図 出土石器(4).....	471		
第20図 出土石製品・鉄滓.....	472		
第21図 出土鉄滓分布図.....	476		

分析、同定結果

仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査

第1図 製鉄・鍛器製作過程と鉄滓の発生.....	479
第2図 FeO - Fe ₂ O ₃ - SiO ₂ 3元系状態図.....	486
第3図 製鉄滓のTi/Fe-砂鉄の Ti/Fe-鉄收率の計算図表.....	487
第4図 宮城県下出土滓の 製練滓・鍛治滓の区分.....	488

梨野A遺跡包含層の花粉分析

第1図 梨野A遺跡包含層の 主要花粉ダイアグラム.....	501・502
----------------------------------	---------

周辺遺跡の表探資料

第1図 表探資料(1).....	511
第2図 表探資料(2).....	512
第3図 表探資料(3).....	513
第4図 表探資料(4).....	514

考察・まとめ

沼原・嶺山地区の層位関係と土壤・土壤群について

第1図 沼原・嶺山地区的 基本層位対応関係.....	519
-------------------------------	-----

表 目 次

立地と周辺の遺跡	群別土器の割合	280
第1表 遺跡・地名表	第25表 第V・VI・X群土器の 層別層別の割合	280
第2表 文献	第26表 グリッド別 出土数量表(群別及び11縦部数)	283
石器の分類基準	第27表 土壌形態別検出数	287
第1表 石器の分類	第28表 底部の縦物圧痕型式と数量	312
第2表 スクレーパーの分類		
梨野A遺跡		
第1表 2分住居跡	沼原A遺跡	
第2表 6号ピット石器計測表(1)	第1表 縄文時代	
第3表 6号ピット石器計測表(2)	弥生時代土器出土数量表	360
第4表 7~66号ピット造構觀察表	第2表 平安時代土器出土数量表	360
第5表 21~34号土壌構造観察表	第3表 石器出土数量表	360
第6表 7~66号ピット出土遺物数量表	沼原B遺跡	
第7表 21~34号土壤出土遺物数量表	第1表 縄文時代土器出土数量表	384
第8表 出土土器数量表	第2表 石器出土数量表	384
第9表 群別土器出土地点別数量表	沼原C遺跡	
第10表 出土層位と造構内出土の土製円盤	第1表 遺物出土数量表	401
第11表 土製円盤の重量分布	轟山A遺跡	
第12表 形態分類	第1表 土器出土数量表	420
第13表 土製円盤の加工度と大きさ	第2表 石器出土数量表	420
第14表 土製円盤の加工度と形態	轟山B遺跡	
第15表 石器出土数量表	第1表 遺物出土数量表	435
第16表 石器観察表	轟山C遺跡	
第17表 ポイント観察表	第1表 縄文時代土器・ 石器・石製品出土数量表	462
第18表 スクレーパー出土数量表	第2表 平安時代土器出土数量表	462
第19表 磚の形態と出土点数	第3表 鉄滓出土地点及び数量表	476
第20表 砂石器の類型と磚の形態及び出土点数		
第21表 砂の形態及び使用痕・石材の関係		
第22表 接合および同一母岩資料		
第23表 基本層出土		
11縦部の層位別数量		
第24表 基本層位内での		

分析・同定結果	梨野A遺跡試料リン分析結果
沼原A・嶺山C・梨野A各遺跡出土炭化材樹種同定結果	第1表 リン分析資料表 508
第1表 炭化材樹種同定表 478	
仙台市諫山C遺跡出土鉄滓の分析調査	考察・まとめ
第1表 供試鉄滓と調査項目 480	沼原・嶺山地区の層位関係と土壤・土壌群について
第2表 供試鉄滓のX線回折 481	第1表 沼原A遺跡の
第3表 鉄滓の化学分析結果 482・483	灰白色火山灰の分析結果 518
梨野A遺跡包含層の花粉分析	第2表 配列分類表 532
第1表 梨野A遺跡包含層の花粉・孢子出現率表 499・500	茂庭造成畠地工事地内遺跡群について
沼原C遺跡出土の骨片	第1表 各遺跡の時代別変遷 543
第1表 骨片同定表 504	第2表 各遺跡の縄文時代の土器・石器
梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC ₁₄ 年代測定結果	総出土数量表 544
第1表 C ₁₄ 年代測定結果一覧表 506	

写 真 目 次

梨野A遺跡	21 六反田遺跡後期初頭土器他 301
1 調査前全景 29	沼原A遺跡
2 54年度調査遺景 29	1 第1地点全景 328
3 55年度調査構造物状況(1) 29	2 第1地点発掘風景(1) 328
4 55年度調査構造物状況(2) 30	3 第1地点発掘風景(2) 328
5 55年度調査構造物状況(3) 30	4 第2地点全景 329
6 56年度調査1号住居跡完掘状況 30	5 第2地点全景(1) 329
7 基本層位K-13b東壁セクション 33	6 第2地点全景(2) 329
8 1号住居跡炉椗出状況 49	7 1号住居跡完掘状況 351
9 1号住居跡炉石組部底面 49	8 1号住居跡カマド内遺物出土状況 351
10 P ₄ 内遺物出土状況 50	9 1号住居跡カマド完掘状況 351
11 1号住居跡完掘状況 50	
12 2号住居跡完掘状況 60	沼原B遺跡
13 2号住居跡床面埋設土器 60	1 調査前全景 379
14 2号住居跡炉全景(1) 61	2 54年度調査全景 379
15 2号住居跡炉全景(2) 61	3 55年度調査全景 380
16 7号土壙出土遺物状況 107	4 水没状況 392
17 7号土壙底面遺物出土状況1) 107	
18 7号土壙底面遺物出土状況2) 108	沼原C遺跡
19 7号土壙完掘状況 108	1 全景 395
20 35号土壙完掘状況 277	2 1号土壙骨片出土状況(1) 398

3	1号土壤骨片出土状況(2).....	398	5	製鉄炉底検出状況.....	451
4	1号土壤充填状況.....	398	6	製鉄炉底底部セクション.....	451
5	遺跡全景.....	404	7	製鉄炉内土器出土状況.....	451
			8	1号土壤セクション.....	453
	福山A遺跡		9	2号土壤セクション.....	453
1	第1地点調査前全景.....	409	10	西平坦面カマド内遺物出土状況.....	455
2	第1地点調査後全景(1).....	409			
3	第1地点調査後全景(2).....	409		分析・同定結果	
4	第1地点調査風景.....	426		仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査	
				鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅰ.....	491
	福山B遺跡			鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅱ.....	492
1	調査前全景.....	429		鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅲ.....	493
2	遺跡遠景.....	429		鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅳ.....	494
3	遺跡よりの遠景.....	432		梨野A遺跡包含層の花粉分析	
4	発掘風景.....	433		梨野A遺跡包含層中の主要花粉.....	503
	福山C遺跡			沼原C遺跡出土の骨片	
1	調査前遠景.....	442		1号土壤出土骨片.....	505
2	調査風景.....	442			
3	調査後全景.....	442		周辺遺跡の表探資料	
4	製鉄遺構全景.....	449	1	門野山側遺跡遠景.....	510
			2	嶺岸遺跡遠景.....	

調査経過

I. 調査に至る経過

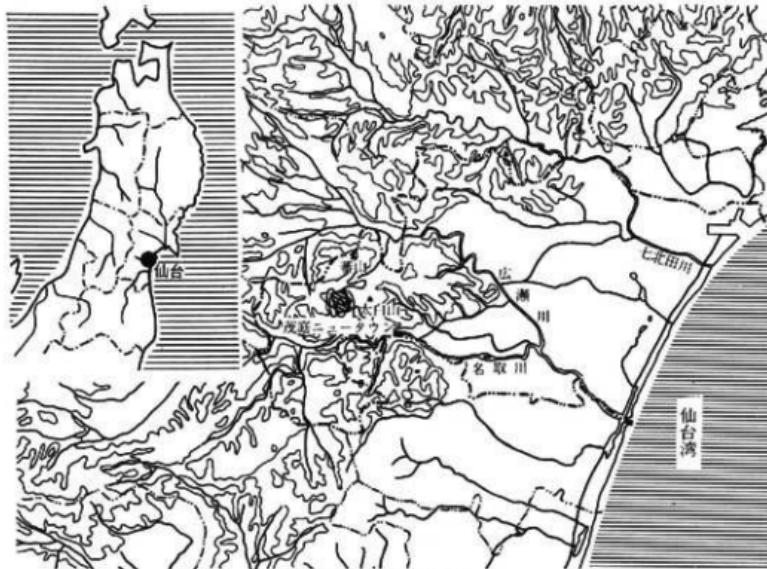
仙台市は年々都市化が進み、その結果として人口の増加、市街地の拡大等の種々の現象が生じてきている。

仙台市は将来の人口増加に伴う住宅難に備えて大型の市営団地を計画し、その造成地の選定を急いでいたが、昭和48年に仙台市西部丘陵地帯の茂庭地区を決定した。昭和51年には基本計画案が作成され、南北本郷地区一梨野地区間、東西大堤川一岩ノ川間の標高約100~200mの丘陵地約130haが造成対象地域とされた。

当地域内には周知の4遺跡（峯館跡、西館跡、向根遺跡、梨野A遺跡）が含まれていたが、より詳細な文化財分布資料が必要となり、昭和51年7月、仙台市開発局より造成予定地内の文化財の分布調査依頼を仙台市教育委員会が受け、当年12月に仙台市教育局社会教育課文化財係（現文化財調査係）は、東北学院大学考古学研究部の協力のもとに文化財分布調査を行った。

その結果を基にして仙台市開発局、仙台市教育委員会の間で協議が行なわれ、峯館跡、西館跡、向根遺跡の3遺跡は造成工事から除かれ、残りの遺跡に関しては記録保存を前提とする発掘調査を行うこととして、昭和53年度より造成地内の発掘調査が行なわれた。

佐藤甲二



第1図 仙台市域地図

II. 調査概要

昭和53年度調査は、初年度である為、予備調査を主とする発掘調査を実施した。分布調査で確認された内の4地点が調査対象となり、調査は10月23日に開始され12月6日までの約1ヶ月間行なわれた。調査対象総面積約1,600m²、調査総面積は約350m²であった。炭窯跡を除く他の2地点の調査では遺構、遺物の検出、出土は皆無で、また2基の炭窯跡も20年ほど前まで使用されていた新しいものと判明した。

昭和54年度調査からは本格的な調査が実施された。梨野A遺跡(西側急斜面部)、梨野C遺跡、沼原A遺跡第1・第2地点、沼原B遺跡第1地点、嶺山A遺跡第1・2地点の5遺跡7地点が調査対象で、調査は5月7日に開始され12月10日までの約7ヶ月間行なわれた。調査対象総面積約8,000m²、調査総面積は約5,000m²にのぼる。沼原A遺跡第1地点の調査では縄文時代の土壌6基、平安時代の住居跡1軒が検出され、第2地点の試掘調査では縄文時代の土壌が確認された。沼原B遺跡第1地点の調査では縄文時代の遺物を出土する層が認められ、嶺山A遺跡第1地点の試掘調査でも縄文時代の遺構が確認された。しかし、梨野A遺跡、嶺山A遺跡第2地点、梨野C遺跡の調査では若干の小土器片を出土したのみで遺構、遺物包含層は検出されなかった。本年度調査では当初遺跡の可能性は薄いだろうとされていた沼原A遺跡第2地点、嶺山A遺跡第1地点のような谷部・窪地部より、縄文時代の土壌が検出された。この為、次年度調査は出来得る限り他の谷部・窪地部にも調査を加えることとした。

昭和55年度調査は造成工事に係る遺跡調査最終年度で、昨年度よりの継続調査である梨野A遺跡(東側緩斜面部)、沼原A遺跡第1・2地点、沼原B遺跡第1地点、嶺山A遺跡第1地点と今年度新たに調査を加える沼原B遺跡第2地点、沼原C遺跡、嶺山B遺跡、嶺山C遺跡第1～3地点の7遺跡11地点が調査対象となり、調査は4月7日から11月28日までの約8ヶ月間行なわれた。調査対象面積15,500m²、調査総面積は6,500m²にのぼる。梨野A遺跡では縄文時代の多数の土壌、ピット、古墳時代の土壌が検出された。沼原A遺跡第2地点、嶺山A遺跡第1地点、嶺山B遺跡からは昨年度沼原A遺跡第1地点で検出された土壌と同様な縄文時代の土壌群が検出された。また嶺山C遺跡第2地点では、多数の鉄滓と共に平安時代の製鉄跡が検出された。

昭和56年度調査は梨野A遺跡の東側公園化に伴う遺跡範囲確認調査で、丘陵東側平坦部を中心として4月7日から9月6日までの約5ヶ月間調査が行なわれた。調査対象面積4,600m²、調査面積は300m²であった。その結果新たに縄文時代の住居跡も検出され、梨野A遺跡が縄文時代の集落跡であることがより明らかになった。

以上、昭和53年度に始った造成工事に伴う発掘調査は昭和56年までの4ヶ年をもって完了した。調査地点17ヶ所、調査総対象面積30,000m²、調査総面積は12,000m²である。調査遺跡内に

は分布調査では発見されず、調査過程の中で新たに追加した遺跡が多く含まれる。その内の多くは縄文時代の上塙群を中心とする谷部・窪地部の遺跡であった。これら上塙はいわゆる「船穴」、「落し穴状遺構」、「Tピット」と呼ばれる土壤に類似しており、当時の人々の行動範囲等を知る上で貴重な資料と成り得るものであったが、大半の地区すでに造成工事が進んでいた為、沼原、嶺山地区の一部でしか十分な調査を行なえず大きな悔いを残す結果となった。今後、丘陵地帯の調査に対しては時前の分布調査以外に詳細な試掘が必要であること、また調査に際しては広範囲な調査が必要であることを痛感する。

4年間の調査期間中、開発局宅地課江刺衝課長を始めとする宅地課、工事関係者、地元の皆様にはみなみならぬ御協力、御便宜を賜わり、厚くお礼申し上げます。また調査開始から終了までの長期に渡って発掘調査に参加下さいました地元有志の皆様にも心から感謝申し上げます。

佐藤甲二

発掘調査参加者（敬称略、五十音順）

相沢清一 阿部正也 天野エリ子 石垣純子 石垣富一郎 板山つねお 蛭原千賀子 大井ふみよ 太田恵知子 太田平治 太田ゆき子 大本春子 叶文俊 木戸春夫 熊谷信一 後藤タミ 後藤浩樹 斎藤真理 桜井信子 佐々木やえ子 佐藤いつ子 佐藤栄子 佐藤栄作 佐藤喜恵子 佐藤しげ子 佐藤勢子 佐藤正（故人） 佐藤廣史 佐藤わくり 庄子勝子 鈴木みづ子 鈴木洋子 住吉慈右衛門 清野仁子 高橋研一 武田藤雄 武田美津子 田中敏 玉川可奈子 千葉きよ子 長尾きよみ 長島栄一 中根三千子 成田寿（故人） 南雲祐美 南雲直二 沼田いな子 沼田卯太郎 沼田金作 沼田今朝夫（故人） 沼田とし子 根本ときわ 長谷川徹 早川策子 細川隆 真駿三郎 巻野俊夫 松浦光子 松本寿一 三浦チヅ子 嶺岸さかえ 嶺岸倉治 嶺岸たけお 嶺岸ハル子 嶺岸わくり 村山タマ子 横山利夫 横山由紀恵 吉川明宏 柳沢和明

遺物整理参加者（敬称略、五十音順）

相沢浩二 相沢史子 阿部多津子 天野エリ子 石垣純子 石黒伸一郎 石山真理子 大友透 大場拓俊 柿沼敏朗 叶文俊 木戸春夫 木村繁子 工藤久美子 熊谷信一 斎藤秀寿 佐藤栄作 佐藤幸子 佐藤順 佐藤真貴 宮戸美智子 菅原恵美子 平照子 高橋研一 田村富美江 千葉きよ子 千葉ひろみ 松岡敦子 松木仁 松本純子 森剛男 山田しよう 山田富士子 吉田康子

立地と周辺の遺跡

I. 地形と地質

1. 地形と遺跡の立地

宮城県南部、宮城野海岸平野の西方には標高300～400m以下の丘陵地が発達している。この丘陵地は陸前丘陵といわれ奥羽山脈より派生するものである。仙台市西方では、陸前丘陵を北から順に七北田川、広瀬川、名取川が東流し、下刻作用により中流域に4～5段の河岸段丘を形成している。これら3河川により開析を受けた丘陵地は河川により分割されていることや開析の度合い、起伏などにより分けられ、それぞれ名称を与えられている。

仙台市においては、北西部の七北田川と広瀬川の河間丘陵地と西南部の広瀬川と名取川の河間丘陵地に大別され、さらに七北田一広瀬河間丘陵地は七北田丘陵（主に七北田川右岸の西田中、桜ヶ丘、南光台に広がり東縁を長町一利府構造線に画される）と国見丘陵（広瀬川左岸の国見、大石原に広がる）とに、広瀬一名取河間丘陵地は青葉山丘陵（青葉山、八木山に広がり、北東縁を広瀬川により形成された段丘群に、東南縁を長町一利府構造線に画される）と、蕃山丘陵（青葉山丘陵の西方、茂庭、梨野、折立、高田に広がる）とに分けられている。これらの丘陵は河川水の浸食による開析を受けており、開析の度合いは蕃山丘陵において最も顕著であり、次いで七北田丘陵で著しく、国見丘陵、青葉山丘陵では前者ほど開析は進んでいない。青葉山丘陵は洪積世青葉山礫層の堆積面である青葉山面を残しており、標高は200～100mと東方へ低下している。青葉山礫層は国見丘陵でも部分的にのせている所がある。また蕃山、七北田、国見丘陵では定高性のある丘陵面及び丘頂面が認められる。蕃山、国見丘陵では西風蕃山（372.5m）、太白山（320.7m）、鬼ヶ森（344.5m）、権現森（314.2m）など、標高300m前後ないし300mを越える丘頂があることから標高370m前後を蕃山面とし、定高面の存在を推定する考え方もある。また国見丘陵には定高性の丘陵面である国見岬面（230m+^{往々}）があり、これは蕃山丘陵では標高240～200mの丘頂面（佐保山面）、七北田丘陵では標高230～130mの丘頂面に相当し、国見丘陵に比べ蕃山、七北田丘陵の開析度が高いことを示している。さらに国見丘陵では国見岬面の下位に標高180～160mの定高丘頂面（中山面）が、七北田丘陵では標高120～100mの定高丘頂面が認められている。これらのこととは、七北田丘陵（蕃山面がなく標高200mを越す所の少ない）、国見丘陵（権現森はあるが定高丘陵面が広がる）に比べ蕃山丘陵の起伏が大きいことを示している。

今回茂庭住宅団地造成工事に伴ない調査対象となった梨野、沼原、嶺山地区（以下「対象地区」という。）は、仙台市役所の西北西約8km、北に蕃山、西に鬼ヶ森、東は太白山を窓む蕃山丘陵のほぼ中央に位置する。標高は120～250m、東西0.9km、南北1.5km、面積約130haの丘陵地である。対象地区は北に梨野平坦面（湖成の堆積面）、南に比高差約40mの茂庭低地（段丘面）が広



第1図 地形区分図

※『地形・表層地質・土じょう 仙台』^{註1}を参考として作成した。

Scale 1 : 100,000

がり、東を大堤川、西を岩ノ川に囲まれ、特に大堤川、岩ノ川は急崖を形成しており、周囲から独立しているかのような景観を呈する。

対象地区は起伏の大きい番山丘陵にあるが周囲に比べやや低く、標高120～250mと約130mの高低差をもちながらも、全体として比較的起伏が緩やかな丘陵地といえる。宮城氏によれば、対象地区は「巨大な崩壊地であり、巨大崩壊は、少なくとも2万年以前に梨野集落の背後にある急崖を上滑落崖として発生した。その全体としての方向は、ほぼ北北西～南南東であり、崩壊により生産された地すべりブロックは、7個内外の地塊になって移動した。崩壊地内の凹地(窪地)は地すべりブロックの境界に集中しているが、これは、崩壊発生前から既にあった開析谷が地すべりブロックどうしの示差的移動によって、せき止められたものと考えられ、凹地(窪地)の底面高度はスベリ面の位置をしめしているものと推定^{井出}している。このように、大略2万年以前の巨大崩壊により形成された対象地区的現地形は、北半において標高200mを越える所が多く、北西端で標高237.6m(丘陵頂部A)、北端部中央で257.5m(丘陵頂部B)、北東端やや南寄りで210.2m(丘陵頂部C)を測る。これら3つの丘頂からは南西及び南へ伸びる尾根線が認められる。それは丘頂Aから対象地区西端中央へ(尾根線A)、丘頂Bから南西端へ(尾根線B)、丘頂Cから東端中央(尾根線C)へと伸びており、南へいくほど丘頂高度は低下する。対象地区南半においても標高が200mを越える所が見られるが、これは尾根線Bから伸びる丘頂である。また尾根線間では、尾根線AとBの間に狭い谷が入り込み、尾根線BとCの間には6ヶ所の窪地が形成されている。これらの窪地は茂庭・梨野窪地群といわれ、対象地区的大きな特徴となっている。窪地は尾根線Cと大堤川の間に1ヶ所あるが、対象地区東方の一の宮川付近、西方の高出付近にもありそれぞれ一の宮川窪地群、高田窪地群といわれている。

対象地区における発掘調査は8遺跡17地点で行なわれた。梨野A遺跡を除き全て尾根線B～C間の南半部にある。梨野A遺跡は対象地区的北東端、丘陵頂部Cの北の丘陵緩斜面に位置する。標高は180～190mと東方へゆるやかに傾斜する。大堤川は遺跡北方で流路を東から南へ変え、遺跡東縁の急崖下を南流する。遺跡の西には谷があり、西縁はこの谷への急峻な斜面となっている。沼原A遺跡は対象地区的東南端に位置する。第1地点は標高125m前後のほぼ平坦な丘陵緩斜面に、第2地点は第1地点に続く標高125～130m、東南方へ聞く谷地形に立地する。第1地点の東縁と南縁は急崖となっている。第2地点の西北には標高168m前後の丘陵頂部があり、ここから東方と南方へ尾根が伸び、第1地点の北と東南、第2地点の北は急峻な斜面となっている。沼原B遺跡は対象地区的中央やや南寄りの窪地に立地する。第1地点は標高160～165mの窪地東南縁辺部、第2地点は標高156m前後の窪地ほぼ中央部である。遺跡西方には尾根線Bが走り、西北方に標高208.3mの丘頂(丘陵頂部D)、西南方に標高201.6mの丘頂(丘陵頂部E)があることから周囲の丘陵との比高は30～50mである。沼原C遺跡は対象地区南半のほぼ



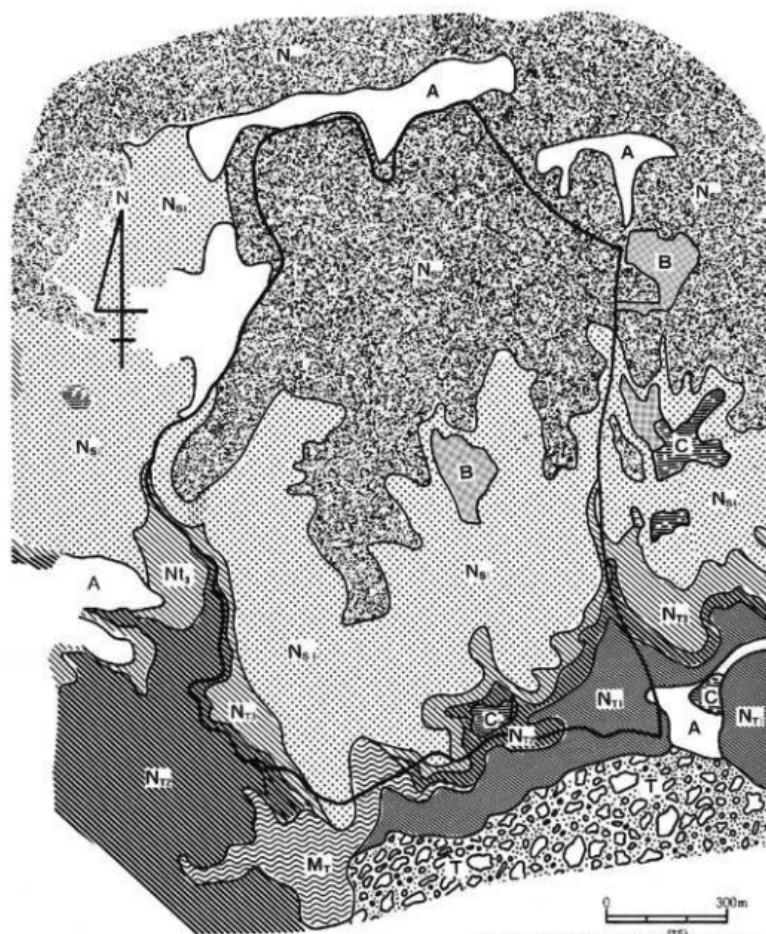
1. 梨野 A 遺跡
2. 沼原 A 遺跡第1地点
3. 沼原 A 遺跡第2地点
4. 沼原 B 遺跡第1地点
5. 沼原 B 遺跡第2地点
6. 沼原 C 遺跡
7. 嶺山 A 遺跡第2地点
8. 嶺山 A 遺跡第1地点
9. 嶺山 B 遺跡
10. 嶺山 C 遺跡第1地点
11. 嶺山 C 遺跡第2地点
12. 嶺山 C 遺跡第3地点
- 13・14 炭窯
- 15・16 昭和53年度調査地点

第2図 対象地区地形図

中央の東南方へ開く谷地形に立地する。標高は160～164m、遺跡北に標高188.3mの丘頂(丘陵頂部F)、西に丘陵頂部Eがあるため、遺跡北及び西は急峻な斜面となっている。沼原C遺跡に隣接して対象地区南半中央には他に嶺山A遺跡、嶺山B遺跡が位置する。嶺山A第2地点は沼原C遺跡の南に隣接する。標高160～165m、東南方に舌状に張り出す丘陵緩斜面に立地する。嶺山A第1地点は標高162～172mの窪地に立地する。沼原B遺跡と同様に西方を尾根線Bが走る。遺跡北方に丘陵頂部E、東方に標高186.1mの丘頂(丘陵頂部G)があることから周囲の丘陵との比高は15～40mである。嶺山B遺跡は丘陵頂部Eから嶺山A遺跡第2地点へかけての急峻な斜面の中位、標高186～189mにあるテラス状の丘陵緩斜面に立地する。嶺山C遺跡は対象地区南端のほぼ中央に位置し、3地点に分かれている。第1地点は越河堤の北岸、標高128～130m南方へ開く谷地形に立地、第2地点は越河堤西岸、標高130m前後の東方へ開く谷地形に立地している。第2地点の周囲の丘陵との比高は30～50mである。第3地点は第2地点の西、丘陵頂部Gから南へ伸びる尾根に立地する。標高は172m程である。以上のように、調査は立地からみると、丘陵緩斜面4地点、谷地形4地点、窪地及び窪地の縁辺3地点、丘頂から伸びる尾根1地点において行われた。

2. 地質と水理

対象地区及びその周辺には、新生代新第三紀、新生代第四紀の地層が見られる。新第三紀層は名取層群、梨野層、三滝玄武岩貢安山岩類(以下「三滝安山岩類」)である。名取層群は新第三紀中新世に形成された層群であり、対象地区では南端と東西を画する岩ノ川、大堤川に見られる。「茂庭住宅団地環境影響評価」によれば、対象地区で見られる名取層群は下部層(N_m 層)、中部層(N_{t2} 層)、上部層(N_{t3} 層)に分けられており、 N_m 層は太白山周辺に広く分布する旗立層に相当する。細粒砂岩、シルト岩より成る海成層である。 N_{t2} 層は旗立層上部に相当し、やや凝灰質の細粒砂岩を主体とする海成層であるが砂岩は若干の浮石(バミス)を含むことから、火山の影響をいくらか受けているものと考えられる。 N_{t3} 層は主に浮石質の凝灰岩、雲母を含む凝灰質砂岩より成る陸成層である。このように対象地区的名取層群は N_m 層が海成、 N_{t2} 層が火山の影響をいくらか受けている海成層、 N_{t3} 層が陸成層と移行することから、海退期を明瞭に示す層群と考えられる。この名取層群の上部には梨野層がのっており、両者は不整合関係にある。梨野層も名取層群と同様に新第三紀中新世に形成された層であり、対象地区のほぼ全域及び梨野付近に分布している。主として浮石質の粗粒凝灰岩から成る陸成層である。さらに梨野層は安山岩疊を含むことから、若干の小疊を含む下部層(N_{s1} 層)と種々の大きさの角礫を含む上部層(N_{s2} 層)とに分けられ、 N_{s1} 層は対象地区南半に、 N_{s2} 層は北半に見られる。次に三滝安山岩類は対象地区西南端と岩ノ川が茂庭低地へ出る所に分布している。これは梨



※『茂庭住七田地盤境影響評価』を一部改変

[Symbol: Pond]	澗池	[Symbol: Shaded]	N _s	上 部	梨野層
[Symbol: Embankment]	盛 土	[Symbol: Shaded]	N _{Bi}	下 部	
[Symbol: Alluvium]	沖積層	[Symbol: Shaded]	N _{T1}	上 部	名取層
[Symbol: Terrace]	段丘疊層	[Symbol: Shaded]	N _{T2}	中 部	
[Symbol: Mt. Sansei Anhydrite Group]	三滝安山岩類	[Symbol: Shaded]	N _{T3}	下 部	層群

第3図 対象地区地質図

第4図 仙台付近の地質層序概略

地質時代	地層名	分布
第四紀 完新世	沖積層	
	段丘堆積物	名取川流域に分布
第三紀 鮮新世	仙台層群	仙台市北西～南部に分布
	白沢層	三滝安山岩類
	梨野層	梨野から北方中心に分布
	綱木層	調査地域北方に分布
中新世	旗立層	茂庭～太白山周辺に分布
	名取層群	茂庭西方に分布
	高館層	名取川南方から岩沼方面に分布

※「茂庭住宅団地環境影響評価」^{注3)}を一部改変

野層堆積後に地下深所より貫入してきたものである。貫入の時期は新第三紀中新世末～鮮新世の初めと考えられる。新第三紀層は以上の3層である。鮮新世に属する仙台層群に相当する層は見られない。新第三紀層は梨野層、名取層群と不整合関係にあるが2万年以前の巨大崩壊(地すべり)により、地質構造は複雑な様相を呈していると考えられる。

新生代第四紀層としては、主として段丘礫層と沖積層がある。対象地区の南に広がる茂庭低地は、各取川によって形成された段丘面である。段丘を構成する砂礫層の厚さは5m前後であり、名取層群を被っている。仙台市近郊では、段丘は古期から青葉山、台ノ原、上町、中町、下町段丘と5期に分けられており、茂庭の段丘面は、中町段丘に對比されている。また、茂庭低地の標高は60～80mであるが、低地北端では標高がやや高くなっている。これを三滝安山岩類の貫入の影響とする考え方もあるが、南方傾斜の傾動運動とも考えられる。^{注4)}

第四紀完新世(沖積世)に堆積した沖積層は、梨野平坦面や大堤川の谷に分布する。層厚は薄い。対象地区においては沼原B遺跡の調査の結果、窪地の中央部の第2地点で、主に黄褐色～暗褐色のシルト質粘土層が認められた。層厚は地表下1.8mまでしか確認されなかったが、沖積層と考えられる。また第四紀の堆積層としては降下火山灰層の存在がある。調査地域の中で丘陵緩斜面に立地する梨野A遺跡、嶺山A遺跡第2地点、尾根に立地する嶺山C遺跡ではほとんど認められないが、沼原A遺跡、沼原B遺跡、嶺山A遺跡、嶺山C遺跡などでは調査の結果、

地山層より上層に堆積する各層は、完新世の降下火山灰層と判断された。また地山層は、斜面等から梨野層が崩壊して堆積したもので、完新世及び洪積世の火山灰層が地山下層に存在することは十分に考えられる。

次に対象地区における水理地質であるが、蕃山丘陵では太白山周辺に旗立層、綱木から鉤取にかけては、名取層群に属する綱木層、蕃山周辺には三流玄武岩、対象地区と梨野には梨野層が分布している。太白山周辺は地下水に乏しいとされているが、これは三流玄武岩はもとより旗立層、綱木層が固結の進んだ岩石により構成されていることによる。これに対し梨野層は浮石質の凝灰岩を主体とする火山性の堆積物で全体に粗粒であることから透水性が良い。対象地区の基盤は梨野層と名取層群で構成されており、上層の梨野層が透水層、下層の名取層群が不透水層であることから梨野層が地下水の滞水層となることが考えられている。しかし、対象地区においては、一様に梨野層中に滞水されているとは考えられず巨大崩壊時に生じた複雑な地質構造に水理が左右される面が強く、ある条件下において地下水は湧水として地表に流出している。湧水は対象地区内には少なく、その縁辺部に見られ溜池となっているものもある。東緯大堤川沿いには、スズ湧水、涌沢湧水等があり、スズ湧水は近接する梨野A遺跡との関連を考えられる。

斎野裕彦

註

1. 経済企画庁「地形・表層地質・土じょう」仙台 1967
2. 上滑落崖：崩壊の移動域と不動域を分ける崖(宮城豊彦氏による。)
3. 承認的な移動：隣り合う地塊が相対的に逆方向に動くこと(宮城豊彦氏による。)
4. 宮城豊彦「仙台都市圏の地形的基盤ーとくに仙台周辺の古期崩壊地形についてー」「東北文化研究所研究紀要」第12号 P. 176~184. 1981
5. 仙台市開発局地「茂庭住宅周辺地盤環境影響評価」1976
6. 昭和53年度調査区分及び梨野C遺跡を含めた遺跡数及び測定地点数である。以下においては、これらを除いて記述する。
7. 中川久次郎「仙台付近の第四系および地形」『第四紀研究』第1巻第6号 P. 219~227. 1960
8. 川山利三郎「北上山地の地形学的研究其一 A. 仙台市近傍の河岸段丘」『東北報道会学術研究報告』第17号 P. 1~83. 1933
9. 調査地点で確認された降下火山灰層は、1次堆積層ではなく、主に2次堆積層であるとの判断をしているが、火山灰の1次堆積・2次堆積の区別については不判断的な点がある。また猿山A遺跡第1地点採取の基本層IV~Ⅵ層の土壤サンプルについて、山田一郎氏により、完新世の降下火山灰を主体とする層であろうとの所見を得ている。

II. 歴史的環境

仙台市西南部の番山、坪沼、高館各丘陵及びこの間を東流する名取川流域の段丘面は、現在まで正式な発掘調査が行なわれた遺跡は少なく、ほとんど踏査等により発見された遺跡で、その数も少ない。これら遺跡の立地は狭い段丘上、丘陵末端斜面上、谷底平野、盆地を中心としている。しかし、人来田地区以東の名取川左岸になると段丘面がしだいに発達し出し、富田付近になると名取川両岸に沖積面がみられるようになる。左岸沖積面北側には青葉山丘陵から伸びる緩やかな、数段から成る段丘面がひろがり、これら段丘面、沖積面には数多くの遺跡が立地する。

番山丘陵南端の茂庭地区には、名取川左岸に比較的広い段丘面（茂庭低地）がみられ、遺跡の多くはこの周辺部に立地している。

茂庭地区の遺跡を中心として名取川流域の赤石、西多賀、富沢、柳生周辺及び坪沼丘陵そして一部名取市北部も混え、旧石器時代から中世に至る各遺跡の立地、分布を概観して行くこととする。

旧石器時代の遺跡は名取川左岸山田地区段丘上に位置する山田上ノ台遺跡（8）、北前遺跡（9）で旧石器時代の調査が行なわれ、旧石器時代前期、後期の遺物を出土している。

縄文時代早期になると茂庭造成地内梨野A遺跡（1）、嶺山B遺跡（6）で遺物が出土している他は茂庭地区では認められず、名取川の段丘上に位置する川添東遺跡（11）、北前遺跡、山田上ノ台遺跡、三神峯遺跡（12）等で、坪沼盆地内では館前東遺跡（13）、中沖遺跡（14）で遺物の出土、散布がみられる。北前遺跡では、末葉の集落跡が検出されている。縄文時代前期の遺跡は早期の遺跡と重複している場合が多い。茂庭地区では造成地内の梨野A遺跡、沼原A遺跡（2）で若干の遺物を出土しているにすぎないが、三神峯遺跡で前葉の住居跡が、北前遺跡では末葉の土壙群が検出されている。縄文時代中期になると茂庭造成地内の各遺跡で遺物が出土しており、梨野A遺跡からは後葉の住居跡が検出されている。他に茂庭地区では、段丘面に位置する人来田遺跡（16）、人来田A遺跡（17）、新熊野遺跡（18）で遺物の出土、散布がみられ、人来田遺跡では中葉の住居跡が検出されている。山田地区では山田上ノ台遺跡で末葉の大集落が形成されている。また、中葉～末葉の時期には丘陵末端斜面上、段丘上以外にも大野田地区の六反田遺跡（19）、山口遺跡（15）、下ノ内遺跡（20）にみられるような沖積面の自然堤防上に遺跡が形成されるようになる。六反田遺跡では中葉末の住居跡が、下ノ内遺跡では末葉の住居跡が検出されている。縄文時代後期に於いては茂庭造成地区では中期と同様に各遺跡で遺物を出土し、他に茂庭地区では丘陵末端斜面上に位置する嶺岸遺跡（22）、門野山畠遺跡（23）で遺物の散布がみられる。この時期になると大野田地区六反田遺跡周辺の沖積地自然

堤防上には遺跡数が増加し、六反田遺跡では初頭の集落が形成されている。縄文時代晩期もまた茂庭造成地内の各遺跡で遺物を出土しており、梨野A遺跡では後葉の土壙墓が検出されている。他に茂庭地区では、後期と同様に嶺岸遺跡、門野山団遺跡で遺物の散布をみる。名取川流域丘面、大野田周辺の沖積地で遺物の出土、散布地はあるが、住居跡あるいは大規模な遺跡は現在までのところ確認されていない。以上その他に茂庭地区には縄文土器を散布する向根(25)、新組(26)、塩ノ瀬(27)、人来田C(28)の各遺跡がある。尚、この時代に造成団地内で特徴的なのは、丘陵地緩斜面部、谷部、窪地部に立地する沼原A、嶺山A・Bの各遺跡から土壙群(晩期か?)のみが検出されており、これら丘陵部が居住域とは全く異なる活用のされたかをしていた点である。

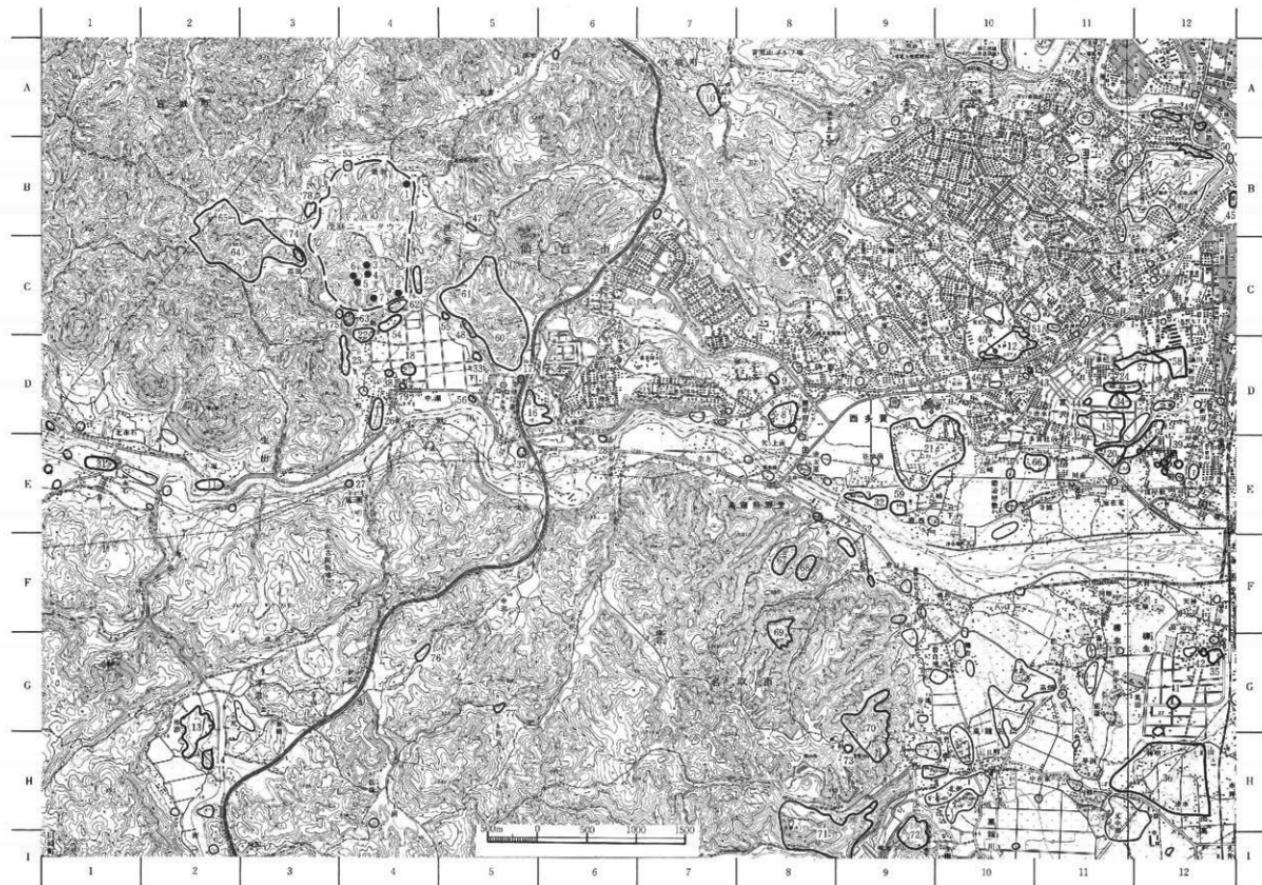
弥生時代の遺跡としては茂庭造成地内の沼原A遺跡(中期後半)で、他に茂庭地区では門野山団遺跡、坂ノ下遺跡(33)、人来田遺跡、人来田A遺跡で、赤石地区では名取川段丘上の大苗遺跡(31)で(以上時期不明)遺物の出土、散布をみるとすぎず、遺跡数は減少する傾向を示す。しかし、大野田地区や仙台市東部の沖積地の自然堤防上、浜堤上には南小泉遺跡、藤田新田遺跡、今泉遺跡、西台畠遺跡(以上中期後半)、山口遺跡、六反田遺跡、下ノ内遺跡(以上後期)等の中期後半以後の遺跡が多くみられるようになる。山口遺跡では後期の遺物包含層中のプラント・オパール分析で、周辺に水田跡の可能性を十分求められる結果が出ており、この時代になると、生活、生産の場が、丘陵上、段丘上から沖積地へという大きな変換期を迎える。

古墳時代の遺跡としては茂庭造成地内の梨野A遺跡より中期の土壙を出土しているが、他に茂庭地区では向根、坂ノ下、町田(38)、新組、人来田B(37)、人来田C、塩ノ瀬の各遺跡で遺物が散布するか時期は不明である。この時代になると沖積面も安定の度合を高め生活の舞台の中心は完全に丘陵上や段丘面から沖積地へと移る。沖積地自然堤防上や、段丘末端上には遠見塚古墳、名取市鶯神山古墳といった大型古墳が造営され始め、前期には名取川右岸、柳生地区の自然堤防上に位置する安久東遺跡(35)、名取市清水遺跡(36)に集落が形成され、左岸大野田地区や西多賀地区の自然堤防上、段丘上には中期から後期にかけて大野田古墳群(39)、三神嶺古墳群(40)等の古墳群が形成される。右岸中田地区では後期になると東遺跡(41)のような大集落や安久源訪古墳(42)等の古墳が多く造営される。

古墳時代終末から奈良時代にかけての遺跡は茂庭地区では丘陵斜面部に梨野横穴群(47)、向根横穴群(48)が、奈良時代の遺物散布地としては梨野B遺跡(53)、本郷遺跡(54)、向根東遺跡(55)、中ノ瀬遺跡(56)がみられる程度であるが、名取川左岸西多賀周辺や大年寺周辺、右岸熊野堂周辺の丘陵斜面や、段丘斜面には横穴群が群集する。この時期には名取川と広瀬川の合流点北西約1kmの自然堤防上には、多賀城創建前の官衙跡と推定される郡山遺跡が作られている。奈良時代の集落では名取川左岸の六反田遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡、右岸の名取市清

第1表 通跡地名表

No.	地名	種別	立地	年代	文獻	No.	地名	種別	立地	年代	文獻	資料		
1	柴野A道跡	集落跡	丘陵	戰國(後半-前半)	義文(後半-前半)	B4	41	栗造跡	集落跡	自然災害	古墳	I7 55	G12	
2	沼原A道跡	狩獵場	丘陵	戰國(後半-前半)	義文(後半-前半)	C4	42	安久源跡	田地	自然災害	古墳	26	G12	
3	沼原B道跡	狩獵場	丘陵	戰國(中-後)	義文(中-後)	C4	43	高町寺	田地	自然災害	古墳	9	D10	
4	沼原C道跡	散在地	丘陵	戰國(中-後)	義文(中-後)	C4	44	教宿古墳	田地	自然災害	古墳	26	D11	
5	富山A道跡	狩獵場	丘陵	戰國(後半)	義文(後半)	C4	45	完谷古墳	特殊地點	特殊地點	段丘	6	B12	
6	富山B道跡	狩獵場	丘陵	戰國(早-後)	義文(早-後)	C4	46	高尾金山古跡	廢跡	段丘	古墳-平安	12	D10	
7	酒山C道跡	生產跡	丘陵	戰國(後半)	義文(後半)	C4	47	野野橫穴	橋樑古墳	丘陵斜面	古墳東~奈良	115		
8	山口D1-台邊跡	集落跡	段丘	戰國(後半)	義文(後半-平安)	23	D8	48	向根橫穴	橋樑古墳	丘陵斜面	古墳東~奈良	5	C5
9	北前道跡	集落跡	段丘	戰國(後半)	義文(後半)	29	D8	49	安岩山城跡	特殊地點	丘陵斜面	古墳東~奈良	10	A12
10	青葉山道跡	包含地	丘陵	戰國(後)	義文(後)	16	A7	50	大年寺橫穴	橋樁古墳	丘陵斜面	古墳東~奈良	4	B12
11	川添家涼跡	包含地	段丘	戰國(中-後)	義文(中-後)	F2	51	上手内樋穴	橋樁古墳	丘陵斜面	古墳東~奈良	3	C10	
12	二神寺道跡	集落跡	段丘	戰國(中-後)	義文(中-後)	22	D10	52	野野又橫穴	橋樁古墳	丘陵斜面	古墳東~奈良	E8	F9
13	新屋道跡	包含地	丘陵	戰國(早)	義文(早)	G2	53	野野又道跡	包含地	丘陵斜面	奈良-平安	B4		
14	中冲溝跡	包含地	台地	戰國(早)	義文(早)	H2	54	木本道跡	包含地	丘陵斜面	奈良-平安	14	C4	
15	山口迹	集落跡	自然階地	戰國(後)	義文(後)	24	D1	55	向根東道跡	包含地	台地	奈良東-平安	8	C5
16	大室田道跡	集落跡	丘陵	戰國(中-後)	義文(中-後)	5	D5	56	中ノ瀬道跡	包含地	台地	奈良東-平安	8	D5
17	入来田A道跡	包含地	台地	戰國(中-後)	義文(中-後)	D5	57	中谷施道跡	水田跡	後背溝地	平安	D12		
18	新飯野道跡	包含地	段丘	戰國(中-後)	義文(中-後)	D4	58	鳥居原道跡	水田跡	後背溝地	平安	D12		
19	六反田道跡	集落跡	自然階地	戰國(後)	義文(後)	27	D12	59	八项西道跡	集落跡	段丘	平安	18	E9
20	下ノ内溝跡	集落跡	自然階地	戰國(中-後)	義文(中-後)	R11	60	茂庭東施跡	城	丘陵	中世	11	D5	
21	上野道跡	包含地	段丘	戰國(中-後)	義文(中-後)	15	E9	61	茂庭本施跡	城	丘陵	中世	11	C5
22	鹿岸道跡	包含地	丘陵	戰國(後)	義文(後)	31	C4	62	茂庭峯施跡	城	丘陵	中世	11-16	C4
23	門町山道跡	包含地	丘陵	戰國(後)	義文(後)	16	D4	63	茂庭西施跡	城	丘陵	中世	11-14	C4
24	荒崎道跡	水田跡	後背溝地	戰國(後)	義文(後)	18	D11	64	茂庭大施跡	城	丘陵	中世	11	C2
25	向根道跡	包含地	台地	戰國(古-中)	義文-古墳	16	C4	65	茂庭小施跡	城	丘陵	中世	11	B2
26	新堀道跡	包含地	台地	戰國(古-中)	義文-古墳	8	D4	66	富浪施跡	城	丘陵	中世	11	E10
27	鶴ノ瀬道跡	仙台地	丘陵	戰國(後)	義文(古-後)	8	E4	67	黒崎城跡	城	丘陵	中世	11	F8
28	人来田C道跡	包含地	台地	戰國(古-中)	義文-古墳	8	E6	68	小(古)雞野城	城	丘陵	中世	11	F8
29	篠木溝跡	包含地	谷底平野	戰國	義文	5	A6	69	馬野堂大施跡	城	丘陵	中世	11	F8
30	竹保山東道跡	包含地	丘陵	戰國	義文-平安	20	B7	70	高原城跡	城	丘陵	中世	11-15	G9
31	大昔道跡	包含地	丘陵	戰國	義文-平安	8	E1	71	大昔山尼跡	城	丘陵	中世	11	H8
32	郵便道跡	包含地	段丘	戰國(後)	義文(後)	7	F9	72	桑島和跡	城	丘陵	中世	11-15	H9
33	坂ノ下道跡	包含地	台地	戦後-古墳	平安	8	D5	73	野野原御社跡	社跡	丘陵中腹	小世-近世	15	H9
34	見崎前道跡	水田跡	後背溝地	戰後	平安	D1	74	高田カナク道跡	生産跡	丘陵	中世-近世	C3		
35	安久道跡	集落跡	自然階地	戰後	平安	13	G12	75	西能登(飯能登)	生産跡	丘陵斜面	C3		
36	清水道跡	集落跡	自然階地	戰後	平安	25	H112	76	ノヤマ道跡	生産跡	丘陵斜面	G4		
37	人来田B道跡	包含地	台地	古墳-平安	古墳	8	E5	77	北原道跡	包含地	台地	G5		
38	町田道跡	包含地	台地	古墳-平安	古墳	8	D4	78	製野D道跡	包含地	台地	B3		
39	大野田古漬跡	古墳	自然階地	古墳	古墳	27	E12	79	町北東道跡	包含地	台地	8	D4	
40	三峯古墳跡	丘陵	丘陵	古墳	古墳	28	D10							



第5図 周辺の地図 (国土地理院1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」を複製)

水遺跡が調査されている。

平安時代の遺跡としては茂庭造成地内では沼原A遺跡、嶺山A遺跡、嶺山C遺跡（7）、梨野A遺跡より遺物を出土し、沼原A遺跡では住居跡、嶺山C遺跡では製鉄跡が検出されている。周辺部では梨野B、向根、本郷、向根東、門野山圓、坂ノ下、町田、中ノ瀬、新組、人来田B、人来田C、塩ノ瀬の各遺跡で遺物の散布がみられ、茂庭地区では弥生～奈良時代の遺跡数に比べ平安時代の遺跡数が増加している。これは赤石地区、坪沼盆地に於いても同様の傾向を示しており、この時期に丘陵地帯への進出が目立つ。また、これら遺跡は丘陵中でも河川沿いの段丘面の発達した場所や盆地性の場所にのみ集中する傾向を示している。沖積地ではほとんどの遺跡が奈良時代の遺跡と立地の変化はなく、従って重複する遺跡が多く見受けられるが、丘陵地同様遺跡数は増加する。山口遺跡では自然堤防上に集落が形成され、これに接する後背湿地より水田跡が検出されている。またこれに隣接する泉崎浦遺跡（24）、泉崎前遺跡（34）、中谷地遺跡（57）、鳥居原遺跡（58）からも同時代と考えられる水田跡が検出されている。

中世になると茂庭低地周辺の丘陵上には、東館跡（60）、本館跡（61）、峯館跡（62）、西館跡（63）が、高田地区西側の丘陵上には大館跡（64）、小館跡（65）の館跡が密集し、高館丘陵東麓の城館群とともに名取川流域中世山城の集中地点となっている。沖積地にも平城は点在しているが、この時期の一般集落跡の調査例は貧しい。尚、山口遺跡では水田跡が検出されている。

この他に茂庭地区では高田周辺の丘陵斜面上に位置する高田カナクソ遺跡（74）、本郷周辺の丘陵末端斜面上に位置する西館裏（仮称）遺跡（75）でかなりの鉄滓の散布をみると、時代は不明である。造成地内嶺山C遺跡で平安時代の製鉄跡が検出されていることから、平安時代以後茂庭地区の丘陵地帯が鉄の生産の場としてひろく利用されていた可能性は十分考えられ、これは中世に於ける茂庭地区の城館の集中と大きな関りを持つ、一つの要因と成り得るかも知れない。また茂庭の南側の坪沼、高館丘陵中のノマヤマ遺跡（76）、北原遺跡（77）でも鉄滓、羽口の散布が認められる。

佐藤甲二

第2表 文 献

No.	編 序	著 者	題 目	概 要	所 載 書 誌	発 行 年 月
1	清 水 重 國 郎	宮城県内の古墳及び石碑	宮城県内の古墳及び石碑	宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書第12集	宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書第12集	1924. 3
2	松 本 庄 信	仙台市内の中石器時代及至新石器時代(上・下)	仙台市内の中石器時代及至新石器時代(上・下)	考古学雑誌25(2) / 4	考古学雑誌25(2) / 4	1930. 2. 4
3	伊 小 林 洋	仙台市内の古代墓地	仙台市内の古代墓地	仙台市史 3	仙台市史 3	1950. 8
4	宮 城 県 教 育 委 員 会	煙草文化財調査報告書第18集	煙草文化財調査報告書第18集	宮城県教育委員会史 27集	宮城県文化財調査報告書第49集	1954. 3
5	宮 城 県 教 育 委 員 会	東北新幹線関係急行分布調査報告書	東北新幹線関係急行分布調査報告書	宮城県文化財調査報告書第49集	宮城県文化財調査報告書第49集	1969. 3
6	宮 城 県 教 育 委 員 会	船形山前流跡	船形山前流跡	宮教考第4	宮教考第4	1972. 3
7	宮 城 県 教 育 委 員 会	名取川水系分布調査	名取川水系分布調査	仙台市文化財調査報告書第7集	仙台市文化財調査報告書第7集	1972. 6
8	宮 城 県 教 育 委 員 会	仙台市西沼田町舟見越洞窟報告書	仙台市西沼田町舟見越洞窟報告書	仙台市文化財調査報告書第8集	仙台市文化財調査報告書第8集	1974. 3
9	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市向山町向山駅穴隙洞窟報告書	仙台市向山町向山駅穴隙洞窟報告書	宝文堂	宝文堂	1974. 5
10	仙 台 市 教 育 委 員 会	正	降	仙台市古跡	古蹟研究報告 3	1974. 7
11	柴 井 正	富沢臨時・仙台三神等氏跡所在別説	富沢臨時・仙台三神等氏跡所在別説	仙台市文化財調査報告書第10集	仙台市文化財調査報告書第10集	1974. 9
12	古 瀬 路 研 究 会	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	各取市史	各取市史	1976. 3
13	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第2集	仙台市文化財調査報告書第2集	1977. 1
14	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第14集	仙台市文化財調査報告書第14集	1978. 3
15	名 取 市 史 編 纂 委 員 会	堀もれた仙台の歴史	堀もれた仙台の歴史	萩の白鳥詩文庫	萩の白鳥詩文庫	1980. 3
16	仙 台 市 教 育 委 員 会	高木跡	高木跡	宮城県文化財調査報告書第71集	宮城県文化財調査報告書第71集	1980. 9
17	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市教育委員会	仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第25集	仙台市文化財調査報告書第25集	1980. 9
18	仙 台 市 教 育 委 員 会	年報 1	年報 1	仙台市文化財調査報告書第30集	仙台市文化財調査報告書第30集	1981. 3
19	加 藤 勝	萩の台跡	萩の台跡	仙台市文化財調査報告書第77集	宮城県文化財調査報告書第77集	1981. 3
20	宮 城 県 教 育 委 員 会	東北自動車道沿線調査報告書 IV	東北自動車道沿線調査報告書 IV	仙台市文化財調査報告書第34集	宮城県文化財調査報告書第34集	1981. 10
21	仙 台 市 史 料 館	名取川の里	名取川の里	仙台市文化財調査報告書第34集	仙台市文化財調査報告書第34集	1981. 12
22	仙 台 市 教 育 委 員 会	二ノ森塗壁	二ノ森塗壁	仙台市文化財調査報告書第35集	仙台市文化財調査報告書第35集	1982. 2
23	仙 台 市 教 育 委 員 会	山口塗壁	山口塗壁	仙台市文化財調査報告書第37集	仙台市文化財調査報告書第37集	1982. 3
24	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市南塗壁	仙台市南塗壁	仙台市文化財調査報告書第40集	仙台市文化財調査報告書第40集	1982. 3
25	宮 城 県 教 育 委 員 会	仙北断跡	仙北断跡	仙台市文化財調査報告書第41集	仙台市文化財調査報告書第41集	1982. 3
26	氏 家 利 和	古墳時代	古墳時代	宮城県史 34	宮城県史 34	1982. 8
27	仙 台 市 教 育 委 員 会	六反田塗壁	六反田塗壁	仙台市文化財調査報告書第34集	仙台市文化財調査報告書第34集	1982. 8
28	絹 清 邦	日本城郭大系第3卷	日本城郭大系第3卷	新入門社	新入門社	1982. 8
29	仙 台 市 教 育 委 員 会	北前船	北前船	仙台市文化財調査報告書第36集	仙台市文化財調査報告書第36集	1982. 8
30	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙平野の通駆跡	仙平野の通駆跡	仙台市文化財調査報告書第37集	仙台市文化財調査報告書第37集	1982. 8
31	仙 台 市 教 育 委 員 会	仙台市南塗壁	仙台市南塗壁	仙台市文化財調査報告書第40集	仙台市文化財調査報告書第40集	1982. 8
32	仙 台 市 教 育 委 員 会	年報 3	年報 3	仙台市文化財調査報告書第41集	仙台市文化財調査報告書第41集	1982. 8
33	仙 台 市 教 育 委 員 会	乘馬	乗馬	仙台市文化財調査報告書第43集	仙台市文化財調査報告書第43集	1982. 8

石器の分類基準

茂庭同地造成地地内の各遺跡から石器が出土しているが、梨野A遺跡以外の遺跡からの出土量は、125点と極少数である。梨野A遺跡からは、第I—IVc層の各層位、造構等から総計4168点の石器が出土している。なお、梨野A遺跡の場合、IVc層のみが縄文時代早期の遺物包含層と認定され、IVa、IVb層は縄文時代に限定される遺物包含層であり、他は縄文時代早期～晚期および古墳時代、平安時代、中世の遺物の混在した堆積層である。

茂庭同地造成地地内の各遺跡の出土石器の分析を行う場合、石器の出土量が安定している梨野A遺跡の出土石器を対象とし、分類基準を設定し、それを梨野A遺跡以外の遺跡にも適用する形をとった。

大まかな分類を以下のように規定し、さらに細分類した。

1. 打製石器 加熱によって石器製作がなされているもの。
2. 磨製石器 研磨によって石器製作がなされているもの。
3. 確石器 自然礫を素材とし、それに使用痕が付されているため、石器と認定されたもの。
4. 石製品 研磨等によって、ある定形的な形態が作り出されているもの。
5. 破石

1. 打製石器

(1) 石鏃

長幅および型式相関図（第148図 239頁）によるAのまとまりを石鏃とした。さらに第147図（238頁）のように、下表に基づき「尖頭部側縁形態」と「基部形態」を分類の基準とし、細分類した。

第1表 石鏃の分類

基部形態	尖頭部側縁形態	細分型式
α類：基部をつくり基部が突出するもの	I類：平坦かやふくらむもの	①
	II類：ふくらむもの	②③
β類：基部が丸味をおびるもの	III類：ふくらむもの	④⑤
	IV類：平坦かやふくらむもの	⑥⑦⑧
γ類：基部が平坦なもの	V類：平坦かやむくらむもの	⑨⑩⑪
	VI類：内湾するもの	⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱
η類：基部が凹状のもの	VII類：ふくらむもの	⑯⑰⑯⑯⑯
	VIII類：側縁部の中位以下が角ばっているもの	⑯⑰⑯⑯⑯
	IX類：側縁部の中位以下が丸味をおびているもの	⑯⑯⑯⑯⑯⑯⑯⑯

※ 尚、アメリカ型石鏃特と先端部が丸味をおびているもの⑯⑯は個別に扱った。

(2) 石錐

I類 先端部と基部の境界が不明瞭で、全体的形状が細身のポイント状を呈するもの。全面調整である。

II類 先端部及び基部を入念にほぼ全面調整し、しかもその境界が明瞭なもの。

II-a₁ 先端部が基部の長さ以上のもの。

II-a₂ 先端部が二ヶ所に作り出されているもので、二ヶ所のものはII-a₁に等しい。

II-b₁ 先端部が基部の長さ未満のもの。

II-b₂ 先端部が二ヶ所に作り出されているもので、二ヶ所のものはII-b₁に等しい。

III類 先端部の長さが基部の長さ以内のもの。全面調整である。

III-a 基部が不規則な方形状を成す。

III-b 基部が三角形状を成す。

IV類 茎材（石核、剥片、破損した剥片）に部分的に調整を加え整形し、一部に錐部を作出しているもの。

IV-a 大形のもの。

IV-b 小形のもの。

(3) 石匙

I類 所謂横型のもの。

II類 所謂縦型のもの。

III類 つまみ部が不明瞭なもの。

(4) ポイント

長幅および型式相關図（第148図 239頁）によるBのまとまりをポイントとした。

I類 細長く左右対称形で、基部が作り出されている。全面調整である。

II類 やや細長く左右対称形であるが、基部は特別作り出されてはいない。尖頭部のみ背腹両面とも調整が加えられている。

III類 左右対称形で、基部は丸味をおびている。背腹両面とも全面調整に近い。

IV類 ほぼ左右対称形で、基部は丸味をおびている。調整は背面の場合、尖頭部及び周辺に及ぶが、腹面は主要剝離面を残し、尖頭部に若干の調整を加える程度である。

V類 ほぼ左右対称形であるが、形態が三角形、五角形等のもの。ほぼ全面調整である。

VI類 剥片の一部にわずかに調整を加え、尖頭部を作り出しているもの。左右非対称形である。

(5) 篠状石器

I類 捲形を呈し、両面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は平坦である。

II類 短冊形を呈し、片面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は弧状を成す。

III類 短冊形を呈し、両面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は弧状を成す。

(6) ピエス・エスキュー

I類 4ヶ2対の刃部を有するもの。

II類 2ヶ1対の刃部を有するもの。

(7) スクレイパー

従来、不定形石器、スクレイパー等と規定されて来た石器であるが、この中には定型的な石器として細分類される石器、さらに新器種としてこの種の石器の範疇から独立していく石器が含まれている可能性がある。事実、近年ピエス・エスキューはスクレイパーの範疇から独立して^{註1)}一つあるし、切削調整石器、二次加工がある石器、微細な剥離痕がある石器、ノッチ等は、その属性がかなり限定されてきている。本報告ではピエス・エスキューは(6)でとり扱い、他は第2表のようにとり扱った。尚、石器の出土数量についてはスクレイパーとして一括せず、「不定形石器」、切削調整石器、二次加工がある石器(S・F)、微細な剥離痕がある石器(M・F)、「スクレイパー」^{註2)}として扱った。本報告の「スクレイパー」の細分型式Ⅸ類・Ⅹ類は、理論的に可能な分類であり、それに対応する分類は本報告では充分検討することができなかった。又、「不定形石器」のI類の細分型式のいくつかは、将来定形的な器種として、独立した位置が与えられていく可能性がある。

第2表 スクレイパーの分類

「不定形石器」									切削調整石器	S・F	M・F	「スクレイパー」		
I類					II類	III類	V類	VI類				VIII類	IX類	X類
A	B	C	D	E	F	G	H	I						

I類 調整が全周あるいは全面に及び、定形的な形態を形づくっているもの。

I-A 長×幅×厚=1.6~3.2×1.2~3.5×0.5cm。形態は歪んだ四角形ないし円形を呈するが、四角形に片寄る傾向がある。同一打面で剥離が進行した結果得られる薄手の剝片を素材としている。調整は打面を除く側縁や先端部に加える場合が多い。

I-B 長×幅×厚=2.2~3.3×1.8~2.8×0.5~1.0cm。形態は円形ないし橢円形を呈し、断面形はレンズ状である。調整は両面とも全面調整もしくは部分調整である。

I-C 長×幅×厚=2.5~4.0×2.4~4.3×0.9cm。形態は歪んだ円形ないし橢円形を呈し、断面形はレンズ状もしくは蒲鉾形を成す。調整は両面とも全面調整もしくは部分調整である。刃部は敲打によるものか、全周潰れているのが特徴的である。

I-D 長×幅×厚=3.0~3.8×2.4~2.8×1~1.4cm。形態は歪んだ橢円形で断面形は蒲鉾形を呈す。剝片を素材とし、調整は粗く、背面のほぼ全周をめぐる。

- I-E 長×幅×厚=1.6~2.2×1.0~1.7×0.6~1.0cm。形態は円形を呈している。剥片を素材とし、背面のほぼ全面を調整している。石材は黒曜石に片寄る傾向がある。
- I-F 長×幅×厚=3.6~6.4×2.8~6.8×1.1~1.7cm。形態は重んだ円形あるいは楕円形を呈す。剥片を素材とし、全周あるいは一部に、やや粗雑な調整を加え刃部を形成している。断面形は蒲鉾形を呈す。
- I-G 長×幅×厚=3.7~5.6×2.6~3.4×1.5~1.8cm。形態は長楕円形を呈し、厚味がある。粗雑な調整が全周をめぐる。断面形は蒲鉾形を呈す。
- I-H 長×幅×厚=1.7~2.0×1.4~2.0×0.3~0.7cm。形態は円形を呈し、調整は両面とも全面に及ぶ。断面形はレンズ状を呈す。
- I-I 長×幅×厚=2.7~3.1×1.9~2.1×0.7~0.9cm。三角形状を呈し、その頂点に石匙に類似したつまみ部を作出している。断面形は不規則な楕円形を呈す。
- II類 尖頭部をつくり出したもの。
- III類 縱長の剥片の一側縁あるいは二側縁に調整を加えたもの。
- IV類 横長の剥片の短軸の一側縁と長軸の一側縁、あるいは長軸の一側縁に調整を加えたもの。
- V類 切断面に再調整のある石器
- VI類 二次加工のある石器。不規則な剥離痕が無造作に刃部をつくり出しているもの。
- VII類 微細な剥離痕のある石器。1mm弱の剥離痕が連続するもの。
- VIII類 石器の未製品
- IX類 完成した石器あるいは未製品の欠損品
- X類 二次調整部を素材の一部に無造作につくり出したもの。

この他、ノッヂ、デンティキュレイトがあるが、それらについては出土遺物の項で述べることとする。尚、Ⅷ類、IX類、X類は「スクレイパー」として、他の各類は「不定形石器」として便宜的に大別した。

2. 磨製石器

石斧

敲打痕が認められるものがあるが、石斧の型式との特徴的な関連性は認められなかったので、ここでは石斧の形態分類のみを提示する。

- I類 最大幅は刃部近くにあるが、両側縁はやや聞く程度である。側面観の胸部は扁平で、刃部は鎌刃を呈す。
- IIa類 短骨形で、基部は面を成す。側面観は胸部中央部よりやや刃部寄りに最大厚があり、刃部は鎌刃を呈す。
- IIb類 短骨形で、基部は点を成す。側面観は胸部中央部よりやや刃部寄りに最大厚があり、

刃部は船刀を呈す。

3. 磨石器

肉眼観察による使用痕分類と、礫の分類とを個別に行い、その後にその相互の傾向性を検討し、磨石器としての分類を行った。

使用痕

a 類 磨痕 ツルツルしている。時には擦痕が認められる場合もある。

b 類 敲打痕 打痕 (b-1 類) 敲打痕の集積

凹痕 (b-2 類) 敲打によって凹部を形成しているもの。

c 類 「擦痕」 敲打と磨きの複合によりカット面を形成しているもの。

d 類 搔疵痕 搐疵、押圧痕の類

礫の形態

A 類 直径10~13cm内外で球状を呈するもの。

B 類 平面形の形状は直径が10cm内外の円形で、断面形は細長い楕円形で扁平なもの。

C 類 長さ対幅が2:1で、平面形及び断面形が楕円形状を呈するもの。大きさは長さ7cm内外のもの(α)と長さ10~15cm内外のもの(β)とがある。

D 類 長さ(L)対幅(W)が $2 < L < 3 \sim 4 : W = 1$ で、断面形が三角形状を呈するもの。大きさは長さ15cm内外に集中する。

E 類 平面形及び断面形が不規則な楕円形状を呈するもの。長さ対幅が2:1のものと、 $2 < L < 3 \sim 4 : W = 1$ のものとがある。前者の大きさは長さ10~15cm(β)に、後者は長さ18cm内外(γ)に集中する。

F 類 E 類以上に不規則で、不整な自然礫に近い。大きさは長さ7cm内外のもの(α)と10~15cm内外のもの(β)と18cm内外(γ)に集中する。

G 類 大形で平面形が円形、楕円形、長楕円形等を呈す。重量が2~10kgのもの。

H 類 断面形が長方形ないし正方形の角礫。

磨石器の分類

I 類 C-α 類、F-α 類に打痕、磨痕が認められるもの。

II 類 A 類に磨痕の他、打痕、凹痕が組み合わされる場合のあるもの。

III 類 B 類、C 類、E 類、F 類の一部に、凹痕と磨痕の他に、打痕が組み合わされるもの。

IV 類 D 類と F 類の一部に「擦痕」及び磨痕が組み合わされるもの。まれに C-β 類にも認められる。

V 類 H 類に磨痕が認められるもの。

VI-1 類 G 類の凸面に凹痕、磨痕、打痕が認められるもの。

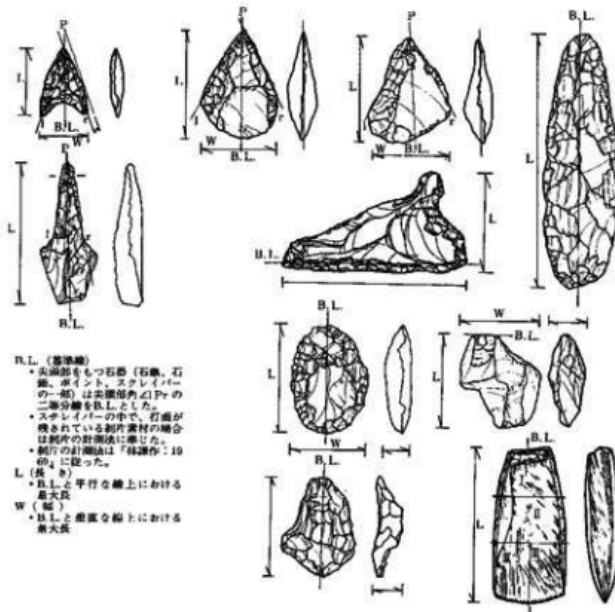
VI-2類 G類の凹面、やや僅かな凹面に磨痕が認められたもの一石皿。「中央を曲めた皿形の石器」の定義を充分満足するものではないが、ここでは便宜的に石皿の名称を付け加えておく。

4. 石製品 円板状に整形したもの。擦痕が認められるものもある。

5. 破 石 打製石斧様石器を砥石に転用したと考えられるものもある。

柳 沢 みどり

尚、石器の計測法は以下による。



注

1. 間村道雄: 「縄文時代石器の基礎的研究法その具体例その1」『東北歴史資料館研究紀要』第5巻 1979
2. 阿子島香: 「切削調整石器」『想山』東北大文学部考古学研究室 1979
3. 本文中のM・Fは1mm頭の剥離痕が規則的に連続するもの。S・Pは剥離痕が無造作に連続するもの。
4. 尚、遺構出土物数量表のスクレイバーは、「不定形石器」「切削調整石器」「スクレイバー」を括して扱っている。
5. 永峯光一: 石皿『日本考古学辞典』1962

第1図 石器の計測基準

梨野 A 遺跡

(C - 180)

遺跡所在地：仙台市茂庭字大堤22

調査期間：1次調査 昭和54年10月22日～11月12日

2次調査 昭和55年4月7日～8月8日

3次調査 昭和56年4月6日～9月6日

対象面積：1次調査 1250m² 2次調査 2400m²

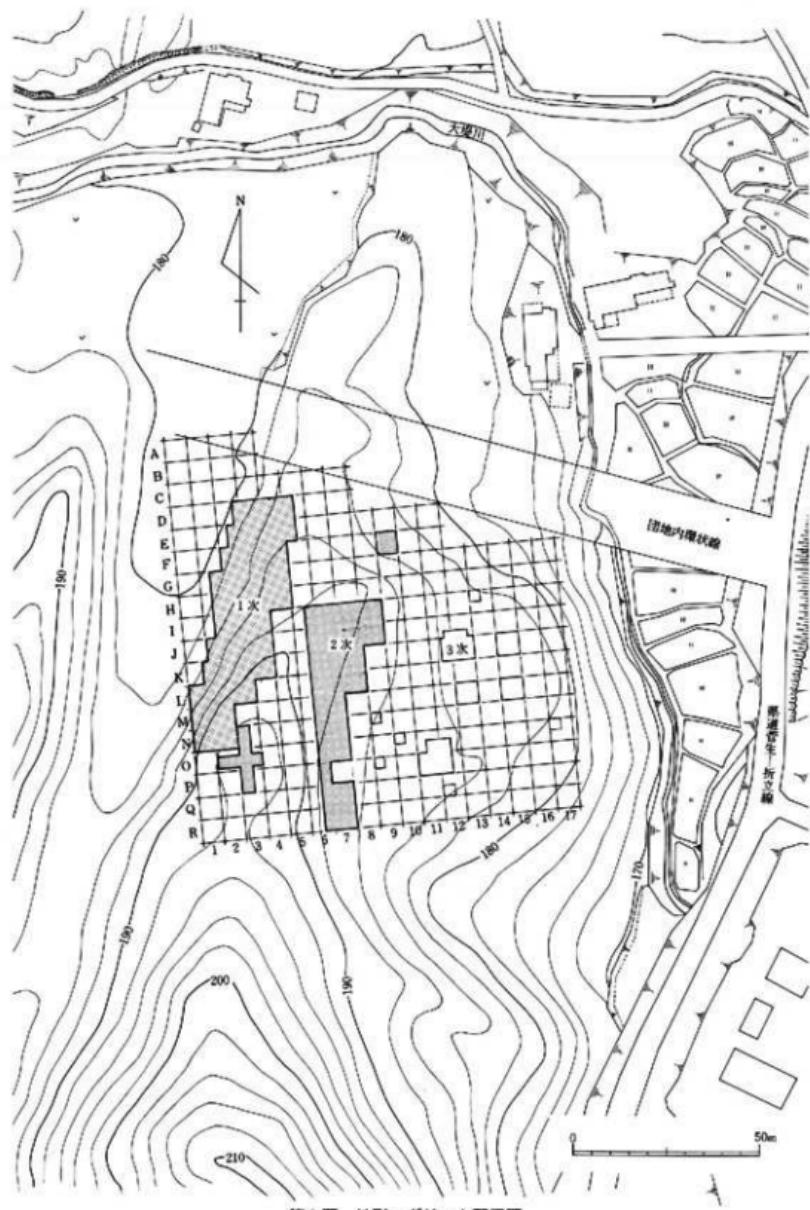
3次調査 4600m²

発掘面積：1次調査 1050m² 2次調査 970m²

3次調査 300m²

担当職員：佐藤甲二・篠原信彦・渡部弘美・加藤正範・森野裕彦

I. 遺跡の文地



第1図 地形・グリッド配置図

I. 遺跡の立地(第1図、写真1)

梨野A遺跡は以前より縄文時代の遺物散布地として仙台市の遺跡台帳に登録されていた遺跡で、造成工事地内の北東隅、県道管生一折立線梨野バス停より南西約150mの丘陵上に位置する。

丘陵は標高約210mを頂部として北側に舌状に張り出す。遺跡は丘陵やや南側の東側斜面部に入り込んでいる浅い谷の北側、標高180~190mの間の丘陵北面から東面にかけての緩斜面上に立地する。緩斜面の標高182~184mの間には、北側、東側にはほぼ平坦な面が広がっている。

丘陵の北側は梨野平坦面へと続く斜面となり、南側は茂庭丘陵地帯へと連なる。丘陵の西側には深い谷が、東側には大堤川に開削された深い谷が南北に走る。名取川の支流大堤川は、梨野平坦面で東流していたものが、遺跡北東約30mの地点で大きく方向を変え、茂庭低地へと南流し、梨野A遺跡を乗せる丘陵を北から東へ巻くようにして流れている。大堤川と遺跡との比高差は約10~15mで、東側谷部には湧水点がみられる。

当丘陵は以前雑木林であったと言う。戦後開墾され、圃地用地買収前までは、緩斜面は畠地として、急斜面は杉の植林地として利用されていた。開墾時にはかなり削平をしたとも言われている。尚、丘陵北側は東西に走る間地内柵状線によってすでに寸断されている。遺跡はこれより南側が造成圃地用地となっており、北側は現在も個人所有の畠地となっている。

佐藤甲二

II. 調査の方法と概要

梨野A遺跡は昭和54年~56年までの3年次に渡って調査が行なわれた。調査対象部分は間地内柵状線の南からほぼRラインまでの標高180m~192mの間、8300m²である。1次(昭和54年度)・2次(昭和55年度)調査は圃地造成工事に伴う事前調査で、丘陵西側急斜面部、丘陵東側緩斜面部が調査対象部分であった。3次(昭和56年度)調査は、丘陵東側平坦部の公園化に伴う遺跡範囲確認調査であった。

1. 調査の方法(第1図)

ほぼ南北方向(N-6°-W)に南北軸(A~R)、これを直交する東西軸(1~17)による6×6mのグリッドを設定し調査を行った。各グリッドは4分割し、北西方より右廻りにa・b・c・dの小グリッドを設けた。

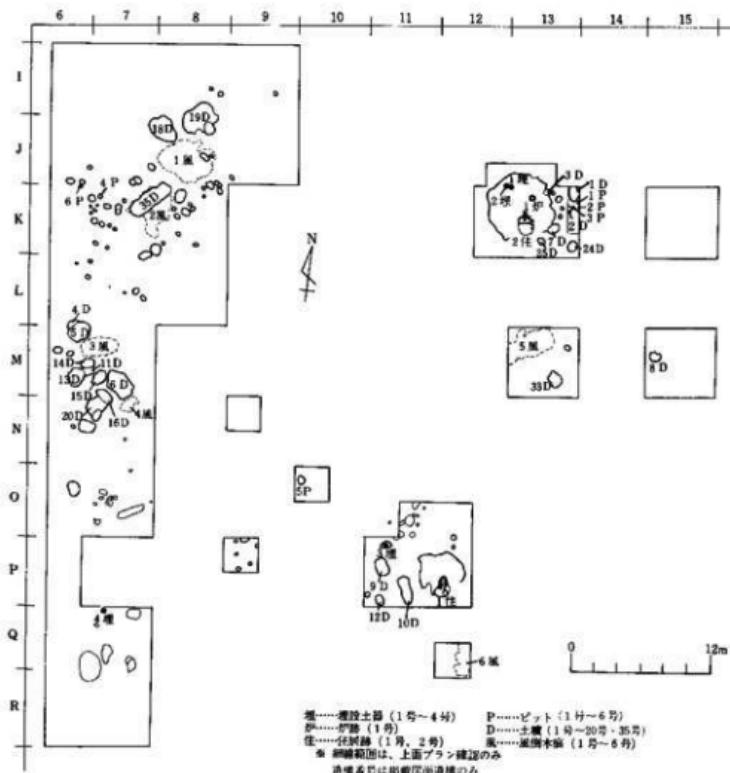
2. 調査の概要

1次調査(第1図、写真2)

10月22日より11月12日の約半月間行なわれた。西側丘陵急斜面部約1300m²が調査対象面積でDラインからNラインまでの約1,000m²を調査したが、20~30cmの表土(I層)排土後地山(VI層)となり、遺物は磨滅の激しい小土器片が数点表土中より出土したのみで、遺構は皆無であった。地山は、植林の根によって凹凸状であり、調査前より露出している部分もみられた。

2次調査(第1・2図、写真3~5)

4月7日より8月8日までの約4ヶ月行なわれた。丘陵東側の標高186m~190mの間の緩斜面部約2400m²が調査対象面積で、I~R-6(東側)~9グリッドを中心として約1000m²を調査し



第2図 遺構配置図

1. 調査前全景
(北東より)

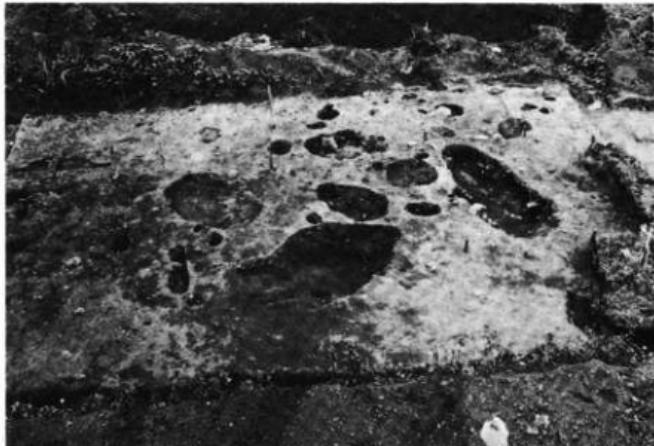


2. 54年度調査遺景
(北西より)



3. 55年度調査遺構
完振状況(1)
(南東より)





4. 55年度調査遺構
完掘状況(2)
(東より)



5. 55年度調査遺構
完掘状況(3)
(北より)



6. 56年度調査1号住
居跡完掘状況
(東より)

た。表土排土後、ほとんどが直接Ⅲ層となり、K-7グリッドⅢ層上面で、古墳時代の土壙1基が検出されたが、他のグリッドではⅢ層上面より遺構は検出されなかった。Ⅲ層中には多量の縄文時代の遺物が含まれ、これを排土した段階で、V層(地山漸移層)・地山層となり、J-8、K-7・8、M-6・7、N-7グリッドを中心として、縄文時代の埋設土器1基、ピット49個、土壙22基が検出された。Iラインでは、表土が10cm前後で直接地山となる部分もみられ、遺構も希はくな状態であった。この為、北側の1段下った部分にF-10グリッドを設定し調査したが、耕作による削平が進んでおり、表土下約10cm前後で地山となり、遺構は検出されなかった。南側、O・Q・R-7グリッドは、造成工事部分よりはずれる為、遺構のひろがりをみることを主としたので、遺構上面プラン確認のみに調査をとどめたが、土壙、ピット状の落ち込みがV層上面で確認された。しかし、Oライン以南では出土遺物量も少なくなり、Rラインでは遺構も検出されず、地山も削平を受けている状態で、遺構はRライン以南にはひろがらない様子であった。また丘陵尾根上、及び東側急斜面の状況をみると、丘陵尾根上のN-P-2・3グリッドに幅3mの十字状のトレンチを入れたが、西側急斜面同様、植林による地山凹凸状を呈しており、遺物、遺構は皆無であった。遺構以外では地山上面で風倒木痕が4基検出されている。

3次調査(第1・2・6回、写真6)

4月6日より9月6日までの約5ヶ月間行なわれた。造成工事によって削平された部分を除く残りの約4600m²が調査対象で、この内、東側平坦部標高182~184mを中心とする300m²を調査した。今回の調査は公園化に伴う梨野A遺跡の性格把握、遺跡の広がりを主体とする調査であった為、平坦部に入れたK-13・15、M-13・15グリッドを中心として丘陵際にも数ヶ所の調査区を設けた。その結果、P-12(d)、K-13グリッド地山上面で縄文時代の住居跡(1・2号)の一部が検出され、O-11・12、J-12・13、K-12グリッドの一部を新たに拡張した。またK-13、P-11グリッドを中心としてIVb層上部で、縄文時代の埋設土器2基、炉跡1基、V層及び地山上面で、縄文時代の埋設土器1基、ピット17個、土壙12基が検出された。O-11(d)グリッドでは地山上面でピット、土壙状の落ち込みが検出されたが上面確認のみでとどめた。遺構以外では風倒木痕2基が検出された。丘陵際のI-14(a)、O-17(a)、Q-12(d)ではI層下に若干のⅢ層をみると、地表下約20~30cmですぐに地山となり、地山は地表等高線とほぼ同様に、北東側、東側、南東側に下っていく。M-13、15グリッドに於いてもM-15グリッド西側で土壙が1基検出されたのみで、周辺部同様地山がすぐに顔を出す状態であり、15ラインより以東、Iラインより以北、Rラインより以南は、遺構がひろがる可能性はうすい。

3次調査では新たにK-13グリッドを中心に縄文時代包含層(IV層)が認められ、K-13グリッド東側では早朝の包含層IVc層が検出された。55~57号ピット、24号土壙北側から地山が徐々

に北東に落ち込んで行っており、この部分にⅣc層が認められた。東側M-15グリッドではⅣc層が確認されなかった点より、Ⅳc層はK-13グリッド北東側に若干分布する程度であろうと考えられる。

尚、K-13グリッド地山上面検出2号住居は、J-12・13、K-12グリッドではⅣb層中で上面プランをおさえることが出来たが、当住居を復元住居とする計画もあり、Ⅳb層中以下の調査、炉の埋土の掘り下げは行なわなかった。同理由により、K-13グリッド東側に検出されたⅣc層も4×2mの部分の掘り下げを行なったのみである。

9月6日全てのグリッドの埋戻しが完了し、3ヶ月に渡る梨野A遺跡の調査は完了した。検出遺構は縄文時代の住居2軒、炉跡1基、埋設土器4基、ピット66個、土塙34基、古墳時代の土塙1基であった。遺構以外では風倒木痕が6基検出された。出土遺物は、Ⅲ層、Ⅳ層を中心として平箱約100箱分が出土したが、その大部分は縄文時代の土器破片資料であった。

佐藤甲二

III. 基本層位(第3図、写真7)

現表土層より地山層まで大別6層から成り、これらはさらに11層に細別される。

第I層 現表土層で、2層に細別される。

Ia層 黒褐色(10Y R 3/6)シルト層。粘性弱く、しまり不良。

表土及び畑地耕作土。草、木の根を多く含む。厚さ約10~20cm。

Ib層 黒褐色(10Y R 3/6)シルト層。粘性なく、しまり不良。

畑地耕作土。II層をブロック状に含む、Ia層とII層の混合土。厚さ約5~15cm。

第II層 黒色(10Y R 3/6)シルト層。粘性弱く、しまりやや不良。

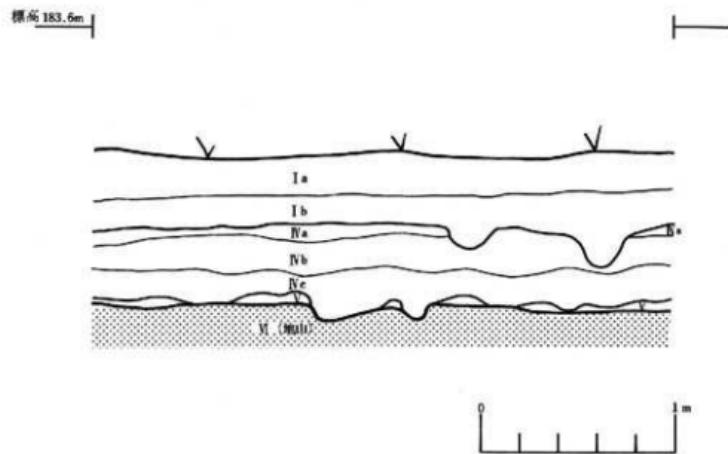
開墾時前の旧表土(雜木林の時期の腐植土)。ほとんどが耕作によって削られている。

O-7、J-K-12・13、M-13グリッド等で部分的にしか分布せず。厚い部分で約5~6cmの薄い層。磨滅風化した小土器器片を数点含む。

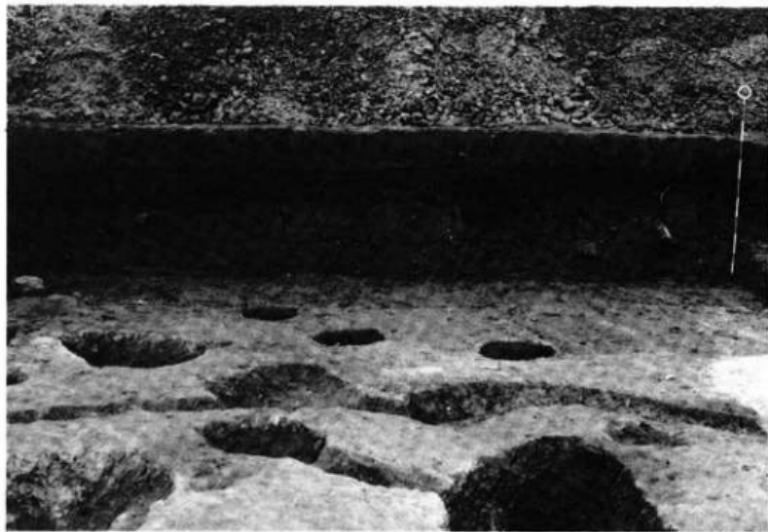
第III層 にぶい黄褐色~黒褐色(10Y R 3/6~3/8)粘土質シルト。粘性は地点によって異なる。しまり不良。

IV層以下の層の二次堆積層。加えて雜木林の時期に於いて木の根の擾乱を受けており、多量の地山ブロックを含む。III層の下層は直接地山となる場合が多い。西側急斜面以外の全調査地点に分布する。厚さ約10~20cm。多量の縄文時代の遺物を含む。

第IV層 縄文時代の遺物包含層で3層に細別される。



第3図 基本層位 K-13(b) 東壁セクション図



7. 基本層位 K-13(b) 東壁セクション

- IVa層** 暗褐色(10Y R 3/4)粘土質シルト層。粘性強く、しまり良好。
- IVb層** 漸移層。J・K-12・13、M-13、N-9、O-10、P-9グリッドに分布。部分的には厚い場合もあるが、約5cm前後の薄い層。
- IVb'層** 暗褐色(10Y R 3/4)粘土質シルト層。粘性やや強く、しまり良好。
- Va層** 同一グリッドに分布。厚さ約10~30cmと安定していない。P-9グリッドでは下層で若干しまりが不良な部分がみられ、これをVib'層とした。
- Vc層** 暗褐色(7.5Y R 3/4)シルト質粘土層。粘性強く、しまり良好。
- K-13グリッド東側のみに分布が認められた。厚い部分で約20cm。縄文時代早期末葉の遺物のみ出土。
- 第V層** 褐色(10Y R 4/4)粘土層。粘性強く、しまり良好。
- 地山漸移層。厚さ約2~3cm。無遺物層。
- 第VI層** 黄褐色~褐色(10Y R 4/4~5/4)粘土層。粘性強く、しまり良好。
- 褐色・淡黄色・にぶい黄色(10Y R 4/4・5 Y 4/4・2.5Y 4/4)凝灰岩層
- 地山層。地山層には粘土層、凝灰岩層、粘土中に多量の風化凝灰岩ブロックを含む粘土層と凝灰岩層の混合層から成り、M-13グリッド南西側深掘区(2×2m、深さ約1m)の結果では、上層より粘土層、混合層、凝灰岩層の層序となるが、調査地点のほとんどは地山層が直接凝灰岩層、混合層となり、わずかにK-13、P-9グリッドを中心とする部分にしか粘土層は分布しなかった。従って、本来分離すべき3層を一括してVI層とした。尚、粘土層、混合層とも無遺物層である。

以上、基本層序は第I層から第VI層まで順序だって認められた調査地点はなく、非常に不安定な堆積状態を示す。ほとんどのグリッドはI層→III層→VI層の層序から成り、表土下約20~40cmで地山となる。わずかに東側緩斜面部から平坦部に移行する部分に入れたJ・K-12・13、O-10、P-9グリッドで堆積土が厚く(K-13グリッドの場合表土から地山まで約1m)、これらグリッドを中心としてIV層が認められた程度であった。

IV. 縄文時代の遺構と遺物

1. ピット、土壙の分類基準

I. 平面規模による分類

ピット66個、上壙34基が検出されたが、この両者は平面規模の差により分類しており、堆積土、出土遺物、配置等からの分類ではない。従って土壙と名称したものより規模の小さなものとしてピットの名称が与えられている。土壙もその平面規模により、小型、中型、大型の3つに分けた。これらは全て上端最大値(長辺、長軸等)を分類基準としており、その分類値を次のように置いた。

ピット：0.7m未満のもの。

小型土壙：0.7m以上、1m未満のもの。

中型土壙：1m以上、2m未満のもの。

大型土壙：2m以上のもの。

ピットと土壙との分類値を0.7mに置いたのは、この値未満の場合、下端最大値が全て0.5m未満となり、加えて上端最大値に対して比較的深いものが多いという点で、0.7m以上のものとは多少差異を見い出せるという点からである。しかしながら、小型土壙と中型土壙、中型土壙と大型土壙との分類値は、いたって便宜上の値である。

II. 土壙の形態分類

土壙は上端平面形、下端平面形、底面積、断面形の上から形態分類を行ったが、平面形に関しては、当遺跡出土土壙のほとんどが整形を呈していない(ピットも同様)という点より、分類では、例えば不整円形も円形として取り扱った。また余りにも不整なものに関しては分類より除外し、明らかに縁の一部が崩壊したと認められるものについては上端平面形を復元した状態で分類した。

上端・下端平面形は円形、楕円形、長楕円形に分類される。これらの分類の一応の目安として、長軸÷短軸の値が1.2未満のものを円形、1.2以上2.0未満のものを楕円形、2.0以上のものを長楕円形とした。

底面積は上端面積より大きいものと小さいものに分類され、さらに小さいものは、上端面積と比較して広いものと狭いものに分類される。

断面形はラスコ状、U字状、ややひらいたU字状、スリ鉢状、舟底状に分類される。

以上、上端平面形、下端平面形、底面積、断面形の組み合わせにより土壙は以下のA～Fま

での7類型に分類される。

A類：上端・下端平面形とも円形を呈す。底面積が上端面積より大きい。断面はフラスコ状を呈す。

B類：上端平面形楕円形、下端平面形円形を呈す。底面積が比較的広い。長短軸断面はややひらいたU字状のもので、壁角度は長軸が短軸に比べ若干ゆるやかになる。

C類：上端・下端平面形とも楕円形を呈す。底面積、長短軸断面ともB類と同様、壁角度は長短軸ともほぼ等しいもの。

D類：上端平面形楕円形、下端平面形長楕円形を呈す。底面積、長短軸断面ともB類と同様。壁角度は短軸が長軸に比べ若干ゆるやかになる。

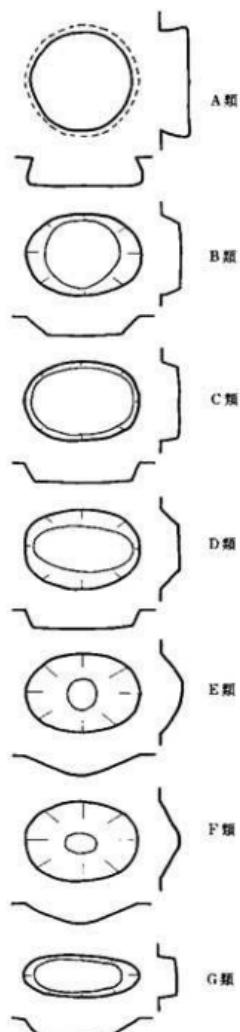
E類：上端平面形楕円形、下端平面形円形を呈す。底面積が狭い。長短軸断面が若干スリ鉢状を呈し明確な下端を持たない。壁角度は長軸が短軸に比べゆるやかになる。

F類：上端・下端平面形とも楕円形を呈す。底面積、長短軸断面、壁角度ともE類と同様。

G類：上端・下端平面形とも長楕円形を呈す。底面積は比較的ひろい。長軸断面舟底状、短軸断面U字状で、長短軸壁角度の差異が大きい。

以上、土壤形態を7類型に分類したが、これら土壤の深さは浅く、深さ÷上端長軸の値が0.2前後のものがほとんどで、0.5以上(0.56)のものは、C類の小型土壤1基しか認められなかった。

佐藤甲二



第4図 土壤の分類基準

2. 土器の分類基準

梨野A遺跡出土の縄文土器の分類に際しては、時期区分としての「群」を、第Ⅰ群～第Ⅴ群まで設定した。これら各群は、器形、部位形態、文様(文様構成、文様帶、文様形態、文様要素)胎土等によりさらに「類」に細分した。

第Ⅰ群土器

早期中葉に位置づけられる貝殻・沈線文系土器群である。文様の特徴により以下の2類に分けられる。

第1類 沈線文のもの

第2類 貝殻腹縁圧痕文のもの。文様構成によってa、bに分けられる。

a. 貝殻腹縁圧痕文が沈線、「く」字状連続刺突文に沿って文様を構成するもの。

b. 貝殻腹縁圧痕文が単独に文様を構成するもの。

第Ⅱ群土器

早期末葉に位置づけられる条痕文系土器群である。胎土に植物繊維を含み、内外面の文様より以下の4類に分けられる。

第1類 外面縄文、内面条痕文のもの。隆線の有無によりa、bに分けられる。

a. 外面に隆線を持つもの。 b. 外面縄文のみのもの。

第2類 外面縄文、内面無文のもの。

第3類 内外面とも無文のもの。隆線の有無によりa、bに分けられる。

a. 外面に隆線をもつもの。 b. 内外面とも無文のみのもの。

第4類 外面沈線文、内面条痕文のもの。

第Ⅲ群土器

前期中葉に所属する土器群である。半截竹管状の施文具による鋸歯文と刻みを持つ隆線を持つ。

第Ⅳ群土器

中期前半に所属する土器群である。半截竹管状の施文具による連続刺突文を持つ。

第Ⅴ群土器

中期後葉に所属する土器群である。文様構成の特徴により以下の2類に分けられる。

第1類 文様のあるもの。その文様帶によりa、b、c、dに分けられる。

a. 口唇部に文様帶を持つもの。 b. 口唇部直下から体部まで文様帶を持つもの。

c. 口唇部直下が無文帶となり、その下部から体部まで文様帶を持つもの。

- d. 口縁部が無文帯となり、体部に文様帯を持つもの。

第2類 地文のみのもの

第VI群土器

中期末葉に所属する土器群である。文様構成の特徴により以下の3類に分けられる。

第1類 口縁部～体部に文様帯を持つもの。文様形態によりa、b、c、dに分けられる。

- a. 隆沈文による楕円形文様区画を持つもの。
- b. 隆線文・沈線文・隆沈文による「S」字状文を持つもの。
- c. 隆線文・沈線文による「コ」字状文を持つもの。
- d. 隆線文・隆沈文による方形区画文を持つもの。

第2類 口縁部のみに文様帯を持つもの。文様形態によりa、b、cに分けられる。

- a. 波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部で横位にめぐるもの。連続刺突文の有無により二分される。

①、連続刺突文の施文されているもの。②、連続刺突文の施文されないもの。

- b. 頸部に横位の隆線文がめぐり、口唇部直下から隆線文が垂下しているもの。

第3類 地文のみのもの。

第VII群土器

大木10式末葉から後期初頭にかけての土器で、所属時期を確定できないものである。細片等のため文様構成を明確にしえないものが多いための便宜的な分類である。

第VIII群土器

後期初頭の上器群で器形より深鉢I～Ⅲ類、壺I・II類、浅鉢I～Ⅲ類・小型鉢・蓋に分けられる。これらは、文様形態より以下のように分類され、さらに表出技法により細分される。

第1類 湧状・弧状磨消繩文(肩消然系文を含む)、渦状・弧状沈線文のもの。

- a. 磨消繩文により表出されるもの。 b. 沈線文により表出されるもの。

第2類 湧状・弧状隆線間研磨文、弧状隆沈線文のもの。

- a. 湧状・弧状隆線間研磨文のもの。 b. 渦状・弧状隆沈線文のもの。

第3類 「X」状・三角形状・斜行文のもの。

- a. 磨消繩文により表出されるもの。 b. 沈線文により表出されるもの。
- c. 隆線間研磨文により表出されるもの。 d. 隆沈線文により表出されるもの。

第4類 並行直線状の磨消繩文と横位直線状の沈線文。

- a. 沈帶磨消繩文のもの。
- b. 橫位直状沈線のもの(口縁部)。b₁: 1本のもの。 b₂: 2本のもの。
- c. 縱位並行沈線間磨消繩文のもの。

第5類 連続刺突文が文様単位の主体となるもの。

- a . 沈線間連続刺突文のもの。
- b . 連続刺突文が単独で文様要素となるもの。

第6類 連続刺突隆線文・連続刻み隆線文のもの。

- a . 連続刺突隆線文(鎖状隆線文—「鎖」が短沈線状のものを含む)のもの。
- b . 連続刻み隆線文のもの。※ a・b類とも一部は「方形区画文」に含まれる可能性あり。

第7類 方形区画文のもの。

- a . 沈線文や縦位隆沈線により構成されるもの。
- b . 連続刺突文により構成されるもの。

第8類 上位区画帯文のもの。

- a . 沈帯により口縁部と体部を区画するもの。
- b . 隆沈帯により口縁部と体部を区画するもの。
- c . 縦状隆帯により口縁部と体部を区画するもの。
- d . 隆帯により口縁部と体部を区画するもの。

第9類 下位区画隆帯文のもの。

隆帯により体上部文様施文部と体下部研磨部を区画するもの。

第10類 口縁部縦位裝飾文のもの。

- a . 研磨した口縁部に縦位隆沈線文が下垂するもの。
- b . 研磨した口縁部に縦位隆線文が下垂するもの。

第11類 突起のあるもの

- a . 貫通孔のあるもの。a₁ 盲孔。a₂ 頂部：凹孔・盲孔。a₃ 頂部：溝状沈線文。
- b . 貫通孔のないもの。b₁ 盲孔。b₂ 頂部：凹孔・盲孔。b₃ 頂部：溝状沈線文。

*観察者中の文様名稱は施文部位に分解しているため1~11類の名稱と細部において多少異なる。

第Ⅸ群土器

広義の後期前葉の土器に属するが、下記の1・2類を第Ⅹ群土器より分離して狭義の後期前葉の土器とした。

第1類 突起より縦位「S」字状沈線文の下垂するもの。

第2類 突起及び口縁部を文様起点として多条弧状並行沈線文の施文されるもの。

第Ⅹ群土器

後期後葉の土器である。大波状口縁と瘤状小突起の配列を特徴とする。

第Ⅺ群土器

中期から後期に属する粗製土器(「地文」のみの土器で「文様のない突起」をもつものを含む。)口

縁部の断面形態により、以下の4類に分けられ、さらに地文の種類によって細分される。

第1類 口縁から体上部にかけて内弯する深鉢。

- a. 繩文のもの。 b. 繩文+綾格文のもの。 c. 格子状沈線文のもの。
- d. クシ目状沈線文のもの。 e. 摺糸文のもの。 f. 網目状摺糸文のもの。

第2類 口縁部が直線的に外傾する深鉢

- a. 繩文のもの。 b. 内外縁文のもの(波状口縁のものを含む)。
- c. 摺糸文のもの。 d. 網目状摺糸文のもの。 e. 繩文+綾格文のもの。

第3類 口縁部が外反する深鉢のもの

- a. 縦位縄文のもの。 b. 摺糸文のもの。

第4類 内弯する浅鉢

- a. 繩文のもの。

第XII群土器

中期から後期に所属するミニチュア土器である。

第XIII群土器

晩期後葉に所属する土器群である。形態的特徴より以下の3類に分けられる。

第1類 深鉢形土器。頸部の有無によりa、bに分けられる。

- a. 無頸のもの。口頸部を形成する屈曲点を有しない。口縁部直下の文様帶の有無で二分される。

- 1. 口頸部直下に文様帶がある。2. 口頸部直下に文様帶がない。

- b. 有頸のもの。口頸部を形成する屈曲点を有する。頸部の文様帶の内容により三分される。

- 1. 文様帶を区画する沈線等が施文されず、頸部は無文となる。2. 文様帶を区画する沈線等が上下に一条ずつ施文され、頸部は無文となる。3. 文様帶に4~5条の沈線が施文される。

第2類 鉢・深鉢形土器。頸部の有無によりa、bに分けられる。

- a. 無頸のもの。体部から口縁部へ直線的あるいは外反気味でひらくもの。

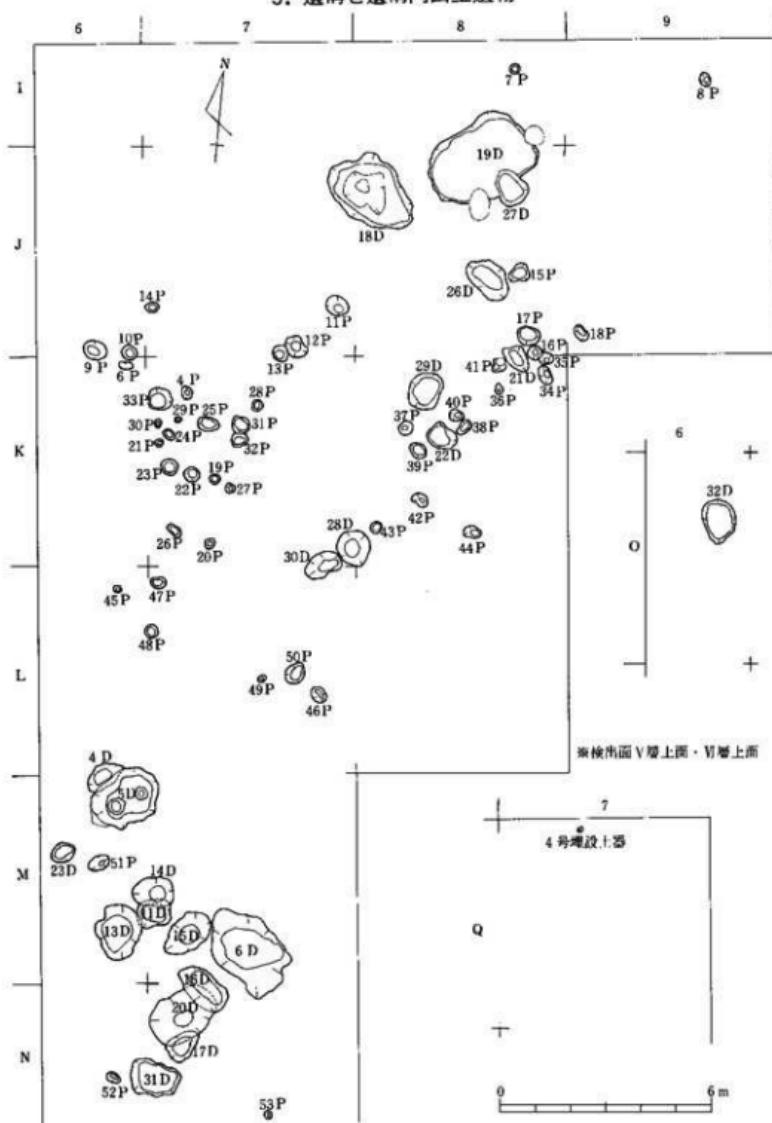
- b. 有頸のもの。頸部が器高の半分以上を占め、短い体部を持つものと、そうでないものとに二分される。

- 1. 頸部が体部の器高の $\frac{1}{3}$ 以下である。頸部は直線ないし内弯気味で直立ないし外傾する。2. 頸部が体部に比し大きく、直線ないし外反しながら大きく聞くもの。

第3類 壺形土器。

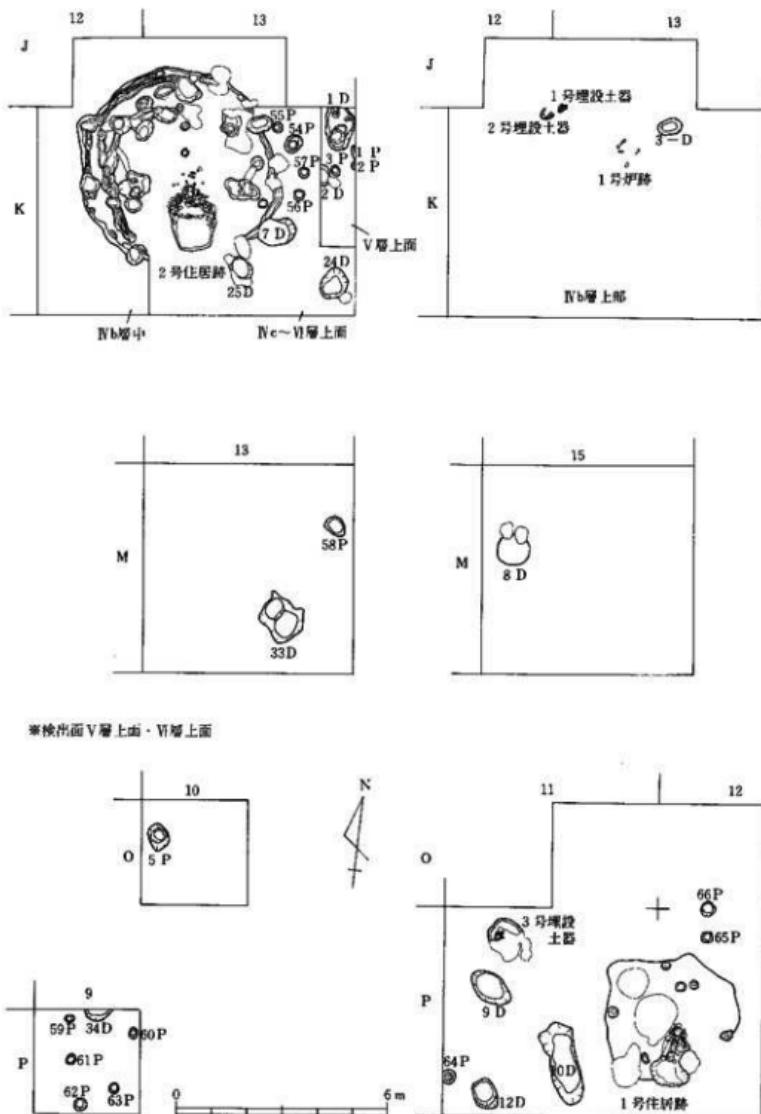
佐藤甲二・上浜光朗・田中則和・吉岡恭平

3. 遺構と遺構内出土遺物



第5図 遺構配置図 (I ~ Q - 6 ~ 9グリッド)

IV. 繩文時代の遺構と遺物



第6図 遺構配置図 (J~P-9-15グリッド)

(1) 繩文時代早期

K-13グリッド東側IVc層(早期包含層)堆土後に、V層上面で検出された。検出遺構はピット3個(1~3号)、土壤2基(1・2号)で、3号ピット以外は完掘していない。土壤は小型、中型のC類に属すると思われる。

1・2・3号ピット(第8図)

深さが10cm以下の浅いピットである。3号ピットは上端規模約30×25cm、上端、下端平面形とも楕円形、深さ9cmのピットである。1~3号ピットとも堆積土は単層で出土遺物はない。

1号土壤(第7・8図)

北側の一部を未掘であるが、中型C類の土壤で、底面には大小ピット状の落ち込みが3個検出された。堆積土は2層から成り、堆積土1層より第II群土器を4点出土した。

2号土壤(第8図)

西側部分未掘の為、正確な規模は不明であるが、上端長軸規模約70cm前後の小型C類の土壤になると思われる。浅い、底面平坦な土壤である。堆積土は2層から成るが出土遺物はない。

以上、ピット、土壤の所属時期は、IVc層中に第II群土器しか含まない点より、早期末葉に位置づけられる。

佐藤甲二

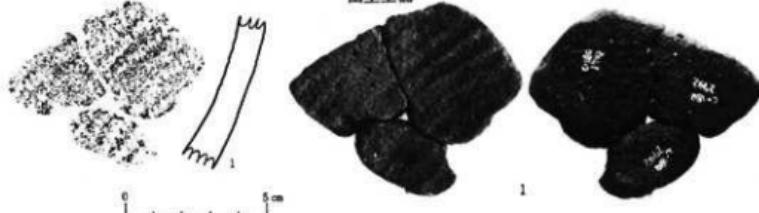
1~3号ピット、1・2号土壤観察表

堆積名	地質名	検出面	地理上	平面形態		平田規格	cm	深さ	傾角	表面状態	上端長軸方位	分類	備考
				上端	下端								
1・2 P	K-13(b)	V層上部	1	—	—	—	—	10.7	—	—	—	—	変形未解
3 P	K-13(b)	V層上部	1	楕円	円	31×24	20×17	9	120°	平坦	N-25°-W	—	—
1 D	K-13(b)	V層上部	2	不整円	不整円	中	0.25×0.85	0.18×0.70	17	113°	凹凸	N-12°-W	C 北東一極未露、表面ピット3
2 D	K-13(b)	V層上部	2	椭円?	椭円?	小	—	—	13	113°	平坦	—	C? 西側一極未露

1~3号ピット、1・2号土壤層註記表

遺構名	地質名	色調	土質	粘性	しまり	備考	
						1	2
1・2・3 P	1	7.5YR5/4 單褐色	粘土	強い	食	粘土粒、灰化粒、凝灰岩粒混在。1~2cmの小塊。	
1 D	1	7.5YR5/6 時間色	粘土	強い	やや不良	粘土粒、灰化粒、量。2~3cmの小塊多量。凝灰岩粒少量。	
	2	10YR5/6 土褐色	粘土	強い	不食	2~3cmの小塊多量。地山ブロック。	
2 D	1	7.5YR5/6 時間色	粘土	強い	食	粘土粒、灰化粒、凝灰岩粒混在。1~2cmの小塊多量。	
	2	10YR5/6 土褐色	粘土	強い	やや不良	1~2cmの小塊多量。地山ブロック多量。	

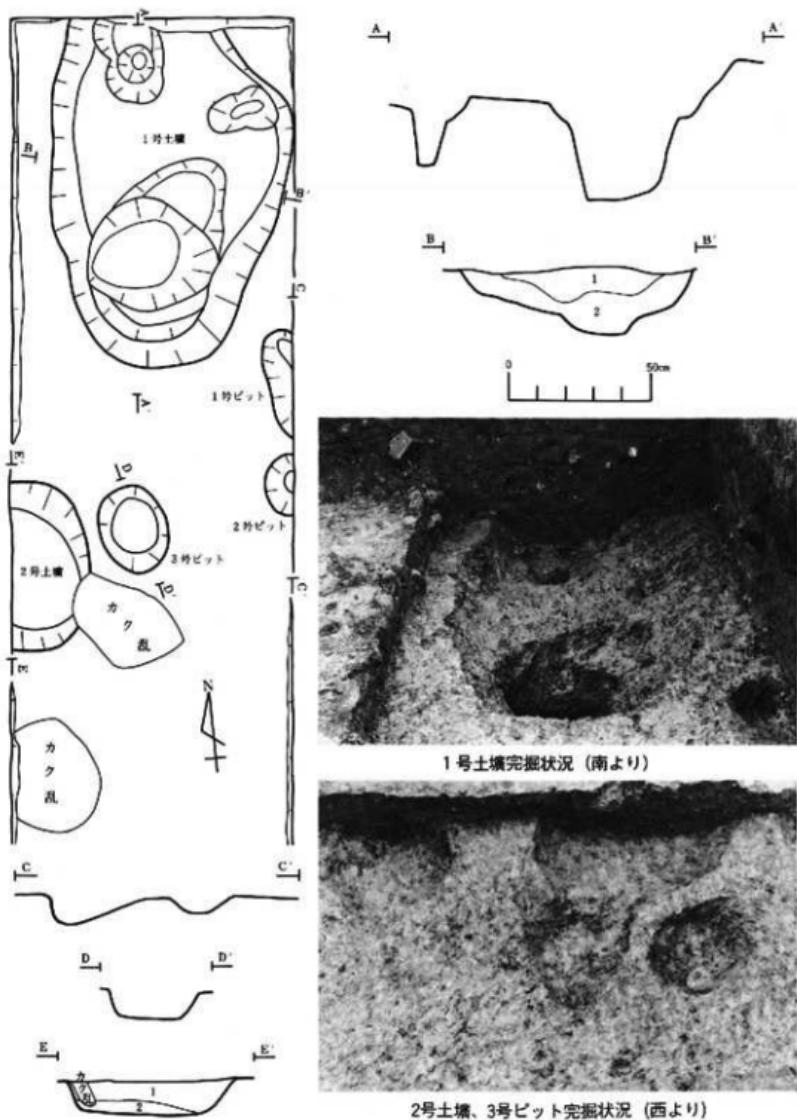
出土土器



観察表

回	遺構名	堆積土	部位	外表面調	内面調	調節	深度cm	胎	土	構成	外表面調	分類	備考
1	1 D	1	全体	褐色L.R.多孔調	柔軟	—	8~10	粘土多量。石炭多量。砂粒。	不食	褐色	B1a	外表面調	

第7図 1号土壤出土遺物



第8図 1号～3号ビット、1号・2号土壙平面図

(2) 繩文時代中期・後期

検出遺構は住居跡2軒(1・2号)、炉跡1基(1号)、埋設土器3基(1~3号)、ピット2個(4・5号)、土壙4基(3~6号)の12遺構である。

縄文時代中期の遺構は、1・2号住居跡、3号埋設土器、5号ピット、3号土壙、縄文時代後期の遺構は1・2号埋設土器、4号ピット、4・6号土壙で、1号炉跡、5号土壙は、縄文時代中期か後期のいずれに所属するか不明である。

検出面は、1号炉跡、1・2号埋設土器、3号土壙がIVb層上部、2号住居跡がIVb層中で、他は全てVI層(地山)上面で検出された。

土壙の規模は、小型1基(3号)、中型1基(4号)、大型2基(5・6号)のものがあり、土壙形態は全てC類である。

1号住居跡(第9~13図、写真8~11)

P-11・12グリッドⅥ層排上後、VI層上面で検出された。後世の擾乱により、すでに壁面、床面はなく炉、ピット、貼床の一部を検出したのみで、周溝の有無は不明である。

住居はVI層(地山凝灰岩層)を約10~15cm程掘り込み粘土を入れ貼床としているが、上部はすでに削平されている。貼床は残存の良い部分で厚さ約10cmある。住居南東側では掘り込み及び貼床は検出されなかった。

平面形：掘り込み部及び貼床残存部より推測すると、4×4mのほぼ円形の住居かと考えられる。

ピット：9個検出された、P₁・P₂は貼床排上後に検出されたが、P₁に関しては上部での見落しの可能性が強い。これらピットの形態、規模、埋土、配列に規則性を見出すことは出来なかった。

〈P₁〉貼床排土後に検出された。上端長軸規模約20cm、深さ約10cmの浅いへこみ状のピットである。内部より剝片が8点重り合って出土した。これら剝片は同一母岩のものであるが、接合関係は認められなかった。

炉

住居南側に位置する。かなり上部に擾乱を受けており炉内土器残存高から推測すると、炉は10cm以上上部が削平された状態かと考えられる。炉は軸長1.8m、最大幅1.1mの縦長なダルマ形を呈する複式炉で、堆積土は3層からなる。

構造：北側より土器埋設部、石組部、掘り込み部に分けられる。

〈土器埋設部〉深鉢形土器(体部上半は擾乱により欠失)が埋設され、土器上部周辺に石をめぐら

しているが、石組部との境界部にまでめぐらしかは不明である（土器の埋土イは石組部側で石組と伴にかなりくずれている）。土器内堆積土、埋土上部は焼土粒、木炭粒が多く認められ、土器自身二次加熱痕が頗著に認められる。また周辺の石も焼けている。

〈石組部〉底面が土器埋設部より約30cm、掘り込み部より約10cm低い平面形台形状の石囲い部である。底面西側にはやや大きめな扁平な礫を2個敷き、その周辺にやや扁平な小礫を敷いているが、東側には礫が散かれておらず、当初からなかったのか、取り除かれたのかは不明である。北壁は崩落が激しく現状をとどめず、東壁についても滑落状を呈するが、壁面はやや大きめの扁平な石を下部に置き、南壁を除く3壁にはその上に数段石を積み上げたものと考えられる。西壁には長さ約45cm、幅約25cm、厚さ約10cmのかなり大型の扁平な石を使用しており、東壁上部の石には2個の礫石器が利用され、また南端の石には平面規模70×60cmもあるような地山自然礫を利用している。壁面、底面の礫は火を受けた痕跡を残し、特に北壁側礫は明瞭である。

〈掘り込み部〉上端平面形不整梢円形、下端平面形不整形を呈す。石組部より一段高くなつており底面は若干起伏を持つ。焼面は認められない。

掘り方：石組部を一段低くし、土器埋設部、石組部、掘り込み部を同時に掘り下げている。石組部は西側壁面を広めに掘り上げ（東壁は削平の為不明）、この後埋土ハ・ロ層を壁面上部・床面に入れ、形を整え石を据えている。埋土ロ・ハ層と貼床、埋土イとの新旧関係は擾乱により不明である。

構築順序：①石組が大きめに炉部分を掘り上げる（掘り方）

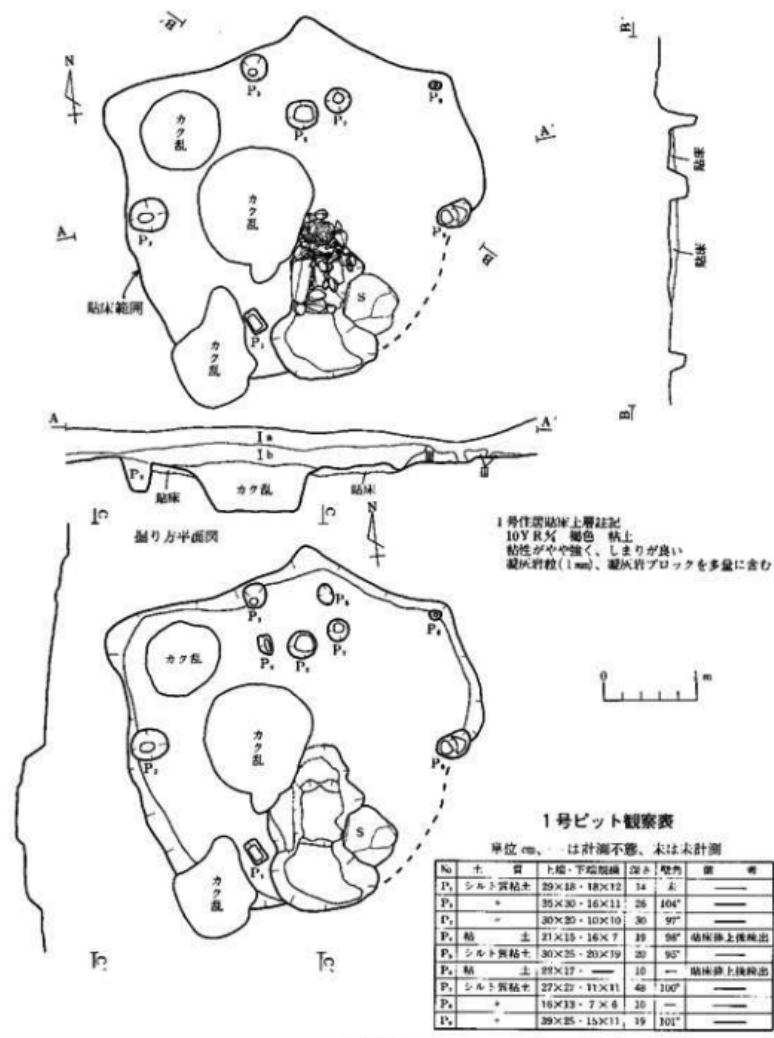
- ②土器を設置する
- ③土器埋設部及び石組部西側壁面・床面に埋土を入れる
- ④石組部に石を入れる（南壁・北壁下部→床面→東西壁下部→東西北壁上部）
- ⑤土器埋設部上部に石をめぐらす

出土遺物：炉土器埋設部土器1点、炉石組部使用礫石器2点、P・内剥片8点の外に貼床中より剥片1点、炉埋土中より磨滅土器片（時期不明）2片が出土したのみである。

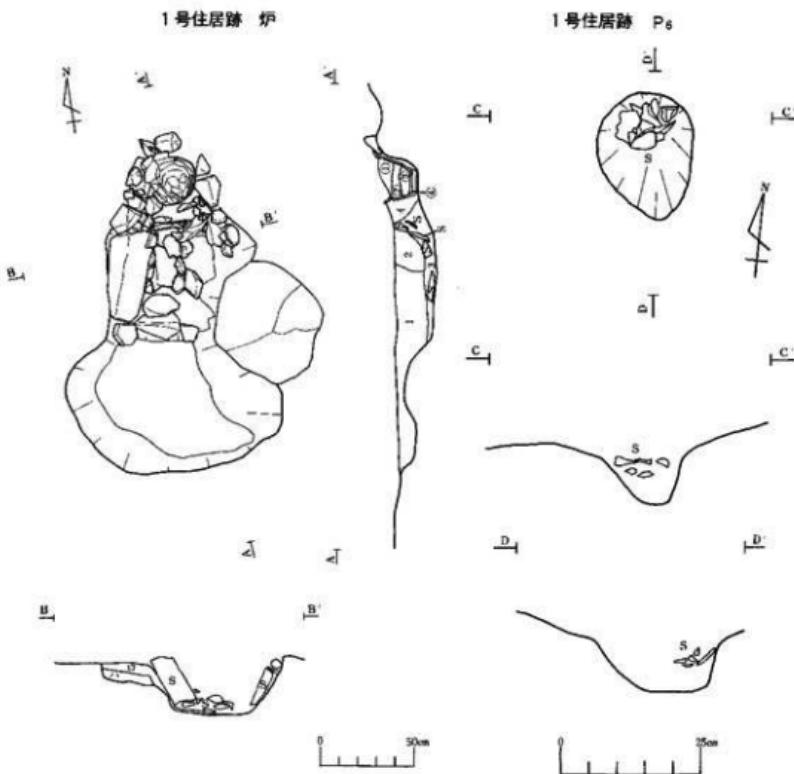
所属時期：唯一の時代決定遺物であった炉内上器が、体部上半欠失の上、地文のみという状況で、遺物よりの所属時期決定は無理であるが、複式炉を持つ点、検出及び周辺グリッドの出土遺物の点からみて、中期後葉から末葉のいずれかの時期に所属するかと考える。

佐藤甲二

2号住居跡地床面平面図



第9図 1号住居跡平面図



1号住居跡炉観察表

※()内は残存数 単位:m

平面形	規模	埋 植 上	掘 り 方	石 板 部	壁 部	壁 り 込 み 部
ダルマ形	1.8×1.1	3	横 植 上	平面形 0.56×0.56-0.43×0.3	深さ 0.25 東西・南北角 130°-145°	不整形 不整形 1.15×0.7-0.6×0.6 0.15-145°

1号住居跡炉土層記表

	層	色	測	し	質	粘 性	しまり	偏 考
埋植土	1	10YR 4/2	暗 褐色	シルト質粘土	強	い	良	1cm凝灰岩ブロック多量。
	2	10YR 4/2	暗 褐色	シルト質粘土	強	い	良	燒土粒。炭化粒。2-3cm凝灰岩ブロック。
	3	10YR 4/2	暗 褐色	シルト質粘土	強	い	やや良	焼土粒。炭化粒。凝灰岩粒。
土壟埋 設部上 部内	①	10YR 4/2	黑 褐色	粘土質シルト	やや強	い	良	凝灰岩粒。
	②	10YR 4/2	黑 褐色	粘土質シルト	やや強	い	良	燒土粒。炭化粒。1-2cm厚少量。
	③	10YR 4/2	黑 褐色	シ ル ト	強	い	良	燒土粒。炭化粒。
	④	10YR 4/2	黑 褐色	シ ル ト	強	い	良	燒土粒。炭化粒。
埋 植 上	イ	10YR 4/2	黑 褐色	粘土質シルト	強	い	良	炭化粒。燒土粒。本の根が混じる。
	ロ	10YR 4/2	にほい黄褐色	シルト質粘土	やや強	い	良	1cm凝灰岩ブロック。
	ハ	2.5YR 4/2	オリーブ褐色	シルト質粘土	やや強	い	良	1-5cm凝灰岩ブロック。

第10図 1号住居跡炉・P₆ 平面図



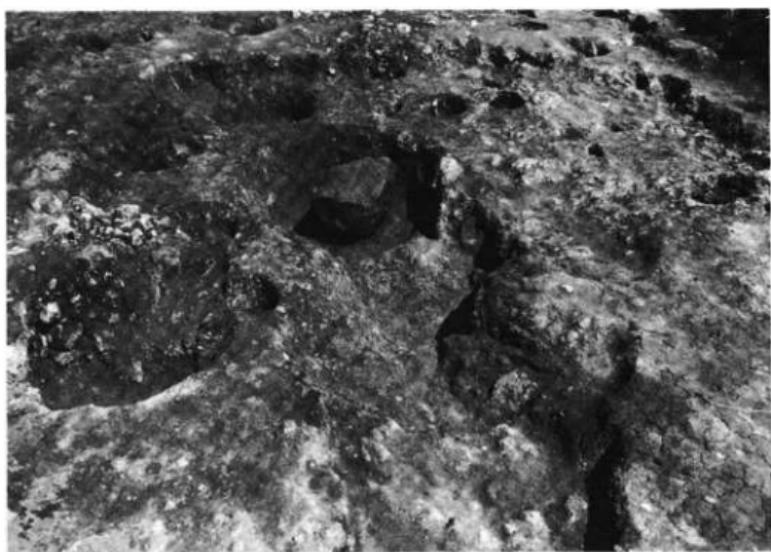
8. 1号住居跡 炉 検出状況



9. 1号住居跡 炉 石組部底面

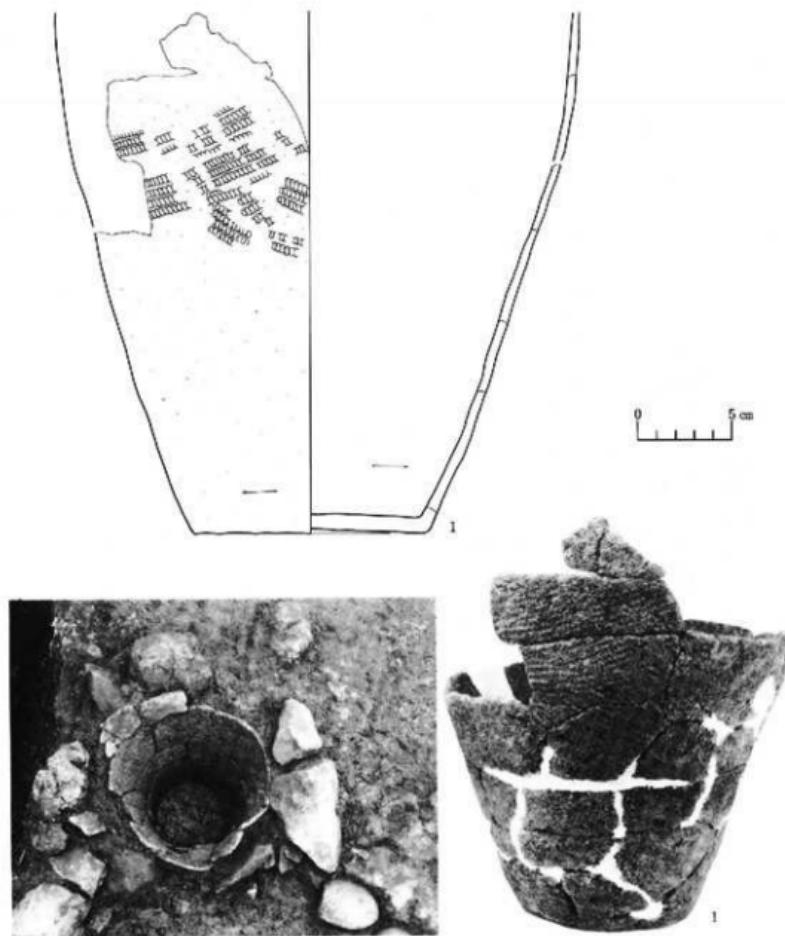


10. P_e内遺物出土状況



11. 1号住居跡完掘状況

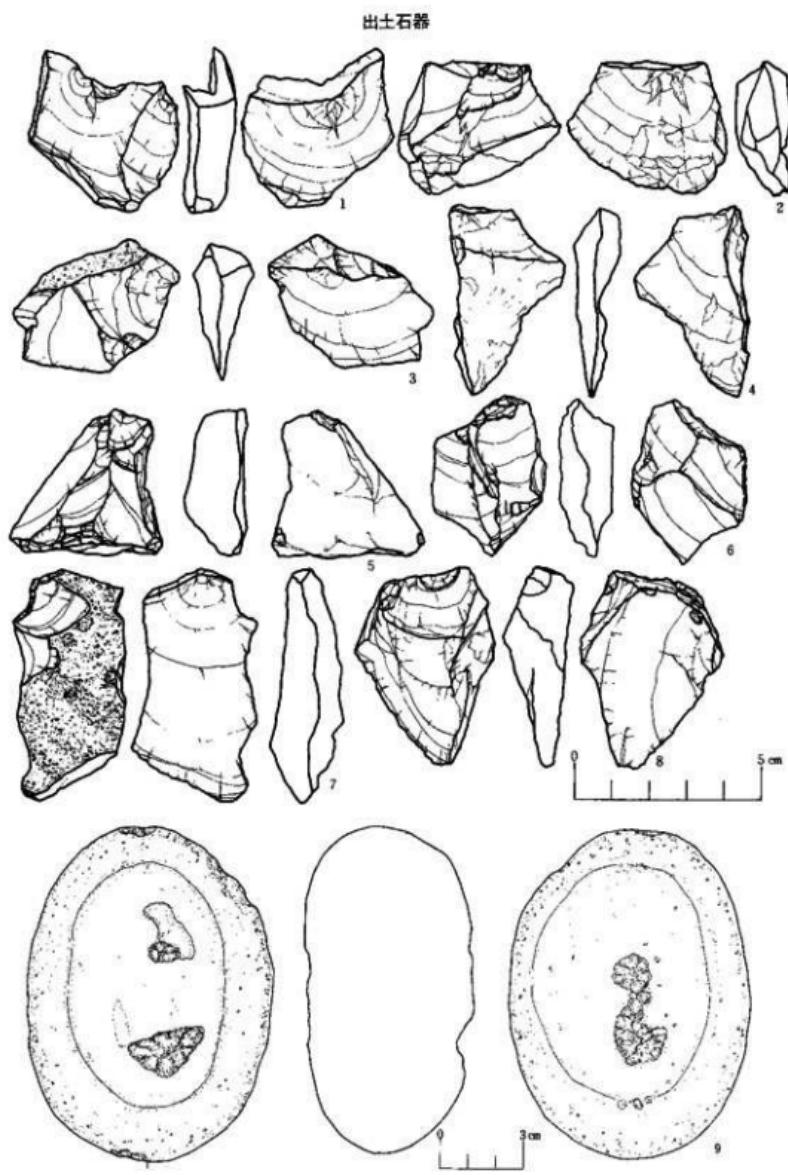
出土土器



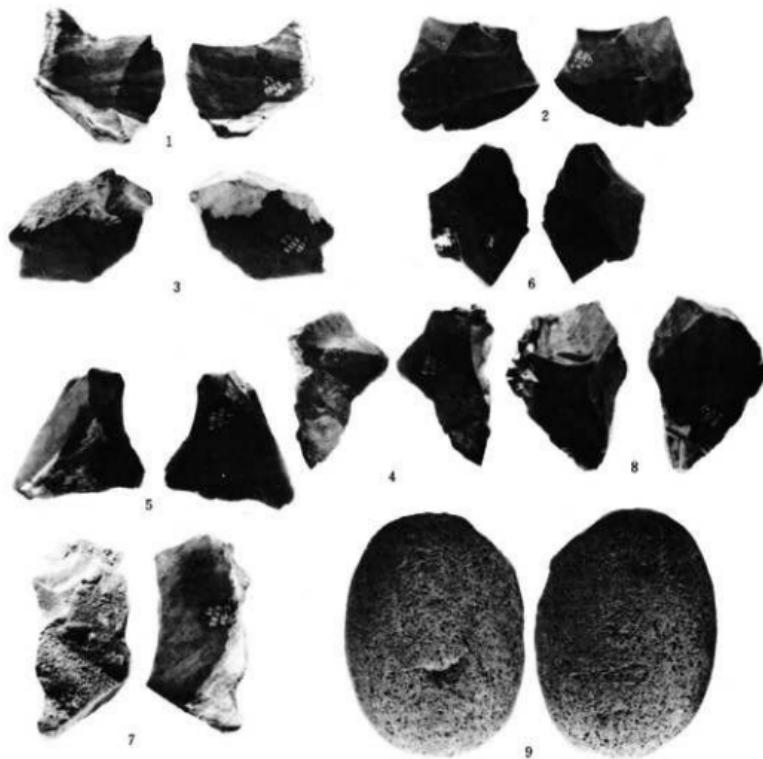
観察表

序	出土地点	層位	部 位	器 形	法 量	施 文	調 査		考
							底 部	壁 部	
1	炉上石塊設部	—	器部下半 —底部	深鉢	殘存高 28.0cm	外面：横位L.R構文 〔高さ15cmまで〕 内面：横位書き〔底部未記〕	著しい剥落のため外面部 調査不明、内面に細かいキ レツ入る。	内外面の剥落激しい 〔二次加熱か〕	

第11図 1号住居跡炉内出土土器



第12図 1号住居跡出土石器(1)



観察表

単位:mm. g

図	出土地点	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	石 材	登録番号	
1	P ₄	堆積土	剥 片	36.5	40.0	10.2	同一母岩 分類番号 No-39	チャート	2588	
2	P ₄	堆積土	剥 片	35.0	44.0	15.0		チャート	2588	
3	P ₄	堆積土	剥 片	30.0	47.0	15.5		チャート	2588	
4	P ₄	堆積土	石 核	30.0	51.0	12.5		チャート	2588	
5	P ₄	堆積土	石 核	39.0	40.5	16.0		チャート	2588	
6	P ₄	堆積土	S・F	44.0	30.5	14.0		チャート	2588	
7	P ₄	堆積土	剥 片	62.5	34.0	18.2		チャート	2588	
8	P ₄	堆積土	石 核	52.5	38.0	17.5		チャート	2588	
図	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	形態	使 用 部・他	分類	石 材	登録番号
9	炉石組部	117.5	86.0	60.0	610	C	磨面(a)-片面中央部 敲打痕(b-2)-片面に各2個 敲打痕(b-1)-側面の上下端	Ⅲ	安山岩	S-3

第13図 1号住居跡出土石器(2)

2号住居跡(第14~29回、写真12~15)

K-13グリッドを中心とするK-12、J-12・13グリッドに位置する。K-13グリッドでは住居上面プランが確認出来ず、住居床面(VI層上面)で住居の検出をみた。その後の拡張により、K-12、J-12・13グリッドでは、IVb層の中頃で住居上面プランが検出された。尚、2号住居は保存を前提とした調査であった為、炉掘り方部分は未掘である。

住居は3号土壙、7号土壙及び擾乱により壁、周溝、ピット、床面の一部が切られている。

平面形：K-13グリッドでは壁が検出されなかったが周溝より推測するに、上端平面形は5.6×5.6mのほぼ円形かと思われる。住居西側部分は拡張が行なわれている。

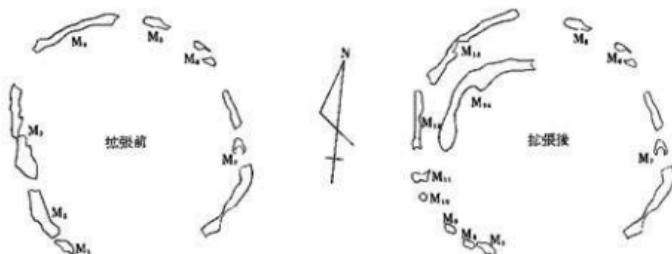
堆積土：2層から成り、2層はa・b・cの3層に細分される。

壁：住居西側、北側で検出され、良好な部分では壁高約50cmで、壁面も垂直ちかく立ち上がる。

床面：VI層(粘土層、混合層)を床面としているが、地形がゆるやかに西から東へ下る為に、西壁ではVI層を10~20cm掘り下げ、東側ではVI層上面を床面としている。床面状態はほぼ平坦であるが、西側拡張部床面は約5cm程高くなっている。また床面中央部付近では若干踏み固められたような状態を呈している。

周溝：周溝は全周せず、所々止切れており、住居南側では炉掘り方に切られている。長短合せてM₁~M₁₄までの14条検出された。これらはほぼ上端幅約20cm、深さ約10cm、断面U字形を呈しているが、M₈~M₁₁のように浅いへこみ状のもの、M₁~M₄・M₁₁~M₁₃のように底面の起状が激しく小ピットを連続させたようなものもある。またM₁のように中央に高まりを持ち2重周溝状のものもある。これら周溝の切り合い、組み合せより、住居の拡張前の周溝はM₁~M₇で、拡張後の周溝はM₈~M₁₃で、M₁、M₅~M₇は拡張後も使用されている(下図参照)。

周溝平面略図



M₁₄は独立し、連續性の認められない孤状の幅広い溝で、M₁、P₇~P₁₀、P₁₂を切っている。拡張後以後のものと考えられる。一応周溝の名称を付けたが、他の周溝とは性格の異なるものと思われる。後世の擾乱の可能性もある。

ピット： $P_1 \sim P_{19}$ の20個検出された。いずれも柱痕は認められなかった。この内、上端規模40cm以上、下端規模20cm以上、深さ40cm以上を持つものは P_4 、 P_7 、 P_8 、 P_9 、 P_{11} 、 P_{12} 、 P_{19} の7ピットである。配置、堆積土より、 P_4 、 P_8 、 P_{12} 、 P_{19} の4本が主柱穴と考えられる。これら主柱穴はが中軸線上を狹んで左右に2本づつ配されている。ただし北西主柱穴 P_4 に関しては隣接して同規模な P_7 、 P_8 、 P_{11} がある上、 M_{11} に上部を切られ、これらの新旧関係も不明で、断定は出来ない。また、北西主柱穴は拡張時に移動したことも十分考えられるし、この周辺に何らかの施設があった可能性もある。

住居北側、がのほぼ中軸線上に位置する P_{13} は、上記7ピットより平面規模が小さいが深さ40cmもあり、主柱穴と何らかの関連性を持つ柱穴である可能性もある。

検出ピット中、住居拡張後のものと断定出来るものは、西壁際の P_1 、 P_8 、 P_9 である。これらは壁面、周溝に付随したような状態のピットで、上端平面規模、形態がほぼ等しく、また等間隔に並んでいる。

炉

住居中央南側に位置する。軸長2.2m、最大幅1.3mの瓢形を呈する複式炉で、堆積土は3層から成る。

構造：北側より土器埋設部、石組部、掘り込み部に別けられる。

（土器埋設部）深鉢形土器の体部（径39cm、第16図）が埋設され、上面に5～10cmの小礫が土器を外周している。土器内堆積土は2層で、ともに多量の焼土粒を含む。土器内底面には焼土面、土器内面には、二次加熱痕がみられる。また、上面土器外周縁は焼けており、周辺には焼土が散在している。土器北側には深鉢形土器体部破片（第14図P-1、第20図6）が一部まわっており、また石組部埋設土器との間に土器片がまわっていることが確認されており、土器の入れ替えが行なわれている。

（石組部）上端、下端平面形とも三角形を呈す。住居床面から底面までの深さは約40cmで、掘り込み部底面より1段下り、境には支切り石として10cm大の礫11個をめぐらしている。底面は平坦で礫は敷いていない。北、東、西壁には、20cm前後の大型の礫を2～3段ほど組み上げ、上部に10cm大の礫を並べている。礫と礫との間には小礫や粘土がつめられている。

北壁中央上部には深鉢形土器（第17図）が斜位に埋設されている。土器上半内外面に二次加熱痕らしき変色がみられ、土器を囲む礫は焼けていた。土器内堆積土中には多量の焼土粒を含む。

壁面の礫には火を受けた痕跡がみられたが、床面には焼面が明瞭には認められなかった。

（掘り込み部）上端、下端平面形とも方形を呈し、住居床面よりの深さは約30cmである。底面は平坦で固くしまっており焼面は認められない。

中央、南壁際にピットが検出された。両ピットとも上端径約30cmのほぼ円形のもので、深さ

は中央ピットが約7cmと浅く、南壁際ピットが約25cmとやや深い。両ピットとも炉主軸線上に位置する。

掘り方：A・B・Cの小規模な3トレンチを入れたのみで、他は木掘の為全貌は不明であるが、掘り方検出プランから推測すると、上端規模長さ3m、最大幅2.5mの大きなものである。掘り込み部外側に入れたA～Cトレンチより、掘り込み部底面の東西外側には、深さ約20cmの溝状の落ち込みが認められた。尚、掘り方埋土は4層からなる。

構築順序：1.掘り方。2.石組部土器設置。3.土器埋設部土器設置。4.土器埋設部、石組部、掘り込み部周辺に埋土を入れる。5.石組部と掘り込み部の間に礫を並べる。6.石組部壁面に礫を積み上げる（東西壁→北壁）。7.土器埋設部、石組部の上部に礫を並べる。

埋設土器：住居ほぼ中央、炉のほぼ中軸線上に位置する。北東部に一部擾乱を受けていたが、径22cmの深鉢形土器体部部分（第18図）が埋設されている。掘り方は土器よりやや大きめの、上端、下端平面形円形、上端規模径約30cm、下端規模径約20cm、深さ10cmである。土器内堆積土は焼土粒、木炭粒を含み、土器内底面、土器内面は若干焼けていた。土器周辺及び埋土上部には礫がまばらにみられ、土器の周りに礫が回っていた可能性もある。

その他：住居南端に大型の自然礫がみられ、礫の下部は1層中にかなり食い込んでいる。また礫上部のレベルより、この礫は住居構築時には地表面に顔を出していたと考えられる。従って住居はこの礫を意識して構築された可能性が強い。

出土遺物：堆積土、床面、住居内施設より、土器、石器、土製円盤が出土している。土器は炉土器埋設部土器、炉石組部土器、埋設土器の他、復元土器1点、口縁部破片100点、体部破片1034点、底部破片29点の総計1167点である。石器は200点出土しており炉掘り方Cトレンチ内では、同一母岩資料（剥片）が6点が出土した。土製円盤は堆積土中より1点のみ出土した。

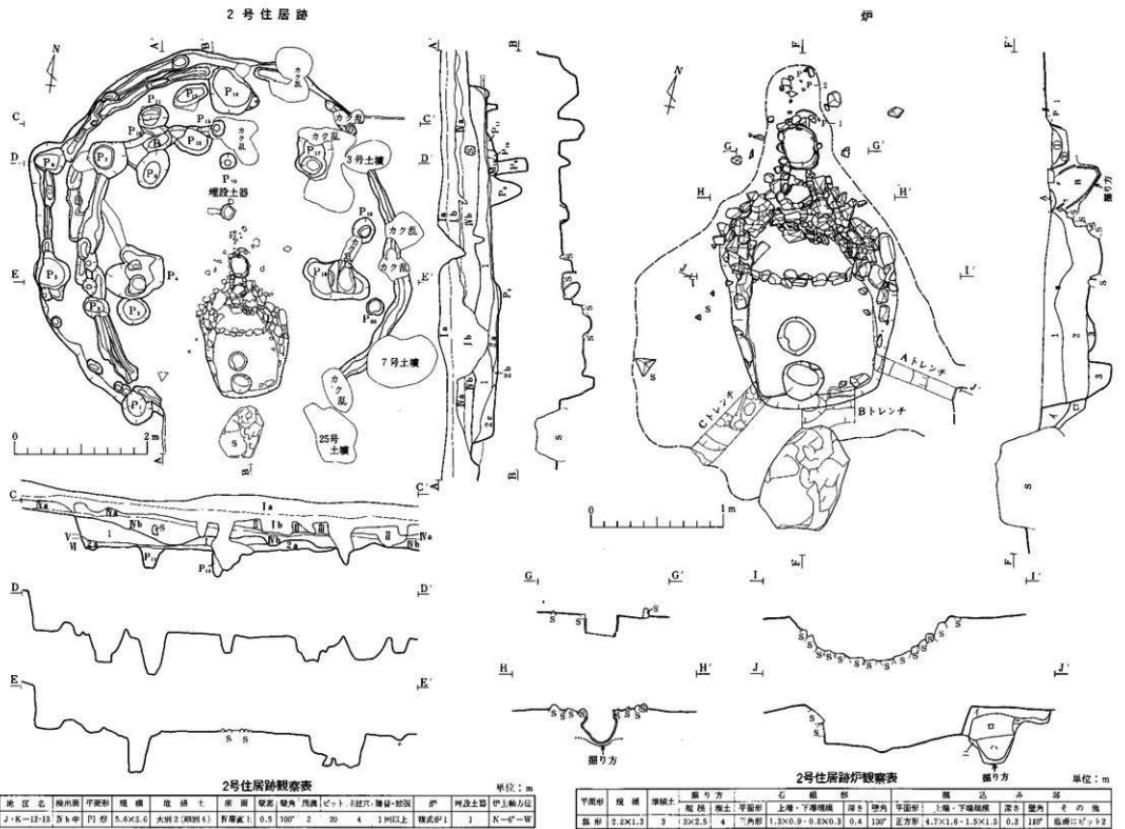
出土土器のほとんどは第V群土器であるが、堆積土1、2層中には他群土器も混在している。第V群と判別された土器は、復元土器4点、口縁部破片20点、体部破片83点の総計107点である。

炉土器埋設部土器（第16図）

体部のみ残存している内弯ぎみの深鉢で最大径39cmを計る。沈線文による楕円文と「匚」文が上下に施され、それらの間に沈線文が縱位に施文されている。地文としてL.R繩文が施文されている。文様は12単位構成であり、1単位のみ縱位の沈線が見られない。

炉石組部土器（第17図）

口縁部が欠損している内弯ぎみの深鉢で、底径10cm、最大径29.5cmを計る。底部は平底で磨かれている。地文としてL.R繩文が施文されているのみである。



第14図 2号住居跡・炉平面図

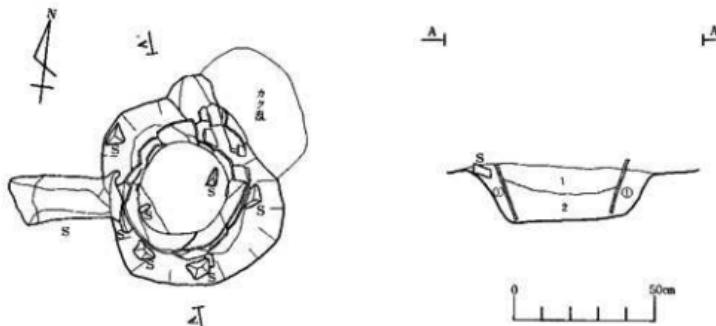
2号住居跡土層記表

堆積土	色 調	土 質	土 質	しまり	備 考
1	10YR5/6 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	焼土粒・炭化粒多量。凝灰岩粒。
2a	10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	強	良	凝灰岩粒。燒上粒。炭化粒。
2b	10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	2~3cm凝灰岩ブロック多量。燒上粒。炭化粒。
2c	10YR5/6 黑褐色	粘土質シルト	強	良	凝灰岩粒。燒土粒。炭化粒。

2号住居跡炉土層記表

層位	色 調	土 質	結 性	しまり	備 考
堆積土	1 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	1cm炭化物多量。焼土粒。1cm凝灰岩ブロック。
	2 10YR5/6 黑褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	1cm炭化物・粘土粒多量。1cm凝灰岩ブロック。
	3 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	強	不	2~3cm地山ブロック・炭化粒・焼土粒多量。
石組部 上部内	A 10YR5/6 黑褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	炭化粒・燒土粒。
	B 7.5YR5/6 極暗褐色	粘土質シルト	強	やや不良	燒土粒多量。炭化粒無。
土器埋設 部上部内	① 7.5YR5/6 黑褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	燒土粒・炭化粒多量。
	② 5YR5/6 暗褐色	シルト質粘土	強	不	燒土粒多量。炭化物少。
割り方 堆積土	イ 10YR5/6 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	良	燒土粒。0.5~1cm凝灰岩ブロック多量。
	ロ 10YR5/6 黑褐色	シルト質粘土	やや強い	良	燒土粒・炭化粒。凝灰岩粒。1cm凝灰岩ブロック。
	ハ 10YR5/6 暗褐色	シルト質粘土	強	やや不良	燒土粒・炭化粒・凝灰岩粒微量。
ニ	10YR5/6 黑褐色	粘土	強	やや不良	地山ブロック多量。

2号住居跡埋設土器



2号住居跡埋設土器土層記表

層位	色 調	土 質	結 性	しまり	備 考
土器内	1 10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	強	良	焼土粒・炭化物少量。凝灰岩粒。
	2 7.5YR5/6 黑褐色	粘土質シルト	強	良	燒土粒・炭化物多量。地山ブロック。
壁上	① 10YR5/6 黑褐色	粘土	強	やや不良	2~3cm門扉少量。地山ブロック多量。

第15図 2号住居跡・埋設土器



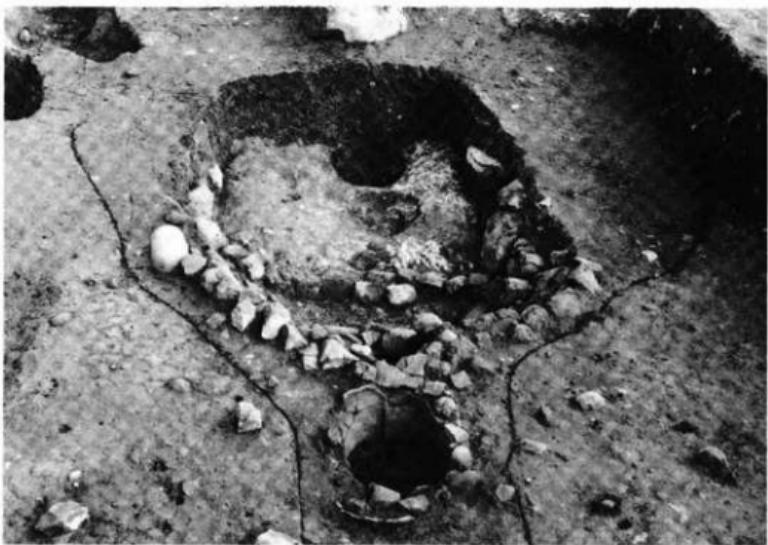
12. 2号住居跡完掘状況 (南より)



13. 2号住居跡床面埋設土器 (北より)



14. 2号住居跡炉全景(1) (南より)



15. 2号住居跡炉全景(2) (北より)

2号住居跡ピット観察表

単位: cm. ()は残存数

%	上質	上角標識	中層範囲	下層範囲	高さ	壁角	柱穴	重複	備考
P ₁	粘土質シルト	37×30	—	4×4	12	—	—	—	表面無鉢状。M _{1,1} に付属。
P ₂	粘土質シルト	49×40	—	35×30	16	130°	—	—	—
P ₃	粘土質シルト	40×32	—	29×19	23	100°	—	—	M _{1,1} に付属。
P ₄	粘土質シルト	90×80	30×28	23×18	68	95°	半柱穴	—	—
P ₅	粘土質シルト	60×46	—	47×40	31	80°-125°	—	—	住居壁際セ・バー・ハンギ M _{1,1} に付属。
P ₆	粘土質シルト	47×40	—	33×24	22	105°	—	—	—
P ₇	粘土質シルト	(60)×(60)	36×32	31×26	58	105°	主柱穴?	M _{1,1} に切られる。	—
P ₈	粘土質シルト	63×(45)	—	35×25	67	95°	半柱穴?	M _{1,1} に切られる。	—
P ₉	粘土質シルト	(45)×(25)	—	33×16	60	100°	主柱穴?	M _{1,1} に切られる。	—
P ₁₀	粘土質シルト	—	—	—	16	—	—	M _{1,1} に切られる。	—
P ₁₁	シルト	46×(40)	36×30	24×8	43	100°	主柱穴?	P ₁₁ を示す。上場・下崩壊場。破壊計測不詳。	—
P ₁₂	粘土質シルト	(52)×49	—	142×29	22	105°	—	M _{1,1} に切られる。	—
P ₁₃	粘土質シルト	55×31	—	42×18	15	110°	—	—	—
P ₁₄	シルト	78×63	—	64×12	24	115°	—	—	—
P ₁₅	粘土質シルト	(24)×(21)	—	10×8	40	125°	—	—	上塗施設カラムにより不明。
P ₁₆	粘土質シルト	23×23	—	11×9	27	100°	—	—	—
P ₁₇	粘土質シルト	(54)×54	31×28	25×16	49	110°	上柱穴	上塗施設カラムにより不明。	—
P ₁₈	シルト	39×(54)	30×17	17×12	30	100°	—	—	—
P ₁₉	粘土質シルト	106×63	42×30	35×23	53	105°	主柱穴	—	—
P ₂₀	粘土質シルト	29×25	—	21×16	8	100°	—	—	—

2号住居跡出土遺物数量表

※()内数値は復元土器数

地 物 層 位 別 点 位	土						石						
	復 元 土 器 数	口	体	底	壁	柱	梁	板	不 規 則 部	石 片	石 塊	石 子	
住居内埋積上	1	69	673	23	1	481	1	5	6	3	704	6	1
住居内埋積下	2	10	129	4	15	1	—	—	—	127	1	3	—
床表	3	5	44	1	8	1	—	—	—	39	1	—	—
P ₁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₂	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₄	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₆	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₈	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₂	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₄	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₆	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₈	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₁₉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
P ₂₀	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
周溝	1	3	17	—	6	—	—	—	—	14	1	1	2
M ₁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
M ₂	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—
M ₃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
M ₄	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
M ₅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
棟面	4	29	1	3	—	—	—	—	—	23	1	1	9
壁面	1	1	54	1	4	—	—	—	—	50	2	1	5
柱面	2	2	12	—	2	—	—	—	—	11	1	—	5
底面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
土器	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
埋設部	①	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
右端部	A	6	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
B	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
検出部	C	2	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
築方土	D	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
基土	E	1	9	—	1	—	—	—	—	9	1	3	7
填土器	F	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

埋設土器(第18図)

体部のみ残存している。体部が外傾する深鉢で最大径22.5cmを計る。隆沈文による「C」字文を3単位とそのすき間をうめる形で縦位横円文が1単位施文されている。地文としてLR繩文が施文されている。

床面上及び住居跡内施設出七土器(第19図、20図、21図1~4)

隆線文及び隆沈文によって文様が施文されるもの(第19図1~5)

1は横位の隆線文から隆沈文による「匚」文が施文されているもので、地文としてLR繩文が施文されている。2は横位の隆沈文と縦位沈線文が施文されており、地文としてLR繩文が施文されている。3、4は縦位の隆沈文が施文されている。地文はRL繩文である。5は縦位の隆線文と隆沈文による横円文あるいは「匚」文が施文されており、地文はRL繩文である。

沈線文によって文様が施文されるもの(第19図6~10、20図、21図1~4)

第19図6~10、20図1・2は口縁部資料である。これらの土器を第V群土器の分類基準によつて分類してみると、第1類：文様のあるものである。a類、b類は確認されない。

c類：口唇部直下が無文帶となり、その下部から体部まで文様帶をもつもの。

第19図6は内側する波状口縁で横位の渦巻文と横円文あるいは「匚」文が施文されている。地文はRL繩文である。7は外反する、8・9は直立ぎみの平縁で「匚」文あるいは横円文が施文されている。7・8は二条の沈線文間に地文が施文されている。7のみ地文がRL繩文と判別された。

d類：口縁部が無文帶となり、体部に文様帶をもつもの。

第19図10は直立ぎみの平縁で横位沈線文が二条以上施文されている。第20図1は外反する波状口縁でII縁下部の二条の横位沈線文で口縁部と体部を区画し、体部に沈線文による渦巻文あるいは横円文が施文されている。2は外反する波状口縁で口縁下部に沈線文が施文されている。

第20図3~7、21図1~4は体部資料である。第20図3~5は沈線文による「匚」文が施文されており、「匚」文の間に縦位沈線文が施文されている。5のみ地文がRL繩文と判別された。6は二重の沈線文の間にLR繩文を施文した「匚」文が施文されている。7は縦位の沈線文が施文されている、地文はLR繩文である。第21図1・2は縦位沈線文が施文されている。1はRL繩文、2はLR繩文が施文されている。3は二条の沈線による変形横円文あるいは「匚」文が施文されている。地文はLR繩文である。4は横円文あるいは「匚」文が施文されている。地文はL繩文である。

住居跡堆積上出土土器(第21図5~11、22図1~6)

隆線文及び隆沈文によって文様が施文されるもの(第21図5~10)

5は橋状の把手がつけられ、その貼付部分から隆線文が施文されている。6は隆線文による

楕円文あるいは「匚」文が施文されている。7・8は隆沈文による楕円文が施文されている。地文としてR L 繩文が施文されている。9・10は隆沈文による渦巻文が施文されている。地文として9はL R 繩文、10はR L 繩文が施文されている。

沈線文によって文様が施文されるもの(第21図11、22図1~5)

第21図11、22図1~4は口縁部資料である。これらは前述のものと同様にa類、b類はない。

c類：第21図11、22図1~3は、11・1・2が外傾し、3が内弯する平縁で「匚」文が施文されている。地文としてはL 繩文、他はL R 繩文が施文されている。

d類：第21図4は外反する波状口縁である。口縁上部に沈線文が一条施文されている点で他のd類土器と若干異なっているが、口縁下部に二条の沈線文が施文されて口縁部と体部を区画していることからd類とした。体部に沈線文で楕円文あるいは渦巻文が施文される。

第22図5は体部資料である。縦位の沈線文と楕円文が施文されている。地文はL R 繩文である。

第22図6は、第V群土器第2類、地文のみのものに分類される。外傾ぎみの小型の深鉢であり、口径11.5cm、底径5cm、器高10cmを計る。R L 繩文の地文が施文されている。

所属時期：時期決定遺物は炉土器埋設部土器、埋設土器の2点である。これらは第V群土器で住居の所属時期は中期後葉である。

佐藤甲二・主浜光尚

第1表 2号住居跡第V群土器類別出土数量表

分類 出土位置	第1類											第2類	計	
	口縁部							体部						
	a	b ₁	b ₂	c ₁	c ₂	d	不明	1	2	3	4	不明		
施設内・床面直上	—	—	—	1	4	4	2	2	—	7	23	1	1	45
堆積土	—	—	--	1	5	5	—	2	—	16	32	—	1	62
計	—	—	—	2	9	9	2	4	—	23	55	1	2	107

出土土器

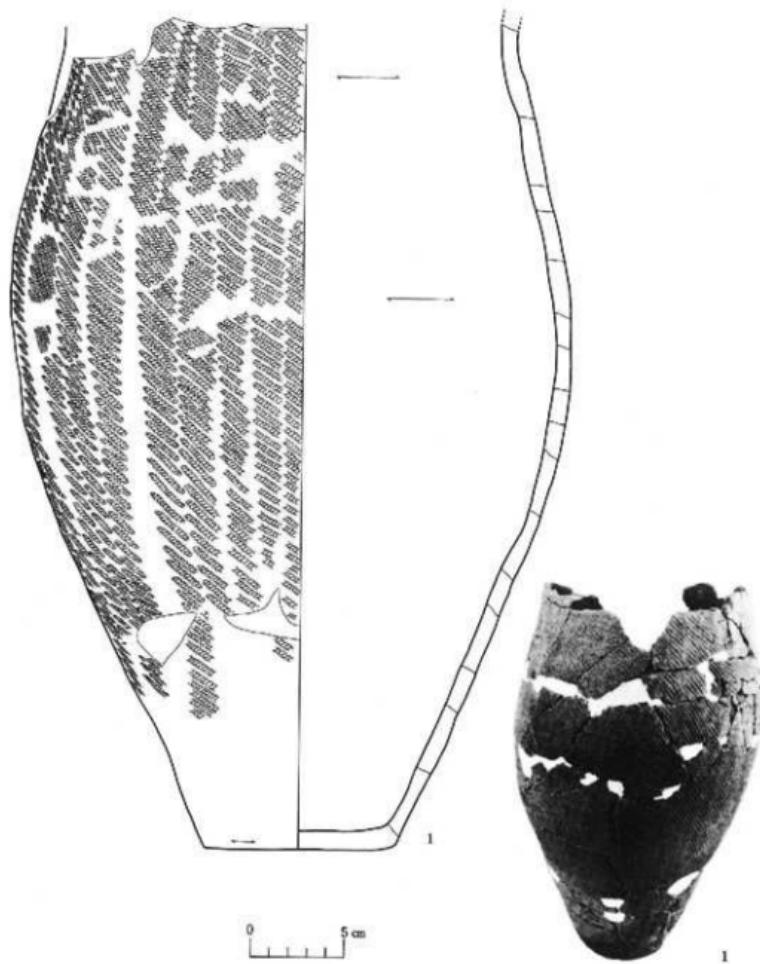


觀 察 表

單位cm

目	出土地点	層位	部 位	器 形	器 高 口 径		施 文 · 調 整	分 期	備 考
					基 高	口 径			
1	炉 土 器 埋 設 佈	—	体 部	深 罐	最大性	縦文 L R 縱文→沈縫文→磨身		V 1-4	内面二次加熱痕
					—	39.0			

第16図 2号住居跡出土土器(1)

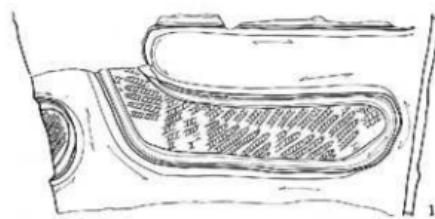
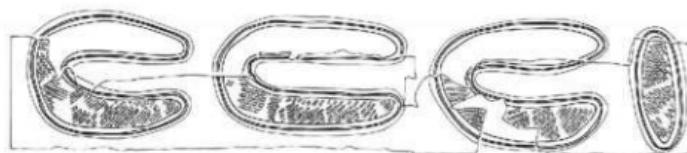


観察表

単位: cm

図	出土地点	層位	部 位	器 形	西 高	口 径	施 文・調 整	底 部	分類	考 考
					—	—				
1	炉石組部	—	体部～底部	深鉢	底 高 10.0	最大径 29.5	網文 L.R 橋文→附き	平底で磨か れている	V 2	内外面二次 加熱痕？

第17図 2号住居跡出土土器(2)



0 5 cm



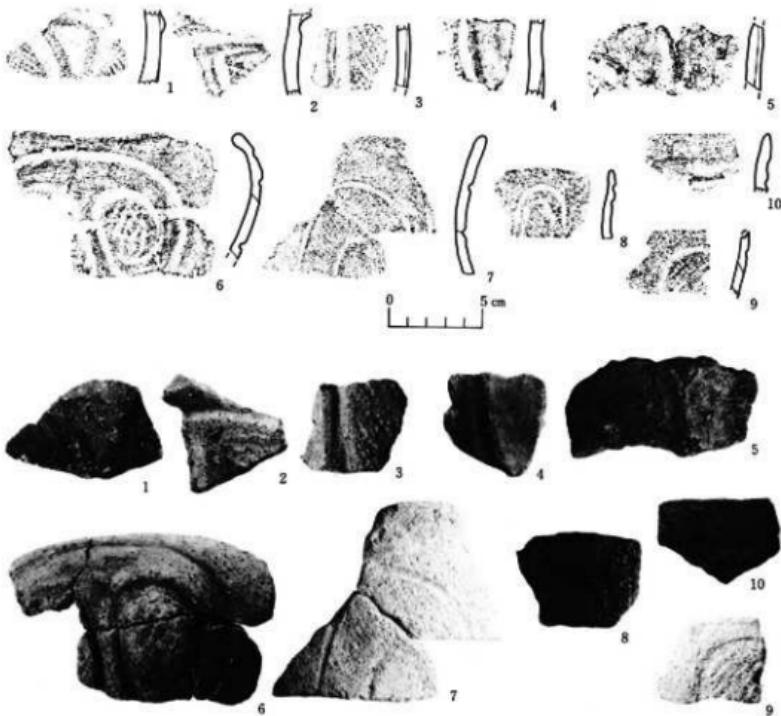
1

錢 寶 表

單位: cm

號	出土地點	層位	部 位	器 形	器 高 ——	11 件	施 文 · 調 整		分類	備 考
							施 文	調 整		
1	埋設土器	—	体 部	深 脊	施 文 最大徑 ——	11.5	陰線文·縱位·橫位·斜位 LR 線文→沈 線文→磨光	22.5	V1-3	內面二次加熱度

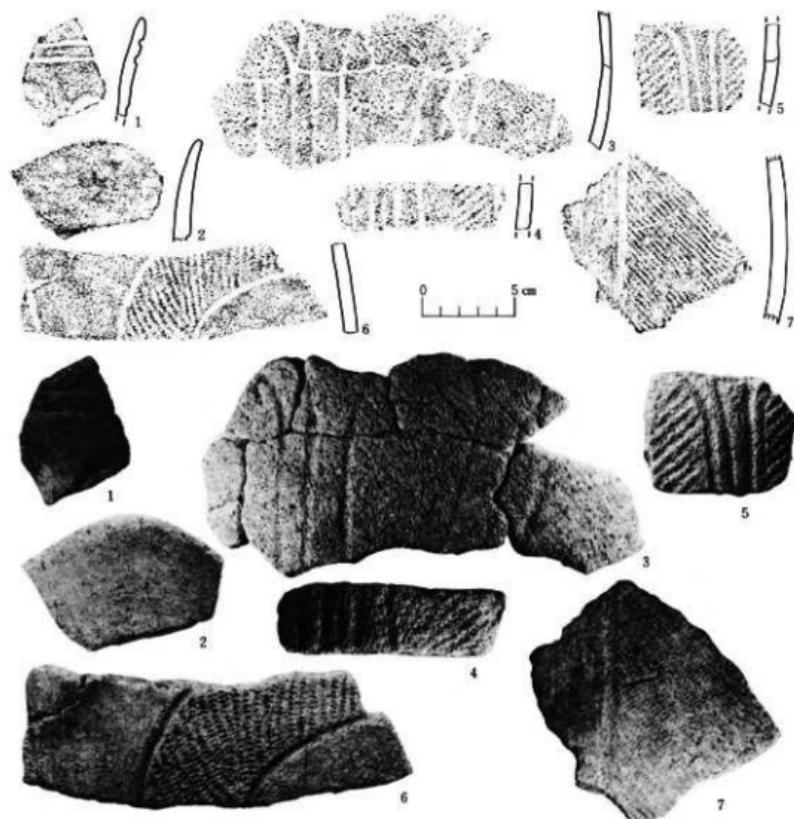
第18圖 2号住居跡出土土器(3)



観察表

図	出土地点	層位	部位	基形	施文・調査	分類	備考
1	炉石組 土器内	A	体部	深鉢	縦位L R 桐文・沈絵文→沈絵文→磨き	V1-3	—
2	P ₁₁	堆	体部	深鉢	縦位L R 桐文・沈絵文→沈絵文→磨き	V1-3	—
3	P ₁₁	堆	体部	深鉢	横位R L 桐文・沈絵文→沈絵文	V1-3	—
4	炉	2	体部	深鉢	縦位R L 桐文・沈絵文→沈絵文→磨き	V1-3	—
5	炉	1	体部	深鉢	縦位R L 桐文・沈絵文→沈絵文→磨き	V1-3	—
6	P ₁₂	堆	口縁部	深鉢	縦位R L 桐文→沈絵文→磨き	V1e	—
7	炉掘り方	検出面	口縁部	深鉢	不明桐文・沈絵文→磨き	V1e	—
8	—	底直	口縁部	深鉢	横位R L 桐文→沈絵文→磨き	V1e	—
9	炉	検出面	口縁部	深鉢	不明桐文・沈絵文→磨き	V1e	—
10	炉掘り方	埋ハ	口縁部	深鉢	沈絵文→磨き	V1d	—

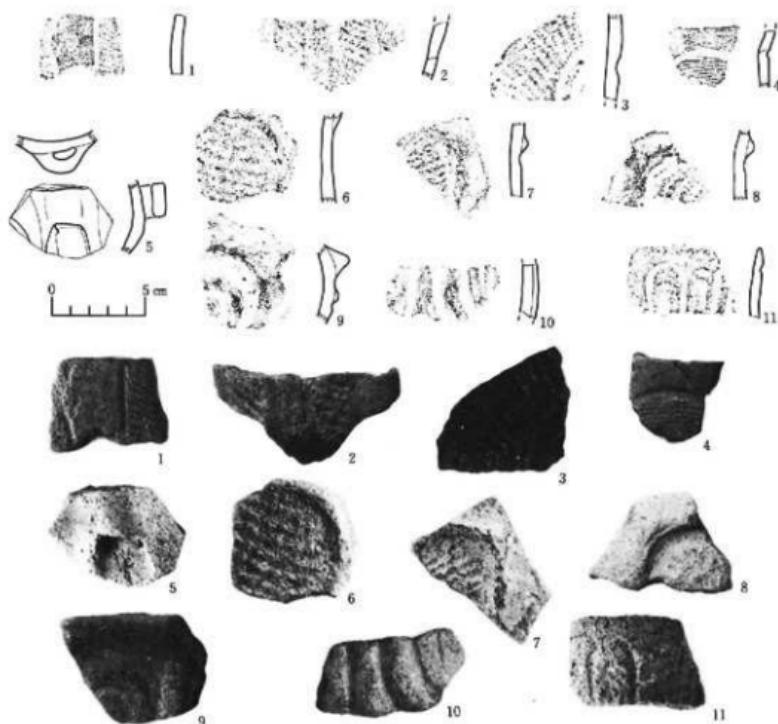
第19図 2号住居跡出土土器(4)



観察表

図	出土地点	層位	部位	器 形	施 文・調 整	分類	備 考
1	炉	検出面	口縁部	深鉢	沈線文→磨き	V1d	—
2	P _{II}	地	口縁部	深鉢	沈線文→磨き	V1d	—
3	炉振り方	検出面	体 部	深鉢	不明模文→沈線文→調整(不明)	V1-4	P-2
4	炉振り方	検出面	体 部	深鉢	不明模文・沈線文→磨き	V1-4	—
5	炉石 越土器内	A	体 部	深鉢	複位R L 模文→沈線文→調整(不明)	V1-4	—
6	炉振り方	埋 イ	体 部	深鉢	複位L R 模文→沈線文→磨き	V1-4	炉土器埋設部土器 外周 P-1
7	—	床 直	体 部	深鉢	複位L R 模文→沈線文→磨き	V1-4	—

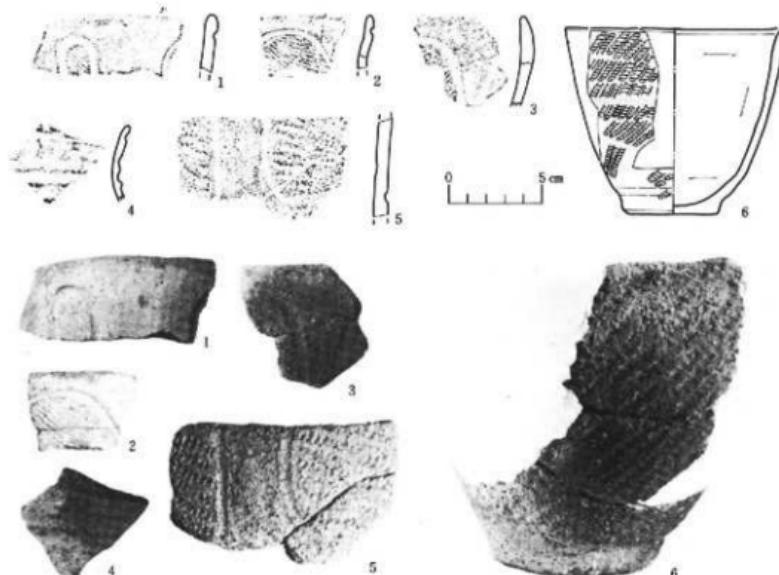
第20図 2号住居跡出土土器(5)



観察表

図	出土地点	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	—	床直	体 部	深 脚	横位RL縦文→沈縦文→磨き	V1-4	—
2	P ₄	地	体 部	深 脚	横位RL縦文→沈縦文→磨き	V1-4	—
3	3 ⁴	2	体 部	深 脚	縦位・横位LR縦文→沈縦文→磨き	V1-4	—
4	3 ⁴	検出面	体 部	深 脚	斜位LR縦文→沈縦文→磨き	V1-4	—
5	堆積土	2	体 部	—	把手の跡付→隆縦文→沈縦文→磨き	V1-3	—
6	堆積土	2	体 部	深 脚	不明縦文・陽縦文	V1-3	—
7	堆積土	2	体 部	深 脚	縦位RL縦文・隆縦文→磨き	V1-3	胎土中に金雲母を含む
8	堆積土	1	体 部	深 脚	陽縦文・縦位RL縦文→沈縦文→磨き	V1-3	—
9	堆積土	1	体 部	深 脚	縦位LR縦文・隆縦文→沈縦文→磨き	V1-1	—
10	堆積土	1	体 部	深 脚	横位RL縦文・隆縦文→沈縦文	V1-1	—
11	堆積土	2	口縁部	深 脚	縦位LR縦文→沈縦文→磨き	V1e	—

第21図 2号住居跡出土土器(6)



観察表

単位: cm

回	出土地点	層位	部位	器形	施文	調査	分類	備考
1	堆積土	1	口縁部	深鉢	縦位LR施文→沈縞文→磨き		V1e	—
2	堆積土	1	口縁部	深鉢	横紋・斜位LR施文→沈縞文→磨き		V1e	—
3	堆積土	1	口縁部	深鉢	縦位LR施文→沈縞文→磨き		V1e	—
4	堆積土	1	口縁部	深鉢	注紋文→磨き		V1d	—
5	堆積土	1	全体	深鉢	斜位LR施文→沈縞文→磨き		V1-4	—
6	堆積土	1	口縁部～底部	深鉢	器高口徑底径 10.0 [11.5] 5.0	縦位RL施文	V2	Pir出土のものと複合

出土土製品

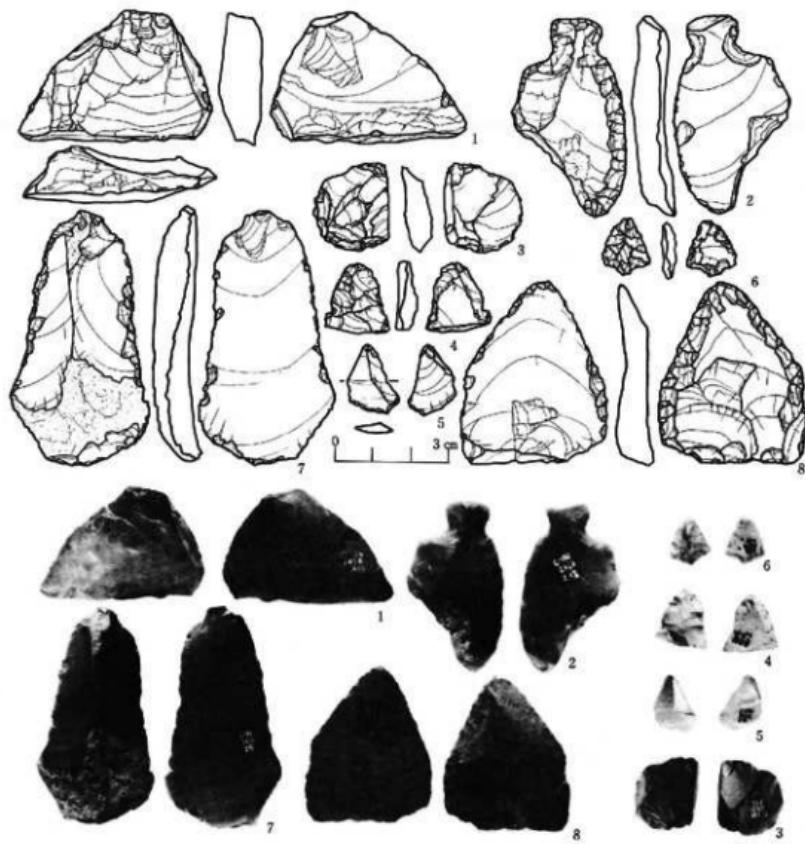


観察表

回	出土地点	層位	大きさ mm	厚さ mm	重量 g	形態	打欠回数	研磨率	部位
7	堆積土	2	小型 29×29	7	6.1	円形	—	100%	体部

第22図 2号住居跡出土土器(7)・土製品

出土石器

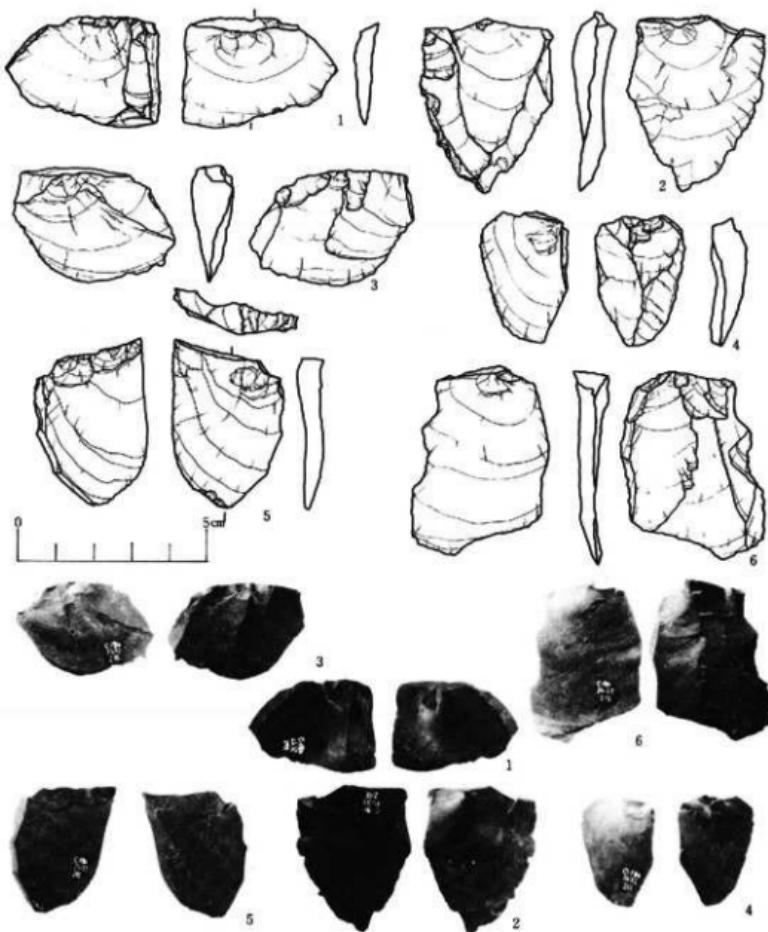


観察表

単位:mm

図	地 点	層 位	名 称	長 さ	幅	厚 さ	備 考	分 類	石 材	發 見
1	炉	検出面	S - F	35.0	51.5	15.0	—	VI	珪質頁岩	2478
2	炉	検出面	石 鋸	52.5	30.0	8.2	—	II	チャート	2826
3	炉 振り方	埋 ハ	ビスス・エヌキーユ	23.0	20.0	7.0	—	II	珪質頁岩	2630
4	炉 振り方	埋 ハ	スクレイバー	(19.0)	(17.0)	(5.3)	一部欠損している	X	珪質灰岩	2630
5	炉 振り方	埋 イ	M - F	18.3	13.5	2.5	—	VI	珪質礫灰岩	2625
6	炉	2	石 鋸	15.2	12.5	3.0	—	IIa②	珪質礫灰岩	2626
7	炉	1	スクレイバー	61.5	36.5	10.5	—	III	珪質頁岩	2625
8	炉石組土器内	A	スクレイバー	48.5	39.0	8.0	背面肉面に黒色の付着物がある	II	珪質頁岩	2679

第23図 2号住居跡出土石器(1)

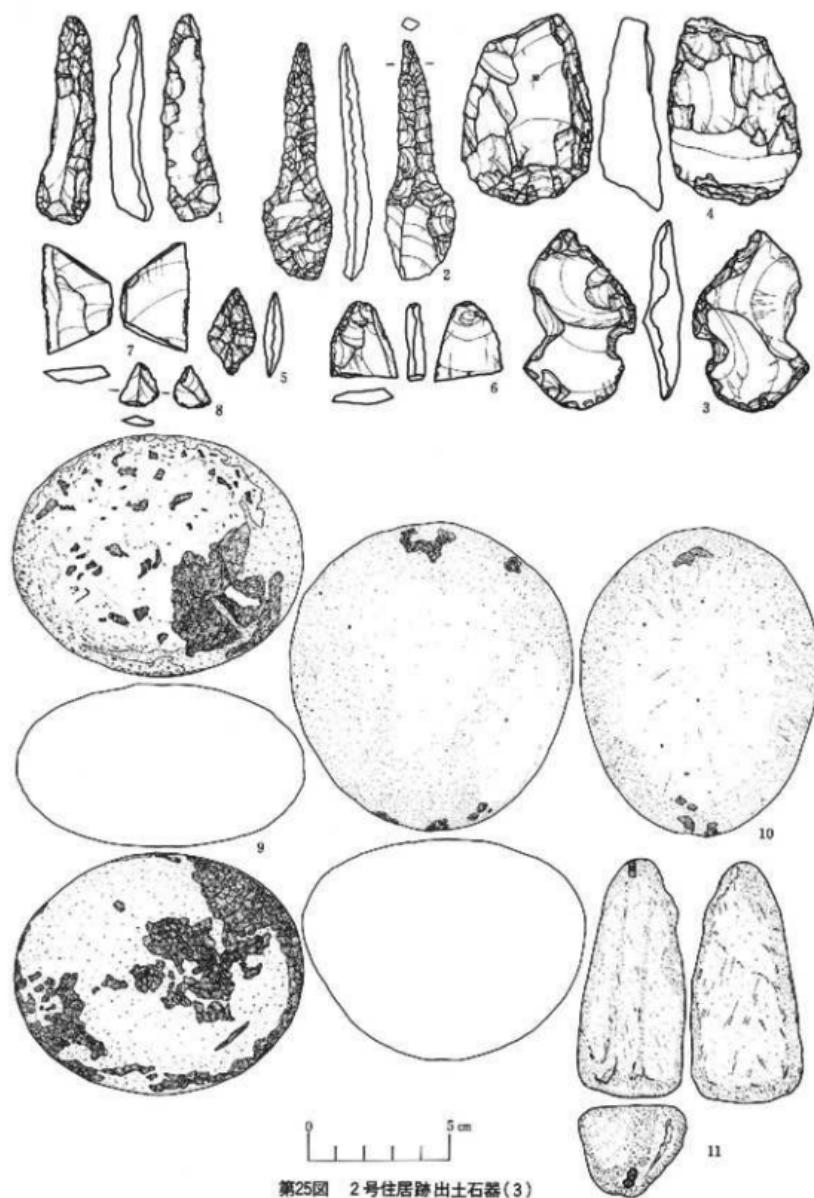


観察表

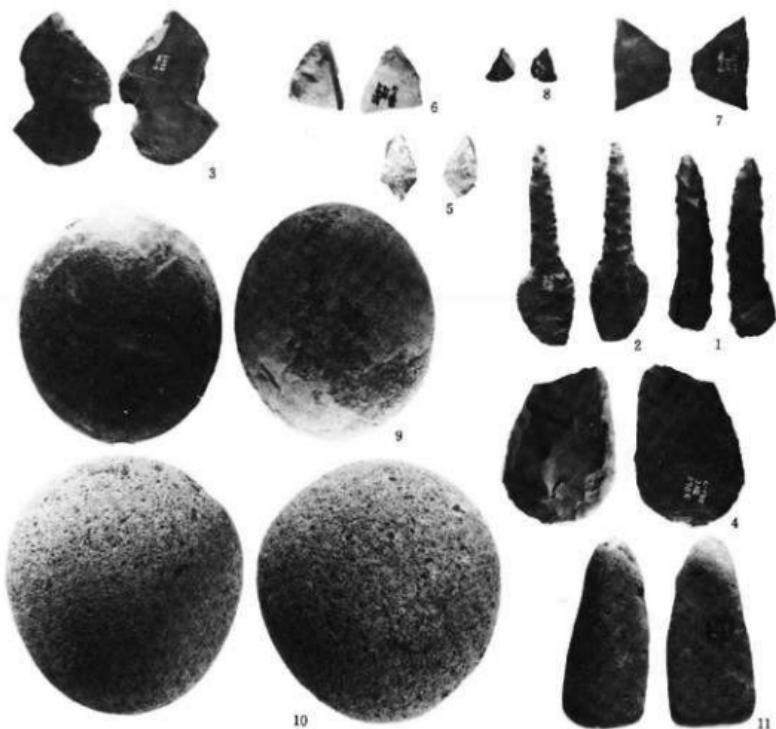
単位:mm

図	出土地点	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	石 材	登録番号
1	炉掘り方	埋ハ	剥 片	29.0	40.5	4.5	同一母岩 (分類番号 №42)	珪質頁岩	2632-1
2	炉掘り方	埋ハ	剥 片	47.0	34.7	9.0		珪質頁岩	2632-2
3	炉掘り方	埋ハ	剥 片	30.5	42.6	11.0	同一母岩 (分類番号 №43)	珪質頁岩	2632-3
4	炉掘り方	埋ハ	剥 片	35.0	22.0	9.0		珪質頁岩	2632-4
5	炉掘り方	埋ハ	剥 片	41.5	29.2	5.0	同一母岩 (分類番号 №44)	珪質頁岩	2632-5
6	炉掘り方	埋ハ	剥 片	48.5	36.0	9.5		珪質頁岩	2632-6

第24図 2号住居跡出土石器(2)



第25図 2号住居跡出土石器(3)



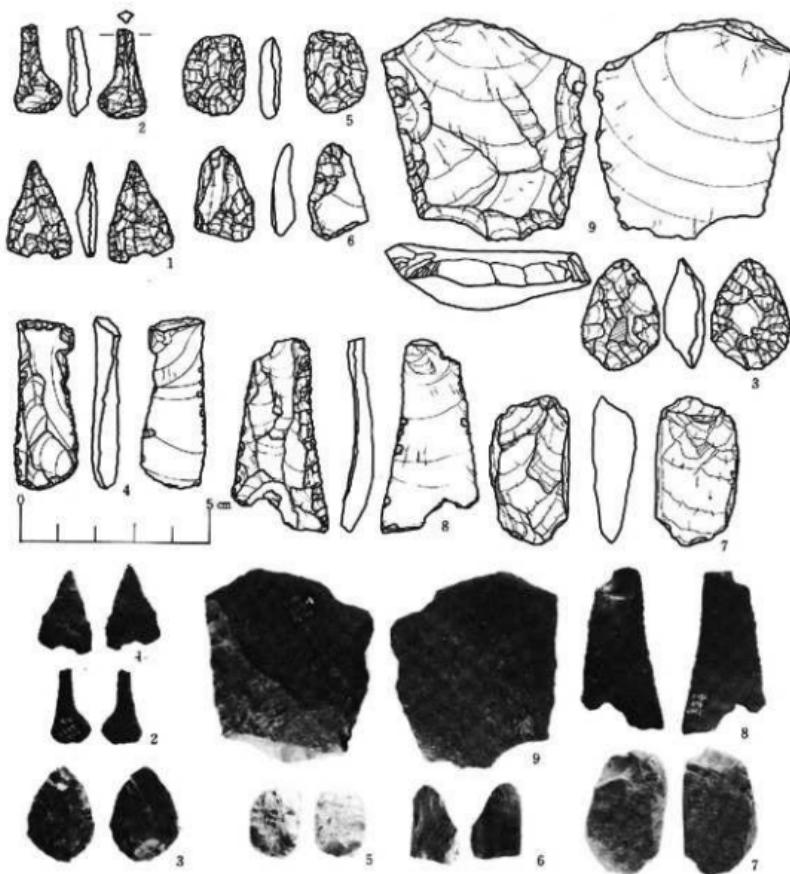
観察表

単位:mm. g

図	出土地点	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	P ₁₄	堆	スクレイパー	55.0	14.5	9.0	—	II	珪質頁岩	2485
2	M ₁₄	堆	石 錐	64.0	18.2	7.0	—	IIa1	珪質頁岩	2647
3	M ₁₄	堆	ノ フ チ	48.0	29.0	10.5	—	—	珪質頁岩	2647
4	—	床 直	スクレイパー	51.0	34.0	16.0	—	X	珪質頁岩	2705
5	—	床 直	石 錐	22.5	12.0	4.5	—	IIa③	珪質凝灰岩	2695
6	—	床 直	スクレイパー	20.5	17.5	4.0	一部欠損している	X	珪質凝灰岩	2695
7	—	床 直	S + F	28.5	18.0	4.0	両端が欠損している	II	珪質頁岩	2895
8	—	床 直	M + F	11.5	9.8	2.5	—	III	珪質頁岩	2505

図	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重 量	器の形態	使 用 痕・他	分類	石 材	登録番号
9	—	床 直	102.0	85.8	57.6	730	C	敲打痕(b-1)により礫の表皮が剥落している 表皮は風化している	III	安山岩	2709
10	—	床 直	108.6	97.2	79.1	1,180	A	全面磨痕(a)がある 一部に敲打痕(b-1)がある	II	安山岩	2708
11	P ₁	堆	84.8	37.4	33.0	60	F	底面に敲打痕(b-1)	I	安山岩	2714

第26図 2号住居跡出土石器(4)

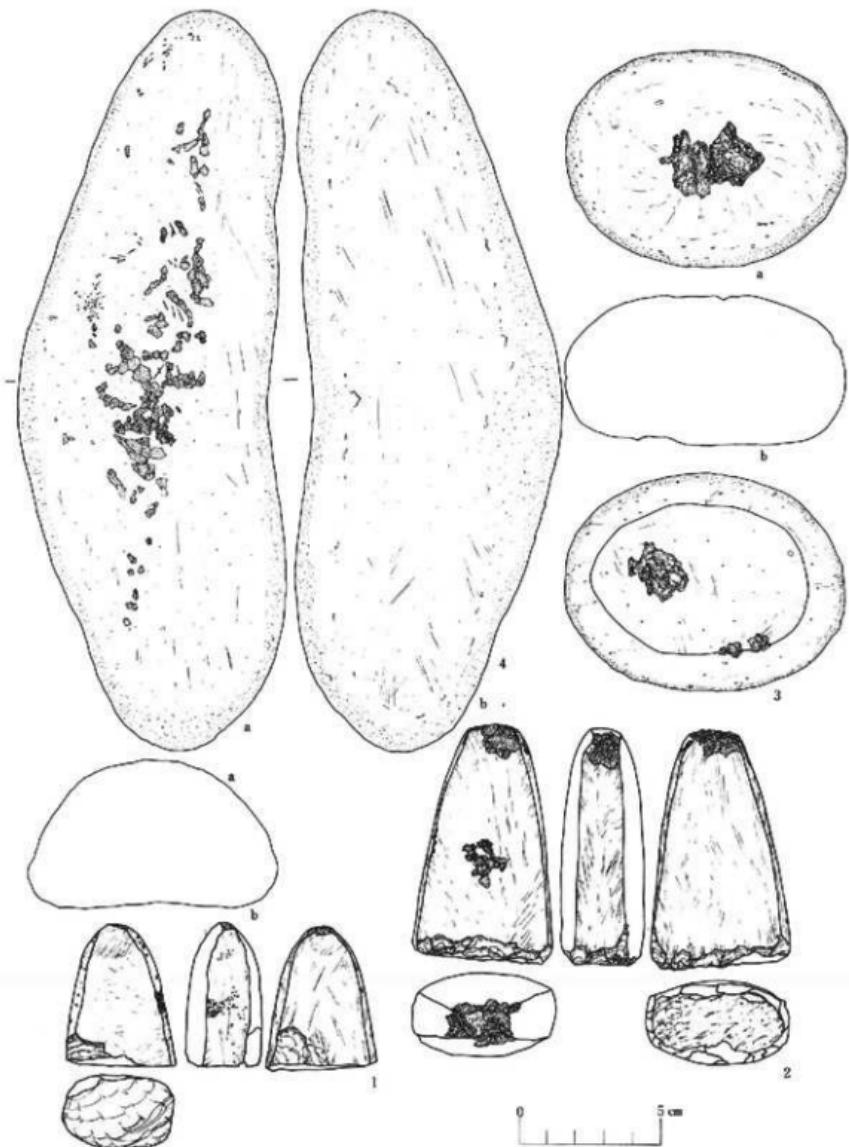


観察表

単位:mm

図	出土地点	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	堆積土	1	石 鋸	26.0	18.0	5.2	脚部欠損	Ia②	珪質頁岩	2659
2	堆積土	1	石 鋸	24.6	13.0	5.5	尖頭部欠損	IIa①	珪質頁岩	2296
3	堆積土	1	ボイント	29.8	20.5	11.0	—	III	チセート	2704①
4	堆積土	1	スクレイパー	45.0	17.0	6.7	—	III	珪質頁岩	2216 Pn-140
5	堆積土	1	ビエス・エスキュー	22.0	16.0	5.5	—	I	珪質頁岩	2704②
6	堆積土	1	スクレイパー	25.0	15.5	6.2	—	X	珪質頁岩	2700
7	堆積土	1	ビエス・エスキュー	30.2	22.0	11.5	—	II	珪質頁岩	2412 Pn-170
8	堆積土	1	スクレイパー	(52.5)	(25.0)	(6.3)	一部欠損	III	珪質頁岩	2693
9	堆積土	1	スクレイパー	59.0	52.5	15.8	—	IF	珪質頁岩	2316 Pn-138

第27図 2号住居跡出土石器(5)



第28図 2号住居跡出土石器(6)



観察表

単位: mm. g

図	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	欠損部	備考	分類	石材	號	
第28-29図1	堆積土	I	(51.3)	(29.3)	(26.7)	II・III	—	II b	安山岩	3412	
第28-29図2	堆積土	I	(85.0)	(50.0)	(30.0)	II	基部A、IIの断面片面の中央部B、欠損部に瘤状(a)	II a	安山岩	2336 Pn-133	
3	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	瘤の形態	使用歴・性	分類	石	號	
第28-29図3	堆積土	I	99.0	78.0	33.5	580	C	a・b両面の中央部に瘤面(*)と 敲打痕(b-2)	II	安山岩	2336 Pn-137
第28-29図4	堆積土	II	395.0	142.0	76.0	6,000	G	a・b両面に瘤状(a)、n面、凸面 に敲打痕(b-1-b-2)	II-1	砂岩	2424

第29図 2号住居跡出土石器(7)

1号炉跡(第30図)

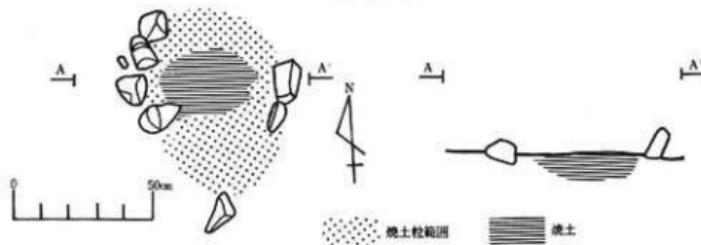
K-13グリッド北西側に位置し、IVb層上部で単独で検出された。約65cmの円形範囲に焼土粒、木炭粒がひろがり、内側には内面が強く焼けた15cm前後の角礫が西側に4個、東側に2個、浮いた状態で南側に1個並んでいた。礫の内面には焼土面がみられる。

検出礫より推定するに、礫外周径60cmのほぼ円形を呈する石囲いの炉であったと思われる。礫の掘り方は明確ではなかったが、ほぼ礫の大きさと大差ないと考える。

出土遺物は皆無であったが、ほぼ同一検出面西側で、1・2号埋設土器(後期初頭)、東側で3号土壙(中期末葉)が検出されており、そのいずれかの時期に所属するかと思われる。

佐藤甲二

1号炉跡



第30図 1号炉跡平面図

1号・2号埋設土器(第31~33図)

K-12グリッド北東隅に位置し、IVb層上部で隣接して検出され、両土器ともIVb層中に南東側(1号)、北東側(2号)にやや倒れた状態で斜位に出土した。1号埋設土器(第32図)は上部がかなりくずれた状態で、口縁部を欠失する。2号埋設土器(第33図)は北東側がボロボロで、わずかに土器の輪郭を残すような状態であった。ともに深鉢形土器で、底部に焼成後の外面からの穿孔がある。検出面、2号埋設土器内には、15cm前後の角礫がみられるが、K-12グリッドVla層からIVb層中にかけて、同じ大きさの自然礫が多く含まれており、自然のものか、人為的なものなのかは判別出来なかった。両土器ともこれに伴う掘り方、造構は検出出来なかった。

土器内堆積土はともに黒褐色(10YR 3/6)粘土質シルトの単層で、若干の炭化粒、焼土粒を含む。礫を除いては出土遺物はない。2号埋設土器内堆積土底部付近のリン分析結果(507頁参照)では、P₂O₅が基本層 IVa・IVb層より多少高い値を示しており、底部穿孔をも考え合わせるに、1・2号埋設土器は単棺墓の可能性も十分に考えられる。

所属時期は1号埋設土器が第Ⅵ群土器であることより、1・2号埋設土器とも後期初頭である。

3号埋設土器(第34~38図)

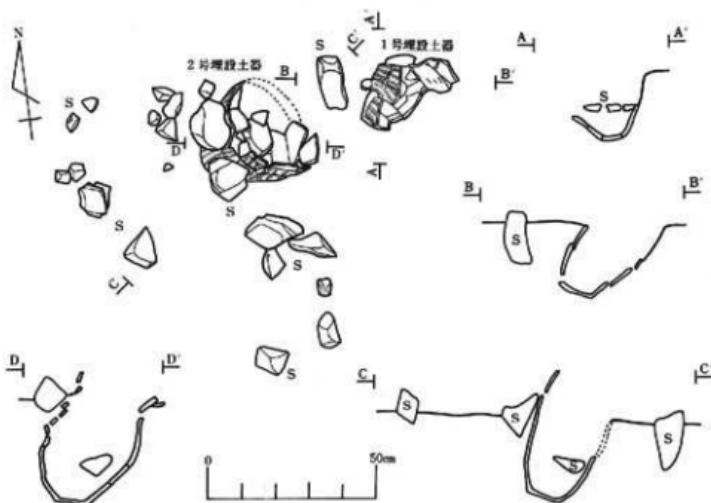
P-11グリッド北西隅に位置し、VI層上面で検出された。上部、南側を木の根によってかなり破壊されている。体部上半が崩れた状態の深鉢形土器が、上端最長部約1m、深さ約15cmの土壤西側に埋設され、土壤東側上部には10~20cmの円礫、角礫が11個集中して出土した。集中礫には積み方に規則性がなく、上面、下面が木の根によって擾乱されていることより、原位置は保たれてないが、当遺構に伴ったものと考えられる。埋土は細別2層からなるが、土器周辺の1a層が1b層より多少汚れている程度ではば同質であり、土器設置後、土壤全体に埋土が入れられたと考えられる。

出土遺物は、検出面、埋土中より土器片30点、石器3点が出土している。埋設土器内からは当土器の破片以外は出土していない。尚、11個の集中礫中には、磨痕のある凹石1点(第38図2)大型の敲打痕・磨痕のある礫1点(第37図3)が含まれる。

所属時期は埋設土器が第Ⅵ群土器であることより、中期末葉である。

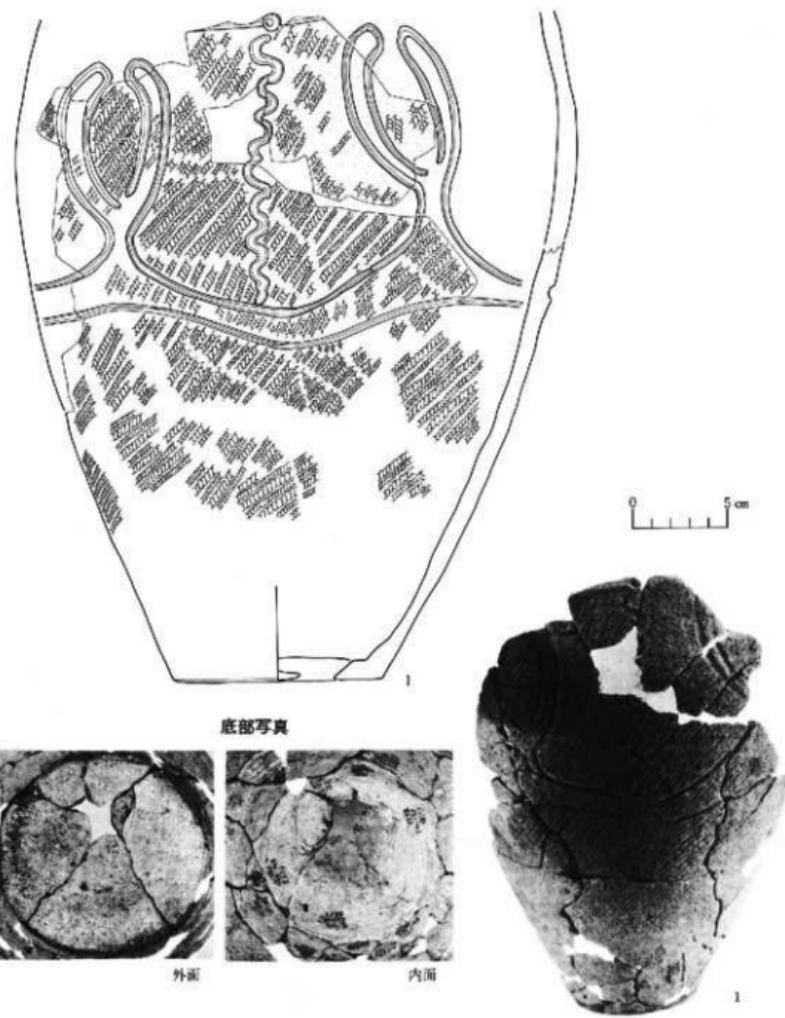
佐藤甲二

1号・2号埋設土器



第31図 1号・2号埋設土器平面図

出土器



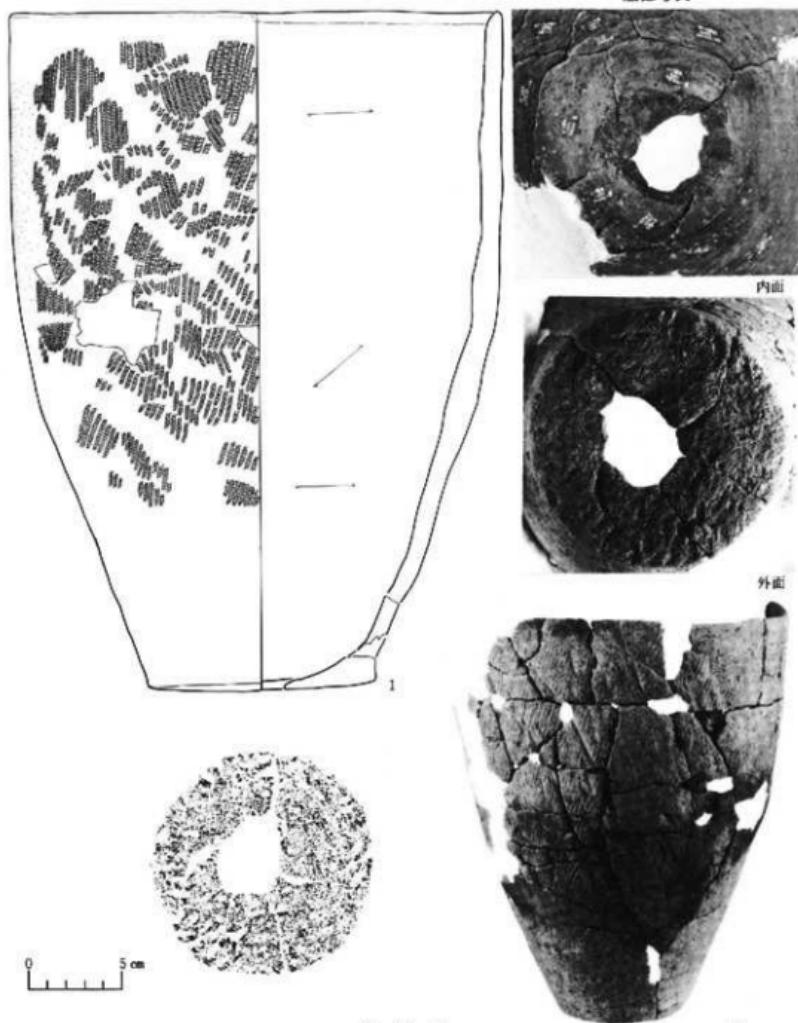
観察表

単位: cm

団	遺構名	層位	部位	器形	現存高	断面	縄文・調査		分類	備考
							部	部		
1	1号埋設土器	Y6層 上部確認	体部-底部 体部下欠損	調査?	35.7	11.0	横作L型縄文-低火候輪郭網縄文(手捻茎連続)	破壊	器1a+1b 穿孔	縄文の部分は大きな面積をもつを認り合せている。 焼成後底面部より空気
					29.7(体部上部)		+管孔(輪郭縄文)+縦的(底面)網縄文			

第32図 1号埋設土器

底部写真



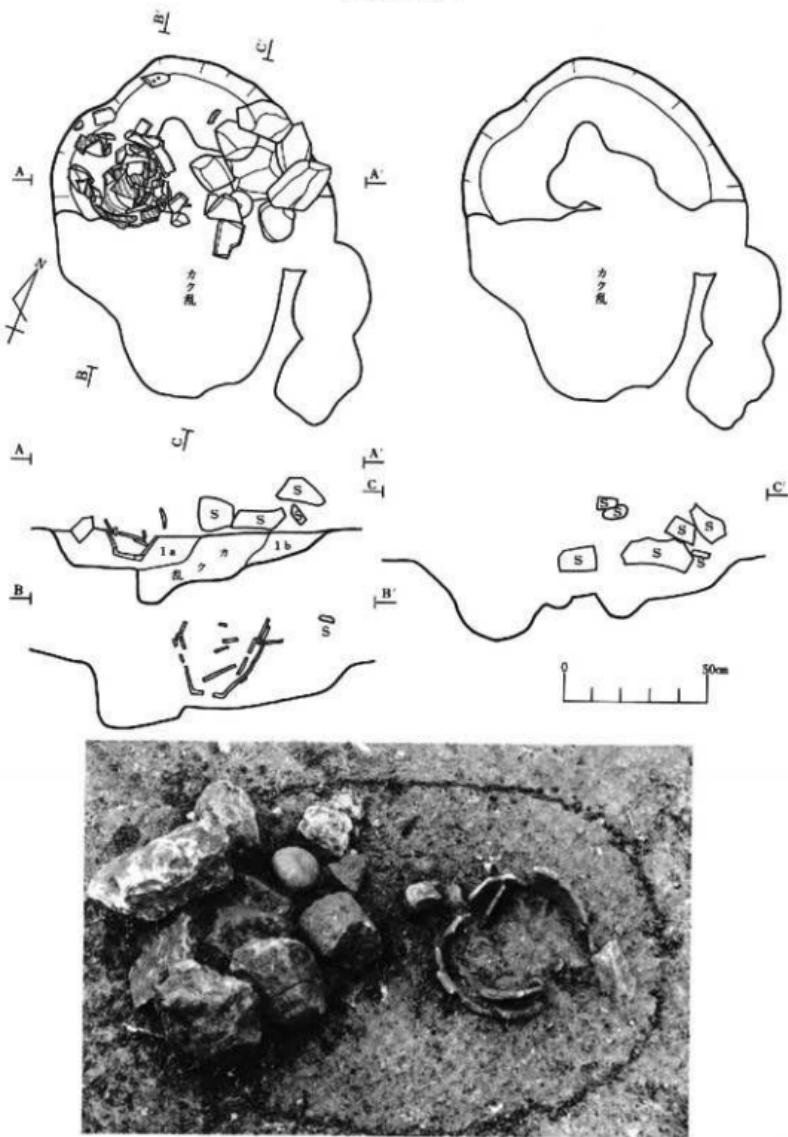
観察表

単位: cm

図	遺物名	場所	部位	器形	高さ	口径	概要		分類	参考
							外文	内文		
1	2号埋設土器 上接觸部	口縁部・体部	深鉢	直筒	36.3	25.1	幅広丸底文(2段3束)→幅狭斜文(口縁部・体下部)	幅広丸底文(口縁部・体下部)	X 1 a	6.5~2cmの横幅多(白色粘土) 絞り施注部外周より2cm

第33図 2号埋設土器

3号埋設土器



第34図 3号埋設土器平面図



3号埋設土器土層註記表

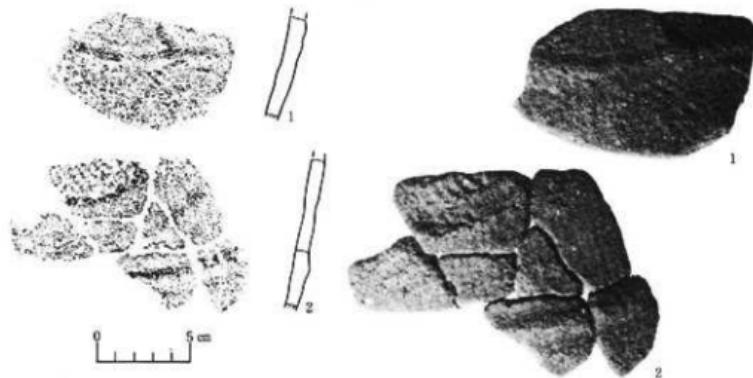
埋土	色調	土質	性質	しまり	圖			考
					保水性	口縁部	体部	
1 a	10YR 4/2	暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	炭化粒少量。	腐灰鉄粒。	燒土粒少量。
1 b	10YR 4/2	暗褐色	シルト質粘土	やや弱い	やや良	1 a層と同質だが、炭化粒、燒土粒ほとんど含まず。		

3号埋設土器出土遺物数量表

※()内数値は復元土器数

遺物	土器				石器			考
	保水性	口縁部	体部	底部	分類	スパイ	刺	
焼土	一	—	2	—	—	2	1	—
検出面	—	—	—	—	刃 不明	レバ	片	III 背—1
1 a	1	2	26	—	2(1)	17	1	1
								焼土 1 b 層は無遺物層

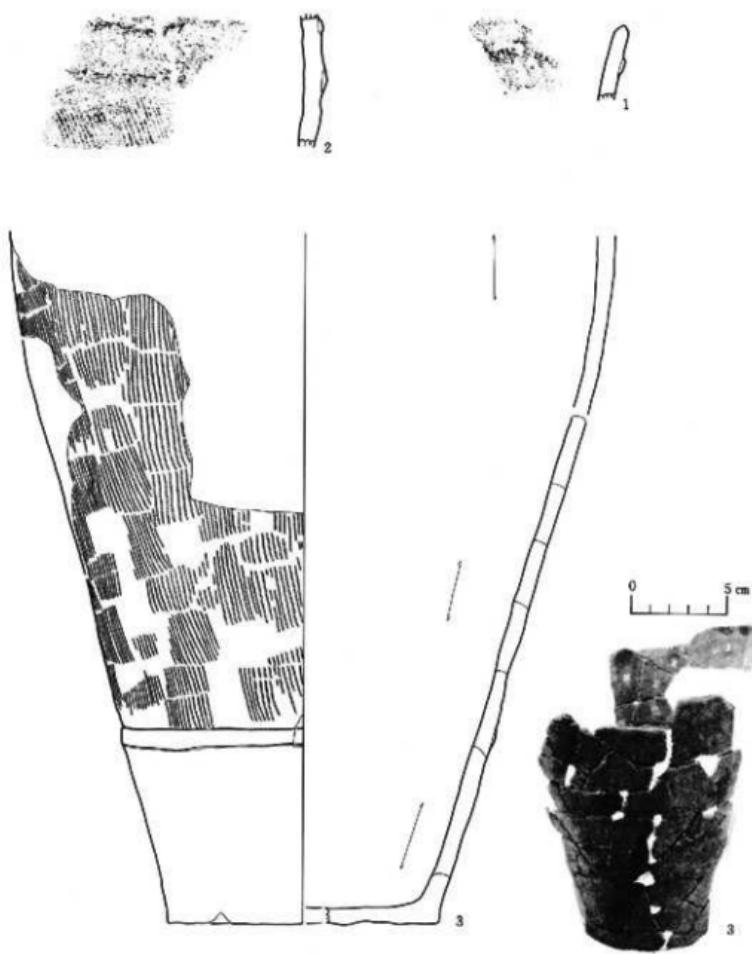
出土土器



観察表

図	造構名	埋土	部位	器形	施文	調査	分類	備考
1・2	3号埋設土器	1 a	体部	深鉢	隆線文→縦位 L.R 織文→磨き		VIIb or c	同一遺物

第35図 3号埋設土器出土土器



観察表

単位: cm

図	遺構名	埋土部位	器形	底		施文・測量	底部	分類	備考
				種	径				
1-2・3	3号埋設土器	1号 1.15 100cm	口縁部欠損 全体部外欠損	深鉢	14.5	最大径 [32.5](全体上半)	施文及埋系文→湯継文→調整(不明)	摩滅のため 不明	M1ker c 同一遺物 ?

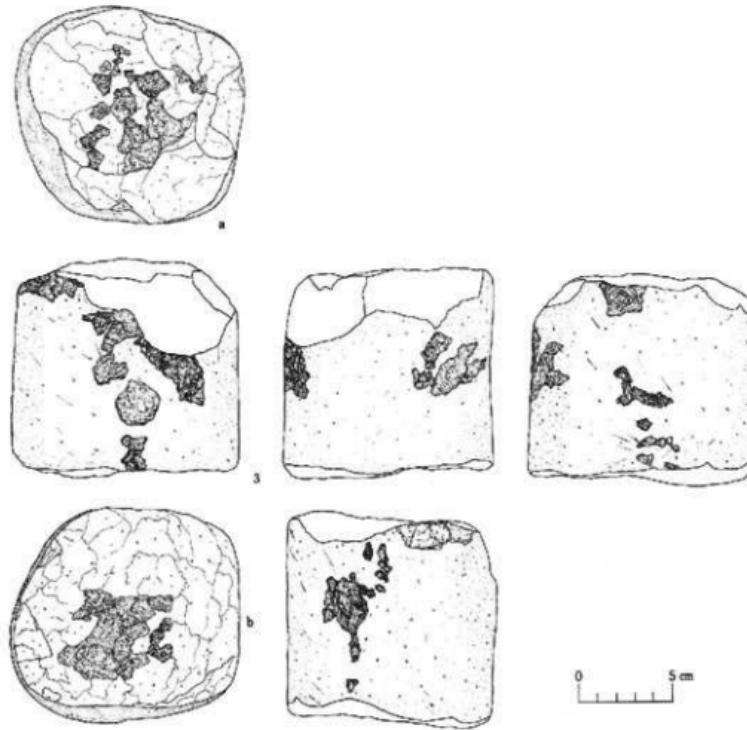
第36図 3号埋設土器

出土石器



観察表

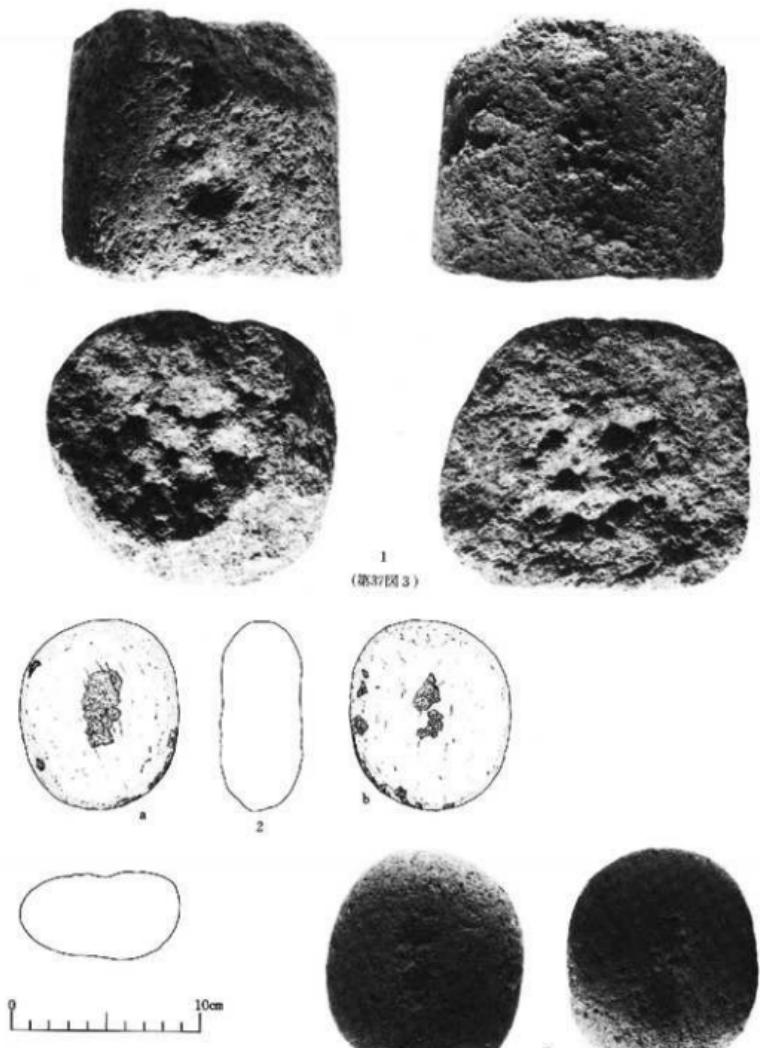
図	遺構名	埋土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	単位:mm	
								石 材	登録番号
1	3号埋設土器	1a	スクレイパー	(37.5)	(18.0)	(7.0)	欠損	珪質灰岩	2355
2	3号埋設土器	抽出面	スクレイパー	40.5	40.0	8.0	欠損後一部調整	珪質灰岩	2366



観察表

図	遺構名	埋土	名 称	長さ	幅	厚さ	重 量	縁の形態	単位:mm-g		
									使 用 標・面	分類	石 材
石3765 石3340	3号埋設土器	抽出面	115.0	121.5	111.5	1950	G	a. し縁に深い船形凹 (b-2) b. 縁部はほぼ直線的 (c-2) c. 縁にやや浅い船形凹 (d-2)	Y-1	珪質灰岩	2345

第37図 3号埋設土器出土石器(1)



観察表

単位: mm.g

回	遺物名	地 土	長 さ	幅	厚 さ	重 量	形 態	使 用 様 ・ 他	分 類	石 材	登 録 番 号
2	3号埋設土器 検出面	111.5	84.0	47.5	610	C	a, b両面に磨面(a)と 敲打痕(b-2) 側面に敲打痕(b-1)	■	安山岩	2344	

第38図 3号埋設土器出土石器(2)

4号ピット(第39~40図)

K-7グリッド北西側に位置し、VI層上面で検出された。上端長軸規模37cm、上端平面形楕円形、下端平面形円形、深さ20cmのピットである。堆積土は単層である。

底面上約10cmで、ほぼ完形の小型浅鉢形土器が1点横位で出土した。土器の表面には赤色顔料が塗られている。リン分析の結果では(507頁)、P、Oは土器内、土壌内で特に多いという結果は得られなかった。小型浅鉢形土器はピット上面に置かれていたものが、落ち込んだことも考えられる。

他に小土器片8点(第V群土器を含む)が出土したが、混入遺物と考える。小型浅鉢形土器の所属時期には後期初頭、後期前葉のいずれに属するか決し難い点もあるが、一応広義の後期前葉の土器として位置づけたい。従い土器の所属時期より、当土壌は後期前葉に属する。

5号ピット(第40~41図)

O-10グリッド北西隅に位置し、VI層上面で検出された。上端長軸規模70cm、上端・下端平面形とも不整楕円形で、中段(不整円形、径40cm)を持つ深さ68cmの深いピットである。上端は崩落している可能性もあり、本来上端は下端と中段との延長上にあり、円形に近い形状を呈していたとも考えられる。堆積土は3層から成るが、堆積土2層出土の土器片と、堆積土3層出土の土器片が接合(第41図2)している点より、堆積土2・3層の堆積にはほとんど時間的差異はないと考えられる。

遺物は各堆積層より土器片18点、石器11点(全てフレークとチップ)が出土している。

堆積土2・3層出土の観察可能な土器片の全てが第V群土器であることより、当ピットは中期後葉に属する。

2号土壌(第42~44図)

K-13グリッド北側に位置し、IVb層上部で検出された。2号住居跡の北東側を一部切っている。上端長軸規模70cm、上端・下端平面形とも楕円形、深さ52cm、長短軸断面ともU字形を呈する深い小型C類の土壌である。

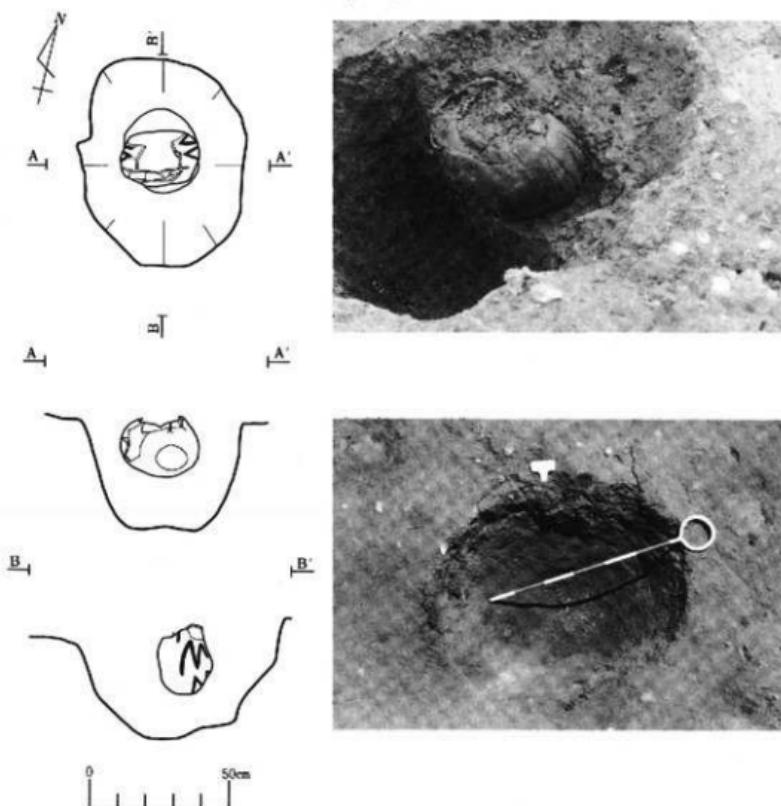
IVb層上部で土器片を中心とした遺物の集中がみられ、遺物を取り除いた段階で遺構上面プランが検出された。堆積土は単層で、人為的に埋め戻された様相を示している。従って遺物は土壤埋め立て後に上面に置かれたとも考えられる。

出土遺物は全て土壤上面及び堆積土上部からで、土器片の何点かは接合し、深鉢形土器2点(第43図1、第44図1)、小型の深鉢形土器1点(第43図2)が実測可能な復元土器となった他、土器片12点、石器5点が出土した。

復元土器、土器片のほとんどが第V群土器に包括されることより、当土壌は中期末葉に位置づけられる。

佐藤甲二

4号ピット



4号ピット観察表

地区名	検出面	平面形態		平面規模cm		深さ cm	壁 角	底面状態	上端 長軸方位	備 考
		上端	下端	上端	下端					
K-7(a)	刃層上面	横円	円	37×30	15×13	20	120°+115°	若干凸凹状	N-6°-W	——

4号ピット土層記表

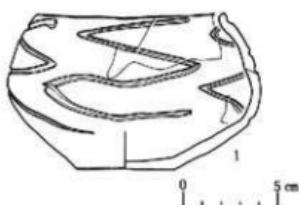
堆積土	色	調	土質	粘	色	しまり	備 考
1	7.5 YR 5G	暗褐色	シルト	やや強	や	良	炭化物、小礫

4号ピット出土遺物数量表 * () 内数値はほぼ完形土器数

遺物	土	器				
		法 式 文	口 縁 部	体 部	底 部	群 別
埴輪上		1	1	—	8	—
		1	1	—	1 (1)	7

第39図 4号ピット平面図

出土土器

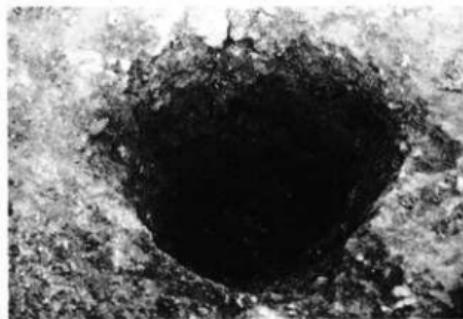
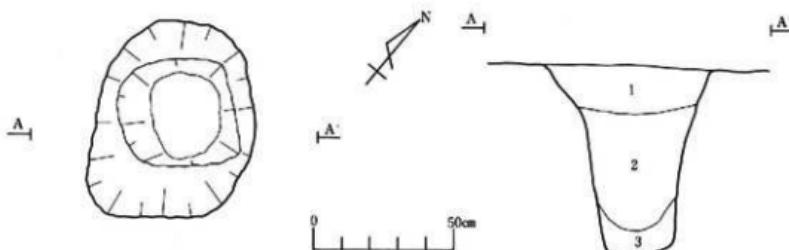


観察表

図	遺構	堆積土	部 位	輪 形	器 高	口 径	施 文	調 整	分類		備 考	単位: cm
									底	頂		
1	4P	I	I系層・底部 の一部欠損	円錐形	5.2	13.4	縦纹波状沈文(5単位)→凹唇(ていねい)	無文 (初期)	無	直	凹部に赤色顕料残存 体錐内面に黒褐色の付着物 底上に金糸母を少量含む	

※図1の遺物については、現段階では、罐群・瓦群土器の幅で捉えがるをえないが便宜的に広義の前業とし、瓦群上面に含めた。

5号ビット



第40図 4号ビット出土土器・5号ビット平面図

5号ピット遺構観察表

地区名	検出面	平面形態		平面規模cm		深さ cm	壁角	底面状態	上端 長軸方位	備考
		上端	下端	上端	下端					
0-10(■)	苷層上面 不整枠円	円	68×56	29×25	68	100*	平坦	N-38°-W		中段あり

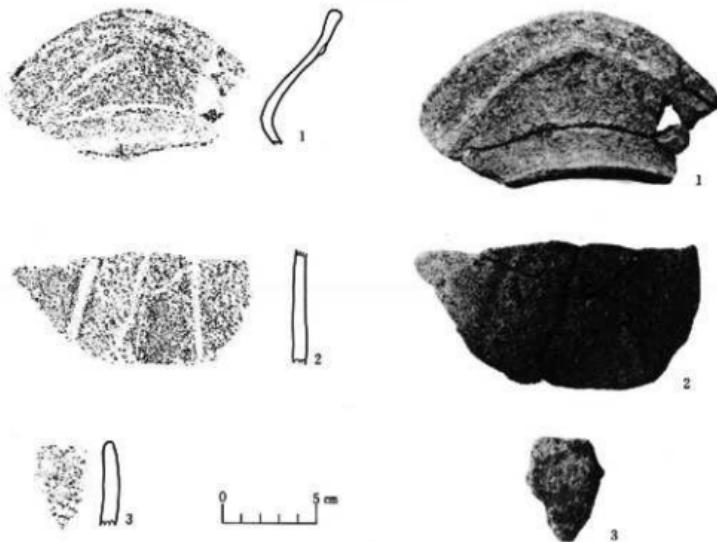
5号ピット土層註記表

堆積土	色 調	土質	粘 性	しまり	備 考	
					シルト	良
1	10YR 4/2 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	凝灰岩粒(2mm)多量。	
2	10YR 4/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	1cm大的凝灰岩多量。炭化粒少量。	
3	10YR 4/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	砂化多量。礫多量。	

5号ピット出土物数量表

堆積土	遺物	土 器						石 器		
		復 元 部	口 絶 部	体 部	底 部	V	XII	不 規	剥 片	チ ップ
	1	—	1	12	—	3	1	9	3	4
	2	—	1	3	—	2	—	2	2	2
	3	—	—	1	—	1	—	—	—	—

出土土器

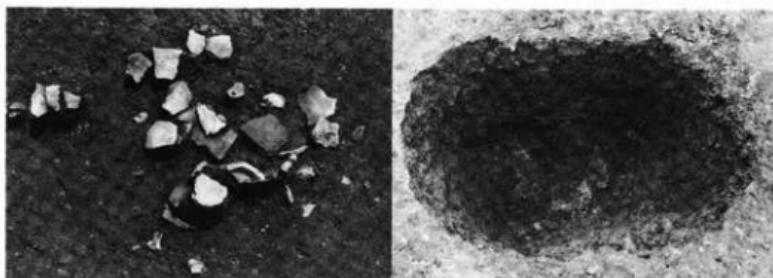
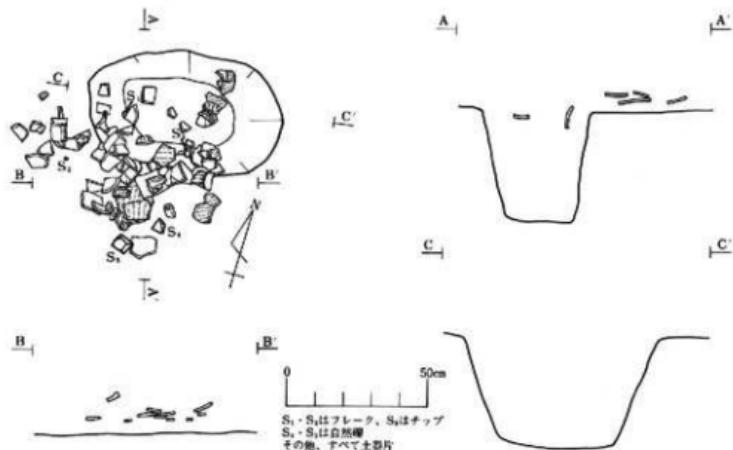


観察表

回	遺構名	堆積土	部 位	器 形	施 文 · 調 整	分 類	備 考
1	5P	2	口縁部	深鉢	陰線文→席き	VId	——
2	5P	3	体 部	深鉢	継位 L.R.縦文→沈線文→席き	VI-4	堆積土2層出土のものと接合
3	5P	1	口縁部	深鉢	横位 L.R.縦文→研磨(口縁部)	XIa	——

第41図 5号ピット出土土器

3号土壤



3号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態	平面規模 cm	深さ cm	壁 角	底面 状態	上 壁 長 距 方 位	分 期	備 考
K-13(a)	N b唇上部	1	横凹 横凹	小 72×42 42×42	40 110°	95°	平坦	N-77°-W	C	2往を切る

3号土壤土層記表

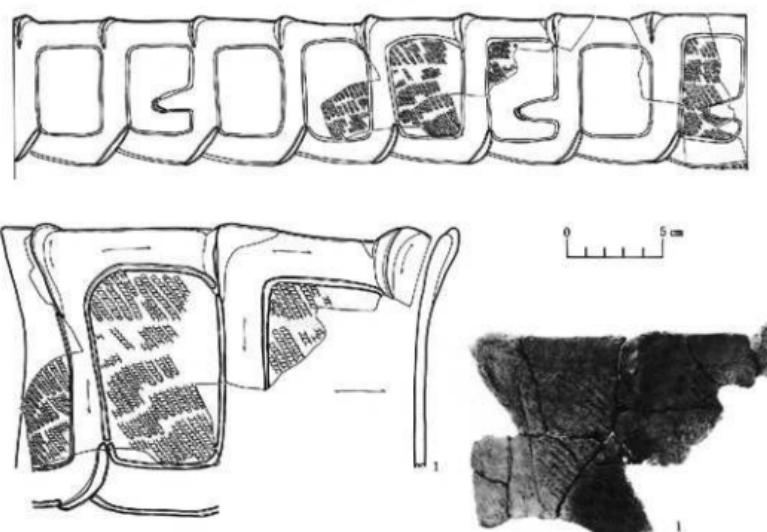
堆積土	色 調	土 質	粘 性	し ま り	備 考
1	10YR 3/4 黑褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	炭化物・焼土粒

3号土壤出土遺物数量表 (内数値は復元土器数)

遺物 堆積土	土 器				石 器		
	復元土器 検出面	口 縁 部	体 部	底 部	群 別		チ プ
		日	月	年	エイ ニ・ス キ		
上 部	2	2	8	2	5(2)	9	1
	1	—	—	—	1(1)	—	3
						—	1

第42図 3号土壤平面図

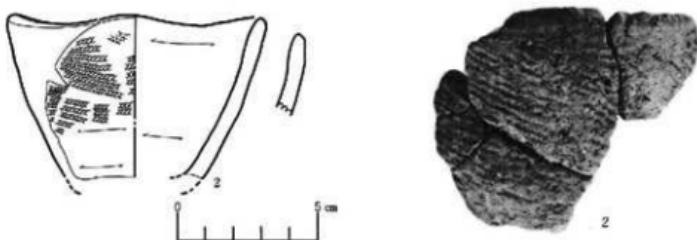
出土土器



観察表

単位: cm

図	遺構	堆積	部 位	器 形	口 径	施 文・調 整	分 類	備 考
1	3 D	検出面	口縁~体部上半	深鉢	24.5	沈織文→陰織文→施位 L R 施文→磨き	IV 1b	—

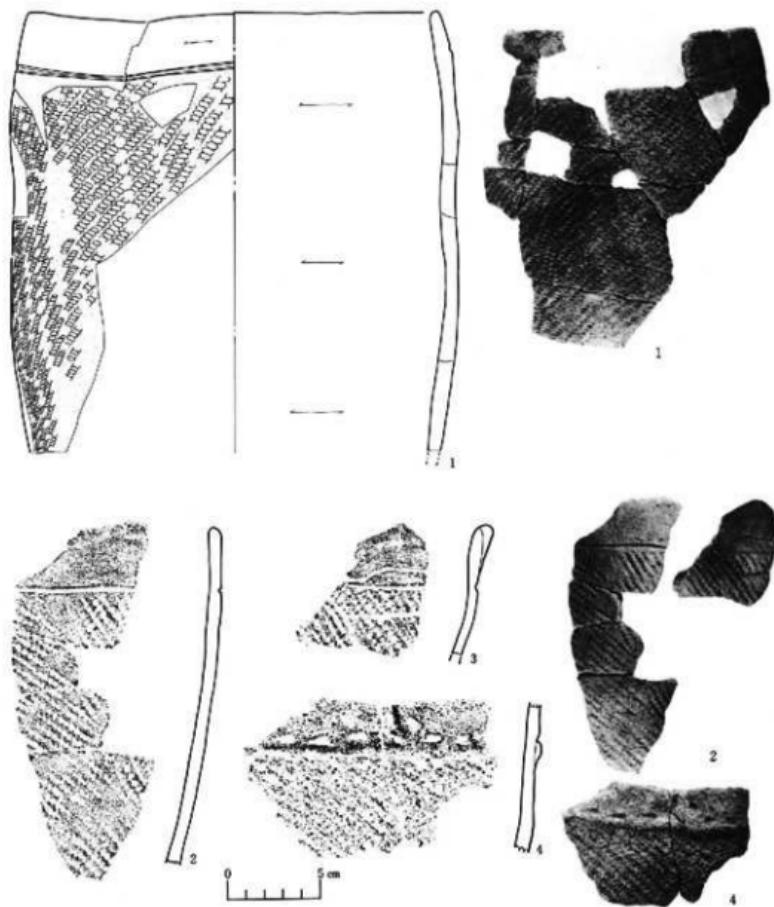


観察表

単位: cm

図	遺構	堆積上	部 位	器 形	口 径	施 文・調 整	分 類	備 考
2	3 D	検出面	口縁~体部 (小型)	深鉢	9.2	斜位 L, R 施文→磨き	VI 1-3	—

第43図 3号土壤出土土器(1)



観察表

単位: cm

図	透視	埋積土	部 位	器 形	施 文 · 調 整	分 類	備 考
1	3 D	1層上部	口縁～体部	深鉢	口 径 最大径 22 24 縦位 L R 横文→沈線文→磨き	Ⅱ 3	—
2・3	3 D	検出面	口縁～体部	深鉢	縦位 L R 横文→沈線文→磨き	Ⅱ 3	波状口縁
4	3 D	検出面	体 部	深鉢	横線文 → 縦位 L R 横文 → 磨き → 刺突文	Ⅱ 1-3	—

第44図 3号土壤出土土器(2)

4号土壙(第45~46図)

M-6グリッド北東隅に位置し、VI層上面で検出された。5号土壙を一部切る。上端長軸規模112cm、上端平面形不整橢円形、下端平面形橢円形、深さ43cmの中型C類の土壙である。

堆積土は2層から成るが、1層下面で大型の扁平礫(第45図S1、第46図2)の上に逆位の底部穿孔土器(第45図P1、第46図1)が密着した状態で出土した。扁平礫は表裏面とも磨かれており(礫石器VI-2類)、その上に赤色顔料を塗っていた痕跡をとどめる。底部穿孔土器は体部下部より上を人為的に切り取られている底部破片で、焼成後穿孔が外面より行われている。これら底部穿孔土器と扁平礫は当初より土壙内に埋設されていたと考える他に、土壙上面に据えられていたものが土壙内空洞化に伴い落ち込んだ可能性もある。

上記出土遺物の他に堆積土1層中より土器片35点(第VI、Ⅴ群土器を含む)、石器2点が出土している。

底部穿孔土器と赤色顔料を塗った特異な大型扁平礫が出土した点より、当土壙は墓壙の可能性が強い。所属時期は堆積土中に第Ⅴ群土器を含むことより、後期初頭と考えられる。

5号土壙(第47~48図)

M-6グリッド北東隅に位置し、VI層上面で検出された。4号土壙に北西側上端を一部切られている。上端長軸規模204cm、上端・下端平面形とも不整橢円形、深さ50cmの大型C類の土壙である。土壙底面には上端規模50×46cm、44×34cm、下端規模34×24cm、20×14cm、深さ10cm、14cmの浅いへこみ状のビットが2個検出されたが、内部よりの出土遺物はない。堆積土は2層から成るが、自然堆積状態を示す。

遺物は堆積土2層を中心として土器片55点(第V、Ⅳ群土器を含む)、石器18点が出土しているが、全て自然堆積遺物と考えられる。

当土壙は4号土壙に切られており、4号土壙の年代より、後期初頭以前に所属すると考えられる。

6号土壙(第49~52図)

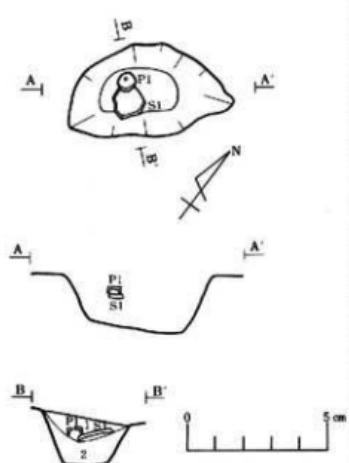
M-7グリッド南端に位置し、VI層上面で検出された。上端長軸規模282cm、上端・下端平面形との不整橢円形、深さ62cmを呈する大型C類の土壙である。上端南側は多少崩落した可能性がある。底面には3ヶ所の浅いへこみ状の落ち込みが検出され、東壁際落ち込み内底面上から、口縁部の一部を欠失した小型深鉢形土器(第50図1、第Ⅳ群土器)が直立でつぶれたような状態で出土した。堆積土は5層から成り自然堆積状態を示す。

小型深鉢形土器以外には堆積土1・2層を中心として土器片295点(第V・VI・Ⅴ群・Ⅳ群を含む)、石器38点を出土している。出土量が多いが全て自然堆積遺物と考えられる。

小型深鉢形土器の年代より当土壙は後期初頭に所属する。

佐藤甲二

4号土壤



4号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面 状態	上端長 軸方位	分類	備考
			上端	下端	壁	上端						
M-6 (b)	Ⅲ層上面	2	不整円形	楕円	中	112×66	56×32	43	125°	平進	N-57°-E	C 5Dを切る

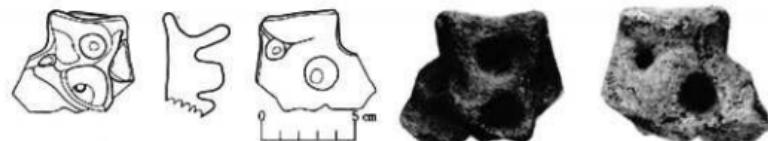
4号土壤土層註記表

堆積土	色	調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 4/2	黒褐色	シルト	弱い	やや良	炭化物
2	10YR 4/2	褐色	粘土	やや強い	やや良	—

4号土壤出土遺物数量表

地 積 土	遺 物	土 器					石 器	備 考
		復元 部	口 縁 部	体 部	底 部	群 別		
		質	量	不明				
1	—	4	30	2	1	3	32	2
							1	堆積土 2 種は無遺物

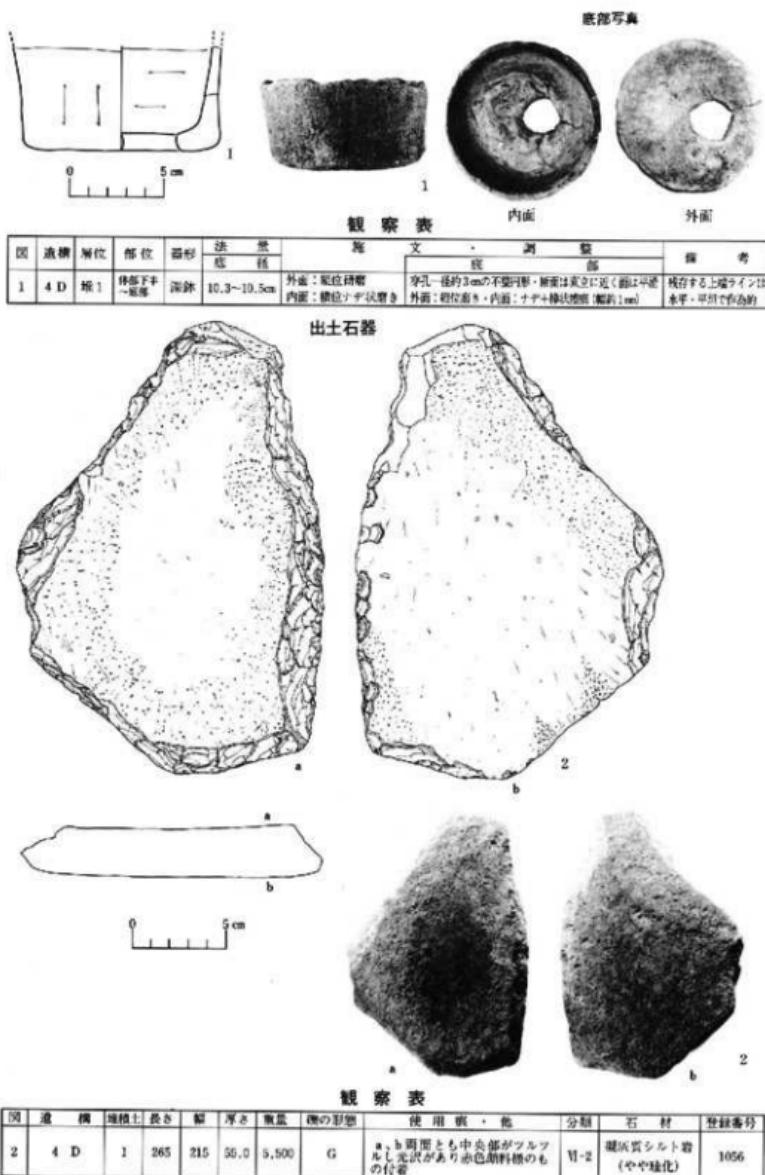
出土土器



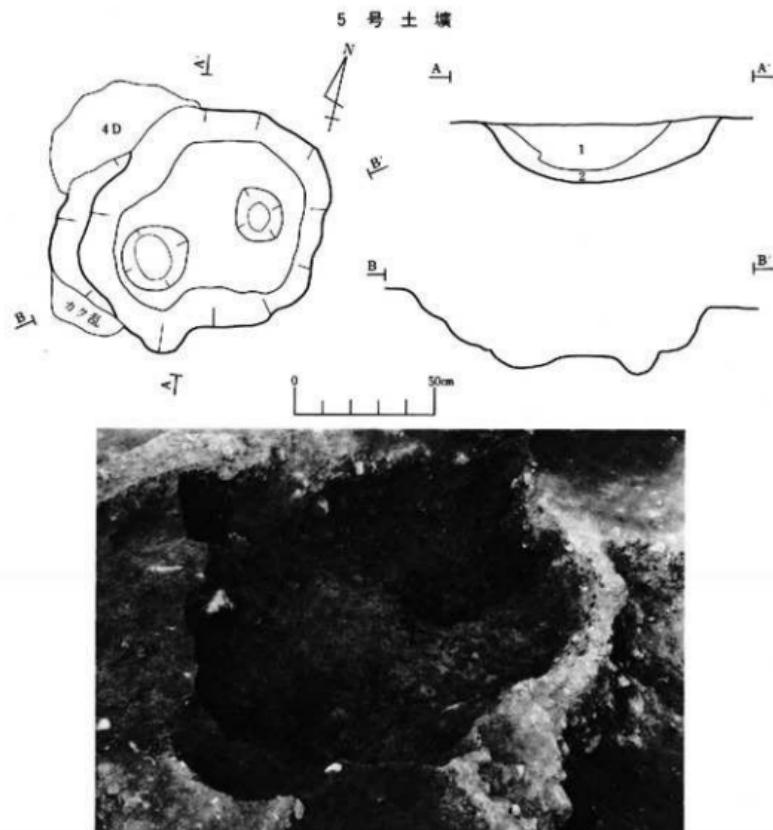
観察表

図	遺構名	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	4 D	1	突起 (口縁部)	深鉢	(円筒突起:「8」字状盲孔・盲孔(内面)盲孔(頂部)凹孔)	器IIb...1	—

第45図 4号土壤平面図・出土土器(1)



第46図 4号土壤出土土器(2)・石器



5号土壤観察表

※()内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ	壁角	底面状態	上端長	幅方位	分類	備考
			上層	下層	上層	下層							
M-6(b)	冒頭上面	2	不整円	不整円	大	280×135	115×120	50	115°	若干鈍状、ピット2	N-52°-E	C	4Dに切られる

5号土壤土層記載表

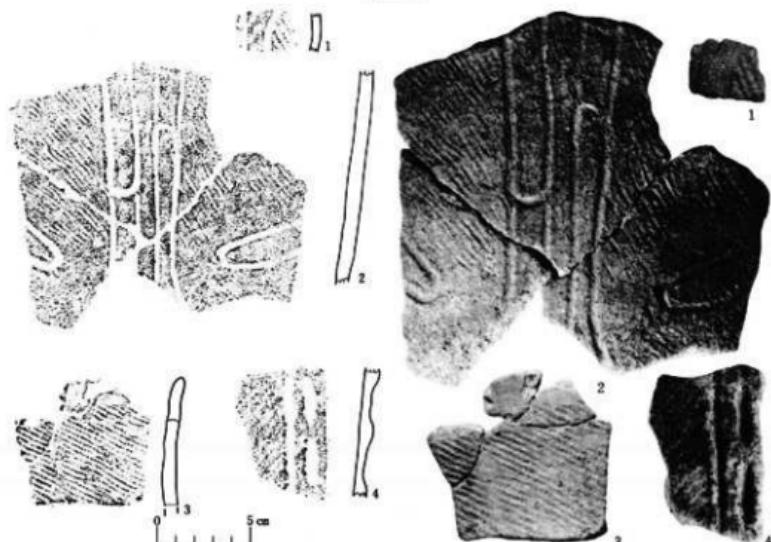
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 褐色	粘土質シルト	やや強い	不良	腐
2	10YR 暗褐色	シルト	やや良	やや良	炭化物。凝灰岩粒多量。

5号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土部						石部				
		復元土器	口縁部	体部	底部	V	電気	不規	石	スイ	S	瓦
1	—	—	2	—	—	—	—	2	—	2	—	—
2	—	—	3	43	7	1	5	1	46	1	3	1

第47図 5号土壤平面図

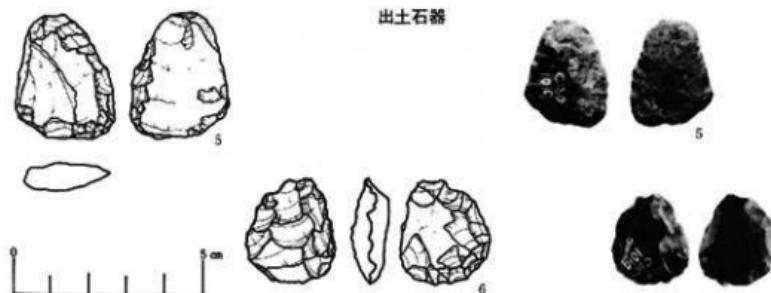
出土土器



観察表

図	造構	堆積土	部 位	器 形	施 文・調 整	分 類	備 考
1	5 D	2	体部	深鉢	縦位 L.R 横文→沈線文→磨き	V1-4	—
2	5 D	2	体部	深鉢	縦位 L.R 横文→長横円形沈線開磨消横文	V1-a	—
3	5 D	2	口縁部	深鉢	縦位 L.R 横文→研磨	X13-a	—
4	5 D	2	体部	深鉢	横位 L.R 横文→縦位並行沈線開銷状沈横文	V14c+5a	—

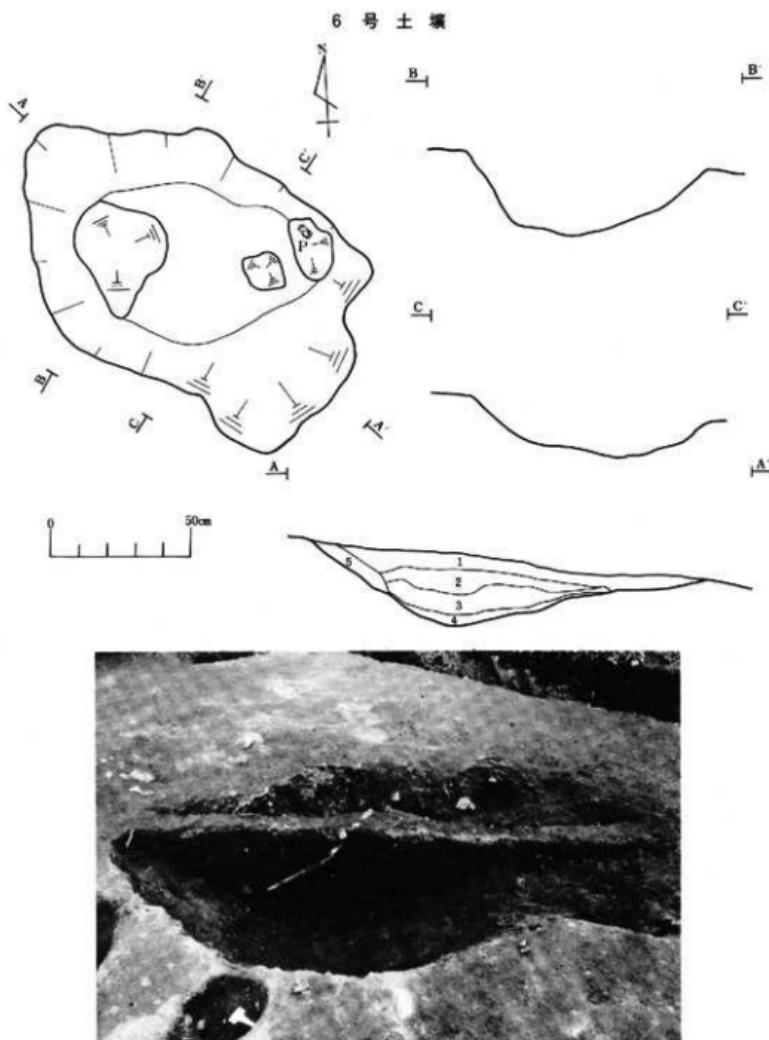
出土石器



観察表

図	造構	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登錄番号
5	5 D	2	スクレイパー	33.2	26.7	7.5	同一母岩(分類番号No.27)	X	透板岩質岩	1019
6	5 D	2	スクレイバー	28.0	24.0	9.0	—	I-B	珪質質岩	1019

第48図 5号土壌出土土器・石器



第49図 6号土壤平面図

6号土壤土層記表

地積土	色調	土質	粘性	しま司	備考
1	10YR 5/6 單褐色	シルト	弱い	不良	小礫。炭化物。
2	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	炭化物多量。燒土粒少量。
3	10YR 5/6 單褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	褐色粒。炭化物。
4	10YR 5/6 黃褐色	粘土	強い	やや良	炭化物。焼上。
5	10YR 5/6 黄褐色	粘土	強い	やや良	

6号土壤出土遺物数量表

地積土 遺物 層面	石器	出土物											備考			
		部類別						石器								
		V	VI	VII	VIII	XI	不明	石鋸	ビ・エスキー	スイ・クバ	S・F	M・F	調査チップ	石核	磨合石	IV
1	—	22	106	7	1	2	—	13	1	118	1	1	—	—	1	—
2	—	—	118	6	1	4	1	6	4	108	—	—	2	1	11	1
表面	1	—	—	1	—	—	—	101	—	1	—	—	—	—	—	—

出土土器



観察表

単位: cm

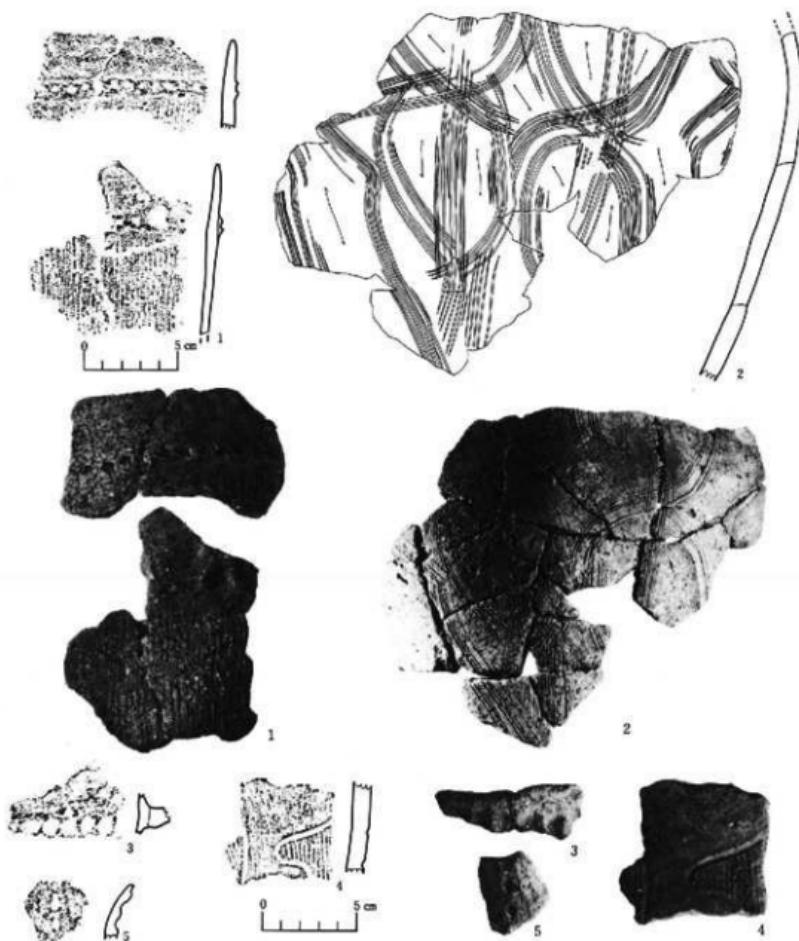
図	遺構	地積土	部位	器形	器高 (12.5) (11.0)	口径 (5.7) (11.0)	施文・調整	底部		分類	備考
								底径	最大径		
1	6D	底面	口縁部、 体部の一部 欠損	深鉢	—	—	(大小突起→小突起の頂部に盲孔)→全周研磨 ・体部全周は削り→研磨 ・底部内面はテッカ	無文	円錐部、削り(7单 位)→研磨	Ⅱb	浅灰口縁 体部下手下中央部に黒色 付着物(幅2cm)



観察表

図	遺構	地積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
2	6D	2	口縁部	深鉢	外面: 研磨 内面: 深孔陥没	Ⅱb	麻痺している

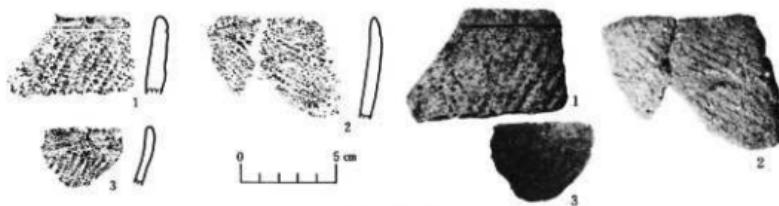
第50図 6号土壤出土土器(1)



観察表

回	遺構	堆積土	部 位	跡 形	施 文	調 整	分 類	備 考
1	6 D	1	口縁部	深鉢V	「横位幾級十小円形・不整三角形刺突文」一組 段階沈縮文→研磨(口縁部)	■	■ 6a	—
2	6 D	1	体 部	深 鉢	研磨→段位「8」次細沈縮文(↓→↓→↓) 縫合乳頭状沈縮文	■	■ 1b	0.1~2mmの灰白粒を多量に含む
3	6 D	2	体 部	深 鉢	「撓伏隕帶」連続解次刺突文	■	■ 8c+5b	—
4	6 D	2	体 部	深 鉢	斜位R捺条文→弧状沈縮間隔消燃条文	■	■ 1a	—
5	6 D	2	注口部?	?	連続刺突文	■	■ 5b	—

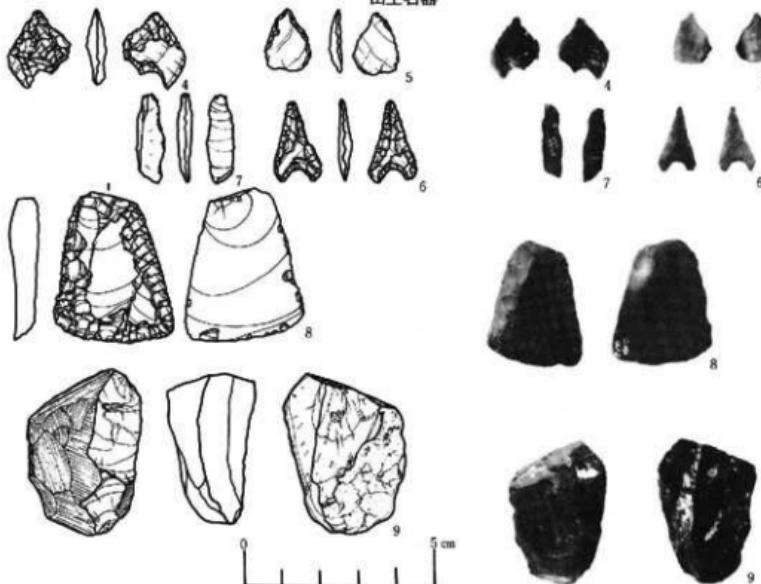
第51図 6号土壤出土土器(2)



観察表

図	遺構名	層位	部位	器形	施文・調査	分類	備考
1	6 D	1	口縁部	深鉢	腹位 R L 繩文・沈带? → ナガ状研磨	Ⅳa?	—
2	6 D	2	口縁部	深鉢	腹位 L 捺承文→研磨(口縁部)	Ⅲle	—
3	6 D	2	口縁部	浅鉢	腹位 R L 繩文→研磨(口縁部)	Ⅲ4a	—

出土石器



観察表

単位:mm

図	遺構名	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	施文	調査	分類	石 材	登録番号
4	6 D	2	石 縫	(20.0)	(17.0)	5.0	肩部一部破壊	Ⅳa④	珪質頁岩	903	
5	6 D	2	石 縫	16.5	11.5	3.0	薄手の削片を素材	NB⑦	メノウ	900 ②	
6	6 D	2	石 縫	21.5	12.0	3.0		VIa⑥	珪質頁岩	900 ①	
7	6 D	2	M・F	23.2	7.0	3.5	ヒスコ・マスキーのスカルルの 骨標本がある	Ⅳ	珪質頁岩	900 ②	
8	6 D	検出面	スクリーパー	39.0	32.0	7.5	—	Ⅲ	珪質頁岩	412	
9	6 D	1	石 植	40.0	31.0	23.5	—	—	真珠岩	450	

第52図 6号土塙出土土器(3)・石器

(3) 繩文時代晚期

繩文時代晚期の遺構としては土壙4基(7~10号)を検出したが、8号土壙に関しては、土壙規模、形態より一応当時期とした。

検出面は4土壙ともVI層(地山)上面である。土壙規模では小型(7・8号)、中型(9号)、大型(10号)、土壙形態ではA類(7・8号)、C類(9号)、G類(10号)に属する。

7号土壙(第53~57図、写真16~19)

K-13グリッド南東側に位置し、VI層上面で検出された(東側の一部はV層上面)、2号住跡を一部切っている。東側壁面はかなりの崩落状態を示し上端平面形不整橢円形であるが、上端平面形は下端平面形と同様にほぼ円形であったと考える。上端復元径約80cm、下端径約85cm、深さ35cm、断面フ拉斯コ状の小型A類の土壙である。底面は平坦で、東側には上端規模径7cm、深さ約25cmの円形の小ピットが1個垂直に掘り込まれていた。堆積土は東壁際で地山ブロックが多くみられたが、單層であった。

土壙上部より小型深鉢形土器(第53図P1、第54図)1点、底面より鉢形土器(第53図P3、第56図1)、壺形土器(第53図P2、第55図1)各1点が出土した。小型深鉢形土器は口縁を欠失し、底部に焼成後の穿孔(内面より)がある。鉢形土器は体部を欠失する。壺形土器は完形であるが体部に2ヶ所焼成後の穿孔(外面より)がある。土壙中央を中心とする上部から底面にかけて、10cm以下の小角礫や20cmもある大角礫が多く出土し、小型深鉢形土器はこの角礫に混じるような状態で出土し、底面出土の鉢形土器と壺形土器は、鉢形土器に壺形土器が横たえられた状態で、北西壁際底面に置かれており、この部分の底面は強く壁側に張り出している。堆積土中には上部から下部まで炭化物が多く含まれ、この中には、クリの実が含まれていた。(大阪大学理学部粉川昭平教授の御教授による。)

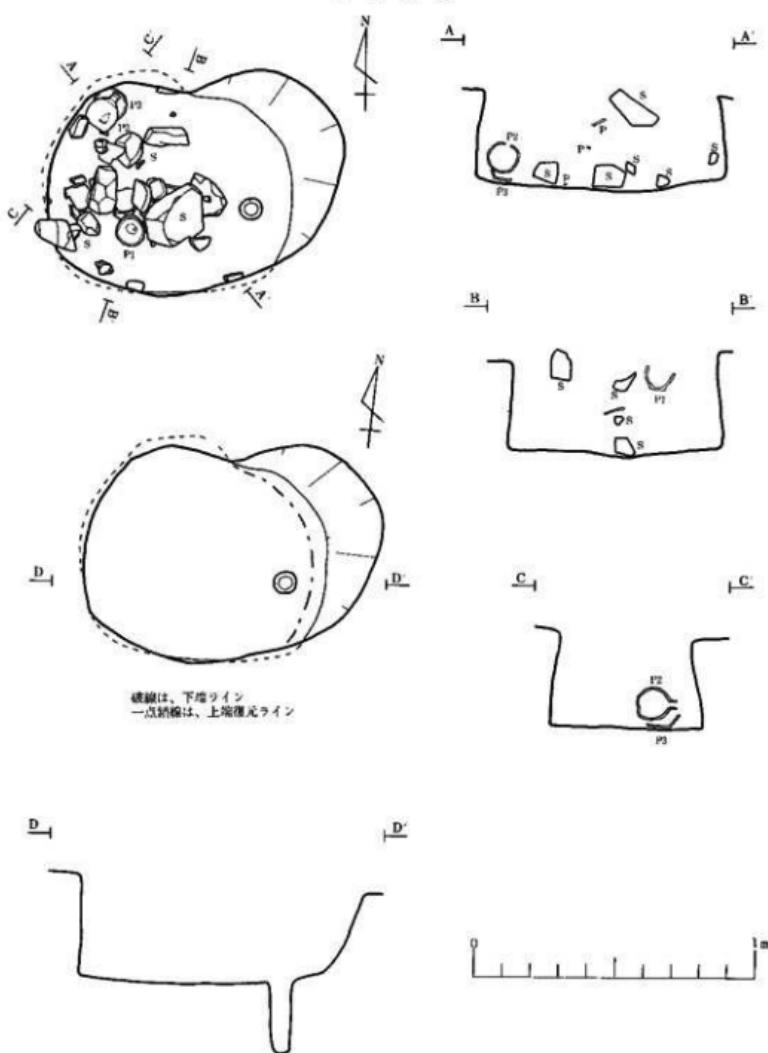
リン分析の結果(507頁参照)では、土壙内堆積土、土器内の土壙からはP、O₂が、K-13グリッド東壁基本層IVa~V層より高い値を示している。

出土遺物は上記3土器の他に土器片57点(第II・V・VI・XIII群土器を含む)、石器40点を出土している。底面より剥片4点が散在して出土したが、底面より第XIII群土器以外の可能性もある土器片も出土している為、当土壙に伴うかどうかは不明である。

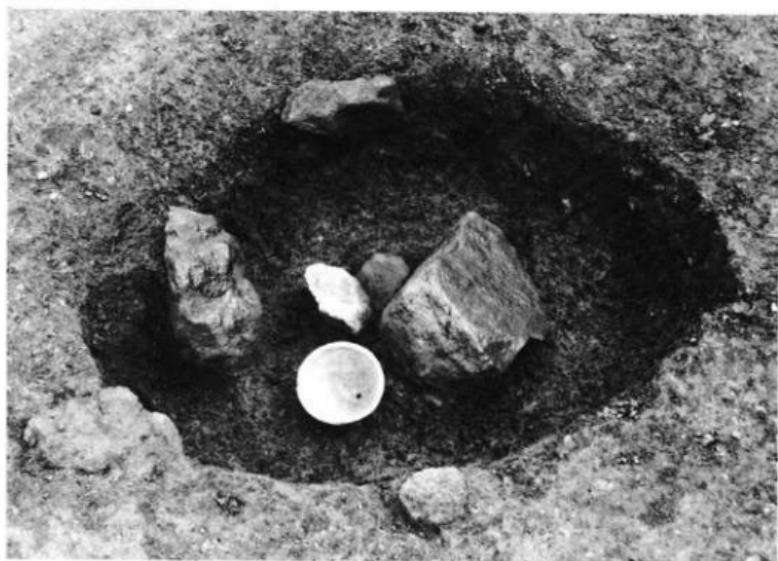
リン分析結果及び穿孔土器出土より、当土壙は墓壙であると考える。また、上部検出小型深鉢形土器及び多数の角礫は、土壙上面に置かれていたものが落ち込んだ可能性もある。

小型深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が全て第XIII群土器に属することより、当土壙は晚期後葉に所属する。

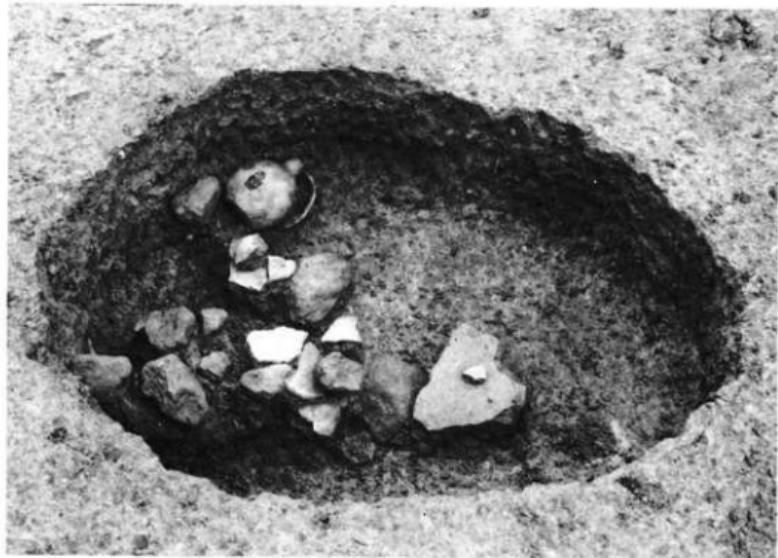
7号土壤



第53図 7号土壤平面図



16. 7号土壤遺物出土状況（南から）



17. 7号土壤底面遺物出土状況(1)（南から）



18. 7号土壙底面遺物出土状況(2)（南東から）



19. 7号土壙完掘状況（南から）

7号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面 状態	分類	備考
			上端	下端	上端	下端					
K-13(e)	V-V'断上面	1	不規則円	不規則円	小	110×76	88×83	35	85°	平坦、ピット1	A 東壁崩壊

7号土壤土層記録表

堆積土	色	調	土質	粘性	しまり	備	考
1	7.5YR 4/2	黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	1cmの炭化物ブロック多量。燒土。炭化粒。	

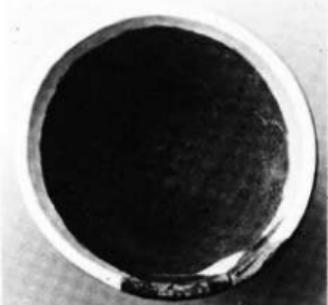
7号土壤出土遺物数量表

※()内数値は完形・復元土器数

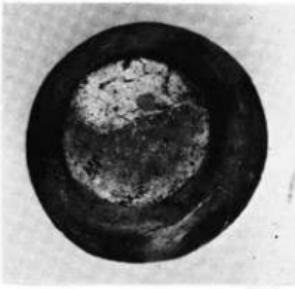
遺物 堆積土 層	土 器							石 砥				自然 遺物				
	高 形 土器	復 元 土器	口 縁 部	体 部	底 部	E	V	環	XIII	不明	石 スライ シ	M F	剥 片	チップ	石 核	
堆 積 土 層 上 部	—	—	6	—	—	1	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—
上 部	1	3	39	1	2	—	1	3(1)	38	1	2	1	22	9	1	炭化堅果類(クリ) 炭化材(クリ)
下 部	—	1	3	1	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—
底 部	2	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	—	—	—	4	—	—	—
底 部 内 部	—	—	3	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—
ピット内	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

出土土器
底部写真

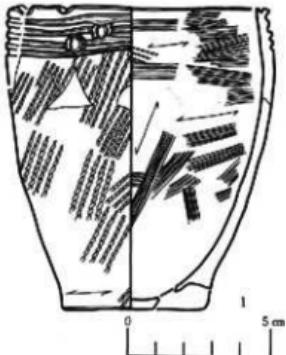
出土土器



内面



外面

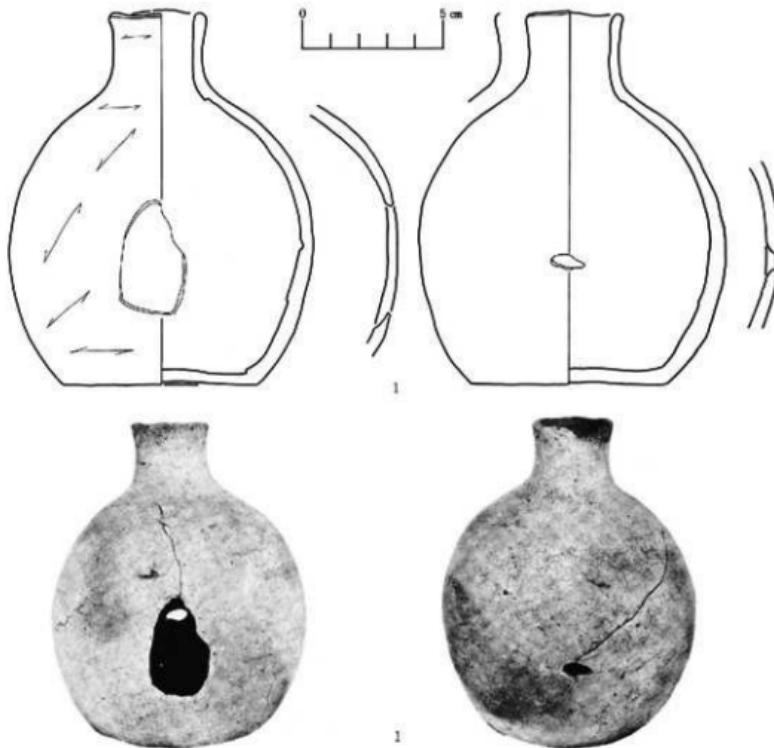


1

第54図 7号土壤出土土器(1)

観察表

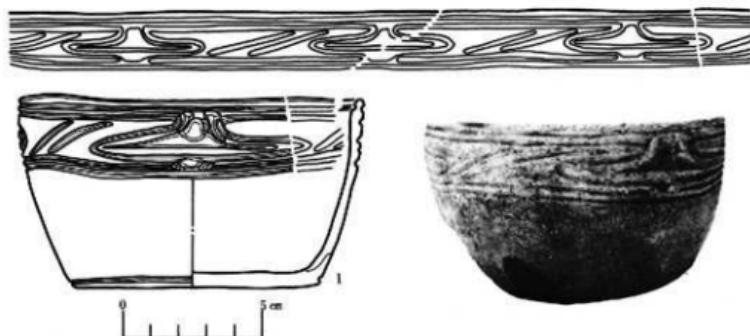
探	通査名	堆積土	口 径	器 高	施 文・調 整	胎 土	分 類	備 考
第54 図 1	7D	上部	(9.2cm) 最大径 9.5cm	10.9cm 底 径 5.1cm	口 頭 部 刻み目+沈線 体部上端 区画沈線2条、工字状文(沈線の一部を円形に彫先) 体部下半 縦位撲手文L	砂粒少	XIII 1 a 1	底部内面 より穿孔



観察表

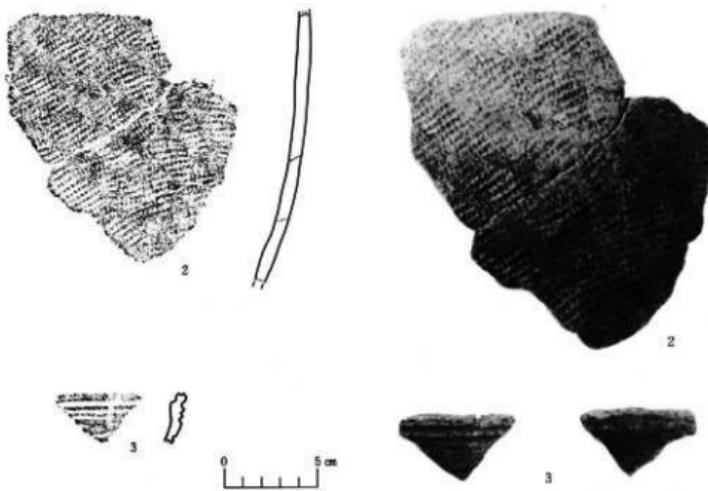
探	通査名	堆積土	口 径	器 高	施 文・調 整	胎 土	分 類	備 考
1	7D	底面	3.5cm 最大径 10.9cm	13.5cm 底 径 6.9cm	平線 外面全面研磨(ヨコ・ナナメ方向) 内面体部中央に腹部内面を研削した際の 工具の先端の痕跡がめぐる。	砂粒 やや少	XIII 3	体部に外面からの 穿孔2ヶ所あり

第55図 7号土壤出土土器(2)



観察表

図	造構名	堆積土	施文・調整		胎土	分類	備考
			口 種	器 高			
1	7 D	底面	12.3cm 最大径 -----	6.8cm 底 径 8.7cm 体部下半	内面1条沈縫 平縫 区画沈縫2条、工字状文(反転する 沈縫の一部を上下逆向きに移去) 研磨、下端1条沈縫	砂粒多	XIII 2 a
							—



観察表

図	造構名	堆積土	部 位	施文・調整	胎 土	分 類	備 考
2	7 D	下部	体 部	斜位L R 縱文	砂粒多	XIII 1	外面に炭化物付着
3	7 D	下部	口縁部	沈縫2条、他に沈縫もあるが全体不明	砂粒多	XIII 2b1	赤色顔料付着

第56図 7号土壤出土土器(3)

8号土壙(第57~58図)

M-15グリッド西壁際に位置し、VI層上面で検出された。北側の一部に擾乱を受けている。上端・下端平面形とも円形、上端径約90cm、下端径約94cmで、上端面積より底面面積の大きい断面フ拉斯コ状を呈する、深さ35cmの小型A類の土壙である。堆積土は4層から成り、堆積土4層中には炭化物が含まれる。

堆積土3・4層中より小土器片12点(全て時期判別不可)、石器1点を出土したが混入と考えられる。堆積土4層上面から約15cmの扁平角礫が1点出土している。

所属時期は時期決定遺物を欠き不明であるが、7号土壙と規模、形態が酷似していることより、また当グリッド内基本層位出土遺物より、7号土壙と同一時期のものと考えられる。

9号土壙(第59~62図)

P-11グリッド西側に位置し、VI層上面で検出された。上端長軸規模130cmで、上端・下端平面形とも梢円形、深さ30cmを呈する中型C類の土壙である。南東側壁は多少崩落状態を示している。土壙南西壁際で約30cm前後の大型角礫が検出されたが、当土壙に伴うものかどうかは不明である。堆積土は3層から成る。検出面から堆積土1層上面にかけて、口縁部から体部下半までの約 $\frac{1}{2}$ を残存する一括土器1点(第59図P1、第60図)が検出され、その直下からは大型で盤状の礫(礫石器VI-1類、第59図S1、第61図)が1点、斜位で出土した。

堆積土各層から上記出土遺物以外に、土器片54点(第Ⅶ・Ⅸ群土器を含む)、石器13点が出土した他、15cm前後の角礫が多く含まれていた。

一括土器と礫石器は当土壙上面に置かれていた可能性が強く、従って当土壙の所属時期は、一括土器が第XIII群土器であることより晩期後葉に属すると考えられる。

10号土壙(第62~64図)

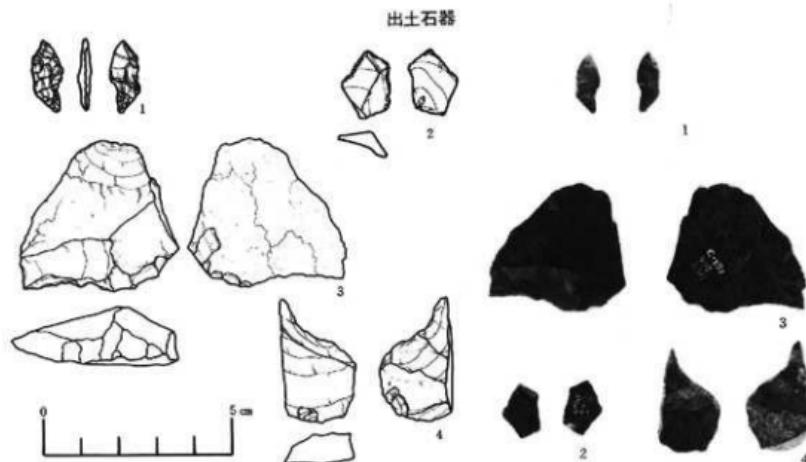
P-11グリッド南側に位置し、VI層上面で検出された。上端長軸規模237cm、上端・下端平面形とも不整梢円形、深さ25~40cmを呈する大型G類の土壙で、底面は長軸に沿って南から北へ傾き深くなる。壁面は長軸壁ではゆるやかに立ち、短軸壁では急角度で立つ。堆積土は3層から成る。

土壙北東際検出面で体部下半を失す深鉢形土器1点(第62図P1、第63図)が、横位でつぶれたような状態で出土し、同一面東側より大型で盤状の礫(礫石器VI-1類、第62図S1、第64図3)が1点出土した。

堆積土1~2層からは上記出土遺物以外に、小土器片44点(第Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ群土器を含む)、石器7点を出土した他、多量の15cm前後の角礫が含まれていた。

10号土壙は9号土壙と形態こそ異なるが、出土遺物の点でかなり9号土壙と似た様相を示している。当土壙も、上面に置かれていた可能性が強い深鉢形土器が、第XIII群土器であることより、晩期後葉に所属すると考えられる。

佐藤甲二

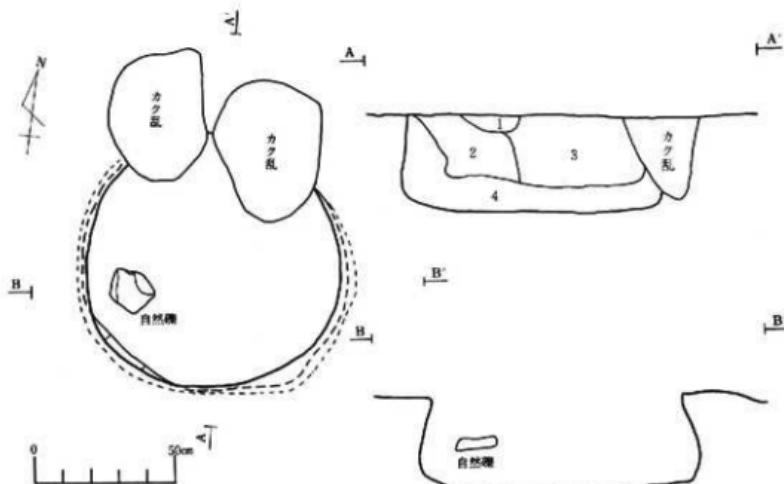


観察表

単位:mm

図	遺構名	堆積土	名 称	長 き	幅 厚 き	備 考	石 材	登録番号
1	7D	1	石 鋸	19.0	8.0	3.0	脚部のみ	珪質頁岩 2608
2	7D	1	M・F	18.0	12.5	4.5	—	珪質頁岩 2610
3	7D	1	スクレイバー	40.5	42.5	15.0	—	珪質頁岩 2611
4	7D	1	石 核	23.0	32.0	8.0	—	珪質頁岩 2608

8号土壤



第57図 7号土壤出土石器、8号土壤平面図



8号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面状態	分類	備考
			上端	下端	型	上端					
M-15(a)	V層上面	4	円	円	小	90×90	94×94	35	85°	平坦	A カク乱に切られる

8号土壤土層註記表

堆積土	色	調	土質	特徴	しまり	測		備考
						表面	内部	
1	7.5YR 5/4	暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	1cm地山ブロック少量。		
2	10YR 5/4	暗褐色	粘土質シルト	やや強い	良	礫土粒多量。1cm炭化物多量。5mm大の地山ブロック少量。		
3	10YR 5/4	暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	炭火粒少量。1cmの地山ブロック少量。		
4	7.5YR 5/4	褐色	シルト質粘土	強い	やや良	1cm炭化物多量。1cm地山ブロック少量。地山ブロックは壁及び底面の砂礫土。		

8号土壤出土遺物数量表

遺物	土器					石器	備考
	復元部	口縁部	全体部	底部	壁部		
3	—	1	8	—	9	1	
4	—	1	2	—	3	—	堆積土1・2層は無遺物層

出土石器

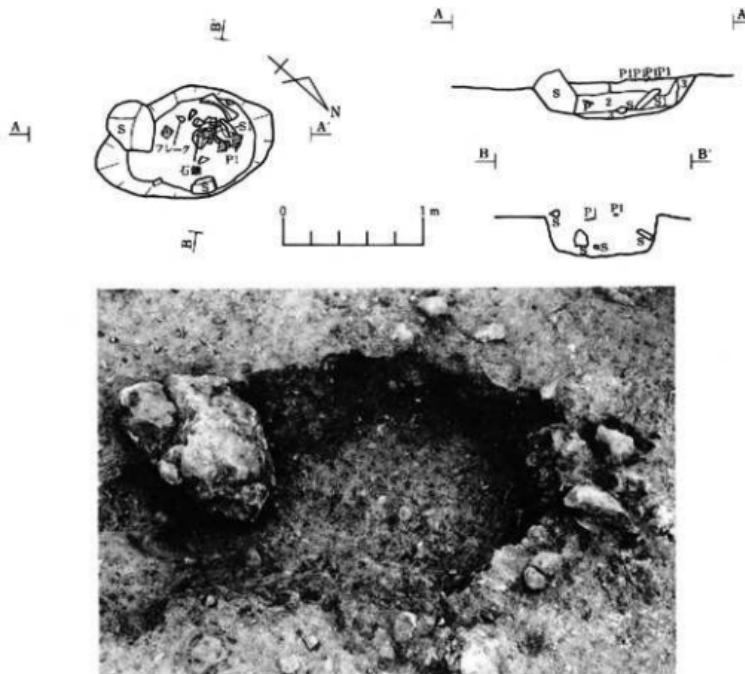


観察表

開	遺構名	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	8D	3	ポイント	32.0	24.0	8.0	尖頭部にわざかな調整	VI	珪質頁岩	2118

第58図 8号土壤出土石器

9号土壤



9号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ cm	壁角	底面 状態	上端 長 軸方位	分類
			上端	下端	型	上	堆					
P-11(a)	直層上面	3	椭円	楕円	中	130×80	92×68	30	115°	若干凹状	N-33°-W	C

9号土壤土層註記表

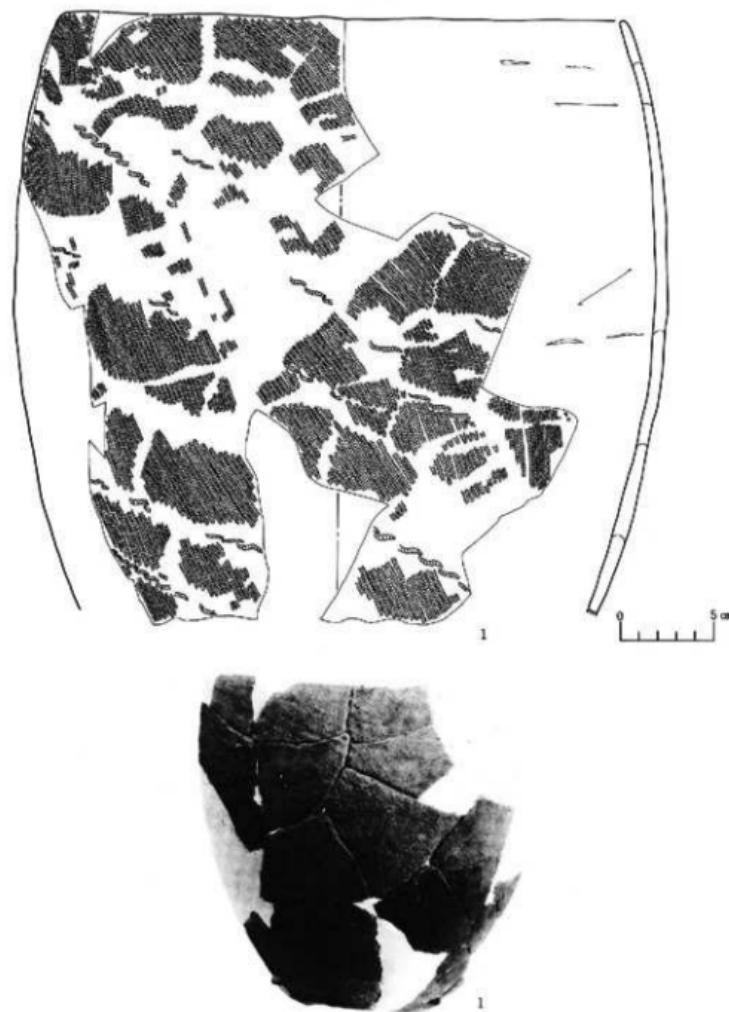
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 5/2	黒褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良 凝灰岩。炭化粒少量。
2	7.5YR 3/4	暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良 1cm炭化物。
3	5YR 3/4	暗赤褐色	粘土質シルト	やや弱い	良

9号土壤出土遺物数量表 () 内数値は復元土器数

堆積土	遺物	土影						石器				
		複種	口縁部	体部	脚部	頭	足	不明	石	S·F	剝片	石核
		1	2	14	1	1	2	1(1)	14	—	1	1
検出土	1	—	—	8	—	—	—	—	—	1	1	—
	2	—	—	1	18	—	—	—	—	1	—	8
	3	—	—	—	10	—	—	—	10	—	—	—

第59図 9号土壤平面図

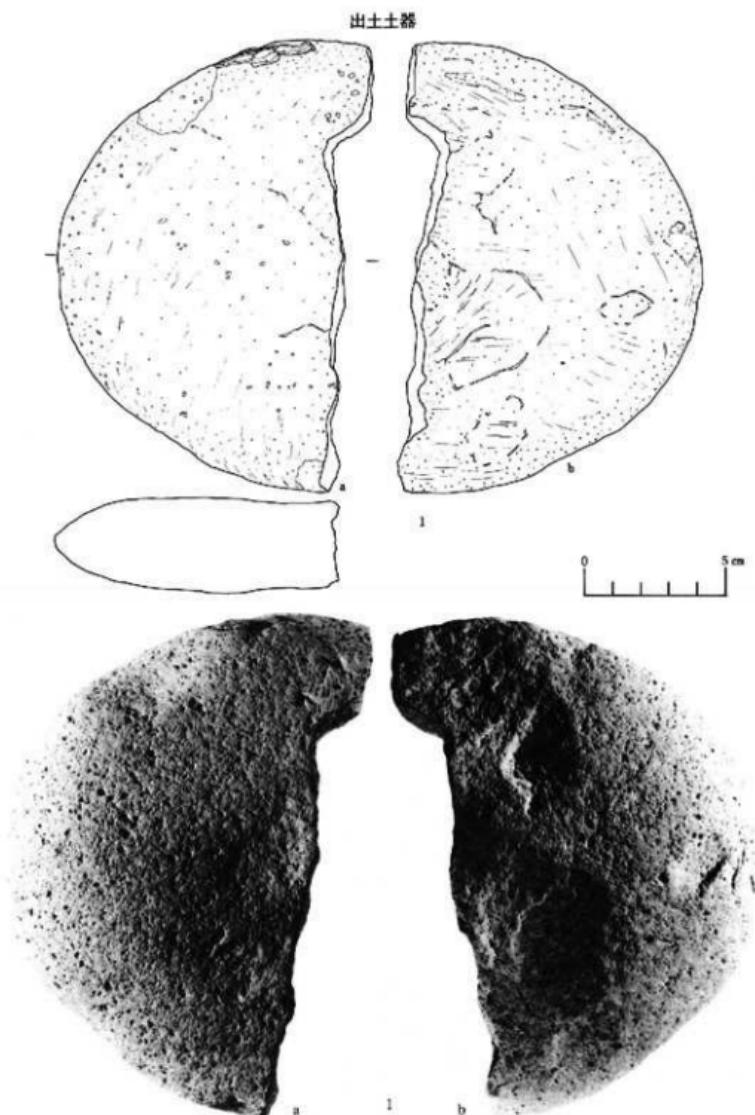
出土土器



観察表

図	通撰名	堆積上	口 径	器 高	最大径	底 径	施文と調査	新 土	分 類	備 考
1	9 D	検出面	29.7cm	—	(34.9cm)	—	平緑、剥色 R L結節施文 砂粒多	XIIIa2	体部下半に炭化物付着	

第60図 9号土壤出土土器

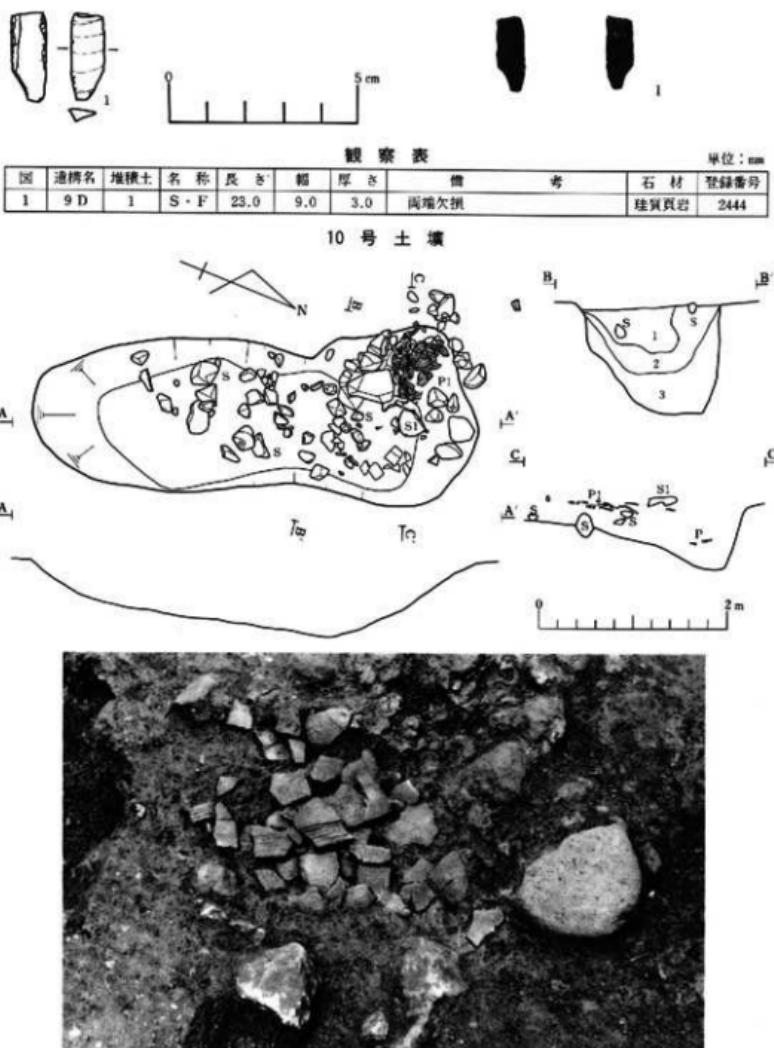


観察表

単位: mm. g

図	造構	埋積土	長さ	幅	厚さ	重量	縫の形態	使用痕・他	分類	石 材	登録番号
1	9 D	2	(149.8)	(242.2)	(47.5)	2,600	G	a,b両面に磨痕(a)	Ⅳ-1	安山岩	2441

第61図 9号土壙 出土石器(1)



10号土壤観察表

地区名	検出面	埋積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角 長軸 短軸	底面 状態	上端長 軸方向	分類	
			上 端	下 端	型	上 墓						
P-II(c)	背壁上面	3	不整長方形	不整長方形	大	237×97	172×66	25~40 160°	130°	凹凸状、斜位	N-24°-W	G

第62図 9号土壤出土石器(2)・10号土壤平面図

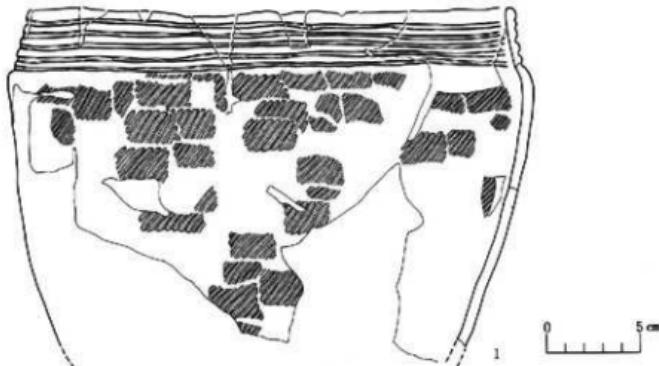
10号土壤土層註記表

堆積上	色 調	土 質	粘 性	しまり	備 考
1	7.5YR 4/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや 良	焼土ブロック。掌大の礫少量。
2	7.5YR 4/2 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや 不良	焼土ブロック多量。掌大の礫多量。
3	7.5YR 4/2 褐 色	粘土質シルト	やや弱い	やや 不良	焼土ブロック。2~3cm大の礫多量。

10号土壤出土遺物数量表

堆積土 遺物	土 器										石 器		
	復元土器	口 縁 部	体 部	底 部	器 形 別				多 少 片	剥 離 片	石 核	磨 石 片-1	
		V	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	不明						
検出面	1	2	10	—	1	1	—	1(1)	10	—	3	—	1
1	—	3	28	—	—	1	—	30	1	2	1	—	—
2	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—

出土土器

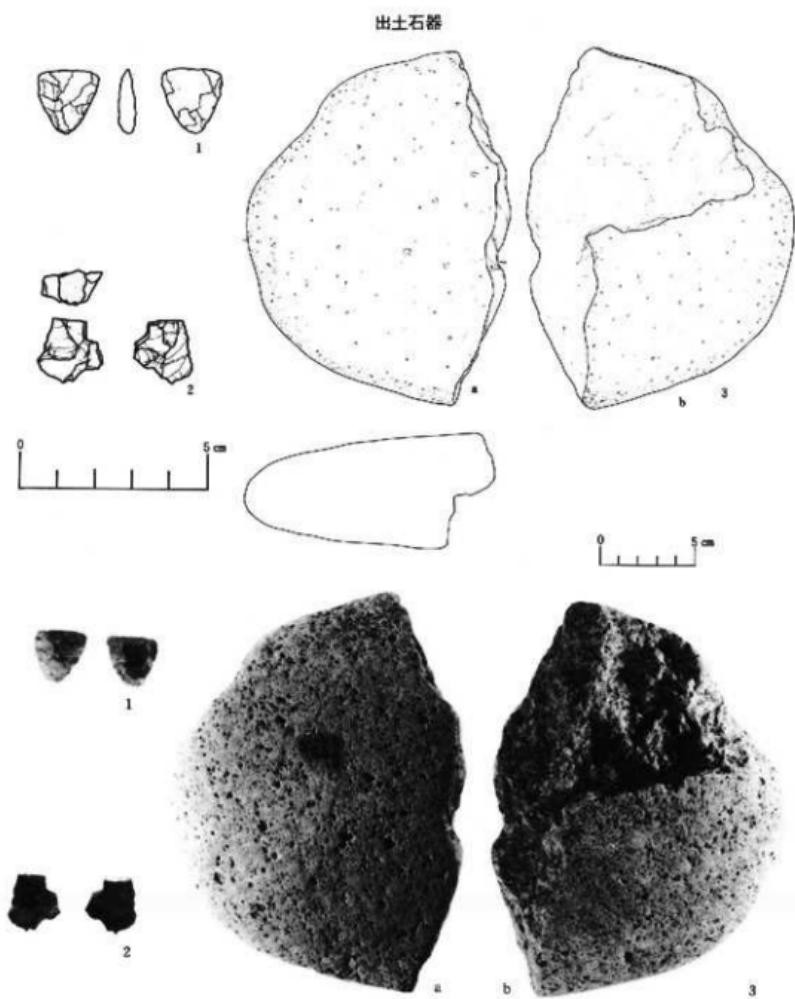


1

観察表

回	造構名	堆積上	口 径	器 高	最大径	底 径	施 文 と 調 繕	胎 土	分 類	備 考
1	10D	検出面	25.7cm	—	28.0cm	—	平縁、底部5条沈線、全体横俊L縞文	砂粒多	Ⅲb3	—

第63図 10号土壤 出土土器



観察表

単位:mm.g

回	遺構	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号	
1	10D	1	スクリイバー	16.5	16.0	4.0	風化が著しい	—	流紋岩	2458	
2	10D	1	石 槌	16.0	17.5	9.5	—	—	珪質頁岩	2458	
3	10D	堆積土	長さ	幅	厚さ	重量	種の形態	使 用 標・他	分類	石 材	登録番号
3	10D	検出面	(189)	(142)	(62)	1,500	G	側面を除く全面に無い崩き(a)がある。 被損面の縁は鋭い。	月-1	安山岩	2442

第64図 第10号土壤出土石器

(4) 時期不明

梨野A遺跡検出の遺構の大半はここに含まれ、埋設土基1基(4号)、ピット61個(6~66号)、土壙24基(11~34号)が検出された。

これら遺構はⅢ層、Ⅳb層排土後のV層、VI層上面で検出されたが、出土遺物の点で 1.出土遺物がない 2.時期決定遺物を出土しない(出土遺物は全て自然堆積状況を示し、多量の遺物を出土しても縄文時代各時期の遺物を含み、堆積土層間にても時期的差異を見出せないもの) 3.遺構内出土遺物に一括性があつても時期決定遺物とは成り得ない(剝片のみの集中)もので、重複関係、遺構の形態の点からも縄文時代のどの時期に所属するか不明なものである。

土壙は規模では、小型7基(11・12・21~25号)、中型13基(13~17・26~33号)、大型3基(18~20号)、半掘の為規模不明のもの1基(34号)、形態では、B類1基(12号)、C類12基(11・12・17・19・22~24・27・29~32号)、D類3基(16・21・26号)、E類4基(14・15・18・28号)、F類1基(20号)、分類外1基(33号)、攪乱、半掘による分類不適なもの2基(25・34号)に分けられる。

以上検出遺構中で代表的あるいは特徴的な4号埋設土器、6号ピット、11~20号土壙については図版を掲載したが、他の遺構に関しては全体図、遺構観察表、出土遺物数量表を参照されたい。

4号埋設土器(第65図)

Q-7グリッド北隅に位置し、Ⅳb層排土後V層上面で単独に検出された。体部下半をわずかに残す底部破片で直立して出土した。底部には焼成後の底部穿孔(外面より)がある。掘り方及びこれに伴う遺構は検出されなかつたが、出土状況が特異であり、底部穿孔という点よりこの土器は埋設されていた可能性も十分考えられ、一応埋設土器として取り扱った。

土器は大部分を欠失している為、所属時期は不明である。

6号ピット(第66~72図)

K-6グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層排土後V層上面で検出された。剝片を中心とする石器88点が、径15cmの範囲に集中し、かつ重なった状態で出土した。検出面では遺物を中心として炭化粒のひろがりもみられたが、遺構プランは認められず、約5cm下げたVI層上面で上端規模40×20cm、深さ15cmの不整楕円形の落ち込みが不明瞭ながら検出された。落ち込みは形状が明確に把握出来ず、これら石器を伴う落ち込みかどうかは断定出来ない。しかしながら、これら石器の上のものと下のものとはレベル差があるという点より、何らかの落ち込みに入れられていたことは確かで、石器のひろがりより、一応石器はピットに入っていたものと考える。

出土石器は剝片を上として、石匙1点、石錐1点、スクレイバー13点(ノッチ1点、「不定形石器」1点含む)等があり、この内接合資料5例(20点接合、9点接合、3点接合、2点接合、2

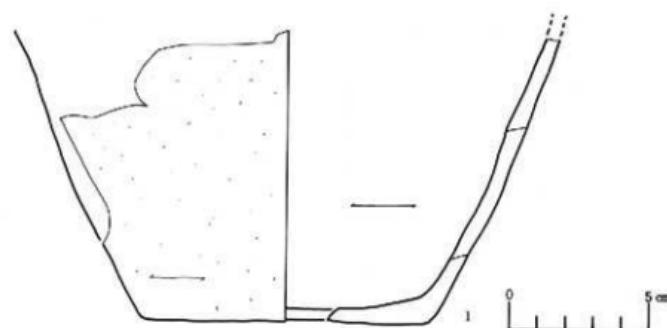
4号埋設土器



出土土器



1



観察表

回	通 様 名	解 析	部 位	器 形	法 量	縄 文 - 調 整		備 考
						底	面	
I	4号埋設土器	V	体部下部 ～底部	深鉢	10.5cm	外面：裏8 内面：横位置き	穿孔一箇2～2.5mmの不整形・焼成後の外 方3mm 内外相乗り・内面高さ2cmまで浅黄褐色	内面「ひび割れ」外深褐色 外底(高さ2～10cm)單色焼成物付着 二 天 然 少

第65図 4号埋設土器

点接合が認められた。尚、下部落ち込み内の土壌、石器集中部の土壌のフローテーション結果では、チップ類は含まれていなかった。

11号土壌(第73図)

M-7グリッド西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。13号土壌、14号土壌を切っている。上端長軸規模1m弱の浅い小型C類土壌である。壁面、底面には地山礫が若干みられる。堆積土は単層である。

堆積土中より土器片56点(第V・VI・IX群土器を含む)、石器6点を出土している。

12号土壌(第74~77図)

P-11グリッド南西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端長軸規模約90cmの上端平面形不整楕円形、下端平面形円形、深さ22cmの浅い小型B類の土壌である。南東側上端が少し崩落している。堆積土は2層から成り堆積土2層中には多量の炭化粒を含む。

堆積土2層下部から底面上を中心として、剝片、チップを多数出土し、これらの多くは同一母岩で、剝片6点は接合関係がみられた。また、これら資料はQ-12グリッドI層出土の剝片と同一母岩、接合関係を示す。

堆積土1層より小土器片22点(第V・VI群土器を含む)、堆積土1・2層より上記資料を含めた石器200点が出土している。

13号土壌(第78~79図)

M-6グリッド南東隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端東側を一部11号土壌に切られている。上端長軸規模160cmの浅い中型C類の土壌である。底面、壁面とも地山礫がみられ凹凸状を呈す。堆積土は単層である。

堆積土より土器片70点(第V・VI・IX群土器を含む)、石器6点が出土している。

14号土壌(第79図)

M-7グリッド西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端南側を一部11号土壌に切られている。上端長軸規模約110cmの中型E類の土壌である。底面は狭く、強く凹状を呈す。堆積土は3層から成り、堆積土3層中には多量の炭化粒が含まれる。

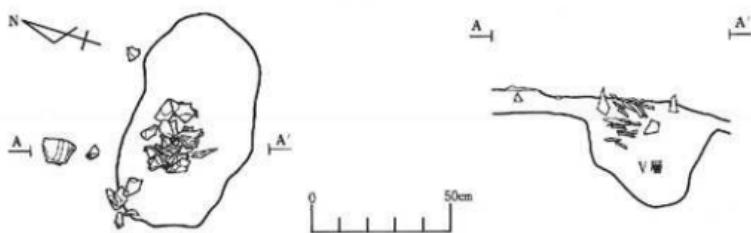
堆積土3層から、小土器片27点(時期の判るものは出土せず)、石器5点が出土した。

15号土壌(第80~81図)

M-7グリッド南西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端長軸規模約160cmの中型E類の土壌であるが、短軸断面はすり鉢状よりもやや開いたU字形を呈す。壁面には部分的に地山礫がみられる。堆積土は2層から成る。

検出面及び堆積土1層から、土器片81点(第V・VI・IX・XI群土器を含む)、石器10点を出土している。

6号ピット



遺物出土状況 ↑ 西より
↓ 南より



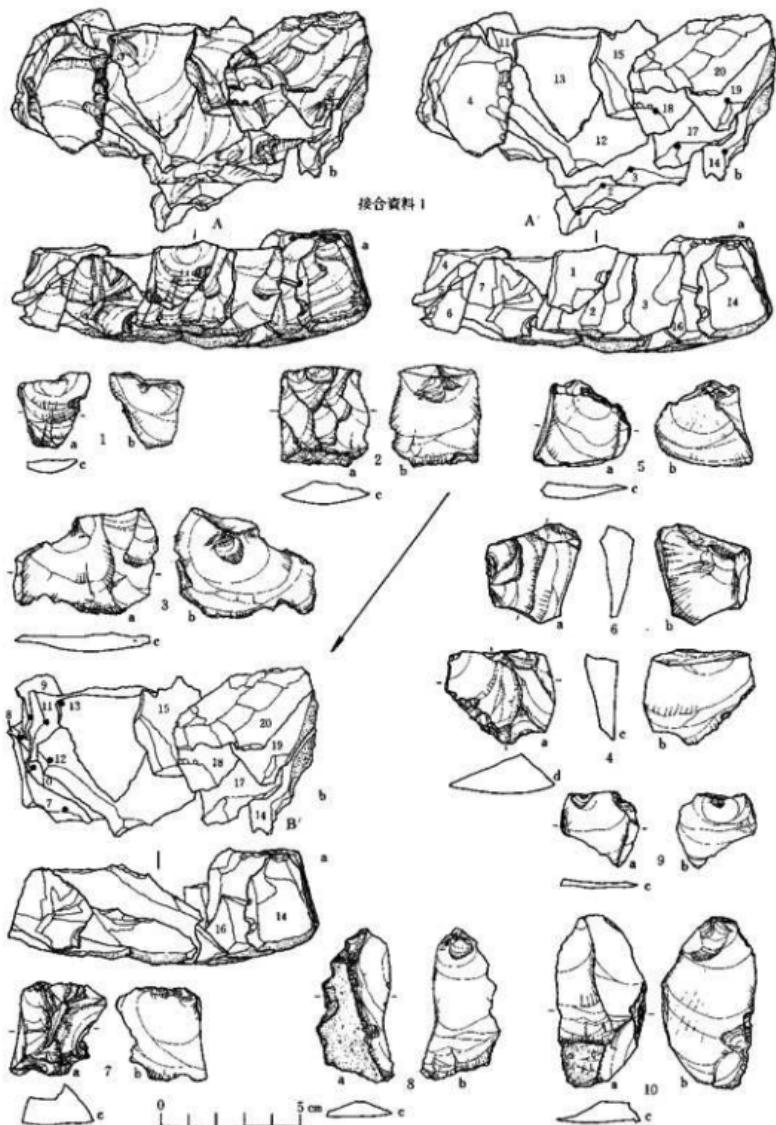
第66図 6号ピット平面図

出土石器



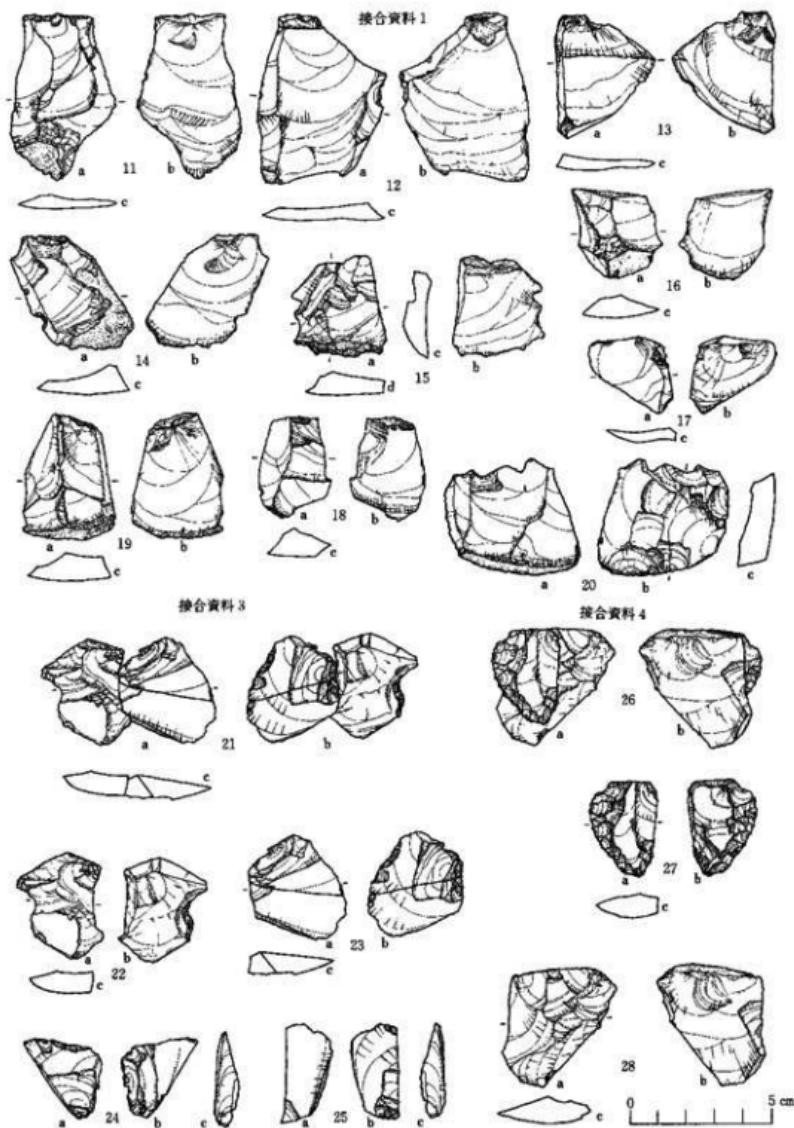
1.石匙 4.石鎌 6.ビュアリン(彫刻刀形石器)、2. 3. 5. 7~12.スクレイパー 13.石楔

第67図 6号ビット出土石器(1)



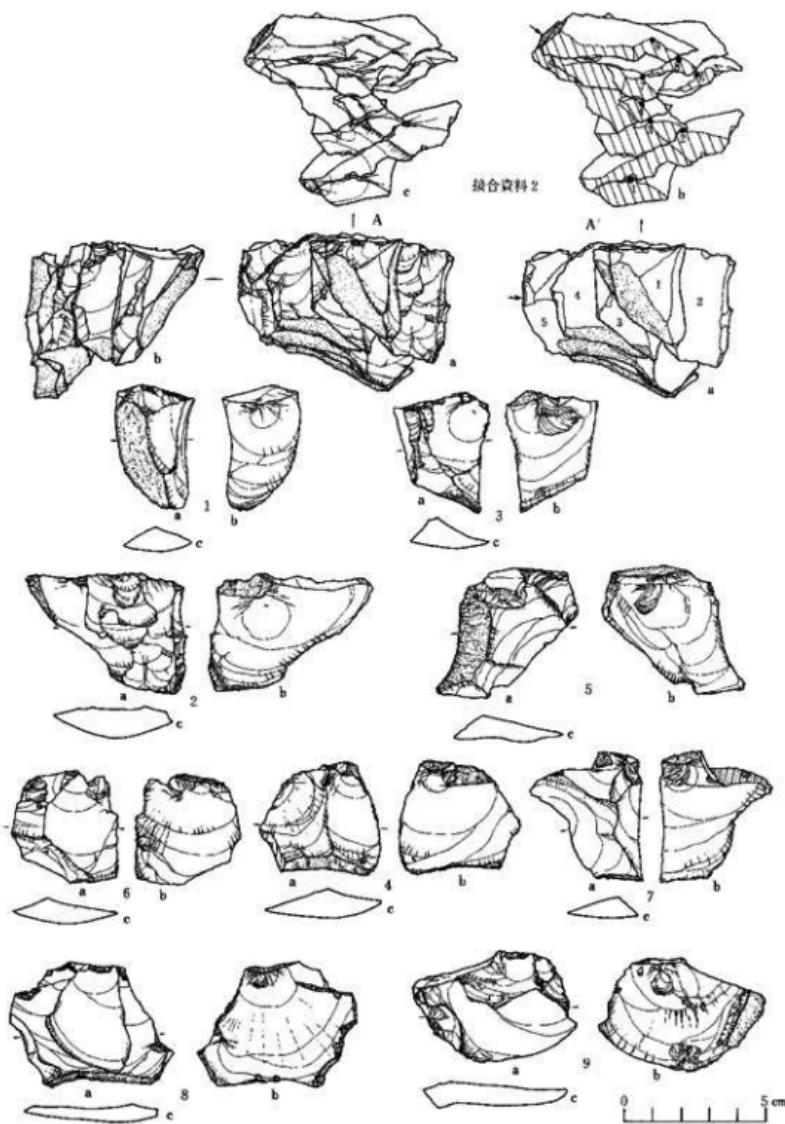
A' b 図、B' b 図の黒点は剝片のバルブの位置を示す。また A' 図、B' 図の番号は、石器の番号に一致する。

第68図 6号ピット出土石器(2)



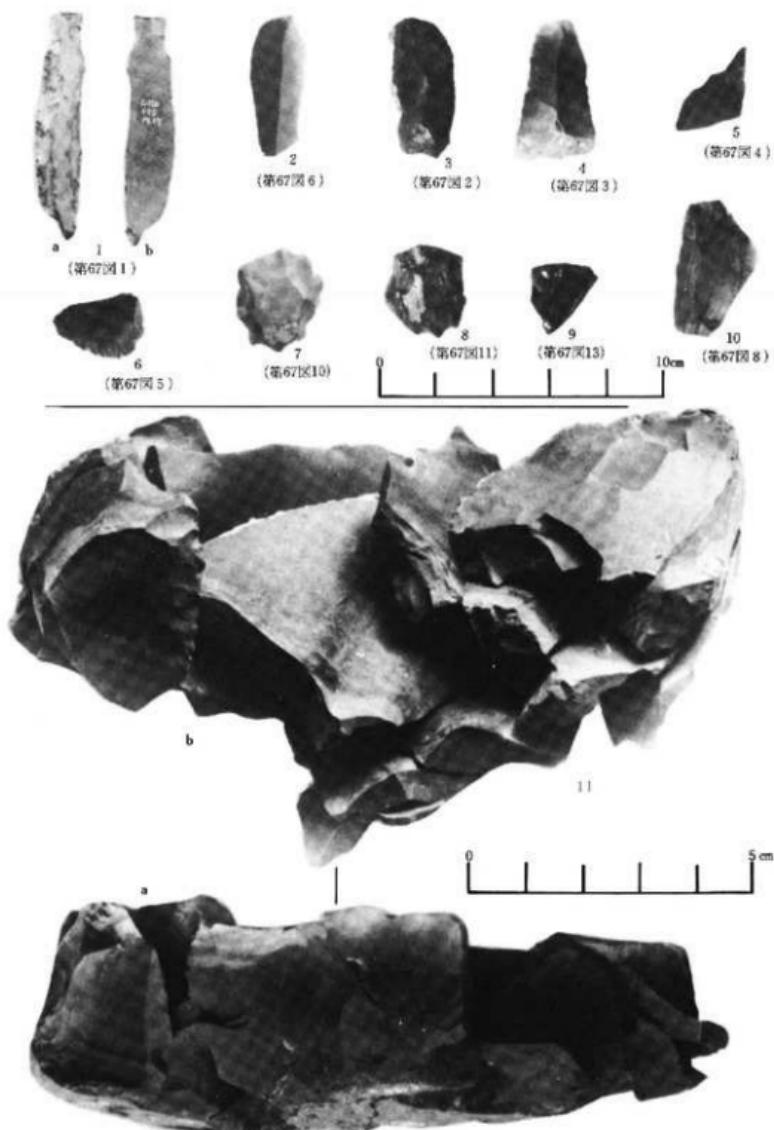
11~20. 接合資料 1 21~25. 接合資料 3 26~28. 接合資料 4

第69図 6号ビット出土石器(3)



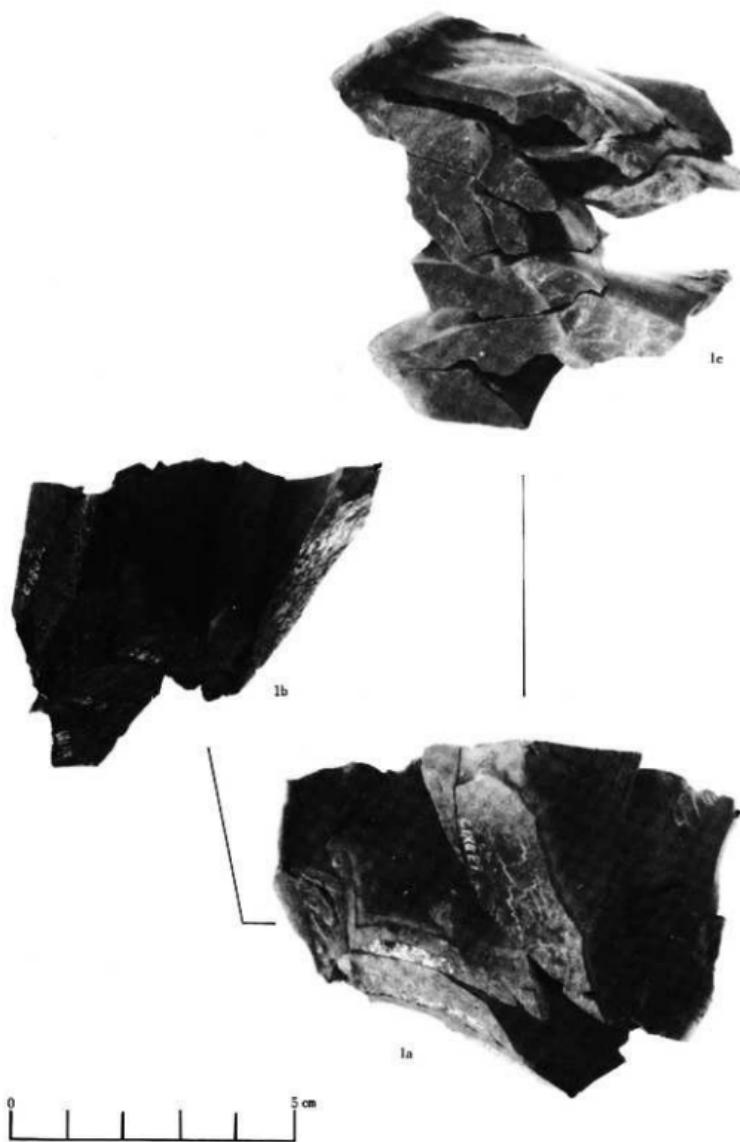
A' b 図の斜線部は打面、黒点は剥片のバルブを示す。また A 図の番号は石器の番号と一致し、矢印は剥片 5 に対する加撃方向を示している。

第70図 6号ピット出土石器(4)



1.石器 2.ビュアリン(漆削刃形石器) 5.石錐 3, 4, 6-8, 10.スクレイパー 9.石核 11.接合資料1

第71図 6号ピット出土石器(5)



第72図 6号ピット出土石器(6)

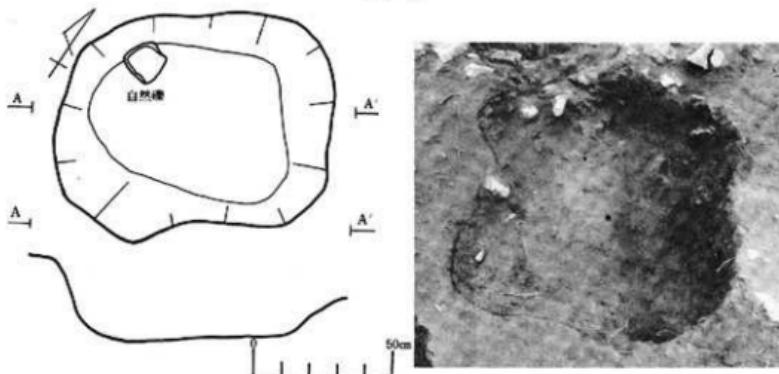
第2表 6号ビット石器計測表(1)

No	石 材	長さ×幅×厚さ cm	名 称	登録番号	標 號	国番号
1	真 岩	2.57×2.60×0.44	剥 片	C180 木	接合資料No1 (母岩別資料1)	68回-1
2	+	3.58×3.19×0.65	+	ナ	*	*
3	+	3.63×3.32×0.68	+	フ	*	*
4	+	3.48×3.87×1.25	スクレイバー(s)	P.39	*	*
5	+	2.65×3.06×0.56	剥 片	P.18	*	*
6	+	2.86×3.57×1.20	+	P.61	*	*
7	+	3.30×4.21×1.50	スクレイバー(デ)	P.3	*	67回-12 68回-7
8	+	4.82×4.10×0.50	剥 片	ソ	*	*
9	+	2.64×2.74×0.28	+	P.31	*	*
10	+	6.10×3.29×1.04	+	P.1	*	*
11	+	5.90×3.63×0.51	+	P.51	*	69回-11
12	+	6.03×4.41×0.59	+	P.13	*	*
13	+	4.31×3.57×0.58	+	レ	*	*
14	+	3.96×4.31×0.87	スクレイバー(ノ)	P.50	*	*
15	+	3.51×3.39×0.85	+	(e)	P.30	*
16	+	2.99×3.37×0.72	剥 片	P.16	*	*
17	+	2.93×3.43×0.47	+	タ	*	*
18	+	3.45×2.56×0.97	+	P.37	*	*
19	+	4.45×3.48×0.97	+	P.43	*	*
20	+	4.14×4.40×1.07	石核(剥片素材)	P.47	*	*
21	+	2.79×3.44×0.74	剥 片	フ	*	
22	+	3.89×3.86×1.13	+	P.28	*	
23	+	3.82×4.18×1.38	スクレイバー(デ)	P.48	*	
24	+	4.13×2.76×0.88	剥 片	P.9	接合資料No2 (母岩別資料2)	70回-1
25	+	4.16×5.57×1.13	+	P.35	*	*
26	+	4.33×3.32×1.06	+	P.24	*	*
27	+	4.10×4.29×1.10	微細剥離痕のある剥片	P.46	*	*
28	+	4.50×5.14×1.01	剥 片	P.38	*	*
29	+	4.10×3.78×0.86	+	P.14	*	*
30	+	4.52×4.49×0.79	+	P.36	*	*
31	+	4.57×5.68×0.69	二次加工のある剥片	P.59	*	*
32	+	3.99×5.86×0.99	剥 片	ニ	*	*
33	+		微細剥離痕のある剥片	P.63	接合資料No3 (母岩別資料3)	69回-22
34	+	4.05×5.74×0.85	二次加工のある剥片	P.55	*	*
35	+		二次加工のある剥片	P.8	*	*
36	+	4.09×3.64×0.90	剥 片	P.40	接合資料No4 (母岩別資料4)	*
37	+	3.38×2.29×0.84	スクレイバー(s)	ワ	*	69回-27 67回-5
38	+	3.45×3.93×0.90	剥 片	P.45	接合資料No5 (母岩別資料5)	
39	+	4.10×3.56×0.69	+	P.60	*	
40	+	3.43×4.62×0.51	+	P.19	*	
41	めのう	4.44×7.29×0.76	+	カ		
42	真 岩	3.55×2.26×0.76	+	ホ		
43	+	7.82×4.90×1.14	微細剥離痕のある剥片	ヌ		
44	+	6.59×4.40×2.14	剥 片	ハ		

第3表 6号ピット石器計測表(2)

No	石 材	長さ×幅×厚 cm	名 称	登録番号	備 考	図番号
45	真 岩		碎 片	C180 リ		
46	。	5.34×7.92×0.79	剝 片	△ イ		
47	。	4.28×3.72×0.72	微細剥離痕のある剝片	△ オ		
48	。	3.07×4.10×0.68	二次加工のある剝片	△ ロ		
49	めのう	2.39×1.93×0.66	剝 片	△ ト		
50	真 岩		碎 片	△ チ		
51	。		△	△ ハ		
52	。	3.46×5.20×0.94	スクレイバー(ε)	△ P.65		
53	。	5.23×3.56×1.36	二次加工のある剝片	△ P.44		
54	。	7.37×1.59×0.69	石 鋸	△ P.17 横長、二重バティナ	67図-1	
55	。	3.87(×2.26(×1.43)	剝 片	△ P.27		
56	めのう	3.73×3.41×1.66	石 鋸	△ P.58		
57	真 岩	4.05×3.52×0.80	剝 片	△ P.49		
58	めのう	3.98×4.53×0.65	△	△ P.5		
59	真 岩	3.71×3.58×1.18	微細剥離痕のある剝片	△ P.15		
60	。	3.56×3.50×1.71	二次加工のある剝片	△ P.22		
61	。	5.85×5.92×1.15	剝 片	△ P.62		
62	。	5.03×3.60×1.11	二次加工のある剝片	△ P.4		
63	。	4.67×3.49×0.68	微細剥離痕のある剝片	△ P.2		
64	。	5.01×4.65×0.94	二次加工のある剝片	△ P.57		
65	。	3.82×5.40×0.82	剝 片	△ P.33		
66	。	2.53×2.84×0.69	二次加工のある剝片	△ P.32		
67	鐵石英	2.62×2.08×0.63	剝 片	△ P.12		
68	真 岩	2.00(×2.95(×0.29(△	△ P.20 折れています		
69	。	2.15×2.39×0.31	△	△ P.52		
70	。		碎 片	△ P.53		
71	。	1.91(×2.44(×0.43(剝 片	△ P.34 折れています		
72	。	3.18×2.72×0.90	△	△ P.10		
73	。	2.34(×1.99(×0.73(△	△ P.26 折れています		
74	。	3.35×5.07×1.27	スクレイバー(ε)	△ P.11		
75	。	2.07(×2.54(×1.00(二次加工のある剝片	△ P.21		
76	。		剝 片(?)	△ P.56 風化著しく		
77	。	3.40(×2.35(×1.10(剝 片	△ P.25		
78	。	3.72×2.88×0.90	△	△ P.41		
79	。		碎 片	△ P.23		
80	。		△	△ P.7		
81	。	5.21×3.00×1.06	スクレイバー(s-e)	△ ル		67図-3
82	めのう	5.09×3.50×0.97	△ (s)	△ P.64		67図-8
83	真 岩	5.38×2.53×0.89	△ (s)	△ P.42		67図-2
84	。	4.85×3.55×0.70	ジュアリン(?)スクレイバー(?)	△ P.51		67図-6
85	。	3.22×2.34×0.82	石 鋸	△ P.6		67図-4
86	。	3.39×3.04×1.33	スクレイバー(?)	△ ロ		67図-11
87	。	3.80×3.50×1.14	△ (?)	△ ノ		67図-10
88	黒曜石	2.58×2.76×1.09	石 鋸	△ P.29		67図-13

11号土壤



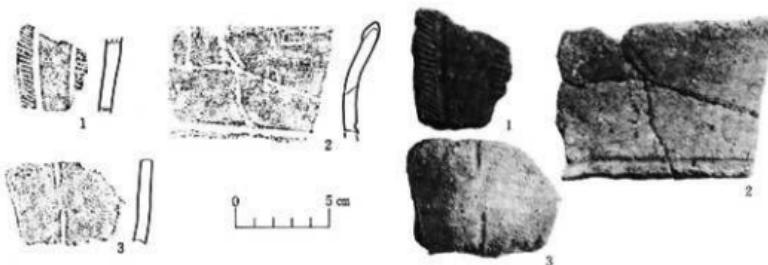
11号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	傾角	底面 状態	上端長 軸方位	分類	備考
			上層	下層	型	上層						
M-7(4)	昌前上面	1	不整梢円	不整梢円	小	97×78	74×53	25	120°	若干圓状	N-80°-E	C 13D, 14Dを切る

11号土壤出土遺物数量表

堆積土 検出面	遺物	土器					石器			
		種類		群別			スノウ クレ	剥 片	チップ	石 核
		復元 個数	口 縁部	体 部	底 部	縁				
		—	2	19	2	1	—	—	22	2
	1	—	2	30	1	—	5	1	27	—

出土土器

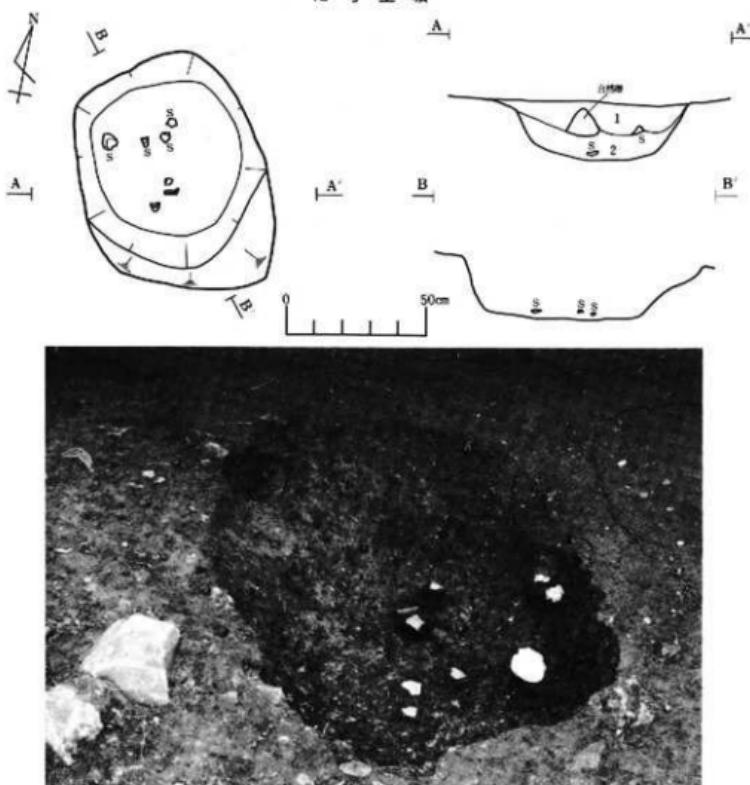


観察表

区	造構	堆積土	部 位	器 形	施 文 · 刻 繪	分類	備 考
1	11D	1	体 部	深鉢	縦位 L-R 楕文→縦位弧状沈縫沿楕文	区?	—
2	11D	1	口縁部	深鉢 I	横位研磨→横位沈縫文	Ⅱ	口唇部内面肥厚
3	11D	1	体 部	深鉢 I	縦位 R 振条文→縦位弧状沈縫文・弧状沈縫文	Ⅱb	外面の一部に黒色の付着物

第73図 11号土壤平面図・出土土器

12号土壤



12号土壤観察表

地区名	検出面	地被土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面	上端長	分類	備考	
			上端	下端	間	上端							
P-11(d)	V層上面	2	不整場円	円形	小	89×55	56×52	22	115°	105°	若干凹状	N-42°-W	B

12号土壤土層記表

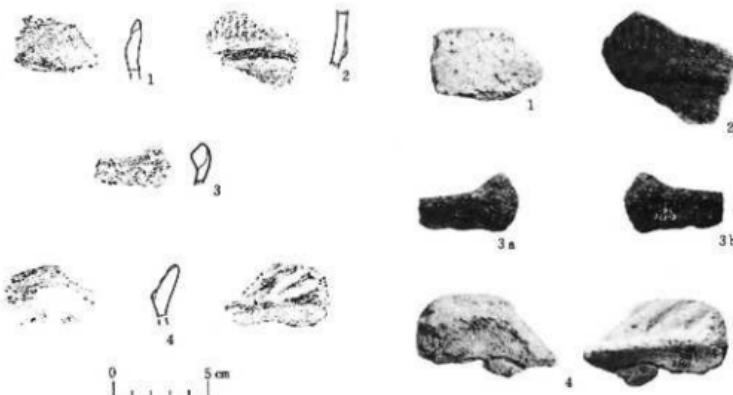
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	留 考		
					1	2	3
1	10YR 5/6	黒褐色	シルト	やや弱い	や	や	良
2	10YR 5/6	黒褐色	粘土質シルト	やや強い	や	や	不良

12号土壤出土遺物数量表

遺 物	土 質					石 質			
	復元土器	日暮部	体 部	底 部	部 別	石 壓	スイバク	刺 片	チフブ
堆積土	—	—	4	18	—	1	1	20	—
1	—	—	—	—	—	—	—	—	2
2	—	—	—	—	—	—	1	3	172

第74図 12号土壤 平面図

出土土器



観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	12D	1	口縁部	深鉢	研磨	一	内面凹線状に凹む
2	12D	1	全体	深鉢?	施文なし擦文・落鉢文→磨き	質	—
3	12D	1	口縁部	?	研磨	一	—
4	12D	1	口縁部	深鉢	外面:純粋、一部研磨残存 内面:連続斜位隆状線文	質	—

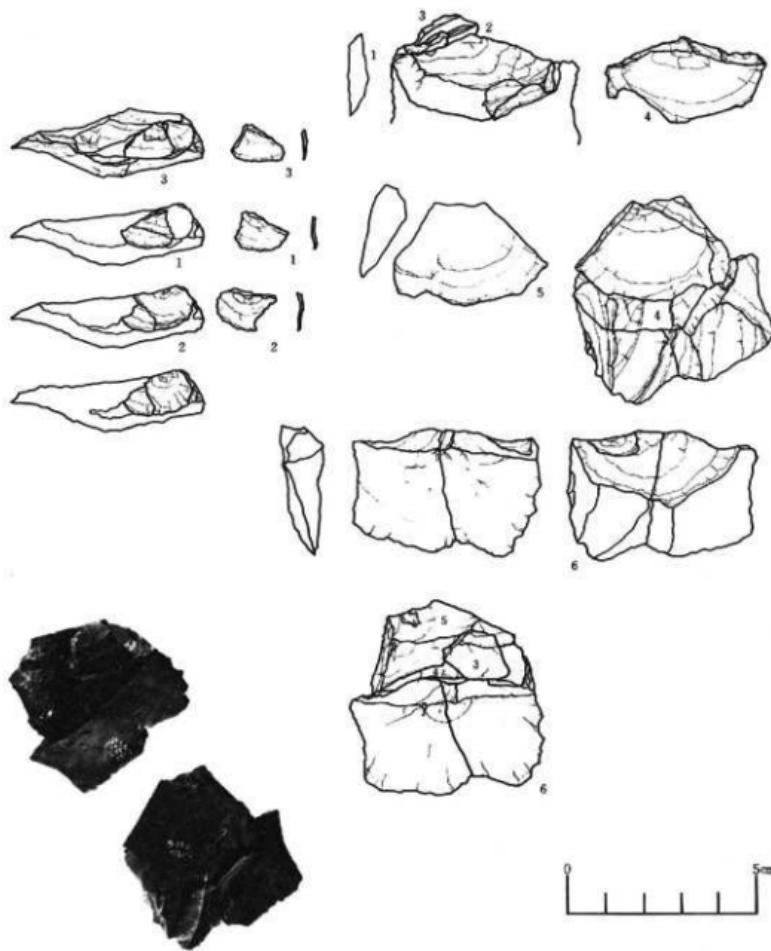
出土石器



観察表

図	遺構	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	石 材	登録番号	単位:cm
5	12D	2	石 錠	(6.0)	13.0	4.0	先端部と基部が破損	メノウ	3003	
6	12D	2	スクレイバー	45.0	14.2	3.0	背面に調整が集中	種質頁岩	2357	
7	12D	2	スクレイバー	(31.0)	(35.0)	(5.0)	基部が破損	桂質頁岩	2356	

第75図 12号土壤出土土器・石器(1)

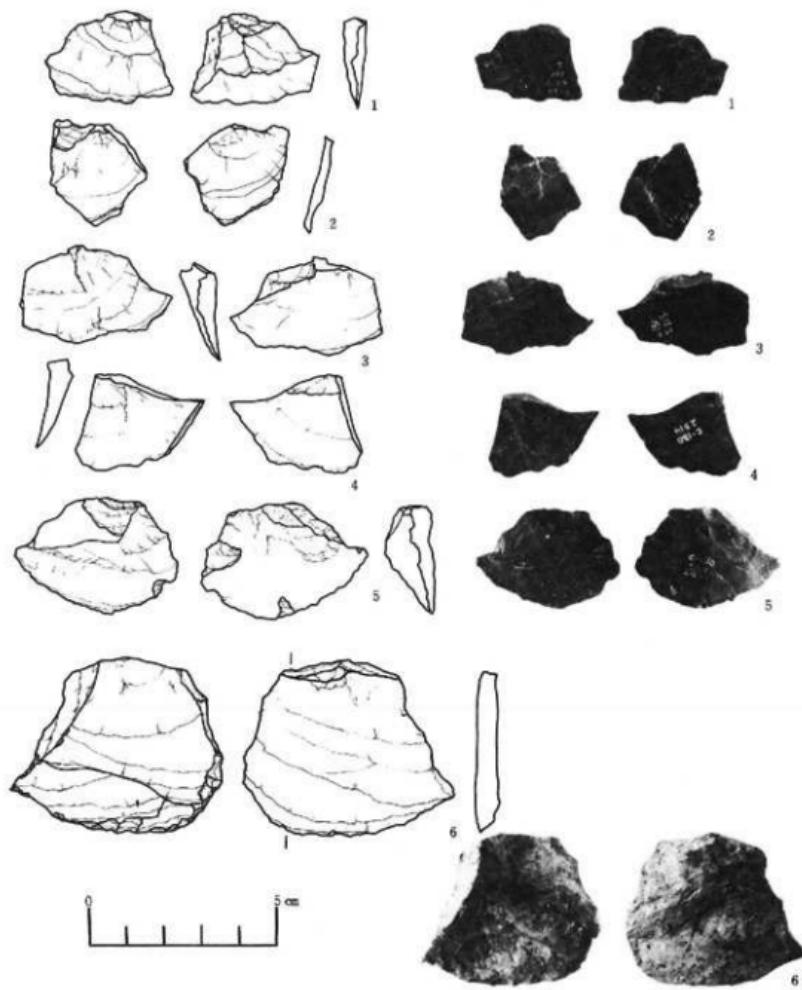


観察表

単位: cm

図	遺構名	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考		石 材	登録番号
							接合	同一母岩 (分類番号No-13)		
1	12D	2	剥 片	10.0	13.0	0.8			珪質頁岩	2357-11
2	12D	2	剥 片	10.5	15.0	0.9			珪質頁岩	2357-13
3	12D	2	剥 片	10.0	14.5	0.8			珪質頁岩	3003
4	12D	2	剥 片	23.0	43.0	4.5			珪質頁岩	2356
5	12D	2	剥 片	27.0	40.5	9.0			珪質頁岩	2356-1
6	Q-12(d)	1	剥 片	35.0	50.0	12.0			珪質頁岩	2357

第76図 12号土壤出土石器(2)



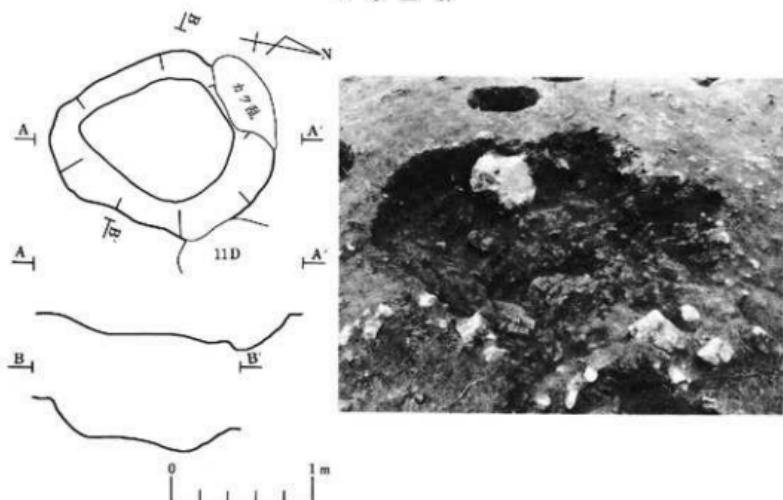
観察表

単位：mm

図	造構名	堆積土	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	石 材	登録番号
1	12D	2	剥 片	23.5	34.0	5.5		珪質頁岩	2357-8
2	12D	2	剥 片	27.0	26.5	2.5		珪質頁岩	2357-9
3	12D	2	剥 片	26.0	40.0	9.3		珪質頁岩	2315
4	12D	2	剥 片	26.0	34.5	6.0		珪質頁岩	2314
5	12D	1	石 棒	31.0	44.0	14.0		珪質頁岩	2351
6	12D	2	スクリーパー	47.0	56.0	6.0	同一母岩（分類番号No-50）	流紋岩質岩	2357

第77図 12号土壙出土石器(3)

13号土壤



13号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
			上端	下端	上端	下端						
M-5(4) 有茎上面	1	不整面凹 不整面凸 中	160×122	110×89	28	135°	凹凸状	N-2-W	C	11Dに切られる		

13号土壤出土遺物数量表

遺物 堆積土	土器							石器				
	復元上面	口縁部	体部	底部	群別				スイ ツバ レ	S F	剝 片	
					V	背	腹	底				
1	—	15	51	4	2	3	9	1	55	1	1	4

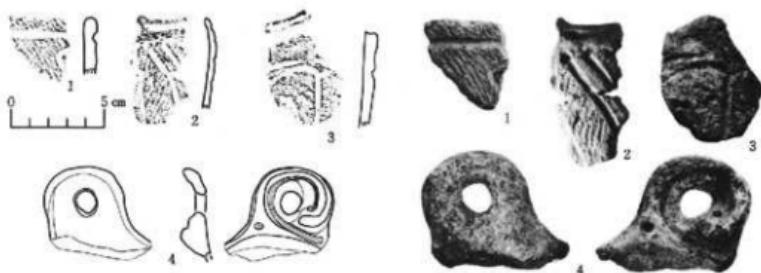
出土土器



観察表

区	遺構名	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	13D	1	口縁部	深鉢?	横位L R繩文・隆線文→沈線文・穿孔→磨き	V1e	—
2	13D	1	体部	深鉢	隆線文→横位L R繩文→磨き	VI	—

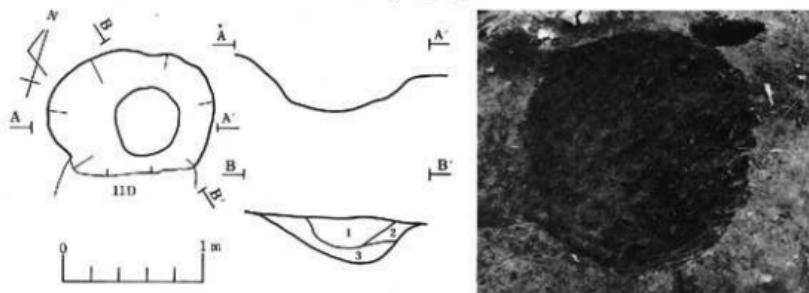
第78図 13号土壤平面図・出土土器(1)



観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・開窓	分類	備考
1	13D	1	口縁部	深鉢	腹内良然系文→沈縫文	Ⅳa? + 1b	—
2	13D	1	口縁部	深鉢Ⅳ	(突起)横位L,R縫文→盲孔+斜行磨擦縫文、貫通孔	Ⅳ 2	縫文の筋は細かい
3	13D	1	口縁部	深鉢	腹内L,R縫文→弧状沈縫開窓消縫文	Ⅳ 1a	—
4	13D	1	突起(口縁部)	深鉢	(突起)貫通孔・盲孔・盲孔間沈縫文	Ⅳ 1a ₁	—

14号土壌



14号土壤観察表

率()内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態	平面規模 cm	深さ cm	傾角 度	概面 状態	上・中・下 層方位	分類	備 考
			上端 下端	型	上 端	下 端				
M-7(d)	背斜上面	3	幅円	円	中	114×(86)	47×43	38	145°-130°	凹状 N-64°-E E 11Dに切られる

14号土壤土層記表

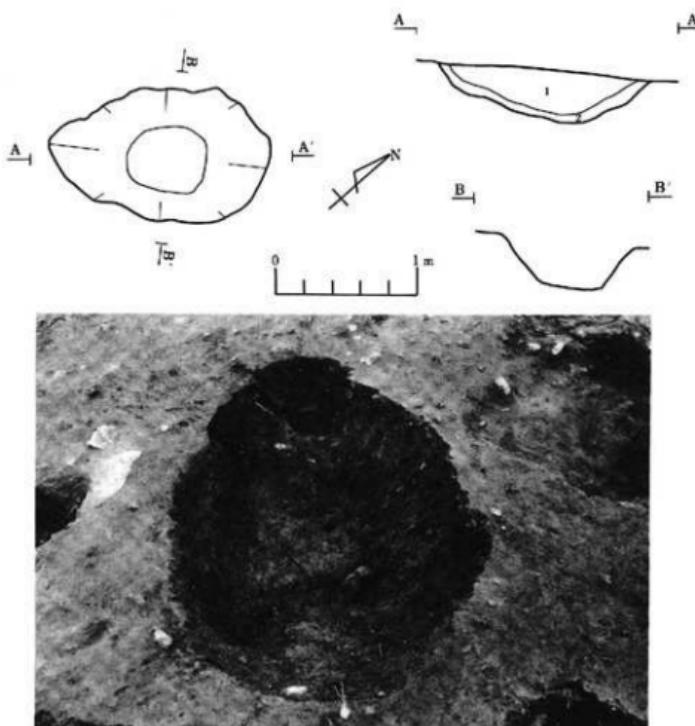
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	小疊。
2	10YR 4/4 暗褐色	シルト	弱い	やや良	炭化粒少量。
3	10YR 4/4 黒褐色	粘土質シルト	強い	やや良	炭化粒多量。黄色小粒子。焼土少量。

14号土壤出土遺物数量表

遺物	堆積土	土				石	骨	備考
		表土面	口縁部	体部	底部			
3	—	1	23	3	27	1	4	堆積土1、2層は無遺物層

第79図 13号土壤出土土器(2)、14号土壤平面図

15号土壤



15号土壤観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	豊角	底面	上端長 度	方位	分類
			上端	下端	型	上端						
M-7(d)	1層上面	2	楕円	円	中	156×96	56×48	42	140° 125°	圓状	N-43°-E	E

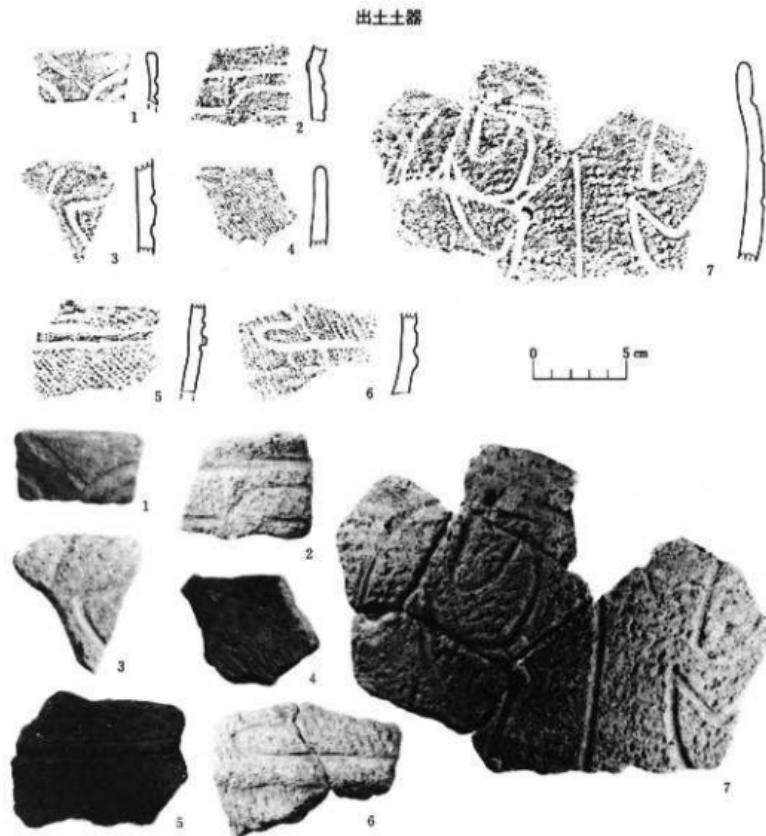
15号土壤土層記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考	
					1	2
1	10YR 5% 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	不 良	炭化粒多量。	
2	10YR 5% 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	や や 良	炭化粒。小塊。	

15号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土 器						石 器		備 考	
		復元 土器	口 縁部	体 部	底 部	群 別			スイ グバ レ1		
						V	日	電	刃		
	検出面	—	—	10	—	—	—	—	10	—	堆積土2層は無遺物層
	1	—	9	58	4	5	2	5	2	57	7 3

第80図 15号土壤平面図



観察表

図	造機	堆積土	部位	器 形	施 文・調整	分 類	備 考
1	15D	1	口縁部	深鉢	沈線文→廢	IV1e	—
2	15D	1	体 部	深鉢?	継位L撚糸文→弧状沈線間廢消繩文	VIIa	6と同一個体
3	15D	1	体 部	深鉢	繩文→弧状沈線間廢消繩文	VIIa	—
4	15D	1	口縁部	深鉢	継位R撚糸文→研磨(口唇部)	IIIe	—
5	15D	1	体 部	深鉢	継位L,R撚糸文→横状沈線文→凸状-弧状沈線消繩文(=沈線文)	VIIa (or VIIb)	—
6	15D	1	体 部	深鉢	下位堆疊?→継位L撈糸文→入組状沈線間廢消繩文	VIIa	2と同一個体
7	15D	1	口縁部-体部	深鉢	継位L,R撈糸文→弧状沈線文→研磨(口縁部)	VIIb	繩文の跡は不整形である。

第81図 15号土壤出土土器

16号土壙(第82図)

N-7グリッド北西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端南西側を一部20号土壙に切られている。上端長軸規模160cmの浅い中型D類の土壙である。堆積土は2層から成る。

堆積土1層から土器片30点(第Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・XI群土器を含む)を出土している。

17号土壙(第83図)

N-7グリッド北西側に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端北側を一部20号土壙に切られている。上端長軸規模115cm以上の浅い中型C類の土壙である。堆積土は2層から成り、堆積土1層中に炭化粒を多量に含む。

堆積土1層から土器片37点(第Ⅵ・Ⅷ・XI群土器を含む)、石器4点を出土している。

18号土壙(第84～85図)

J-8グリッド北西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。上端長軸規模約280cmの大型E類の土壙で、底面が極端に狭く壁面上部と下部に段を持つ。壁面、底面は地山礫が見られ、凹凸状である。堆積土は6層から成るが、5・6層中には多量の炭化物が含まれる。

堆積土1・2層中から、土器片53点(第V・Ⅸ・Ⅹ群土器を含む)、石器18点(底面からも出土)が出土した。堆積土2層出土土器片1点と、35号土壙(古墳時代)堆積土1層出土の土器片1点とが接合している(第85図1)。

19号土壙(第85～87図)

J-8グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。南側の一部を27号土壙、擾乱に切られている。上端長軸規模3mを越すが、深さ20cmの非常に浅い、大型C類の土壙である。底面には地山礫がみられかなり凹凸状を呈す。堆積土は4層から成る。

堆積土1層を中心に土器片122点(第V・VI・VII・VIII群土器を含む)、土製円盤2点、石器16点を出土している。

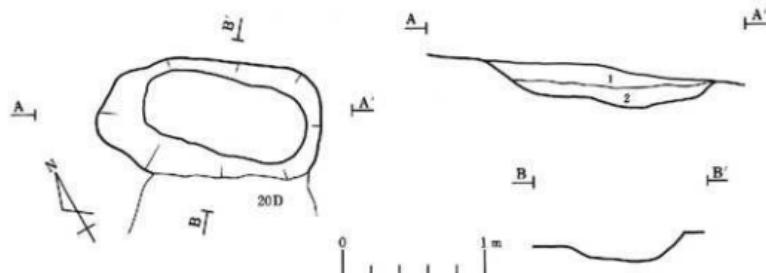
20号土壙(第88～91図)

N-7グリッド北西側に位置し、Ⅲ層排土後Ⅶ層上面で検出された。16号土壙、17号土壙を切っている。上端長軸規模2mの大型F類の土壙で、短軸断面形が顕著なすり鉢状を呈し、底面積は狭い。堆積土は4層から成る。

出土遺物は堆積土4層を除く各層より土器片271点(第V・VI・VII・VIII・IX・XI群土器を含む)、土製円盤6点、石器51点の多量な遺物を出土した。尚、堆積土3層出土の剝片1点、石核1点とが接合している。

佐藤 甲二

16号土壤



16号土壤観察表

※()内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面 状態	上 輪 軸 方位	分類	備考
			上端	下端	型	上 端						
M-7(a)	貝層上面	2	椭円	長帯円	中	160×82	118×52	24	135°	145°	N-56°-W	D 20Dに切られる

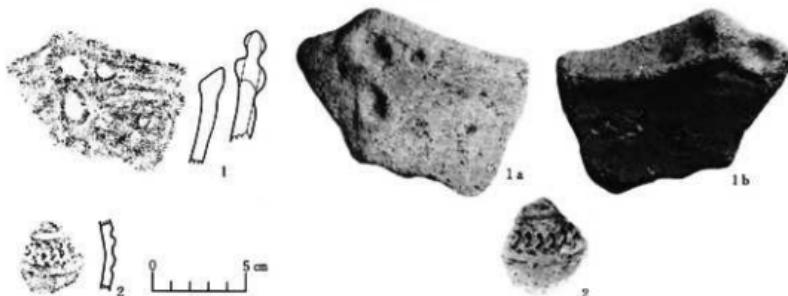
16号土壤土層記載表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考	
					1	2
1	10YR 5/4 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	炭化鉱。	
2	10YR 5/4 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	炭化鉱少量。	

16号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土器						備考
		復元土器	口縁部	体部	底部	群別	不明	
1	—	7	21	2	1	1	2	23 堆積土2層は無液物質

出土土器

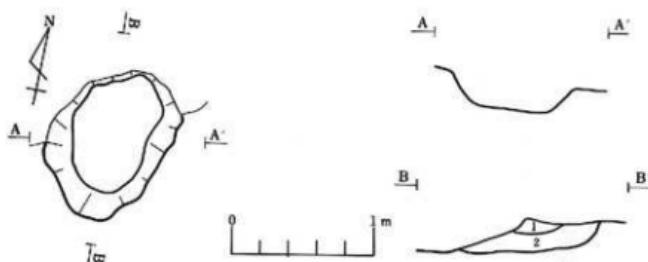


観察表

図	通構	堆積土	部位	器形	施文	開整	分類	備考
1	16D	1	突起	深鉢	(山形突起一外面：首孔(大小各1)・内面：弧状溝線+横位隆起+首孔(2)) ・輪形陰文 ・横位研磨	雷11b ₁	—	
2	16D	1	体部	—	複位RL調文+刺突文 〔沈痕文→麻き〕	IV	IV	—

第82図 16号土壤平面図・出土土器

17号土壤



17号土壤観察表

括弧()内は残存数

地区名	検出面	地盤上	平面形態	断面現象	cm	深さ	堅角	変曲	上端長	分類	備考
N-T(a)	Y側上面	2	不整円	不整円	中	112×82	88×55	24	140°	130°	平坦 N-E-E C 20Dに切られる

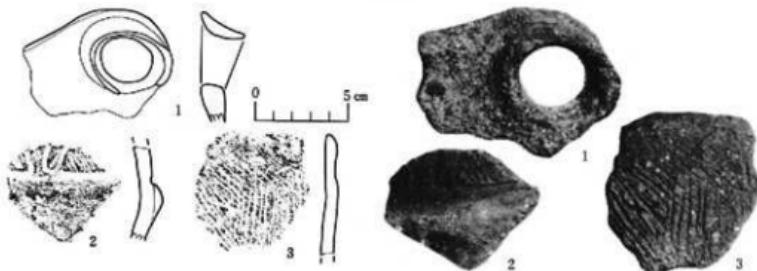
17号土壤土層記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 5/2 黒色	シルト	弱い	不良	炭化粒多量。
2	10YR 5/2 黑褐色	シルト	やや強い	やや良	——

17号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土器						石器	備考
		復元土器	口縁部	体部	底部	形	理		
堆積土上	1	—	6	25	6	2	1	2	32
	2	—	—	—	—	—	—	4	堆積土2層は無遺物層

出土土器

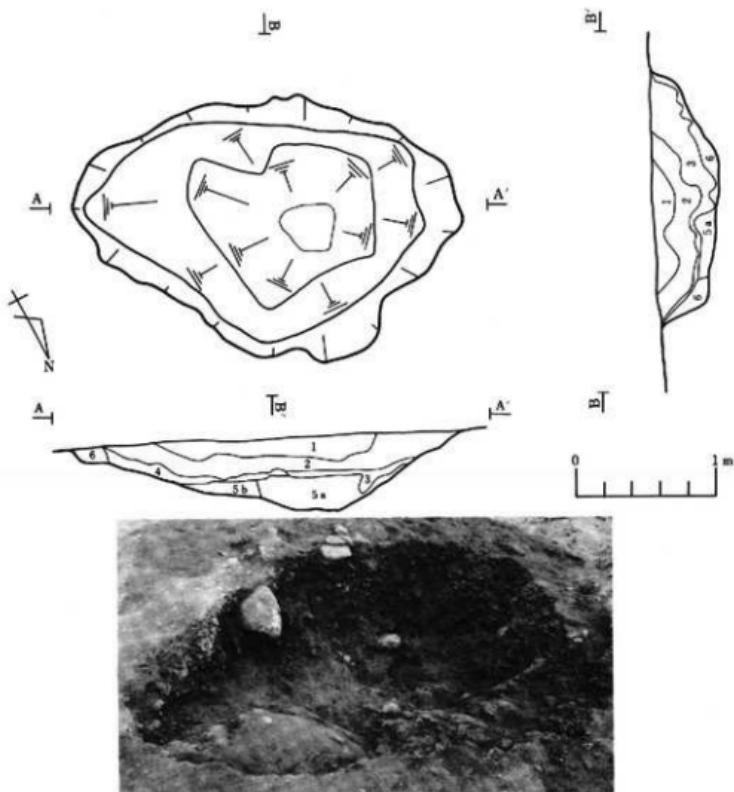


観察表

図	造構	堆積上	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	17D	1	口縁部	深鉢	—	—	磨滅がひどい
2	17D	1	体部	深鉢	継位R捺系文→弧状磨消端文	II1a	体下部で逆「く」の字に強く凹凸する
3	17D	1	口縁部	深鉢	継位・斜位R捺系文→研磨(口縁部)	II2c	—

第83図 17号土壤平面図・出土土器

18号土壤



18号土壤観察表

地区名	検出面	埋植土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面 状態	上層長 軸方位	分類
			上端	下端	型	上端					
J-8(c)	目視上面	6	不整端円	不整円	大	277×178	39×34	54	150° 115°	圓状	N-63°-W

18号土壤土層註記表

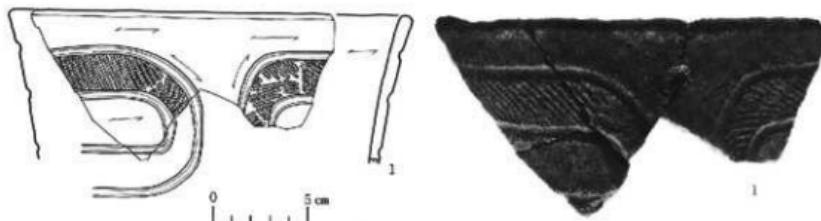
埋植土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 3/6 暗褐色	シルト	やや強い	やや良	黄褐色少量。青灰色粒微量。赤褐色粒微量。
2	10YR 3/6 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	青灰色帶多量。礫少量。
3	10YR 3/6 黒褐色	シルト質	やや強い	やや不良	炭化粒。燒土多量。
4	10YR 3/6 黑褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	黄褐色、青灰色の円暈。
5 a	10YR 3/6 黑褐色	粘土質シルト	やや弱い	やや不良	黄褐色粒少量。赤褐色粒少量。炭化物多量。
5 b	10YR 3/6 暗褐色	シルト	やや弱い	やや良	黄褐色暈。青灰色暈。赤色暈。
6	10YR 3/6 暗褐色	シルト	やや弱い	やや良	黄褐色粒多量。青灰色粒少量。

第84図 18号土壤平面図

18号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土器						石器			備考	
		復元土器	口縁部	全体部	底部	部類別			スレバ クレ	刮 片	礫石 器	
						V	環	刃				
1	—	5	19	—	—	1	2	1	20	1	4	—
2	—	3	26	—	—	2	—	—	27	2	6	1
底面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	地盤上3~6層は無遺物層

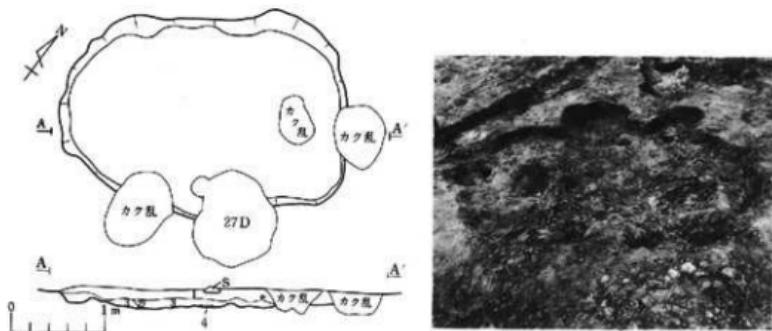
出土土器



観察表

図	造構	層位	部位	器形	口径	施文・調査		分類	備考
						横	斜		
1	18D	2	口縁部～ 全体上半	深鉢	(15.5cm)	横位・斜位R.L.施文→沈線文→磨き		V1e	35号土壤出土のものと接合

19号土壤



第85図 18号土壤出土土器19号土壤平面図

19号土壤観察表

地区名	被出面	堆積土	平面形態		平面規模 m		深さ cm	稜角 長軸 短軸	底面 状態	上坡長 度方位	分類	備考	
			上 端	下 端	大 上 端	下 端							
J-814	直壁上面	4	不整円	楕円	大	306×213	288×194	20	130°	140°	凹凸狀	K-52°-E	C 27Dに切られる

19号土壤土層註記表

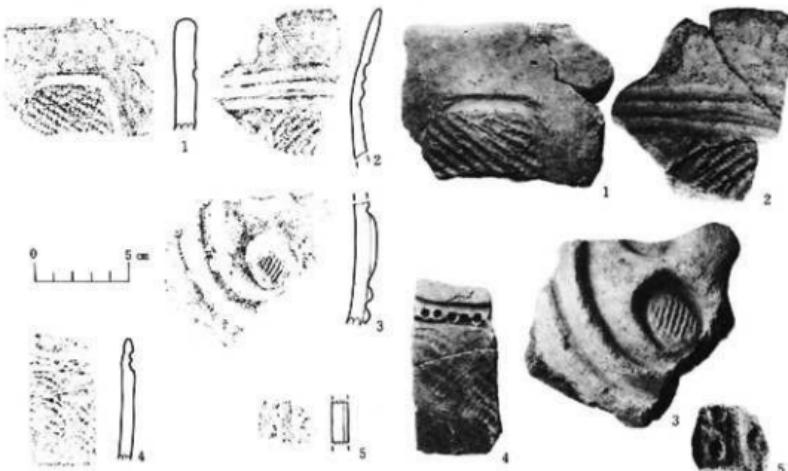
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 4/2	黒褐色	シルト	やや強い	やや良 壩化鉱。小礫。
2	10YR 4/2	暗褐色	シルト	弱い	やや不良 壩化鉱少量。
3	7.5YR 4/2	褐色	粘土質シルト	やや強い	良 磚ブロック多量。
4	10YR 4/2	暗褐色	粘土質シルト	やや強い	良 磚ブロック・塙化鉱少量。

19号土壤出土遺物数量表

堆積土	遺物	土						石						備考			
		埋 入 部	口 縁 部	体 部	底 部	骨			貝			ビ ニ エ ス ク バ レ ー ス ト	S +F	利 石 片	磚 石 片		
						V	貝	貝	貝	貝	貝						
1	—	7	73	7	6	1	—	8	72	2	2	1	3	4	1	1	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
3	—	2	31	—	1	—	2	1	36	—	—	—	—	1	1	—	—
底面	—	1	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	—

堆積土4層は加速度層

出土土器

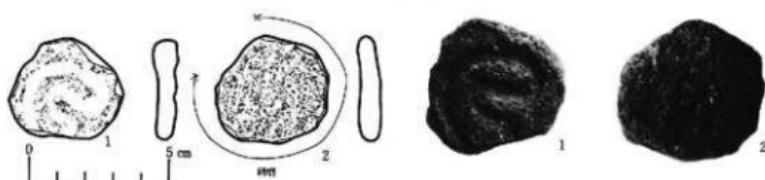


観察表

因	造構	堆積土	部位	器形	施文・調査	分類	備考
1	19D	1	口縁部	深鉢	綴位L.R織文→沈線文→磨き	V1c	—
2	19D	1	口縁部	深鉢	綴位R.L織文→沈線文→磨き	V1d	—
3	19D	1	体部	深鉢	綴位L.R織文→隆線文→沈線文→磨き	V1-3	—
4	19D	1	口縁部	深鉢M	綴位L.R織文→「横位並行沈線→連続小円形斜文→綴位」(口唇部)	図5a	突起or波状口縁 弓形区斜文の可能性 0.5~2mmの灰白色を 多量に含む
5	19D	3	体部	深鉢	綴位隆線文→連続鱗状斜刻文	図5b	

第86図 19号土壤出土土器

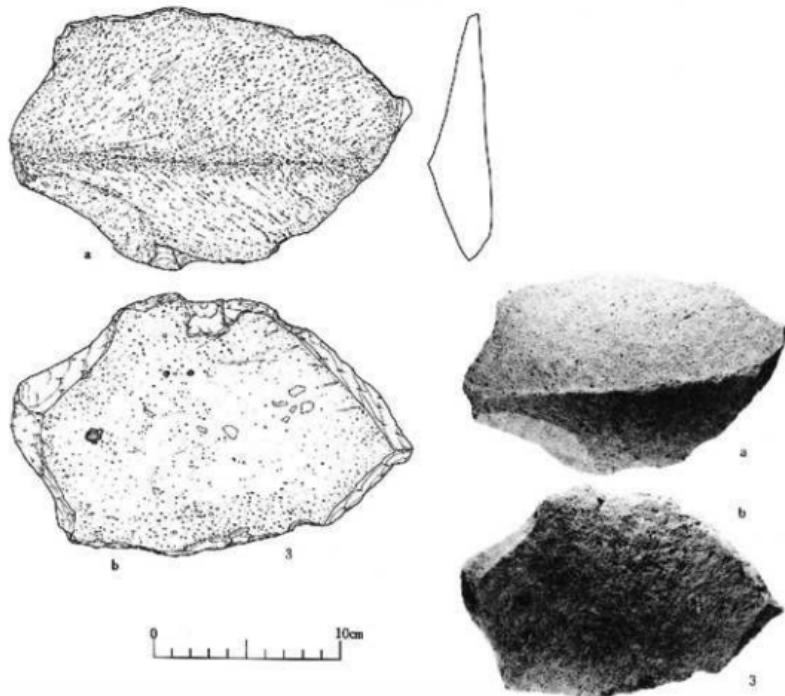
出土土製品



観察表

図	遺構名	地積土	大きさ mm	厚さ mm	重量 g	形態	打欠回数	研磨率	部位	時期	
1	19D	1	中型	40×35	5	10.2	椭円形	7	打ち欠きのみ	体部	後期初頭
2	19D	1	中型	40×38	5	13.2	不定形	8	50%以上	体部	—

出土石器

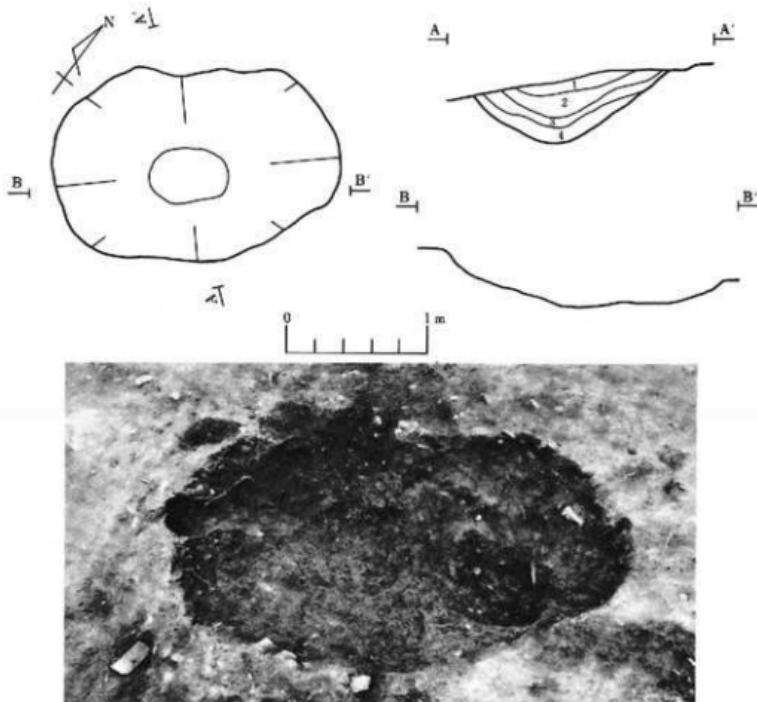


観察表

図	遺構	堆積土	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕、他	分類	石材	登録番号
3	19D	2	301.8	209.6	45.8	3,000	G	a,b両面に磨痕(a)	質-1	安山岩	667

第87図 19号土壤出土土製品・石器

20号土壤



20号土壤観察表

地区名	検出面	準線上	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	堅角		底面 状態	上端 長軸 方位	分類	備考	
			上端	下端	型	上端		長軸	短軸					
N-7(a)	引層上面	4	楕円	楕円	大	200×142	55×40	52	155°	140°	凹状	N-45°-E	F	16D, 17Dを切る

20号土壤土層記録表

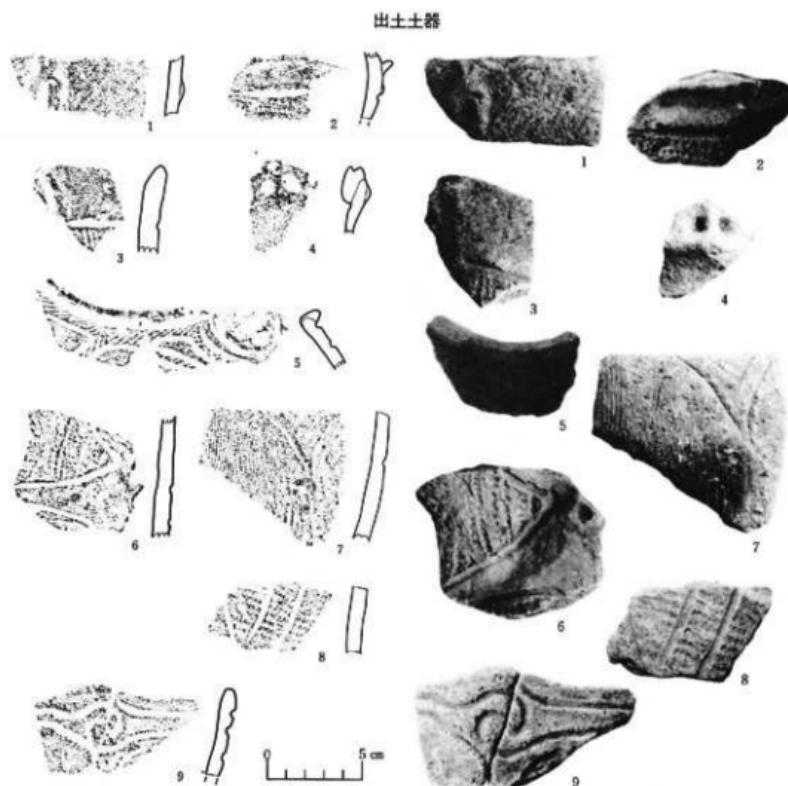
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 4/2 黒褐色	シルト	弱い	不良	炭化物少量。
2	10YR 4/2 黑色	粘土質シルト	やや強い	不良	炭化物多量。
3	10YR 4/2 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	不良	炭化物少量。
4	10YR 4/2 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	—

20号土壤出土遺物数量表

堆積土 層	土 質										石 砂										備考		
	腐光 度	口 徑 部	体 底	砂					石					砂									
				V	H	質	譜	R	M	石 質	石 量	ボ ン ド	ス ペ ク レ イ	S - F	刺 チ フ ラ ス	石 核	磨 石 W-1						
検出面	—	3	36	4	—	1	—	3	—	89	—	—	—	1	—	3	—	4	2	—	2	—	
1	—	13	66	10	—	3	1	5	—	2	80	6	1	—	—	—	—	8	1	—	—	—	
2	—	16	65	11	1	3	—	10	—	2	76	—	—	—	3	—	4	—	8	—	—	—	
3	—	9	34	4	—	—	—	2	1	44	—	—	—	—	—	—	13	—	—	1	—	—	

地質学的特徴

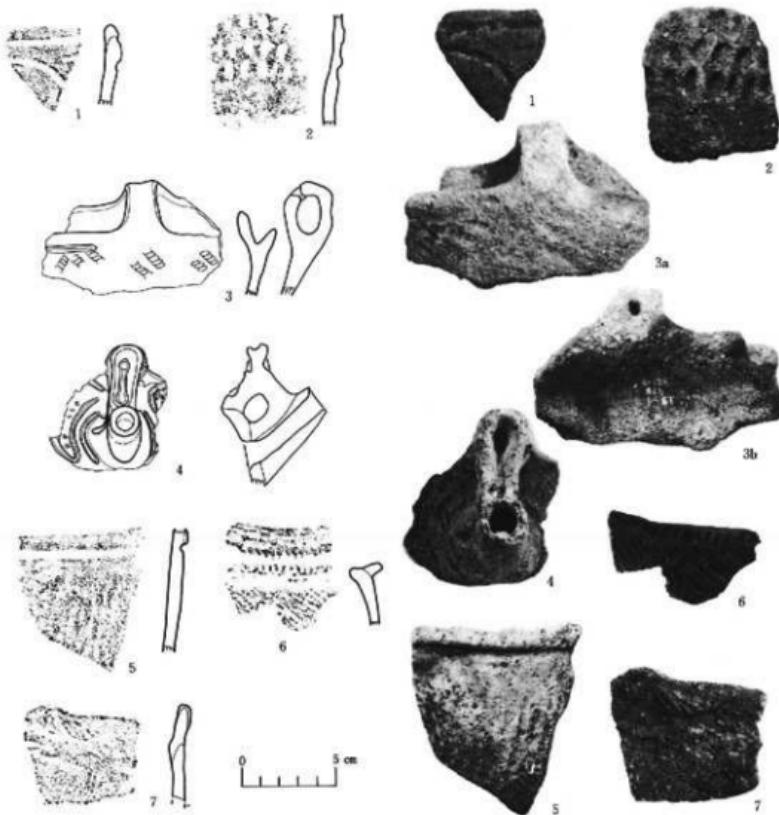
第88図 20号土壤平面図



観察表

回	遺構	堆積土	部 位	器 形	施 文 + 調 整	分 類	留 考
1	20D	検出層	体 部	深鉢	横位L.R繩文→縦位網状隆線文	Ⅳa	
2	20D	1	体 部	深 鉢	櫻文→沈線文→研削	Ⅴ	網状隆脊をもつ
3	20D	2	口 線 部	深鉢II A	横位L.R繩文→沈溝?・弧状沈線文(口縁部)	Ⅳa?+10?	
4	20D	検出面	突起(口縁部)	深 鉢	(山形突起一外側:盲孔a、内部:盲孔b、内面:盲孔c)	Ⅳb ₁₋₂	
5	20D	3	口 線 部	壺 II	横位L.R繩文→弧状網状隆文+盲孔・並行弧状沈線文	Ⅳla or Ⅸ	金雲母を少量含む
6	20D	2	体 部	深 鉢	横位L.R繩文→弧状沈線間隔消穂文・盲孔	Ⅳla	
7	20D	2	体 部	深 鉢	無糸文・弧状網状沈線文	Ⅳlb	砂粒(1~4mm)を多量に含む 腐泥している
8	20D	3	体 部	深 鉢	横位L.R繩文→弧状沈線文	Ⅳlb	
9	20D	1	口 線 部	深 鉢	横位網状沈線文→ナメ状研磨	Ⅳlb	

第89図 20号土壤出土土器(1)

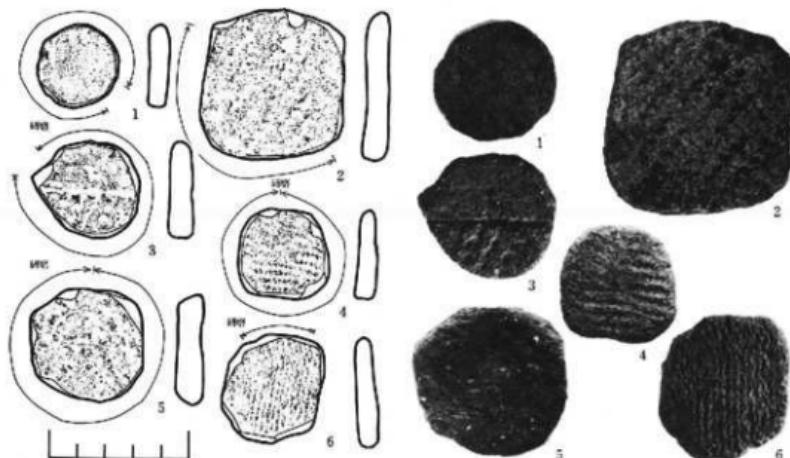


観察表

回	造構	地盤土	部 位	器形	地 文・調 整		分 類	備 考
1	20D	検出面	口 線 部	深鉢	沈器？→渦状沈縞文→研磨(口唇部の研磨はていない)		—	
2	20D	2	体 部	深鉢	横位連続腹縫位横形刻突文→研磨		Ⅱa	
3	20D	1	口 線 部	深鉢	(突起→複位把手→内面：貫通孔) 斜位L.R縄文・沈縞？		ⅡorⅢ	二段口縫
4	20D	1	注口部(体部)	壺	「突起→斜位把手→内面：貫通孔・肩孔間沈縞文」 斜位L.R縄文→→封緘基部開隙酒縞文		Ⅲa	
5	20D	2	体 部	深鉢	・縄文・陰沈縞？		Ⅲ	
6	20D	2	口 線 部	壺	・縦位L.R縄文・連続刻み状刻突文→研磨(頸部)		Ⅲb	
7	20D	2	口 線 部	深鉢	縦位L.R縄文→横位ナデ		Ⅲa	

第90図 20号土壤出土土器(2)

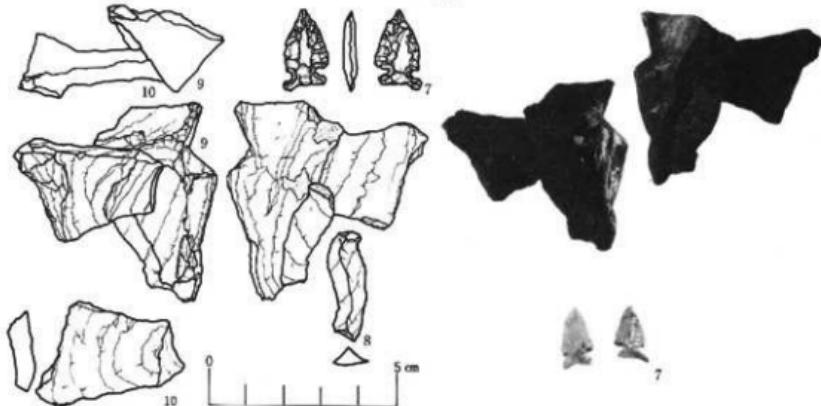
出土土製品



観察表

回	遺構名	堆積土	大きさmm	厚さmm	重量g	形態	打欠回数	研磨率	部位	時期
1	20D	1	小型 29×28	8	7.8	円形	—	100%	体部	—
2	20D	1	大型 54×48	7	28.4	方形	5	50%未満	体部	—
3	20D	1	中型 35×32	7	11.5	円形	—	100%	体部	—
4	20D	1	中型 31×31	6	8.4	方形	—	100%	体部	—
5	20D	1	中型 42×40	10	20.4	円形	7	100%	体部	—
6	20D	1	中型 47×37	6	12.5	方形	6	50%未満	体部	—

出土石器



観察表

回	遺構	堆積土	名称	長さ	幅	厚さ	備考	石材	登録番号
7	20D	1	石錐	21.5	12.0	3.6	アメリカ型石錐	種質頁岩	832
8	20D	3	剥片	29.0	10.0	5.0	接合。さらに(登録番号431)の剥片とも接合	チヤート	862
9	20D	3	石核	30.0	53.0	22.0	同一母岩、分類番号No10	チヤート	862

第91図 20号土壤出土土製品・石器

第4表 7~66号ピット構造観察表

(内) 内は残存数

造標名	地区名	検出番	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面形状	上端 端長短方位	備考	
			上端	下端	上端	下端						
7 P	I-8(a)	V層上面	円	円	31×27	18×18	10	135°	平 壁	—	—	
8 P	I-9(b)	*	円	格	門	35×33	22×18	18	105°	平 壁	—	
9 P	J-6(d)	*	円	横	門	65×56	41×22	40	100°	凹 凸 状	—	
10 P	J-6(e)	*	円	不整円	門	47×41	28×23	20	110°	若干四状	—	
11 P	J-7(c)	*	格	円	不整横円	68×52	29×22	22	120°	若干四状	N-59°-W	
12 P	J-7(c)	*	不整横円	不整	門	60×48	30×27	42	115°	平 壁	N-84°-W	
13 P	J-7(c)	*	不整	円	不整	門	50×44	28×24	16	125°	平 壁	13Pを切る
14 P	J-7(c)	*	円	不整	円	40×34	21×18	31	110°	若干四状	12Pに切られる	
15 P	J-8(c)	*	不整横円	不整横円	門	58×48	44×36	26	100°	若干四状	—	
16 P	J-8(c)	*	円	横	門	42×36	19×15	22	115°	平 壁	—	
17 P	J-8(c)	*	不整横円	横	円	66×55	49×38	34	100°	平 壁	N-79°-W	
18 P	J-9(c)	*	横	円	横	50×33	32×18	20	115°	若干四状	N-38°-W	
19 P	K-7(d)	*	不整	円	円	30×28	21×20	23	120°	平 壁	—	
20 P	K-7(d)	*	不整横円	不整	円	33×26	16×15	14	120°	平 壁	N-27°-W	
21 P	K-7(a)	*	円	円	34×22	13×12	21	105°	平 壁	—		
22 P	K-7(d)	*	不整	円	円	46×42	28×25	13	125°	平 壁	—	
23 P	K-7(d)	*	不整	円	円	50×46	38×36	25	120°	若干四状	—	
24 P	K-7(a)	*	横	円	不整横円	33×25	24×19	11	115°	段差あり	N-48°-W	
25 P	K-7(a)	*	横	円	格	62×40	42×27	15	130°	若干四状	N-75°-W	
26 P	K-7(d)	*	横	円	小不整横円	47×25	30×18	15	120°	若干四状	N-51°-W	
27 P	K-7(d)	*	円	横	円	28×26	17×12	12	110°	平 壁	—	
28 P	K-7(a)	*	不整	円	不整	円	34×30	22×19	14	110°	若干四状	—
29 P	K-7(a)	*	円	円	円	17×16	9×8	9	110°	平 壁	—	
30 P	K-7(a)	*	横	円	横	26×16	14×9	14	120°	平 壁	N-8°-W	
31 P	K-7(a)	*	不整横円	不整横円	門	56×50	46×32	36	105°	若干四状	N-51°-W	
32 P	K-7(a)	*	不整横円	不整横円	門	46×38	38×24	22	115°	平 壁	N-64°-W	
33 P	K-7(a)	*	不整	円	横	68×68	44×36	54	100°	平 壁	—	
34 P	K-8(b)	*	格	円	格	54×38	23×16	20	100°・115°	若干四状	N-31°-W	
35 P	K-8(b)	*	不整	円	横	41×35	18×14	25	100°	平 壁	16Pを切る	
36 P	K-8(b)	*	不整	円	不整	円	25×22	14×12	14	110°	平 壁	—
37 P	K-8(a)	*	横	円	円	49×37	12×12	28	125°	平 壁	N-82°-E	
38 P	K-8(b)	*	不整横円	不整横円	門	49×32	34×16	10	135°	凹 凸 状	N-34°-E	
39 P	K-8(a)	*	横	円	横	52×39	38×26	14	115°	若干四状	N-50°-W	
40 P	K-8(a)	*	不整	円	横	41×35	20×15	18	120°	若干四状	—	
41 P	K-8(b)	*	—	—	—	43×40	23×21	15	115°	平 壁	上面カク乱	
42 P	K-8(d)	*	不整横円	不整横円	門	66×32	16×10	25	115°	平 壁	N-54°-W	
43 P	K-8(d)	*	円	横	横	34×29	25×21	14	105°	若干四状	—	
44 P	K-8(c)	*	不整横円	不整	円	40×30	24×20	46	100°	平 壁	N-65°-W	
45 P	L-6(b)	*	不整	円	不整	円	22×20	14×12	11	110°	平 壁	—
46 P	L-7(c)	*	不整横円	不整横円	門	51×38	37×12	18	105°・130°	若干四状	N-38°-W	
47 P	L-7(a)	*	不整横円	不整横円	門	39×31	22×16	22	105°	平 壁	—	
48 P	L-7(d)	*	円	方	門	40×38	21×17	42	100°	若干四状	—	
49 P	L-7(c)	*	円	不整	円	21×20	10×9	8	115°	若干四状	—	
50 P	L-7(e)	*	横	円	不整横円	66×50	45×26	25	110°	平 壁	N-26°-E	
51 P	M-6(b)	*	横	円	長 横	64×42	23×10	17	125°・135°	平 壁	N-58°-E	
52 P	N-6(b)	*	不整横円	長	横	45×28	29×8	22	105°	平 壁	N-61°-W	
53 P	N-7(e)	*	円	円	円	22×20	11×9	34	100°	平 壁	—	
54 P	K-13(b)	V層上面	不整	円	円	53×45	26×21	29	110°	若干四状	中段あり	

遺構名	地区名	検出面	平面形態				平面規模 cm	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
			上端	下端	左端	右端						
55 P	K-13(b)	V層上面	楕円	楕円	33×26	21×14	26	100°	平坦	N-8°-W	—	
56 P	K-13(b)	V層上面	円	不整円	33×30	23×20	24	105°	若干凹状	—	—	
57 P	K-13(b)	*	円	不整円	32×28	18×17	15	105°	平坦	N-50°-W	—	
58 P	M-13(b)	V層上面	楕円	不整楕円	66×49	48×36	35	110°	若干凹状	—	—	
59 P	P-9(a)	V層上面	円	不整円	26×22	16×12	26	110°	若干凹状	—	—	
60 P	P-9(a)	*	不整円	円	32×27	16×16	16	120°	若干凹状	—	—	
61 P	P-9(a)	*	円	不整円	30×26	20×16	26	100°	若干凹状	—	—	
62 P	P-9(a)	*	円	不整円	37×35	24×21	54	105°	平坦	—	—	
63 P	P-9(a)	*	円	円	30×27	23×22	18	100°	平坦	—	—	
64 P	P-11(d)	V層上面	円	不整円	42×37	13×8	42	100°	平坦	—	中段あり	
65 P	P-12(a)	*	不整円	不整円	32×28	22×18	25	100°	平坦	—	—	
66 P	P-12(a)	*	不整円	不整円	12×38	32×26	28	95°	平坦	—	—	

第5表 21~34号土壌遺構観察表

() 内は残存数

遺構名	地区名	検出面	平面形態				平面規模 cm	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
			上端	下端	左端	右端							
21D	K-8(b)	V層上面	不整円	長楕円	小	80×58	54×26	20	120°-135°	平坦	N-42°-W	D	—
22D	K-8(a)	V層上面	不整円	不要椭円	小	80×61	66×44	17	130°	若干凹状	N-57°-W	C	—
23D	M-6(a)	V層上面	楕円	楕円	小	74×52	56×32	22	120°	平坦	N-56°-E	C	—
24D	K-13(e)	V層上面	不整円	不整円	小	90×73	55×40	25	130°	圓凸状	N-2°-W	C	—
25D	K-13(b)	V層上面	楕円	楕円	小	(72×50)	66×45	18	115°	平坦	—	—	上端カケ亂
26D	J-8(c)	V層上面	不整円	長楕円	中	135×88	94×44	23	110°-135°	平坦	N-56°-W	D	上端乱
27D	J-8(b)	V層上面	不整円	不整円	中	115×87	80×58	18	115°	平坦	N-39°-W	C	Dを切る
28D	K-7(c)	V層上面	不整円	円	中	110×90	50×44	40	140°-130°	平坦	N-27°-W	E	—
29D	K-8(b)	V層上面	不整円	不要椭円	中	116×88	86×63	22	135°	平坦	N-20°-E	C	—
30D	L-7(b)	V層上面	不整円	不整円	中	112×70	66×34	22	130°	圓凸状	N-71°-W	C	—
31D	N-7(a)	V層上面	不整円	不整円	中	143×104	116×80	11	140°-120°	若干凹状	N-77°-W	C	—
32D	O-6(b)	V層上面	不整円	*	中	120×94	103×76	14	150°	若干凹状	N-30°-W	C	—
33D	M-13(c)	V層上面	不整円	不整形	中	126×100	110×74	52	100°-115°	段差あり	N-55°-W	—	—
34D	D-9(a)	V層上面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	北側本断

第6表 7~66号ピット出土遺物数量表

遺構名	部位	口	体	底	剖面				石				器	
					縦	横	深	剖面	石					
									内	外	片	石		
8P		16							16		1	1	3	2
9P	1	17							16					
12P		9							9					
13P		3							1					
15P	1	8							8					
16P	1	8							8		1			
17P		2							2					
20P	1								1					
22P	1	6							5					
23P	1	4							4					
25P	1	7							6					
27P		2							2					
28P	1	5	1						5					
29P	1								1					
30P	1	2							2					
31P	1	20							16	1	1	8	2	4
32P	1	16							17					

遺物 通稱名	口 縁 部	体 部	底 元 土 器	土 器								石 器								
				群 別				不 明				片 石				刮 削				
				I	II	III	IV	V	VI	VII	XI	石 頭	石 核	ビエ ヌ・ス カ・ル ・エ	スイ カ・ル ・エ	S ・ F	M ・ F	チ フ ブ	石 斧	石 錐
33 P	2	23										23								
34 P	1											1								
38 P	1											1								
39 P	2											2								
40 P	2											2								
41 P	4											4								
42 P	3											2								
43 P	4											4								
44 P	1											1								
46 P	1											1								
47 P	3	1										4								
48 P	4											4								
50 P	2											2								
51 P	1	11										10			1	3				
52 P	1	6										5								
54 P	8											7								
55 P	1											7								
57 P	1											1								
58 P	4											4								
61 P	2											1	1							
62 P	6																			
63 P	1	20										20								
64 P	3											2								
66 P																	2	2	1	

* 7・10・11・14・18・19・21・24・26・35・36・37・45・49・53・56・59・60・65号ピットは無遺物

第7表 21~34号土壤出土遺物数量表

遺物 通稱名	口 縁 部	体 部	底 元 土 器	土 器								石 器									
				群 別				不 明				片 石				刮 削					
				I	II	III	IV	V	VI	VII	XI	石 頭	石 核	ビエ ヌ・ス カ・ル ・エ	スイ カ・ル ・エ	S ・ F	M ・ F	チ フ ブ	石 斧		
21 D	1	7										1	1	6					3		
22 D	1	10										11									
23 D	3											3									
24 D	6			1								5		1					2		
25 D	1											1									
26 D	1	1	1									3							4		
27 D	1	1	1									2									
28 D	1											1									
29 D	3											3									
30 D	6	69	3									2	2	73	1		2	1	3	3	2
31 D	3	51	6		1							8	52	1							
32 D	6	31	3									2	4	2	32					4	
33 D	2	25										25	1							2	
34 D	2	6										1	7	1	1				1	1	

4. 出土遺物

(1) 土 器

梨野A遺跡出土の縄文土器総数量は、完型及び復元土器資料31点、破片資料約40,000点(口縁部2,028点、体部約38,000点、底部979点)である。(体部破片は数量が特に多かった為、概算数量である。)

これら資料の内、1)時期決定出来る文様(地文も含む)が認められるもの 2)検出状況より時期決定が可能なもの 3)特殊な器形なもの を第Ⅰ群から第ⅩⅢまでの群別資料として取り扱った。従って、a)細片のもの b)地文のみ、無文のもの c)風化・磨滅の著しいもの d)底部破片 の多くは群別資料から除外された。

群別資料として、完型及び復元土器資料30点、破片資料1,865点(口縁部871点、体部977点、底部17点)が、その対象数量となった。ただし、1号住居跡が土器埋設部出土土器(復元土器資料)1点は、当住居跡が検出状況より、所属時期が中期後葉か末葉のいずれかに決められない為、群別資料より除外した。

佐藤甲二

第8表 出土土器数量表

出土 総 数 量	完形 復元 土器資料 31	破 片			資 料 合 計 約40,000	979
		口 縁 部 2,028	体 部 約38,000	底 部 979		
群 別 資 料 総 数 量	30	1,865	871	977	17	
	第Ⅰ群	—	38	4	34	
	第Ⅱ群	—	121	2	119	
	第Ⅲ群	—	5	3	3	
	第Ⅳ群	—	7	—	7	
	第Ⅴ群	4	445	140	304	1
	第Ⅵ群	8	165	87	78	
	第Ⅶ群	2	20	17	3	
	第Ⅷ群	4	681	365	316	
	第Ⅸ群	1	13	10	3	
	第Ⅹ群	—	1	1	—	
	第Ⅺ群	3	179	179	—	
	第Ⅻ群	1	6	—	—	6
	第Ⅼ群	7	184	63	111	10

※縁部は口縁部に、台部・脚部は底部に含めた。

第9表 群別土器出土地点別数量表

出土位置	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	
基 本 層 位	I	2	5	—	1	56	21	2	95	1	—	22	53	53
	II	—	3	—	—	9	1	—	24	—	—	3	—	291
	III	23	23	4	3	153	814	9(2)	329(1)	6	1	94(3)	6(1)	23
	IVa	—	19	—	—	6	3	1	25	1	—	3	—	42
	IVb上	2	2	—	—	28	4	—	18	—	—	6	—	19(1)
	IVb	3	27	—	—	11	1	4	2	1	—	—	—	4
	IVc	—	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	表 採	1	—	—	—	1	—	—	3	—	—	—	—	1
	遺 構 内	6	9	1	2	16(3)	50(4)	6	138(3)	5(1)	—	43	—	10(5)
	裏 側 木 板 内	1	4	—	1	20	12	—	41	—	—	11	—	1
	合 計	38	121	5	7	449(4)	173(6)	23(2)	665(4)	16(1)	1	182(3)	7(1)	191(7)
	比 率	2%	6%	1%	未満	1%	未満	9%	1%	36%	1%	1%	未満	10%

※各値は完形及び復元土器+破片数、()内数値は完形及び復元土器数、比率は少數点以下四捨五入

第Ⅰ群土器(第92~95図)

第Ⅰ群土器は早期中葉に位置づけられる貝殻・沈線文系土器である。全て破片資料で総出土数38点、内4点口縁部を出土したが底部は出土していない。胎土中に纖維を含むものはない。文様の違いにより以下の2類に分けられる。

第1類 沈線文のもの(第92図1)

この類に属するとして体部下半と思われるものが1点出土している。沈線によって鋸歯文らしい文様が数段重ねられている。内面はていねいな縦位の磨きによる調整が行なわれている。器厚0.7cm、焼成良好な内外面赤褐色を呈する精製土器である。

第2類 貝殻腹縁圧痕文のもの 文様構成によってa、bに分けられる。

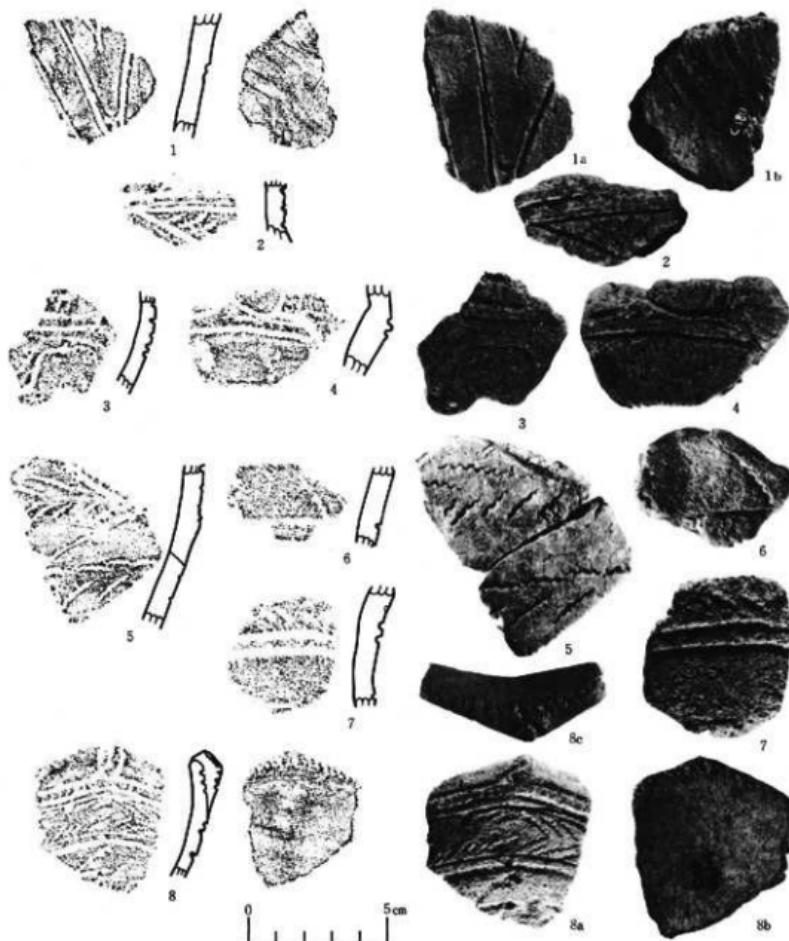
- a、貝殻腹縁圧痕文が沈線、「く」字状連続刺突文に沿って展開するもの(第92図2~4・6~8、93・94図、95図1~4)

第1群土器のほとんどがこの類に含まれ、36点出土している。沈線と沈線、沈線と「く」字状連続刺突文、「く」字状連続刺突文と「く」字状連続刺突文の組み合せによる平行線文を直線状、曲線状に引き、これに沿った内側、外側に貝殻腹縁を斜位に連続圧痕して幾何学的な文様が構成される。平行線は二本を基本としており、これを数段重ねたり(第92図8、第94図7~10)、もう一条の沈線、「く」字状連続刺突文を加えて三本にする場合(第92図3)もある。平行線の上や脇に円形の小刺突が付くものもある(第93図5・9)。口縁部資料は4点出土しており、ともに波状口縁で、口縁部外面に内側に貝殻腹縁圧痕文を充填させた平行線がめぐる。口縁内側には貝殻腹縁が連続圧痕される(第92図8、第93図1)。加えて口唇部に「く」字状連続刺突文による鋸歯文を入れられるもの(第94図3)がある。92図8は口縁部平行線文(「く」字状連続刺突文)の一部が波状口縁頂部で口唇部まで延びて瘤状部分を作り、その内側に小円形刺突が加えられている。93図1は外面口縁部にも貝殻腹縁が連続圧痕されている。ともにやや外反する器形で、外側が斜めに切られたような断面形を呈す。94図は口縁部から体部にかけての同一個体の遺物である。波状口縁下の体部上半には、口縁部平行線文と組み合わせた平行線文によって菱形文(3)、体部には平行線文内に「く」字状連続刺突文による波状文(6~10)がみられる。

体部には内凹する器形(第92図4)が1点ある。沈線には1~2mm幅のものがあるが、「く」字状連続刺突文はほぼ2mm幅である。器厚0.7cm前後、胎土には石英を含むものが多い。焼成は良好なもの、やや不良なもの両者がみられ、内外面色調は黄褐色を主とするが、褐色、赤褐色のものも観察される。口縁部内面にはていねいな横位の磨きによる調整が行なわれている。

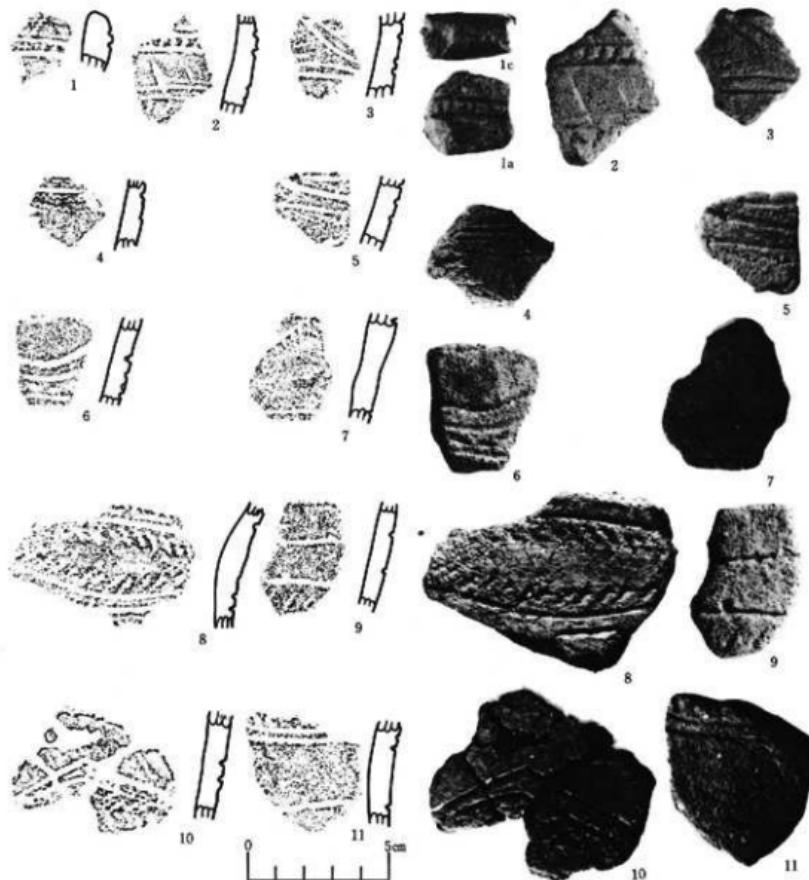
- b、貝殻腹縁圧痕文が単独に文様を構成するもの(第92図5)

体部資料が1点出土している。上部に太い沈線が「八」字状に引かれ、この下に、沈線に沿わずに棗杉状の貝殻腹縁圧痕を横位に連続施文した、帶状文が2段めぐっている。内面はていね



回	地区・遺跡	層次	部位	外 面 形 文	内面形文・調査 記号	器 形	土 焼 成	色 調	分類	備 考
1	K-7(b)	Ⅲ	体 部	沈縞文	縞手	7~8	縞筋、石英混量	良 好	赤褐色	I 1
2	35B	層1	体 部	平行縞文(沈縞+「半矢刺突文」)、沈縞→貝殻文	縞手	7	砂粒	中 中不良	褐色	I 2a
3	36P	堆	体 部	平行縞文(沈縞、沈縞+「字状刺突文」)→貝殻文	——	6	石英、砂粒多量	中 中不良	赤褐色	I 2a 内外面部混
4	M-13(c)	Ⅲ	体 部	平行縞文(沈縞)→貝殻文	縞手	9~10	石英、砂粒多量	中 中不良	黄褐色	I 2a
5	K-8(a)	Ⅲ	体 部	沈縞文→貝殻文	縞手	8	砂粒	良 好	棕黃褐色	I 2b
6	M-7(d)	Ⅲ	体 部	平行縞文(沈縞)→貝殻文	——	7	石英多量、砂粒	中 中不良	黄褐色	I 2a 内外面部混
7	M-13(b)	Ⅲ	体 部	平行縞文(沈縞+「字状刺突文」)→貝殻文	——	7~8	石英微量、砂粒	中 中不良	黄褐色	I 2a 内外面部混
8	K-13(b)	Ⅲ b	口縫部	平行縞文(沈縞+「字状刺突文」)→貝殻文	縞手、貝殻文	5~10	縞筋、石英、砂粒微量	良 好	黄褐色	I 2a

第92図 第I群土器(1)



國	地區・遺構	層位	部位	外面施文	内部施文・調整	基厚mm	胎	土	焼成	色調	分類	備考
1	K-8(a)	Ⅲ	工機部	平行縞文(沈綱)→貝殼文	磨光、貝殼文	8~10	粗製、砂粒混量	良	好	黃褐色	I 2a	同一個体
2	K-8(b)	Ⅲ	伴 嵌	平行縞文(沈綱)→貝殼文	磨光	7~8	細製、砂粒混量	良	好	黃褐色	I 2a	
3	K-8(b)	Ⅲ	伴 嵌	平行縞文(沈綱)→貝殼文	磨光	8	細製、砂粒混量	良	好	黃褐色	I 2a	
4	24D	堆	伴 嵌	平行縞文(沈綱)→貝殼文	磨光	6~7	石英混量、砂粒	良	好	赤褐色	I 2a	
5	J-8(b)	I	伴 嵌	平行縞文(沈綱)→沈綱→斜突	磨光	8	細製、石英混量	良	好	黃褐色	I 2a	—
6	31P	堆	伴 嵌	平行縞文(沈綱+U字状刻突文)→沈綱→斜突	—	7	石英多量	中	不良	赤褐色	I 2a?	内外面施文
7	K-7(d)	Ⅱb	伴 嵌	浅縞文	—	7~8	石英混量、砂粒	中	不良	褐 色	I 2a	内面部成
8	L-7(c)	Ⅲ	伴 嵌	平行縞文(沈綱+U字状刻突文)→貝殼文	—	7~8	石英、砂粒	中	不良	褐 色	I 2a	内面部成
9	表張	—	伴 嵌	平行縞文(沈綱)→斜突、貝殼文	—	6	石英、砂粒多量	中	不良	黄褐色	I 2a	内外面施文
10	35D	堆1	伴 嵌	平行縞文(沈綱+U字状刻突文)→貝殼文	磨光	7	石英、砂粒	中	不良	褐 色	I 2a	—
11	1五	堆	伴 嵌	平行縞文(沈綱+U字状刻突文)→貝殼文	—	7	石英、砂粒	中	不良	褐 色	I 2a	内外面施文

第93図 第I群器(2)

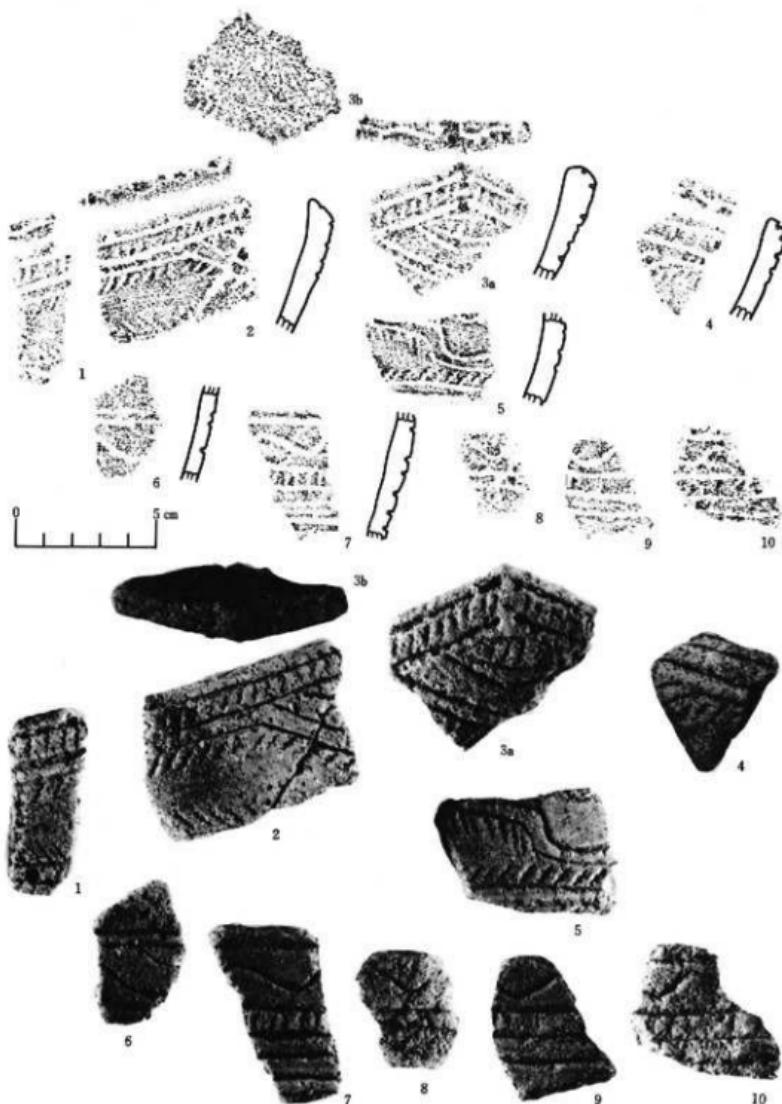


図 地 区	層位	部 位	外 面 滾 文	内面底文・側壁	直徑mm	胎 土	燒 成	色 調	分類	備 考
1 K-7	1-Ⅱ	口縁部 ~底部	平行綫文(沈跡), 沈跡十(字狀刻畫文), <字狀刻畫文>	肩毛、長髮文	6~9	石英多量、砂粒	完全不良	黃褐色	12a	同一個體
10 (a, d)			<字狀刻畫文>, 沈跡一<字狀刻畫文>, 長髮文							

第94図 第I群土器(3)

いな横位の磨きによる調整が行なわれている。器厚0.8cm、胎土には石英を含まず非常に精製された、焼成良好な、内外面暗黄褐色を呈する土器である。

^(注1) 第1類は千葉県城ノ台貝塚出土の田戸下層式土器に、第2類の一部は宮城県明神裏遺跡出土の土器に類例が求められ、第1類は田戸下層式併行、第2類は明神裏Ⅲ式から大寺下層式の時期に比定される。
^(注2) 佐藤甲二

註1. 宮田一裕「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号、石器時代文化研究会、1955年第三類A類上器

2. 白石市史編さん委員会「明神裏遺跡」『白石市史別巻考古資料篇』白石市、1976

第II群土器(第95~99図)

第II群土器は早期末葉のいわゆる条痕文系土器である。全て破片資料で総出土数121点、内口縁部2点で、底部は出土していない。胎土中に植物纖維を含む。この内磨滅風化したもの除く59点は、内外施文、焼成、色調より以下の4類に分けられる。

第1類 外面縄文、内面条痕文のもの。隆線の有無によりa、bに分けられる。

a 外面に隆線をもつもの(第96図1)

口縁部資料が1点のみ出土している。外反する半縁口縁で、口縁上端に隆線を一条めぐらしている。隆線中央には横位沈線が引かれ、その上・下に縄文原体圧痕による刻みが加えられている。外面には隆線貼付後に横位LR多条縄文が施され、内面には幅広の条痕文(0.4cm幅)が施文されているが体部まで続かないようである。器厚0.8cm、纖維を多量に含む焼成不良な、内外面とも黒褐色を呈する土器である。

b 外面縄文施文のみのもの(第95図5~8、96図2、98図1)

体部資料のみで29点出土している。外面縄文施文は横位回転のLR多条縄文を主とし、わずかにRL多条縄文もみられる。内面条痕文には条痕幅がa同様広いもの(0.4cm)と細いもの(0.2cm)の2種類あるが、後者の方が多い。器厚0.7cmのものが多く、1cm前後のものも数点ある。纖維を多量に含み焼成不良なものが多い。外面色調は黄褐色のものが主であるが、褐色、黒褐色、赤褐色のものもある。

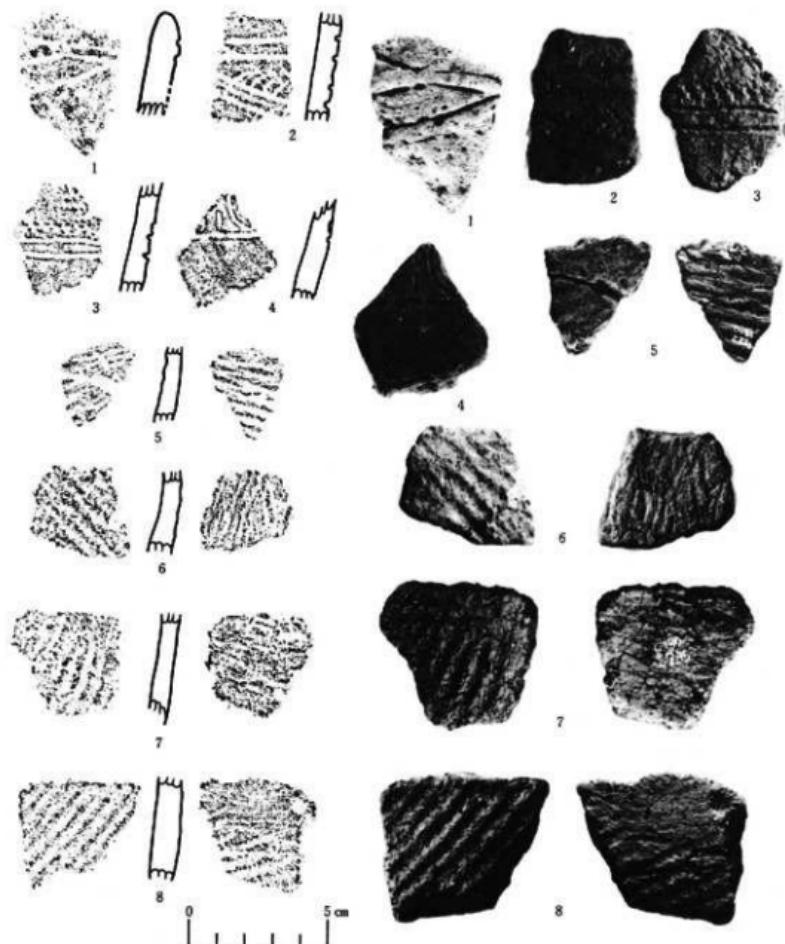
第2類 外面縄文 内面無文のもの(第96図3、97図、98図2)

体部資料のみで23点出土している。外面縄文施文は横位回転のLR・RL縄文とも認められるが、ほとんどが多条縄文である。器厚は第1類同様0.7cm前後のものが多いが、わずかに0.5cm前後の薄いものもある。内面に纖維痕を明瞭に残す焼成不良のものが多い。外面色調は黄褐色、褐色のものを主としているが、赤褐色のものもある。

第3類 内外とも無文のもの。隆線の有無によりa・bに分けられる。

a、外面に隆線を持つもの(第98図3)

体部上半破片が1点のみ出土している。低い隆線が横位にめぐり、これに上部より下垂する隆線が直交している。隆線上も無文である。体部上半の横位隆線部でかかる屈折点を持ち、口



団 地区	要件	部位	外 面 施 文	内面施文(模様)	厚さmm	胎 土	焼 成	色 質	分類	標 号	
1 K-13(d)	石 b	口縁部	平行編文(洗面)→斜面文	—	9	細粒、石英微量	やや不良	黄褐色	I 2a	内面施文	
2 L-6(e)	石	体 部	平行編文(洗面)→斜面文	—	7	石英多量、砂粒	やや不良	褐色	I 2a	内面施文	
3 K-7(a)	石	体 部	平行編文(洗面)↓(字状斜面文)→斜面文	君手	7	石英、砂粒	やや不良	褐色	I 2a	—	
4 J-8(b)	石	体 部	平行編文(洗面)、洗面→斜面	君手	8	細粒、石英微量	良好	褐色	I 2a?	—	
5 K-13(c)	石 b	形 文	走面文	5~5	細粒少量、石英微量、砂粒	やや不良	黄褐色	I 1b	外面磨滅		
6 K-13(e)	石 a	体 部	斜文	走面文	6~7	細粒多量、石英、砂粒微量	やや不良	黄褐色	I 1b	外面磨滅	
7 K-13(b)	石 c	体 部	横紋 L.R.斜文	斜面文	6	細粒多量、石英多量、砂粒	不良	褐色	I 1b	—	
8 K-13(c)	石 b	体 部	斜文	斜面文	8	細粒多量、石英多量、砂粒	不良	褐色	I 1b	外面磨滅	

第95図 第I群土器(4)・第II群土器(1)

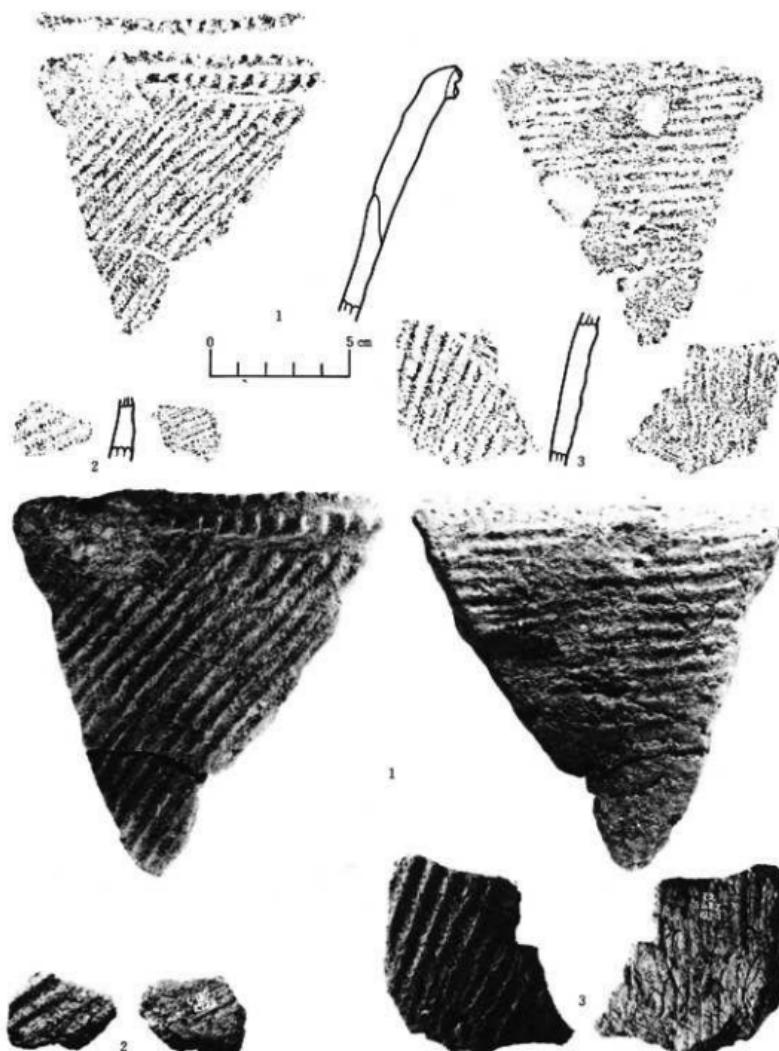


図	地 区	層位	部位	外 表 施 文	内 表 施 文・構 造	基準mm	胎 土	塊 体	色 調	分 類	備 考
1	K-13(c)	下 c	口縁部	横溝(比較+萬文部伴生縫)→横位L,R多条縫文	条縫文	7~9	継縫多層、石英多量、砂粒	不均	褐 色	II 1a	—
2	K-13(b)	下 c	体 部	横位L,R多类型文	条縫文	4~5	継縫少層、石英多量、砂粒	不均	褐褐色	II 1b	—
3	K-13(b)	下 b	体 部	横位L,R多条縫文	—	7	継縫多層、石英微量、砂粒	不均	褐 色	II 2	—

第96図 第II群土器(2)

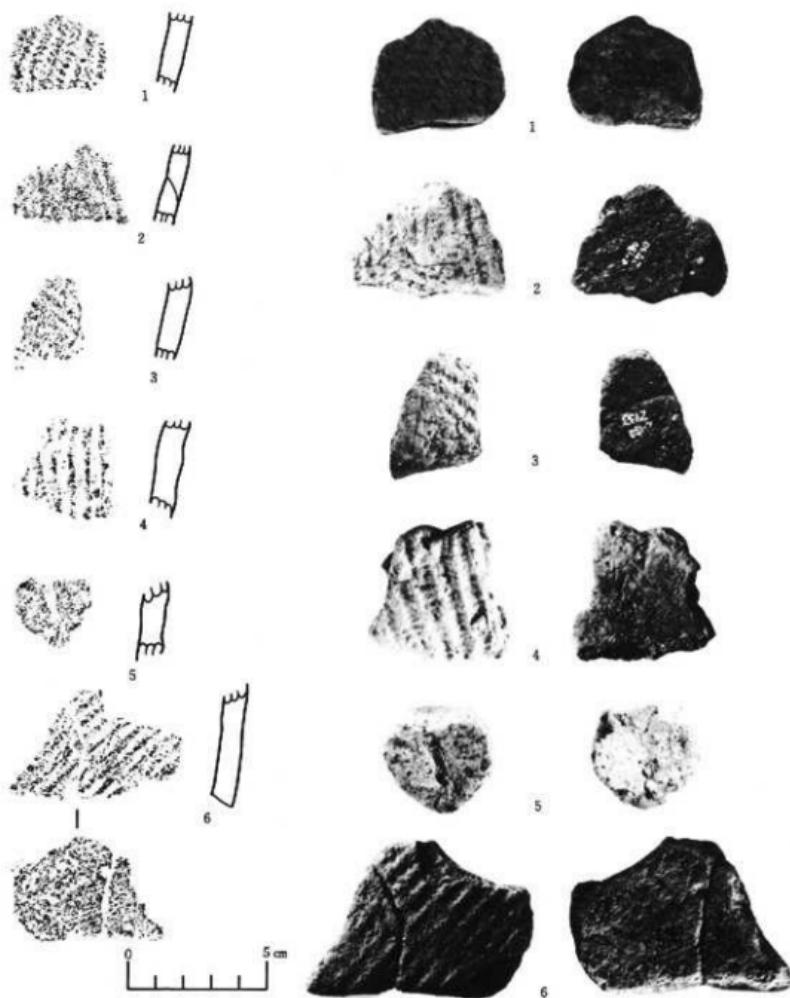
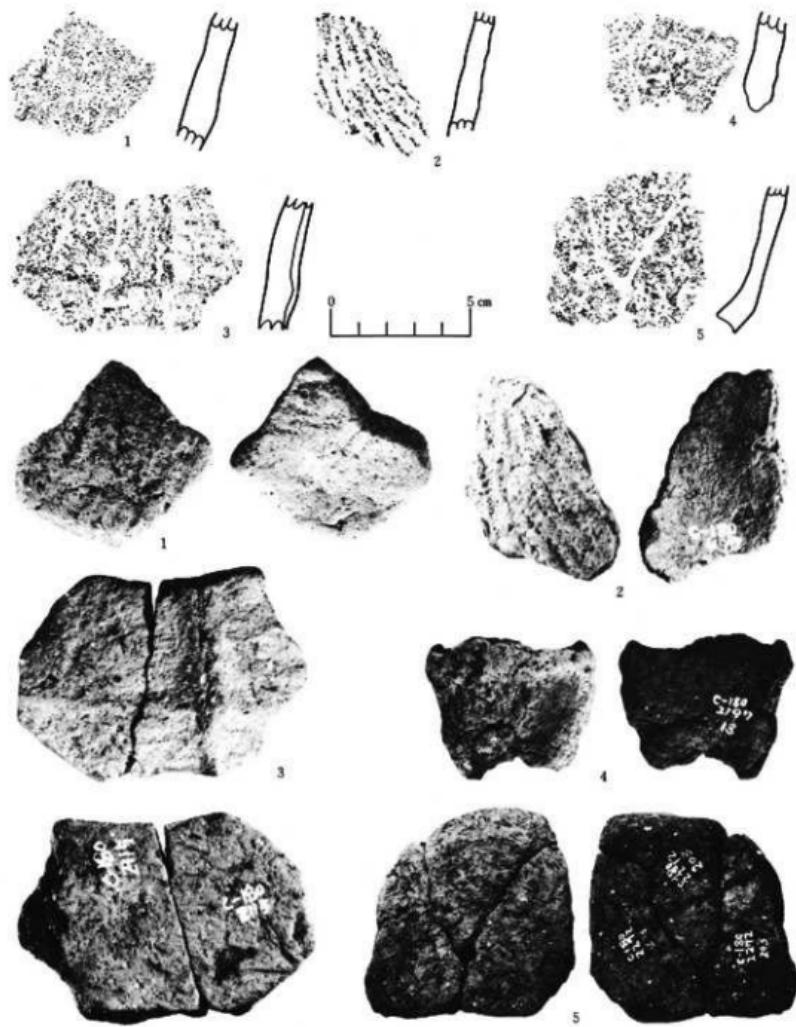


図	地 区	層位	部 位	外 表 施 文	内面施文・調査	器厚mm	胎 土	焼 成	色 調	分類	備 考
1	K-13(e)	古 a	体部	横化L貫織文	—	7	織維多量、石英微量、砂粒	今今不良	黄褐色	II 2	—
2	K-13(e)	古 c	体部	織文	—	7	織維多量、石英多量、砂粒	不 良	黄褐色	II 2	外周崩滅
3	K-13(b)	Ⅲ	体部	横化RL多条織文	—	7	織維多量、石英多量、砂粒	不 良	褐色	II 2	—
4	O-6(b)	古 c	体部	横化RL多条織文	—	9	織維多量、石英微量、砂粒	今今不良	黄褐色	II 2	—
5	K-13(e)	古 c	体部	織文	—	8	織維多量、石英微量、砂粒	不 良	黄褐色	II 2	外周崩滅
6	K-13(c)	古 a	体部	横化L貫多条織文	—	8	織維、石英、砂粒	不 良	褐色	II 2	土側凹陥?

第97図 第Ⅱ群土器(3)



区	地区・遺構	層位	部位	外 面 施 文	内 面 施 文・圖 形	厚 度 mm	胎 土	焼 成	色 調	分類	備 考
1	K-13(e)	N e	全体	横條L及多条網文	条状文	9~11	纖維多量。石英・砂粒微量	不 良	褐 色	E1b	内面磨滅
2	O-7(d)	II	全体	横條R L及文	——	7~9	纖維多量。石英・砂粒微量	中 中不良	黄褐色	E2	——
3	K-13(c)	N a	全体	施紋	——	8	纖維多量。砂粒多量	不 良	暗黃褐色	E2a	——
4	M-13(b)	II	全体	——	——	10	纖維多量。石英・砂粒微量	中 中不良	黄褐色	E3b	——
5	5風	施	全体	——	——	7~10	纖維多量。砂粒多量	不 良	褐 色	E	内外面磨滅

第98図 第Ⅱ群土器(4)

縁部に向ってゆるやかに「く」字状にひらく器形かと考えられる。器厚0.8cm、繊維痕を内外面に明瞭に残し、砂粒を多量に含む焼成不良の土器で、内外面とも暗黄褐色を呈する。

b、内外面とも無文のもの(第98図4、99図1)

体部資料のみで3点出土したが、この内2点は底部付近のものと思われる(第98図4、99図1)。繊維痕を内外に明瞭に残し、焼成は不良である。外面黄褐色、内面黒褐色を呈す。

第4類 外面沈線文、内面条痕文のもの(第99図2・3)

口縁部、体部資料が各1点出土しているが、同一個体の可能性もある。外面は半截竹管状施文具による平行沈線によって鋸歯文等の直線文が施文され、口縁上端部、体部には横位隆線がめぐる。隆線上には半截竹管状施文具による刻みが加えられる。内面条痕文は条痕幅約0.2cmの細いものである。口縁はやや外反する平縁であると思われる。器厚1cm前後、繊維を少量含み、焼成は他のII群土器に比べて良いが、やや不良の部類に入る。外面色調は暗黄褐色を呈する。

K-13グリッド北東側検出VIc層中からは第II群土器1類、第2類のみ出土している。第II群土器は型式の上からは素山IIb式以後のものであるが、羽状縞文、撫糸文、帯状文が存在しない点より船入島下層式とは区別される。第3a類は無文ではあるが、体部上半の横位隆線及び器形の点より素山IIb式との近似性が窺える。また、第4類は、仙台市北前遺跡、石巻市南境貝塚第二層土器中に類例を求められる。
佐藤甲二

註 1. 仙台市教育委員会「北前遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第36号』1982 第2群土器
2. 後藤勝彦他「埋蔵文化財第四次緊急測量報告 南境貝塚」『宮城県文化財調査報告書第20集』宮城県教育委員会
1969 第2群第2層土器。

第III群土器(第99・100図)

前期中葉に所属する土器群である。半截竹管状施文具による鋸歯文と刻みを持つ隆線を特徴とする。全て破片資料で5点出土している。いずれも繊維は含まず、内面に文様は持たない。

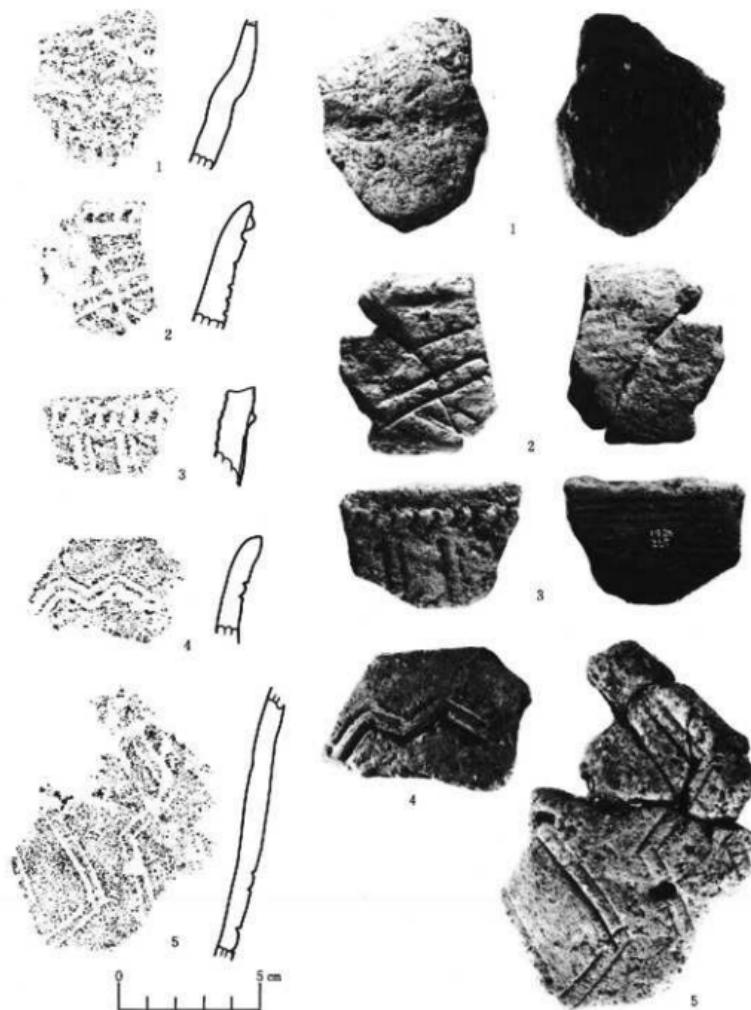
3点(第99図4~5、第100図1)は、半截竹管状施文具による平行沈線によって鋸歯文が施文されている。100図1はやや外反する平縁口縁で、口縁部に横位の鋸歯文が2段めぐり、体部には横位の鋸歯文が展開する。この間には横位の隆線が2段めぐり、その上に半截竹管状施文具による刻みが加えられている。内面には横位のナデによるていねいな調整が施されている。焼成良好な、内外面褐色を呈する土器で、文様構成の上では第II群第4類に類似する。

他の2点は地文を織文とするもので、縦位の隆線上に刻み(半截竹管?)を持つ突起状のII群部破片(第10図3)、細い1本沈線による縦位の鋸歯文の体部破片(第10図2)である。

縦位鋸歯文が展開する類例として宮城県大木貝塚出土の大木3式土器中に認められ、半截竹管状施文具による沈線文、刻みを持つ隆線、1本沈線文も同型式内に包括する文様であることより、これらIII群土器は大木3式に比定されよう。

註 1. 伊東信雄他「縄文時代前期大木3式」『宮城県史34(資料篇11)』1982
2. 舟野義一「大木土器理解のために(Ⅱ)『考古学ジャーナルNo.18』1968

佐藤甲二



地名・遺跡	層位	部位	外面施文	内面施文・模型	器形mm	胎	土	焼成	色調	分類	備考
1 M-13(b)	Ⅲ b	体 部	—	—	5~7	鐵道多量、石英、砂粒微量	小小不良	青褐色	Ⅱb	—	
2 K-8(d)	Ⅲ	口縁部	螺旋(裏み)、平行波綱文	条綱文	7~10	鐵道少量、石英、砂粒微量	小小不良	暗黃褐色	Ⅱ4	同一個跡	
3 K-8(4)	Ⅲ	体 部	強健(裏み)、平行波綱文	条綱文	10	鐵道少量、石英、砂粒微量	小小不良	暗黃褐色	Ⅱ4	—	
4 M-7(a)	Ⅲ	口縁部	平行波綱文	—	7	石英、砂粒多量	良好	褐色	Ⅲ	内面堅硬	
5 33P	准	体 部	平行波綱文	—	7	石英、砂粒多量	小小不良	褐色	Ⅲ	内面堅硬	

第99図 第II群土器(5)・第III群土器(1)

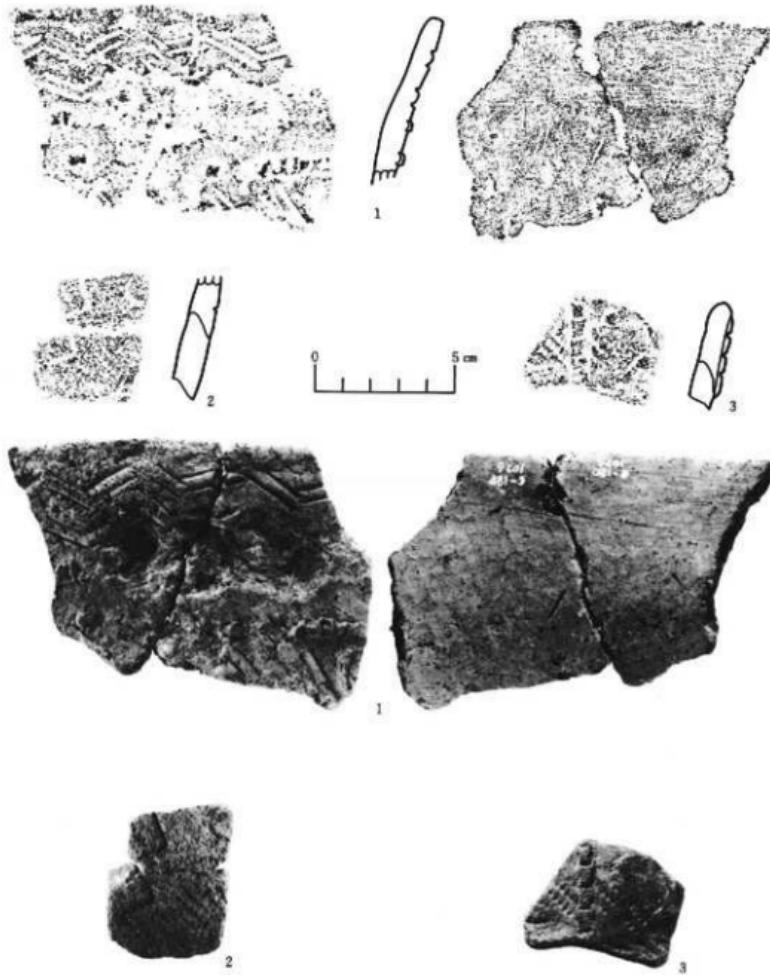


図	地 区	層位	部 位	外 画 施 文	内面施文	器形	胎 土	焼 成	色 調	分類	備 考
1	K-8 (b)	Ⅱ	口縁部	平行波線文、跳ね(刷み)	ナデ	7	石英、砂粒多量	良 好	褐色	Ⅱ	—
2	J-7 (b)	Ⅱ	口縁部	横往LR 猿文→跳ね(刷み)	—	6~8	粗製	中 中不良	暗褐色	Ⅱ	—
3	K-7 (c)	Ⅱ	体 部	横往RL 猿文→沈線文	—	8	粗製	中 中不良	褐色	Ⅱ	—

第100図 第Ⅲ群土器(2)

第IV群土器（第101図）

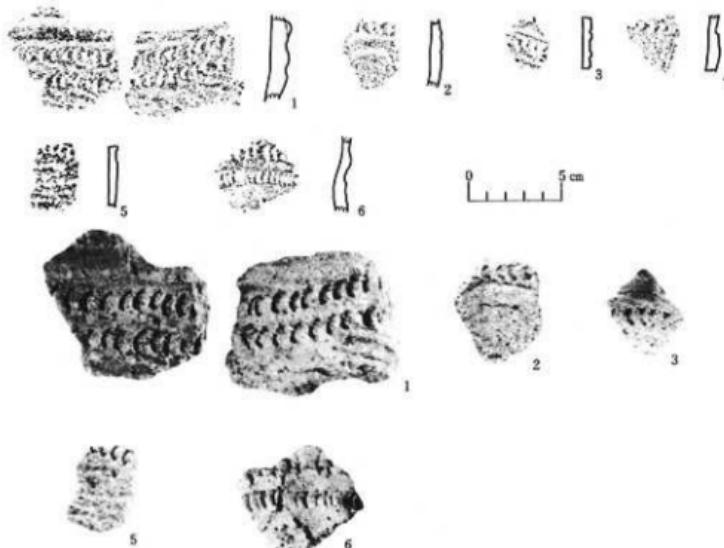


図	地紋・表模	層位	部 位	器 形	施 文	同 集	同 考
1	J-7	I	体 部		縦文・斜位I・丸彫文・斜線文→刺突文・沈線文		—
2	L-7(a)	II	体 部		沈線文→斜突文→縦文		—
3	K-7(d)	III	体 部		斜突文・沈線文→縦文	胎土に金雲母を含む	—
4	L-7	III	体 部		縦位I・丸彫文・沈線文→刺突文		—
5	31B	層	体 部		斜位II・丸彫文・刺突文	胎土に金雲母を含む	—
6	1浪	層	体 部		斜引文→縦文	—	—

第101図 第IV群土器

第IV群土器は、体部資料が7点出土している(第101図、第82図2)。半截竹管状の施文具による連続刺突文をもつものである。全て小破片のため全体の器形や文様構成は不明である。

1は地文・隣線文の後に連続刺突文が施文されたもので、やや内弯している。2~4・82図2は沈線文が伴ない、3・82図2は2条の沈線の間に連続刺突文が施文されており、2・4は沈線文施文後に連続刺突文が施文されたものである。6は押引き連続刺突文が施文されている。胎土中に金雲母が含まれているもの(3・5・82図2)もある。

出土層位は、基本層I層・III層・土壤堆積土であり、出土地点にもまとまりは見られなかった。これらの土器群と類似した資料は、南方町青島貝塚や同町長者原貝塚などから出土しており、縄文時代中期前半に位置づけられている。

註1. 南方町史編纂委員会「南方町史」1975

2. 宮城県教育委員会「長者原貝塚」「宮城県文化財調査報告書第78集」 1981

第V群土器(第102~107図)

第V群土器は、復元資料4点、口縁部資料140点、体部資料304点、底部資料1点の総点数449点出土している。これらの土器は基本層及び住居跡、埋設土器、ピット、土壤などから出土している。ここでは基本層出土のものと、住居跡以外の各遺構出土のものを一括して扱う。

これらの土器は、第1類・文様をもつものと第2類・地文のみのものに分けられる。さらに第1類は文様帯によって以下のa、b、c、dに細分される。

- a. 口唇部に文様帯をもつもの
- b. 口唇部直下から体部まで文様帯をもつもの
- c. 口唇部直下が無文帯となり、その下部から体部まで文様帯をもつもの
- d. 口縁部が無文帯となり、体部に文様帯をもつもの

また、これらの文様帯を形成している文様の施文技法と文様形態は

- ・隆線文によって施文される渦巻文・横円文・「匚」文・横位隆線文
- ・隆線文と沈線文(隆線文→沈線文の順位に施文され、完全に沿っているものは隆沈文とする)によって施文される渦巻文・横円文・「匚」文
- ・沈線文によって施文される渦巻文・横円文・「匚」文・横位沈線文

がある。これらの文様帯は口縁を基調としたものであるため、先ず口縁部資料を分類し、体部資料及び底部資料は文様の施文技法と形態によって分類する。

第1類 文様をもつもの

- a. 口唇部に文様帯をもつもの(第102図1)

口唇部に横位の沈線文による渦巻文が施文され、それが突起部分に延びているものと考えられる。口縁部分は内弯し、隆沈文による横円文が施文され、地文としてR L R 橫文が施文されている。

- b. 口唇部直下から体部まで文様帯をもつもの

これは、文様施文技法により、b₁、b₂に分けられる。

- b₁. 口唇部直下に隆線文あるいは隆沈文による渦巻文が施文されるもの(第102図2~5)

これらは、口縁部が内弯し、体部に沈線文による縦位渦巻文が施文されるもの(2)、沈線文による縦位渦巻文・横円文あるいは渦巻文が施文されるもの(3)、隆線文による円文と沈線文による横円文あるいは渦巻文が施文されるもの(4)と、頸部で逆「く」の字状に折れ、口縁部が内傾する波状口縁で、口唇部直下の渦巻文から隆沈文による隅の角張った変形「匚」文が施文されたもの(5)がある。

- b₂. 口唇部直下に沈線文が施文されるもの(第102図6~8)

内弯ぎみの波状口縁であり、口縁部直下の沈線文が口唇部に向かって延びているためb₂類と

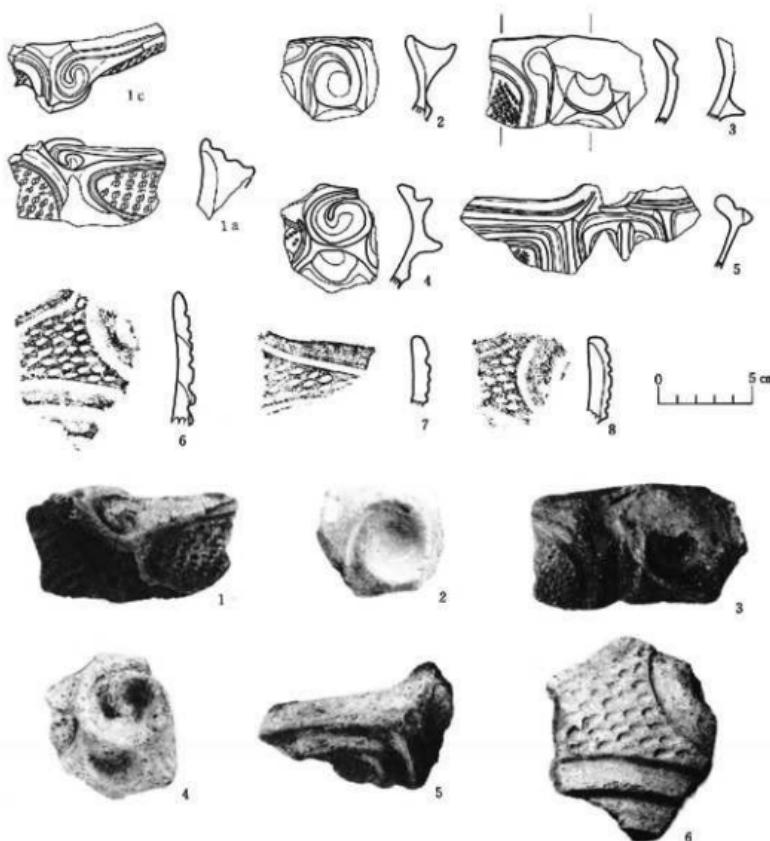


図	地区	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	K-7(d)	III	口縁部	深鉢	縦位R L R 極文→隆線文→沈線文	V1 a	—
2	L-7(a)	III	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文→磨き	V1 b ₁	胎土に金雲母を含む
3	J-8(d)	III	口縁部	深鉢	縦位L R L 極文→隆線文→沈線文→磨き	V1 b ₁	胎土に金雲母を含む
4	N-7(b)	I	口縁部	深鉢	横位L R L 極文→隆線文→沈線文→磨き	V1 b ₁	—
5	P-11(d)	III	口縁部	深鉢	横位L R 極文→隆線文→沈線文→磨き	V1 b ₁	—
6	I-7(d)	I	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文→刺突文→磨き	V1 b ₂	—
7	J-7(e)	III	口縁部	深鉢	沈線文→刺突文→磨き	V1 b ₂	胎土に金雲母を含む
8	K-13(d)	II a	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文→刺突文	V1 b ₂	—

第102図 第V群土器(1)

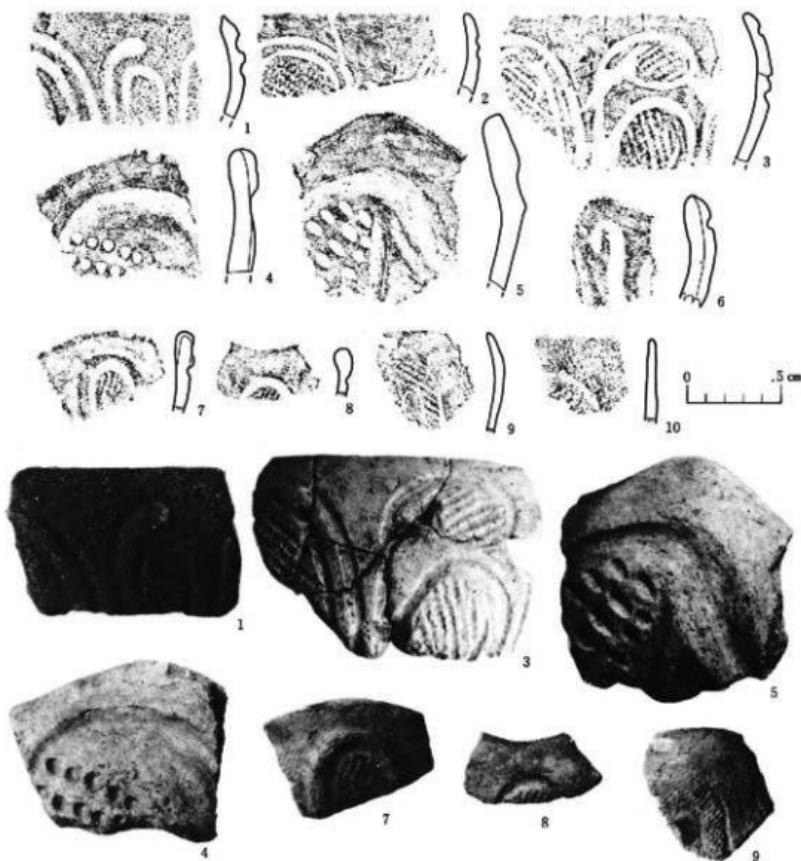
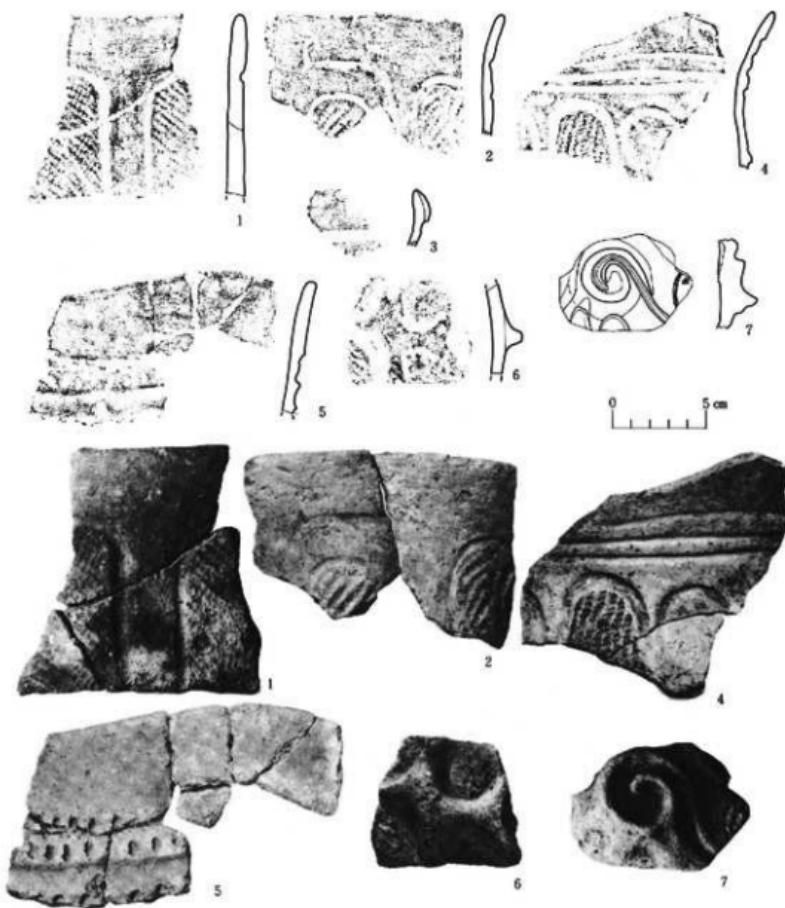


図	地 区	層位	部 位	器 形	施 文 · 調 整	分 類	備 考
1	N-7(d)	■	口縁部	深鉢	継位 L.R 繩文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₁	—
2・3	N-7	■	口縁部	深鉢	継位 L.R・R.L 繩文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₁	同一個体
4	I-8(e)	I	口縁部	深鉢	沈線文 → 刺突文 → 磨き	V1 c ₁	—
5	J-7(a)	■	口縁部	深鉢	陰線文・刺突文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₁	—
6	K-7(b)	■	口縁部	深鉢	沈線文 → 磨き	V1 c ₁	胎土に金雲母を含む
7	J-7(b)	■	口縁部	深鉢	継位 R.L 繩文 → 亂線文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₂	—
8	N-7(a)	■	口縁部	深鉢	継位 R.L 繩文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₂	胎土に金雲母を含む
9	K-13(b)	IV b	口縁部	深鉢	沈線文 → 継位 L.R 繩文 → 磨き	V1 c ₂	胎土に金雲母を含む
10	N-7	I	口縁部	深鉢	継位 L.R 繩文 → 沈線文 → 磨き	V1 c ₂	第106図と同一個体

第103図 第V群土器(2)



回	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	N-7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	横纹 L R 繩文→沈線文→磨き	VIc ₂	—
2	N-7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縱纹 L R 繩文→沈線文→磨き	VIc ₂	—
3	K-12(b)	IV b 上	口縁部	深鉢	縱纹 R L R 繩文→沈線文→磨き	VIc ₂	胎土に金雲母を含む
4	N-7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縱纹 R L R 繩文→沈線文→磨き	VId	—
5	3 塚	堆	口縁部	深鉢	稚線文→刺突文→沈線文→磨き	VId	—
6	K-13(a)	IV b 上	体 部	深鉢	横纹 R L 繩文・陰線文→磨き	VI-1	外面スス状炭化物付着
7	N-7(c)	Ⅲ	体 部	深鉢	斜位 R L 繩文・陰線文→沈線文→磨き	VI-2	—

第104図 第V群土器(3)

した。隆沈文による渦巻文あるいは楕円文が施文されるもの(6)、沈線文による渦巻文あるいは楕円文が施文されるもの(7, 8)がある。

b₁類では地文としてL R L繩文(3・4)、L R繩文(5)が、b₂類では刺突文が施文されている。

c・口縁部直下が無文帯になり、その下部から体部まで文様をもつもの

これは文様形態によりc₁、c₂に分けられる。

c₁・沈線文による縱位渦巻文が施文されるもの(第103図1~6)

内弯する平縁で、沈線文による縱位の渦巻文と、二重の沈線文による縱位の楕円文あるいは「匚」文が施文されているもの(1~3)と、内弯あるいは内傾する波状口縁を呈し、太い沈線文によって渦巻文が施文されているもの(4~6)がある。2、3は同一個体であり、4、5には刺突文が施文されている。

c₂・隆沈文・沈線文による楕円文あるいは「匚」文が施文されるもの(第103図7~10、104図1~3、85図1、86図1、78図1、81図1)

内弯する波状口縁のもの(103図7・8)と平縁のもの(9)があり、7は隆沈文によって、8は沈線文によって楕円文あるいは「匚」文が施文され、9は沈線文によって「匚」文が施文されている。直立ぎみの平縁のもの(103図10、104図1、86図1、81図1)、は沈線文によって「匚」文が施文されている。10は第106図4と同一個体である。また外傾する平縁で二重の沈線文によって「匚」文が施文されるもの(104図2)や、楕円文あるいは「C」字文が施文されているもの(85図1)、口縁部が肥厚するもの(104図3)、穿孔されているもの(78図1)がある。

地文としてc₁類はL R繩文(103図1~3)、L R L繩文(同2~3)が施文され、刺突文(同4~5)を施文するものもある。c₂類はL R繩文(103図7・9・10、104図1・2、86図1、78図1)、R L繩文(103図8・104図3、85図1)が施文されている。縦位回転施文のものが多い。

d・口縁部が無文帯になり、体部に文様帯をもつもの(第104図4・5、41図1、86図2)

頭部に横位の隆線文・沈線文がめぐり、口縁部と体部を区画するもの。外反する波状口縁で三条の横位沈線文が口縁部と体部を区画し、体部に沈線文による楕円文あるいは渦巻文が施文されるもの(4、86図2)と、外反する波状口縁で連続刺突文を施した横位隆線文をもつもの(5)外反する波状口縁で、隆線文で口縁部を区画するもの(41図1)がある。地文として4はR L R繩文、86図2はR L繩文が施文されている。

体部資料・底部資料

体部資料は文様帯が判別できないものである。底部資料については、出土数が1点と少なく体下部の文様が判別できるので体部資料に含めた。これらを口縁部資料の文様の施文技法と文様形態によって分類すると

1. 隆線文によって施文される文様→楕円文

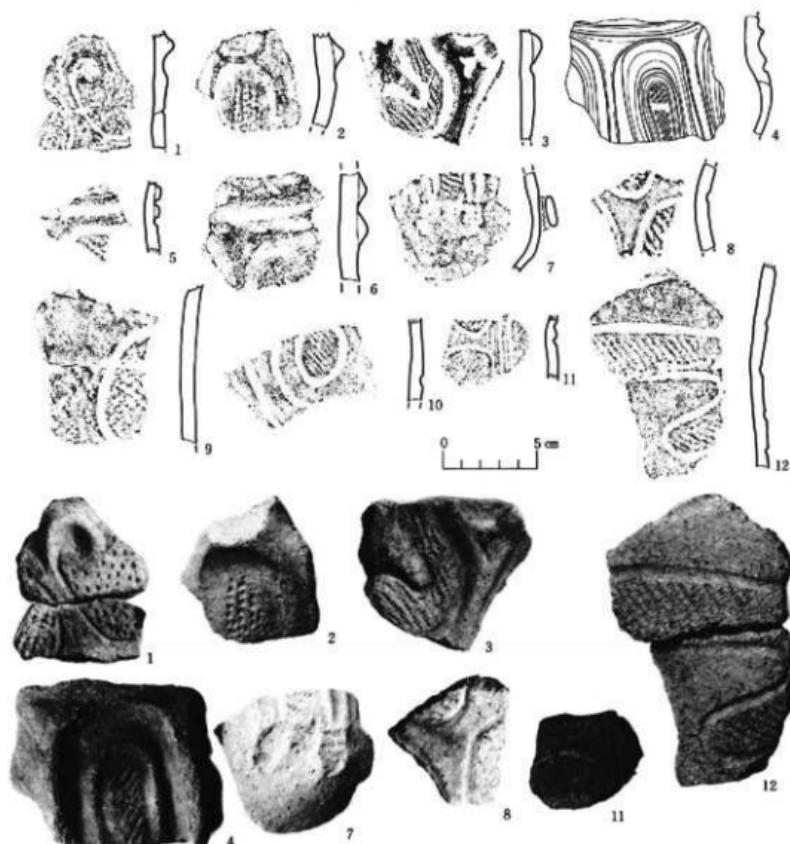
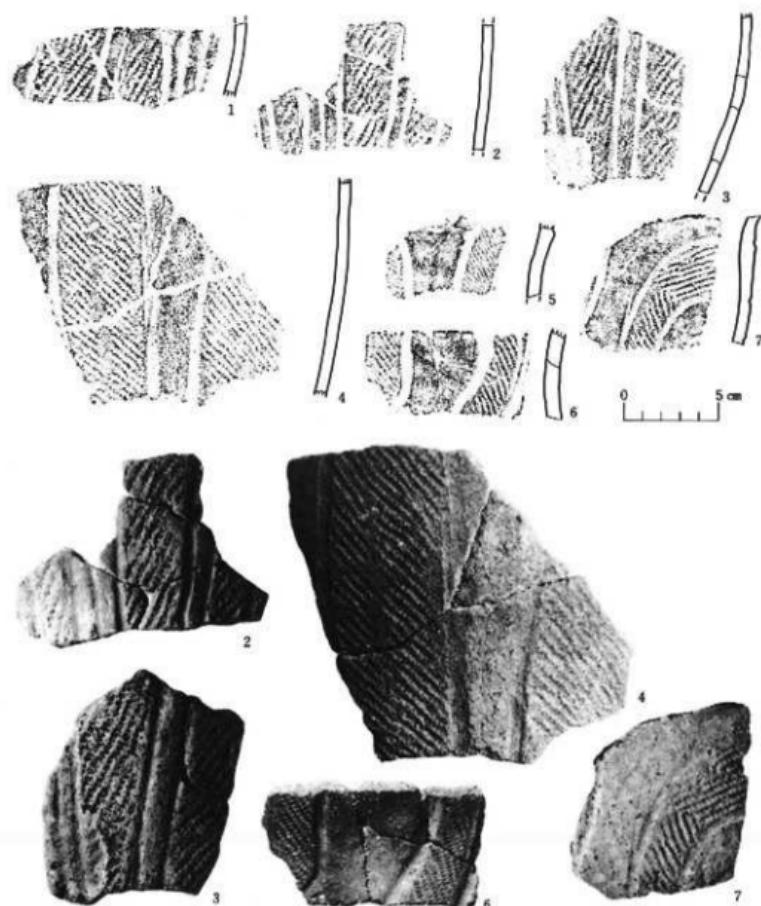


図	地区	層位	部位	器形	調整・施文	分類	備考
1	N-7(e)	Ⅲ	体部	深鉢	陰線文→横位L R L繩文・刺突文→沈線文→磨き	V1-2	—
2	I-8(e)	Ⅲ	体部	深鉢	斜位R L R繩文・陰線文→沈線文→磨き	V1-3	—
3	K-7(b)	Ⅲ	体部	深鉢	綫位L R繩文・陰線文→沈線文→磨き	V1-3	胎土に金雲母を含む
4	L-6(h)	Ⅲ	体部	深鉢	綫位R L繩文・陰線文→沈線文→磨き	V1-3	胎土に金雲母を含む
5	K-12(b)	Ⅳ b	体部	深鉢	横位R L繩文・陰線文→沈線文→磨き	V1-3	—
6	J-8(e)	Ⅲ	体部	深鉢	陰線文→磨き	V1-3	胎土に金雲母を含む
7	J-7(e)	Ⅲ	体部	深鉢	綫位L R繩文・陰線文→把手→沈線文→磨き	V1-3	—
8	K-12(h)	Ⅳ b 上	体部	深鉢	綫位L R繩文→沈線文→磨き	V1-4	—
9	J-7(e)	Ⅲ	体部	深鉢	綫位L R繩文→沈線文→磨き	V1-4	—
10	N-7(a)	Ⅱ	体部	深鉢	綫位L R繩文→沈線文→磨き	V1-4	—
11	M-7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	綫位L R繩文→沈線文→磨き	V1-4	—
12	K-15(b)	Ⅲ	体部	深鉢	横位R L繩文→沈線文→磨き	V1-4	—

第105図 第V群土器(4)



開	地 区	層位	部 位	器 形	施 文・調 整	分 類	備 考
1・2・3	N-7(c)	III	体部	深鉢	縦位R L R縄文→沈線文→磨き	V1・4	同一個体
4	N-7(b)	I	体部	深鉢	縦位L R縄文→沈線文→磨き	V1・4	第103図10と同一個体
5	K-13(b)	IV b	体部	深鉢	縦位R L縄文→沈線文→磨き	V1・4	—
6	I-9(d)	III	体部	深鉢	横位R L縄文→沈線文→磨き	V1・4	—
7	J-7(e)	III	体部	深鉢	縦位・横位L R縄文→沈線文→磨き	V1・4	—

第106図 第V群土器(5)

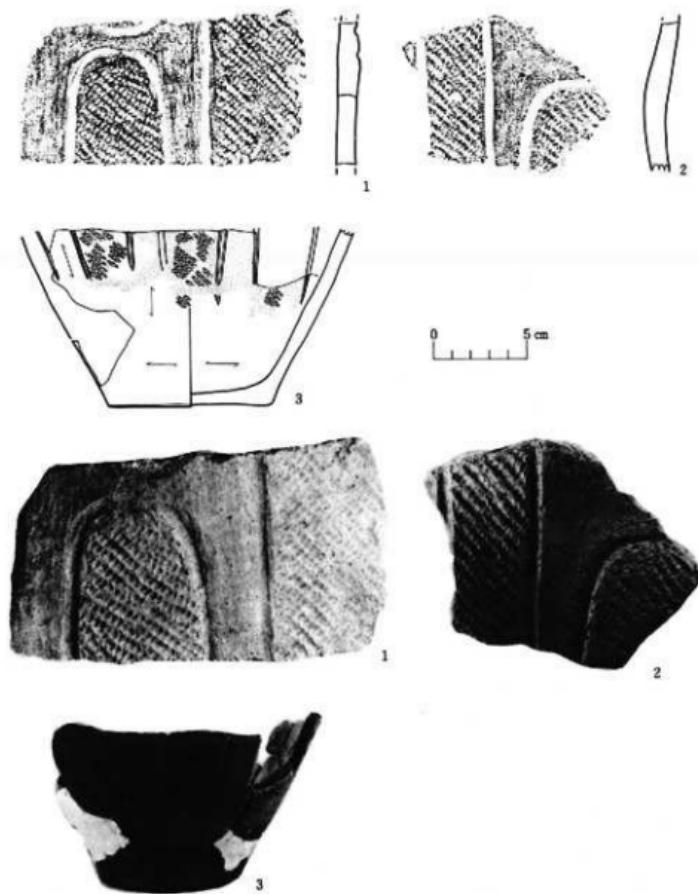


図	地区・遺構	層位	部 位	器 形	施 文 · 調 整	分 類	備 考
1	N-7(a)	Ⅲ	体 部	深鉢	縦位 L R 縦文→沈線文→磨き	V1·4	—
2	M-6(b)	Ⅲ	体 部	深鉢	縦位 L R 縦文→沈線文→磨き	V1·4	—
3	3 風 墓	体部下半 ～底部	深 鉢	縦位 L R 縦文→沈線文→磨き	V1·4	底径8.8cm 底部磨き調整	

第107図 第V群土器(6)

2. 隆線文と沈線文によって施文される文様→渦巻文
 3. 隆沈文によって施文される文様→渦巻文・楕円文・「匁」文
 4. 沈線文によって施文される文様→楕円文・「匁」文
- に分けられる。
1. 隆線文によって楕円文が施文されるもの(第104図6)、地文としてRL繩文が施文されている。
 2. 隆線文と沈線文を組合せて文様を施文するもの(第104図7、105図1)
- 104図7は隆線文と沈線文による渦巻文から沈線文が延び、別の沈線文による楕円文が施文される。105図1は隆線文による渦巻文から沈線文による渦巻文が派生する。
- 地文として7はRL繩文、1はLRL繩文と刺突文が施文されている。
3. 隆沈文によって文様を施文するもの(第105図2~7、86図3)
- 86図3は隆沈文による縦位の渦巻文、105図2は上下に接続した縦位楕円文、3は「S」字状の変形楕円文が施文されており、4~6は横位の隆沈文から隆沈文による「匁」文が施文されている。また7は体下部の破片で、隆沈文による「匁」文の下端に把手がついていたものである。
- 地文としてLR繩文(105図3、7)、RL繩文(86図3、105図4~5)、RLR繩文(105図2)が施文されている。
4. 沈線文によって文様が施文されているもの(105図8~12、106図、107図、41図2、48図1)
- 体部中央でくびれ、楕円文が施文されているもの(105図8~9)、楕円文が二ないし三重に施文されているもの(10)、縦位楕円文に数条の縦位沈線文が伴なっているもの(11)、変形楕円文が施文されているもの(12)、「匁」文とその間に縦位の沈線文が施文されているもの(106図1~3)、これらは同一個体である。48図1)、「匁」文のみが施文されているもの(106図4、41図2)、変形「匁」文が施文されているもの(106図5~7)、「匁」文と楕円文が施文されるもの(107図1~2)、また107図3は平底で、体部に「匁」文が施文された深鉢の底部と考えられる。

地文としてLR繩文(105図8~10、106図4~7、107図1~3、41図2、48図1)、RL繩文(105図11~12、106図5~6)、RLR繩文(106図1~3)が施文されている。

第2類 地文のみのもの

2点出土しているが2号住居跡からのみの出土であり、2号住居跡の出土遺物の項で扱ってるのでここでは省略する。

主 浜 光 朗

第VI群土器(第108~113図)

第VI群土器は、復元資料8点、口縁部資料87点、体部資料78点の総点数165点出土している。これらの土器は基本層及び埋設土器、ピット、土壤などから出土している。これらの土器は第1類・口縁部から体部に文様帯をもつもの、第2類・口縁部のみに文様帯をもつもの、第3類



図	地区・遺構	層位	部 位	器形	施文・調 整	分 類	備 考
1	M-6(b)	Ⅲ	体部下半欠損	深鉢	楕位・横位・斜位LR繩文・陰線文→沈縞文→磨き	VI1a	口径20cm・最大径23cm
2	K-7(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	綾位L繩文→沈縞文→磨き	VI1a	—
3	1 風	堆	口縁部	深鉢	横位R L繩文→沈縞文→磨き	VI1a	—
4	M-6(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	陰線文→横位R L繩文→磨き	VI1b	—
5	P-11(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	陽線文→刺突文→磨き	VI1b	—

第108図 第VI群土器(1)

地文のみのものに分けられる。さらに第1類は、文様形態によって以下のa、b、c、dに細分される。

- a. 隆沈文・沈線文による楕円形文様区画をもつもの
- b. 隆線文・隆沈文・沈線文による「S」字状文をもつもの
- c. 隆線文・沈線文による「コ」字状文をもつもの
- d. 隆線文・隆沈文による方形区画文をもつもの

第2類も同様に以下のa、bに細分される。

- a. 波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部で横位にめぐるもの、これはさらに
 - ①連續刺突文の施文されているもの
 - ②連續刺突文の施文されていないもの

に分けられる。

- b. 頸部に横位の隆線文がめぐり、口唇部直下から隆線文が垂下するもの

以上によって復元資料、口縁部資料を分類し、体部資料は文様の施文技法、形態によって分類する。

第1類 口縁部から体部に文様をもつもの

- a. 隆沈文・沈線文による楕円形文様区画をもつもの(第108図1～3)

第108図1は頸部が逆「く」の字状に折れ、口縁部が内傾する波状口縁を呈する深鉢で、口径20cm、最大径23cmを計る。頸部に隆線文がめぐり、波状口縁頂部に対応して隆沈文による楕円形を基調とした文様区画を3単位形成している。また、体部に横位の隆沈文がめぐり、体部上部と下部とを区画しており、頸部の隆線文から体部の隆沈文へ隆線文が垂下している。この隆線文は基部の幅に比して高さが低いものである。地文として楕円形区画内にLR繩文が施文されている。2は内弯する平縁、3は内弯する波状口縁で口唇部が肥厚している。両者とも沈線文によって曲線的な文様区画が形成されている。地文として2はL繩文、3はRL繩文が施文されている。

- b. 隆線文・隆沈文・沈線文による「S」字状文をもつもの(第108図4、5、109図1～3、43図1)

第108図4、5は外反する平縁で隆線文にはさまれた「S」字状の無文帯が横方向に展開するものである。109図1～3は同一個体である。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁部は直立している。沈線文によってはさまれた「S」字状の無文帯が横方向に展開している。体部部分の無文帯に沈線文が施文されている。地文として、文様区画内に108図4はRL繩文、5は刺突文が施文され、109図1～3は文様区画内や体部文様帶以下にLR繩文が施文されている。43図1は復元資料である。やや外反する小波状II縁の深鉢で、口径24.5cmを計る。鱗状の隆線文と沈線文にはさまれた無文帯が「S」字状を成し、結合部に鱗状の隆線文が施文されている。口縁部に施

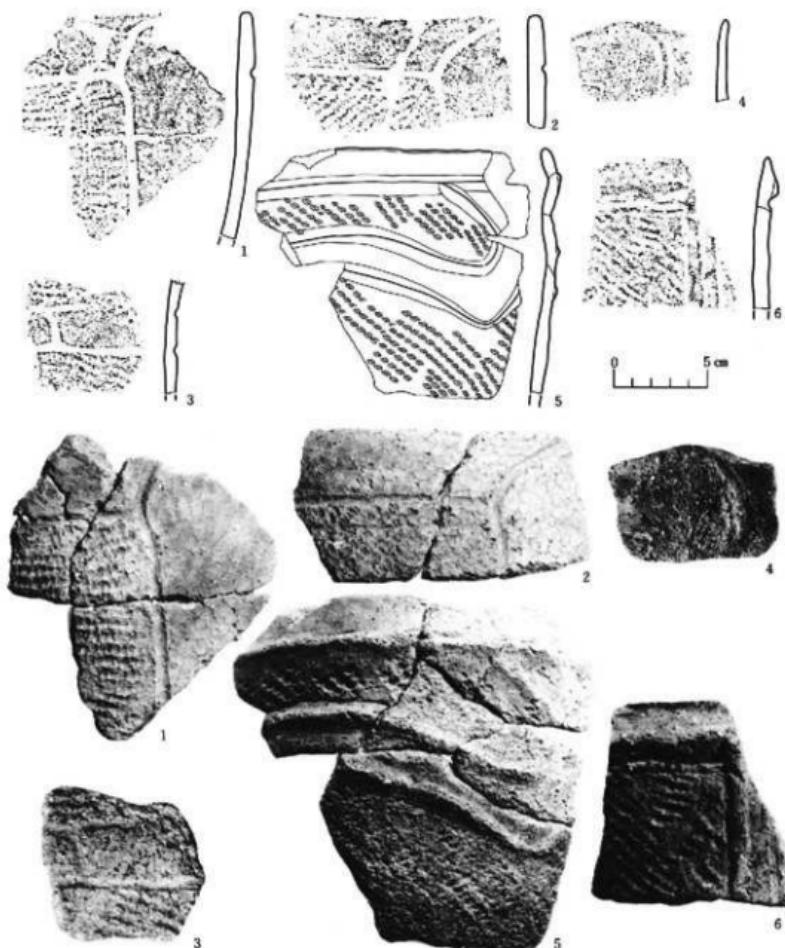


図	地 区	層位	部 位	器 形	施 文・調 整	分 類	備 考
1-2-3	K-6 (d)	III	口縁～体部	深鉢	斜位 L R 縦文→沈縦文→磨き	Ⅵ1b	同一個体
4	M-6 (d)	III	口縁部	深鉢	隕縦文・沈縦文→磨き	Ⅵ1c	—
5	J-8 (b)	III	口縁～体部	深鉢	隕縦文→斜位 L R L 縦文→磨き	Ⅵ1c	—
6	J-7 (d)	III	口縁部	深鉢	斜位 L R 縦文・隕縦文→沈縦文→磨き	Ⅵ1d	—

第109図 第VI群土器(2)

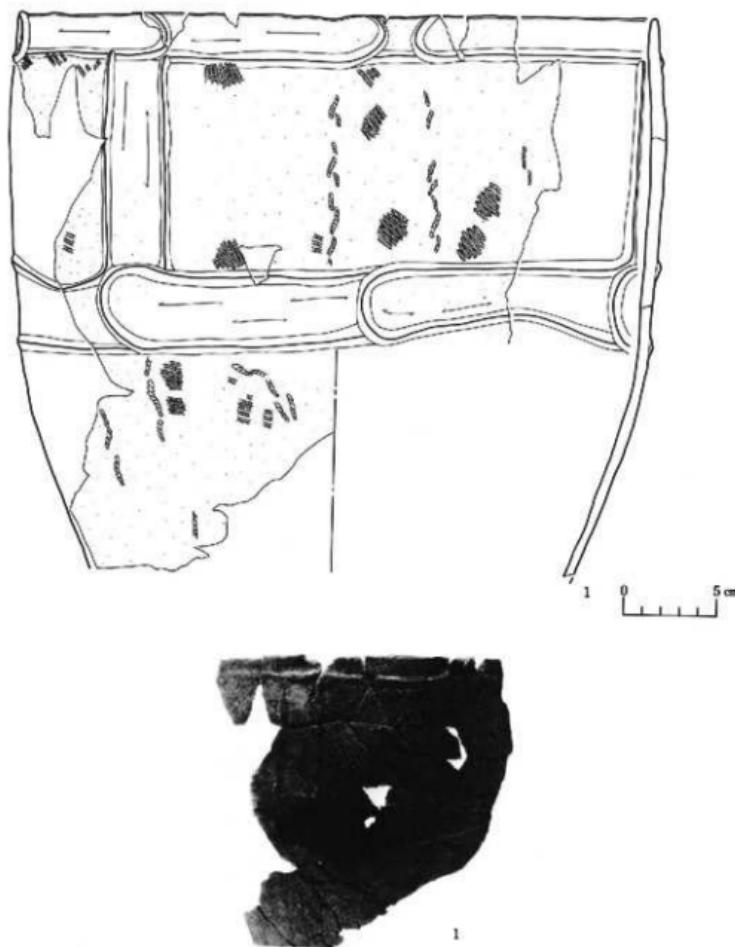
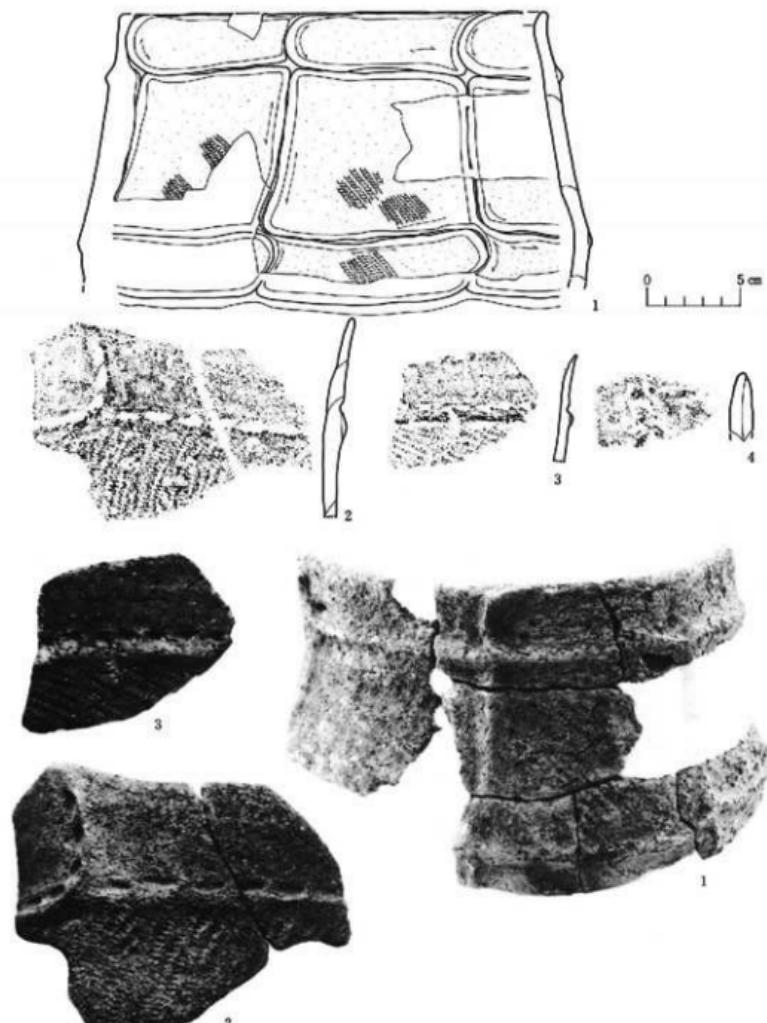


図	地 区	層位	部 位	器 形	施 文・調 整	分 類	備 考
1	M-6 (d)	Ⅲ	口縁-一体部	深鉢	陰施文→横位・斜位R L 施文+複合文 ・麻き	VI 1 d	口径(33.5cm) 最大径(34.5cm)

第110図 第VI群土器(3)



回	地区	層位	部 位	器 形	施 文	調 整	分類	解 説
1	K-7(c)	■	口縁~全体	深鉢	網文 L.R開文→熱鉛文→磨き		V11d	口径(23cm)・最大径(27.5cm)
2	M-7(d)	■	口縁部	深鉢	羅線文→横紋 L.R網文→磨き		V12a①	
3	Q-12(d)	■	口縁部	深鉢	羅線文→沈鉛文→網文 L.R網文→磨き		V12a①	——
4	K-12(b)	■	口縁部	深鉢	羅線文→刻夷文→磨き		V12a①	——

第111図 第VI群土器(4)

文された鰐状隆線文が小波状になっている。文様単位は8単位であるが、沈線文と鰐状隆線文による張り出し部分が1単位間隔で3単位あると思われる。地文として、文様区画内にL.R繩文が施文されている。

c. 隆線文・沈線文による「コ」字状文をもつもの(第109図4・5)

109図4は口唇部近くで外傾するがほぼ直立する波状口縁である。沈線文によって「コ」字状の無文帯を区画している。波状口縁頂部から鰐状隆線文が垂下し、この部分で文様が連結している。5は頸部で逆「く」の字状に折れ口縁部が内傾する平縁である。頸部に隆線文がめぐり、隆線文によってはさまれた逆「L」字状の無文帯が横位に連結し、連続した「コ」字状の文様展開を呈する。地文としてL.R.L繩文が施文されている。

d. 隆線文・隆沈文による方形文様区画をもつもの(第109図6、110図、111図1)

109図6はやや外傾ぎみであるが直立する平縁で、頸部に横位にめぐる隆沈文と縦位の隆線文によって方形区画の文様が形づくられている。縦位の隆線文によってはさまれた無文帯に縦位の沈線文が施文されている。地文としてL.R繩文が施文されている。110図、111図1は復元資料である。110図はいくぶん内寄ぎみの深鉢で、口径33.5cm、最大径34.5cmを計る。隆線文によって方形の無文帯を形づくっている。地文としてR.L繩文、縫絡文が施文されている。111図1は体部がやや脇らみ口縁が内傾する深鉢で、口径23cm、最大径27.5cmを計る。隆線文によって口縁部と体部の無文帯を形成し、縦位の隆線文によって体部を区画し、8単位の方形区画文を形成している。地文としてL.R繩文が施文されている。

体部資料

1. 隆線文・隆沈文による「S」字あるいは「コ」字状文をもつもの(第112図3、113図1・2、35図、36図、75図2)

112図3は体部下半が外傾し、体部上半が直立ぎみの深鉢である。底径9.0cm、最大径25.8cmを計る。隆線文による「S」字状文をもち、体下部に横位の隆線文がめぐり、以下は無文帯になっている。地文として文様区画内、体部文様帯以下にR.L.R繩文が施文されている。113図1・2は同一個体である。35図1・2、36図1～3は各々同一個体である。36図は体下部が外傾し上部が内寄する深鉢で、底径14.5cm、最大径32.5cmを計る。113図1・2は隆沈文、35・36図は隆線文によって「S」字状あるいは「コ」字状文を成すと考えられる。地文としてL.R繩文(35図)、R.L繩文(113図1・2)、R撲糸文(36図)が施文される。また75図2は、隆線文によって文様を区画している。地文としてL撲糸文が施文される。

2. 隆線文・隆沈文による方形区画文をもつもの(第113図5～7、78図2)

113図5は、隆線文によって横位に無文帯が形成され、6・7は同一個体で縦位の隆沈文の区画内に沈線文が施文されている。地文としてL撲糸文(5)、L.R繩文(6・7)が施文されている。

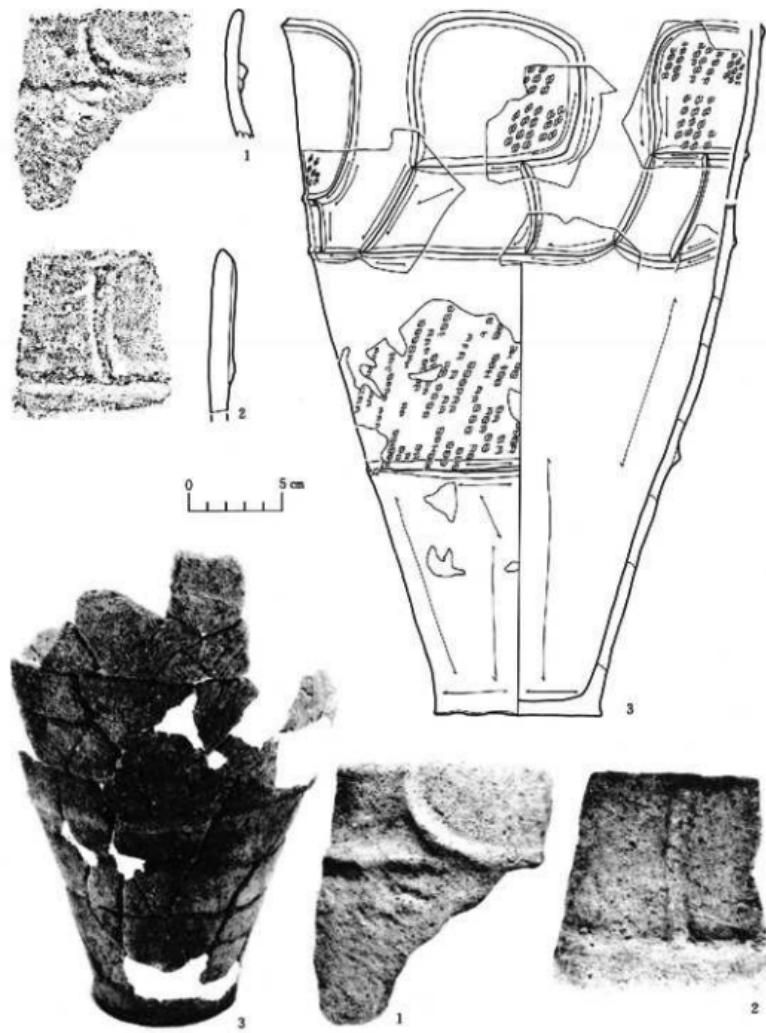


図	地区	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	N-7(a)	III	口縁部	深鉢	不明閻文・隆線文→調整(不明)	VII-2a②	—
2	L-7(d)	I	口縁部	深鉢	肩±→隆線文	VII-2b	—
3	J-7(a)	III	体～底部	深鉢	隆線文→軸位R L R閻文・肩±	VII-1-1	底径9cm・最大径(25.8cm)

第112図 第VI群土器(5)

78図2は横位の隆線文とそれに垂下する隆線文によって文様が区画されている。地文としてLR縄文が施文されている。

3. 隆線文・沈線文に刺突文が伴なうもの(第113図3・4・8・9、44図4)

113図3は横位の沈線文に鱗状の隆線文が垂下し、沈線文、隆線文に沿って連続刺突文が施文されている。4は隆線文に沿って連続刺突文が施文されている。3、4とも文様区画の形態は明らかではない。文様区画外に地文として縄文(3.原体は不明)、R撫糸文(4)が施文されている。44図4は隆線文により「S」字状あるいは「コ」字状文を形成し、この隆線文に沿って刺突文が施文されている。文様区画以下には地文としてLR縄文が施文されている。113図8、9は縦位隆線文と沈線文による「コ」字状あるいは方形の区画をもつもので、縦位の隆線文に沿って刺突文が施文されている。文様区画内及び文様帶以下に地文としてLR撫糸文が施文されている。

4. 体部下部をめぐる隙線文をもつもの(第113図10~12)

113図10~12は体部下部に横位にめぐっている隙線文で、体部の地文がこの隙線以下には見られないことから、体部と体下部あるいは底部を区画するものであると思われる。地文としてLR縄文(11、12)、LRL縄文(10)が施文されている。

第2類 口縁部のみに文様帶をもつもの

a. 波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部を横位にめぐるもの

①連続刺突文を伴なうもの(第112図2~4)

2・3は口縁部が外傾する波状口縁である。頸部の隆線文以下は地文としてLR縄文のみが施文されている。4は突起部分の資料で、頂部から下垂した隆線文を挟む形で刺突文を施文している。

②刺突文を伴なわないもの(第112図1)

外反する波状口縁で、横位にめぐる隆線文以下に地文のみが施文されているが、摩滅が著しく、原体、施文方向等は不明である。

b. 頸部に横位の隆線文がめぐり口縁部直下から隆線文が垂下するもの(第112図2)

ほぼ直立する平縁である。横位の隆線文以下は不明である。

第3類 地文のみのもの(第43図2、44図1~3)

43図2は外傾する波状口縁を呈する深鉢で、口径9.2cmを計る。地文としてLR縄文のみが施文されており、口縁部及び体部下部に磨き調整がなされている。44図1は口縁部が内弯する平縁の深鉢で、口径22.0cm、最大径24.0cmを計る。頸部に横位の沈線文がめぐり、口縁部と体部を区画し、体部にLR縄文のみが施文されている。2~3は同一個体であり、ほぼ直立する波状口縁で、突起部分が肥厚しており、頸部に横位の沈線文がめぐり口縁部と体部を区画している。体部にLR縄文が施文されている。44図1~3は縦位回転施文である。 主 浜 光 城

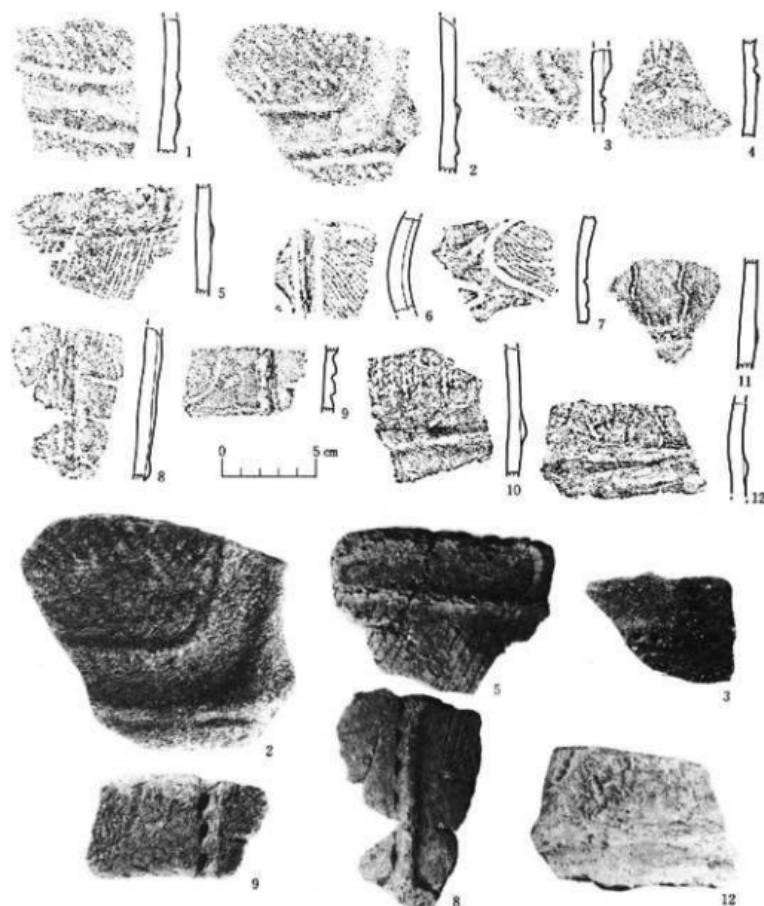


図	地区・遺構	層位	部位	形態	唐文・刻文	分類	備考
1-2	2 住	堆1	体部	深鉢	横位L.繩文→弦縞文→沈縞文→調變(不明)	Ⅴ1-1	—
3	K-13(a)	III	体部	深鉢	不明環文・弦縞文→弦縞文→網突文→磨き	Ⅴ1-3	—
4	L-7(b)	III	体部	深鉢	縱位R.燃矢文→(燃縞文→網突文)→磨き	Ⅴ1-3	—
5	M-15(b)	III	体部	深鉢	弦縞文→縱位L.燃系文→磨き	Ⅴ1-2	—
6-7	P-9(a)	I	体部	深鉢	縱位L.繩文→弦縞文→沈縞文→磨き	Ⅴ1-2	同一個体
8	L-7	III	体部	深鉢	縱位L.燃系文・弦縞文→沈縞文・刻突文→磨き	Ⅴ1-3	—
9	6 D	堆2	体部	深鉢	縦位L.燃系文(連線文→刻突文)→沈縞文→磨き	Ⅴ1-3	—
10	K-13(b)	IV b上	体部	深鉢	斜位L.R.L.廣文・深縞文→磨き	Ⅴ1-4	胎土中に金雲母を含む
11	J-8(d)	III	体部	深鉢	縦位R.L.結節縞文→弦縞文→ナゲ	Ⅴ1-4	—
12	N-7(a)	III	体部	深鉢	横位L.R.闊文・弦縞文→磨き	Ⅴ1-4	—

第113図 第VI群土器(6)

第V群土器 (第114・115図)

大木10式末葉から後期初頭にかけての土器で、所属時期を確定できないものである。復元資料2点、破片資料20点であるが、細片等のため文様構成を明確にしえないものが多いための便宜的な分類である。出土層位についても早期から晩期までの遺物が混在している不安定な状況のため、特徴的な点と類例について述べるにとどめる。

口縁部内面に弧状隆線文のめぐる深鉢 (第114図1・2)

1・2は同一個体で口縁部がゆるやかに外反しやがて内弯する体部に転ずる様相をみせる深鉢である。外面は磨かれ内面には小突起から連続する弧状隆線文がめぐらしている。酷似する例として六反田遺跡出土の大木10式(末葉)の深鉢がある。^{註1)}縦位隆線と方形区画沈線で構成されるものである。しかし後期初頭段階でも突起内面に渦状隆線文がめぐる例もあり、^{註2)}外面が磨きのみの小片では型式を確定できない。

口縁部に横位刺突文をもつ深鉢 (第114図3・4)

3は、口縁部が外傾し口唇部が外方に平坦面をつくってやや突出する深鉢である。口唇部外面下部に横位沈線、その下に横位刺突文が一列に施文される。4は口縁部下部に横位刺突文が施文される。口縁部の横位刺突文の類例として大木10式後半段階の西ノ浜貝塚4層出土深鉢がある。^{註3)}横位沈線を刺突文の下位に伴う例として青木畑遺跡出土の深鉢があるが、同報告書でも時期の断定をさげざるをえない出土状況である。

縦位隆線をもつ深鉢 (第114図5・6)

5は横位沈線と方形区画文を構成し縄文施文部と研磨部を対置している。6は、縦位隆線施文後、縄文を充填している点で大木10式的要素が強い。

環状把手をもつ浅鉢 (第114図7)

7は環状把手をもつ浅鉢で大木10式後半段階の西ノ浜貝塚4層出土浅鉢、^{註4)}後期初頭の青木畑遺跡出土の深鉢の把手部分に近似している。口縁部の横位長條円形沈線文は、六反田遺跡や当遺跡の後期初頭土器の体部に多くみられる長條円形沈線文に共通している。

体下部に隆帯のめぐる深鉢(「下位隆帯」のめぐる深鉢)(第114図8、115図)

8・第115図は体下部に隆帯のめぐるほか地文のみが観察される深鉢である。大木10式では前述の当遺跡のほか六反田遺跡、西ノ浜貝塚出土の深鉢があり、後期初頭の確実な例としては、当遺跡の弧状並行沈線間連続刺突文される深鉢があり(第117図4)、六反田遺跡第4号住居跡では縦位並行沈線間磨消縄文をもつ深鉢と体下部に隆帯がめぐる地文のみの深鉢が、堆積土中であるが共伴している。これらの隆帯は、大木10式に伴う下位隆帯より粗末で不整形である傾向がみられ、8・第115図は六反田遺跡出土の後期初頭の深鉢に器形の点に於いても近似する傾向がみられる。

田 中 則 和

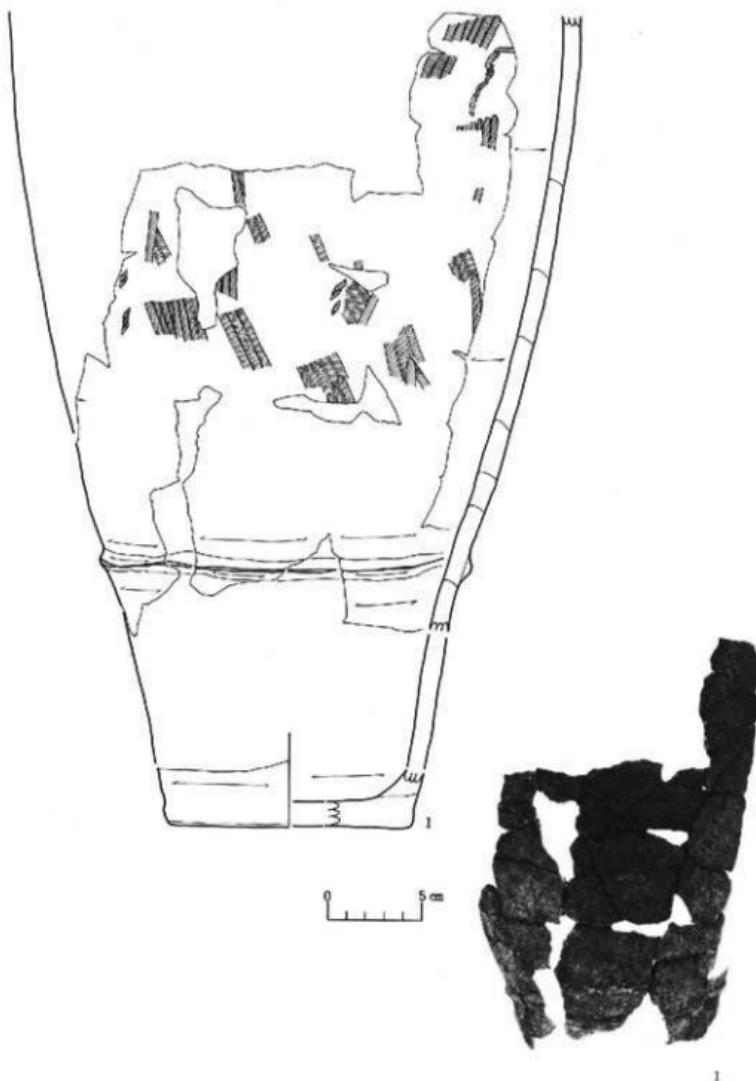


図	地 区	層段	部 位	器 形	施 文	・	同 様	分類	標 考
1-2	O-10(a)	Ⅱ	口縫部	浅 路	外底: 穴縫 内底: 扁状穿孔-横位穿孔	・	文	題	同一個体
3	N-7	Ⅱ	口縫部	浅 路	横位沈縫文+縫縫横位刺突文(-列)	・	文	題	—
4	J-7(b)	Ⅱ	口縫部	深 縫	施文R.L.網文+縫縫文→逆縫縫横位刺突文(-列)	・	文	題	—
5	M-7	Ⅱ	口縫部	深 路	山形文起・方型凹面文(施文)施文横縫-横位穿孔	・	文	題	—
6	N-7	Ⅱ	口縫部	浅 路	施位穿孔→横位L施文→施位周縫文沿うナギ	・	文	題	—
7	I-14(a)	Ⅱ	口縫部	浅 路	施位穿孔+横位L網文(施文)施縫	・	文	題	胎土に金銀粉を含む
8	J-7(a)	Ⅱ	体 部	深 縫	施文R.L.網文+縫縫	・	文	題	—

※以下、本文中の「縫」は表中の「縫縫」は同一意味である。※以下、口縫部-全体上やの資料は「口縫部」と表示している。

第114図 第VII群土器(1)

- 註 1. 田中 利和他「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会 1981
 2. 第VII群土器 本書第131図3
 3. 後藤 勝彦他「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第13集 1962
 4. 加藤 道男「青木旭遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 1982



第115図 第V群土器(2)

図	地	区	層位	部	形	底	施	文	調	物	分	考
1	J	-8(e)	目	口縁部欠損	深	36	12.7cm	・残空	・層位J.桐文→焼成研磨(体下部)		1	底径は不整形

第Ⅳ群土器 (第116~131図)

後期初頭の土器である。復元資料4点、破片資料681点出土した。梨野A遺跡出土土器の36%を占め全群土器中最も高い比率である。I~IV層中及び造構堆積土中に他群土器と共に混在しIII層中より329点と最も多く出土している。器形は口縁部形態などにより深鉢I~Ⅳ類、浅鉢I~Ⅲ類、小型鉢、壺I・II類、蓋に分類される。以下器形毎に土器分類基準(38~39頁)に掲げる文様形態等による大別11類、文様表出技法等による細別26類に従って述べる。

※但し突起一第11類は除く→観察表参照

深鉢I類(第116図1~6)

口縁部が外傾し体部が球形にふくらむもの。口縁部から体上部にかけての外形ラインが「く」の字状を呈する。口唇部外面に横位沈線のあるもの(2~6)は、後述の六反田遺跡後期初頭土器にはないので後期前葉の可能性もある。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(4)

長梢円形沈線文が口縁下部に横位に配される。

4 a類：沈帶磨消繩文のもの(2)

頸部に繩文施文帯と繩文磨消帯が対置されるもの。

5 a類：並行沈線間連続刺突文のもの(6)

口唇部の横位沈線下に並行沈線間小円形連続刺突文が「上」状に配される。

深鉢II類(第116図7~11、117図、118図1・2)

やや肥厚する口唇をもつ口縁部がわずかに外反しややふくらむ体部に転じるもの

A類：隆沈帯により口縁部と体部が区画されるもの。(第116図)

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(7)

わらび状沈線間磨消繩文が、隆沈帯に接続する「C」字状盲孔間隆沈線文(9類:II 縁部縦位装飾文)の直下に縦位に配される。

8 b類：上位隆沈帯区画文のもの(7・8・10・11)

口縁部と体部を隆沈帯で区画するもので、口縁部縦位隆沈装飾文(7・8・10)と接続する。

10 a類：口縁部縦位隆沈装飾文(7・8・9・10)

研磨した口縁部の山形突起より「C」字状or逆「C」字状盲孔間隆沈線文が下垂して隆沈帯に接続するもの(7・8)。逆「C」字状隆沈線文が下垂するもの(10)がある。

B類：口縁部から体部まで文様が連続するもの(第117図、第118図)

体部形態は明らかでないものが多いが体上部のふくらみが大きいもの(第118図1)、体上部があまりふくらまないもの(第118図2)がある。口縁部の尖る例もある(第117図7)。

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの（第117図5・7・8、第118図1・2）

渦状沈線間磨消繩文が体上部に展開するもの（第118図2）方形区画文が磨消繩文手法に転化して小渦状沈線間磨消繩文（大木10式の方形区画文に伴う弧状隆線文の転化か）と結合したものの（第118図1）、盲孔を基点とする逆「J」字状沈線間磨消繩文のもの（第117図8）がある。盲孔ある突起下を中心にし外寄する対称弧線状の沈線間磨消繩文が施文されるもの（第117図5）がある。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの（第117図2・3・4）

波状口縁の頂部付近に渦状沈線文が施文され、後研磨されるもの（2）、方形区画文の構成される口縁部の内面に横位楕円形弧状沈線文の施文されるもの（3）がある。

3 a類：「X」状・三角形状・斜行磨消繩文のもの（第117図1）

輪形隆文+継位鎖状隆線文（6 a類）より斜行磨消繩文の展開するもの。

5 a類：並行沈線間連続刺突文のもの（第117図4）

山形突起or 波状口縁で継位長楕円形沈線間に一列の刺突文があるものとないものとを弧状に対置させるもの。下位隆帶区画文（9類）をもつ。

6 a類：連続刺突隆線文のもの（第117図1）

鎖状隆線文（「鎖」は「押引」状）が隆形隆文を基本として下垂し斜行磨消繩文（3a類）が展開する。

7 a類：方形区画文のもの（第117図3）

9 類：下位隆帶区画文のもの（第117図4）

体上部と体下部を隆帶により区画する。隆帶は断面、不整台形で両辺に粗い沈線状の調整がある。隆帶下は磨きがされているが不完全で地文が残存している。

深鉢Ⅲ類（第118図3～6）

短かく外反する口縁部が逆「く」の字状に屈曲し体部に転じるもの

鈍状の隆帶をもつものをB類とし、もたないものをA類とする。

A類：器厚が薄く口縁端部に最大径をもつもの（3・4）と屈曲部に最大径をもつもの（5）がある。5の口縁部には「8」の字状の輪形隆文が施文されるが、これと組む文様要素は破片のため不明である。

10 a類：口縁部継位隆沈装飾文のもの（3・4）

小山形突起の輪形隆文と屈曲稜線上の輪形隆文間に溝状沈線ある逆「C」字状隆線文（「逆C字状継位隆沈線文」）が配されるもの。屈曲部、体上部には沈線文の一部が観察される。3・4は、同一個体と思われる。

B類：短かく外反する口縁部が二段口縁的な鈍状隆帶により体部に転じるもの（6）。突起部分に貫通孔が1個あり、器形等は浅鉢I類に近い。

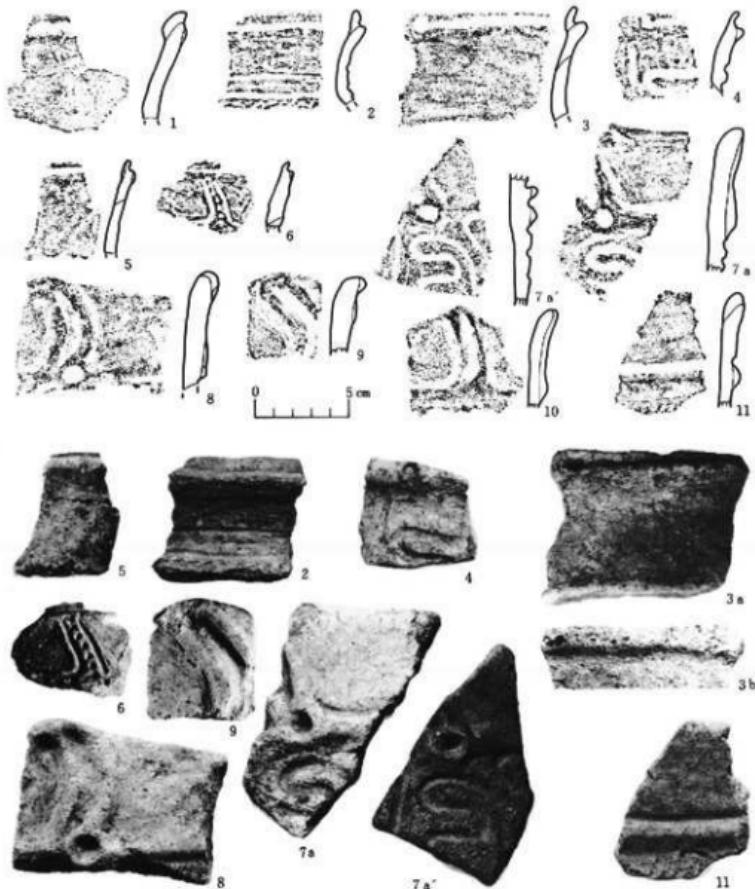


図	地区・遺構	層位	部 位	形 形	施 文	・	測 宽	分 類	備 考
1	J-8(c)	III	口縁部	溝	溝丁	(円錐)	—	鉋	—
2	N-7	I	口縁部	溝	溝	丁	圓錐R L 滅文+沈痕削痕文+横挫沈離文(口付部)	Ⅳa+Ⅳb	瓦群上器の可能性
3	L-7(b)	III	口縁部	溝	溝	丁	肩丸+横挫行切削文+研磨	Ⅳb	瓦群上器の可能性
4	M-7(d)	III	口縁部	溝	溝	丁	肩丸+横挫行切削文+横挫長槽円形沈離文+漏位沈離文	Ⅳb+Ⅰb	瓦群上器の可能性
5	32 D	地	口縁部	溝	溝	丁	横挫沈離文(口付部)+研磨	Ⅳb	瓦群下器の可能性
6	M-7(d)	III	口縁部	溝	溝	丁	横挫沈離文(口付部)+並行化鉛溝造続小円形削突文+研磨	Ⅳb+Ⅴa	瓦群下器の可能性
7	K-8(c)	N b	口縁部	溝	溝	丁	透C, L字状盲孔開削痕文+透次器, わらび状沈離削痕文	Ⅳ(a+1)-Ⅵb	—
8	I-9(a)	III	口縁部	溝	溝	BA	[小山形突起] 溝丸型+透C, L字状盲孔開削文+直孔+研磨	Ⅳd+Ⅹa+Ⅷb	—
9	西 壁	—	口縁部	溝	溝	BA	[山形突起] 溝丸型+透C, L字状盲孔開削文+研磨	Ⅳd+Ⅹc	—
10	K-13(e)	N a	口縁部	溝	溝	BA	[山形突起] 溝丸型+透C, L字状盲孔開削文+研磨	Ⅳd+Ⅹa+Ⅷb	—
11	34 D	堆	口縁部	溝	溝	BA	透沈離+研磨	Ⅳb	—

第116図 第V群工具(1)

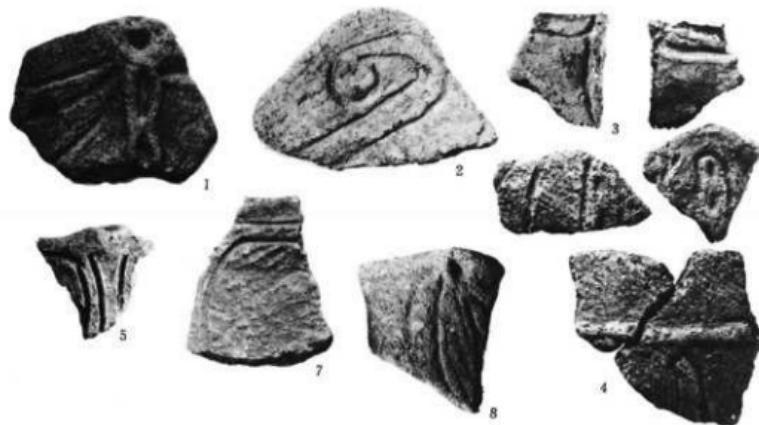
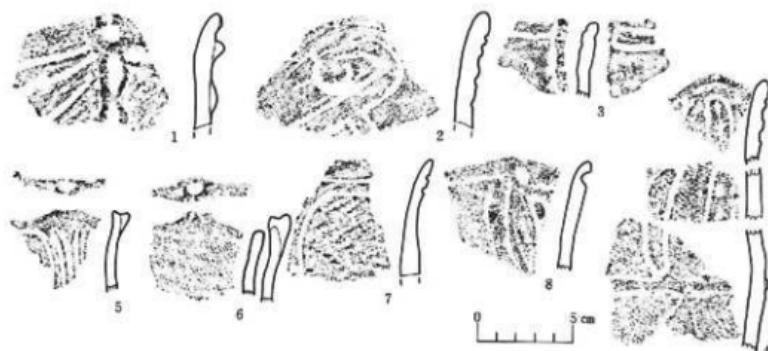


図	地区・遺構	部位	部 位	器 形	縄 文	調 整	分類	備考
1	35 D	堆1	口 縦 帯	深鉢 II B	輪形縄文+側付傾倒縄文→斜付 L R 縄文+斜行沈附縫隙縫涌文	縫6a+2a	波状口縫	
2	K-6(b)	II	口 縦 部	深鉢 II B	直疣沈縄文→斜縫	縫1b	波状口縫	
3	J-8(a)	III	口 縦 部	浅鉢 II B	「小突起」輪形傾倒縫→横付沈縫(方彌形面文)+丁字沈縫	縫7a+1b	波状口縫	
4	M-6(c)	III	口 縦 部	深鉢 II B	縫11, L 縄文+斜疣沈縫達刺痕文、斜疣沈縫文、下位隆筋文	縫5a+1b+9	波状口縫	
5	J-8(c)	III	口 縦 部	深鉢 II B	「山形突起」輪形傾倒縫→横付沈縫(方彌形面文)+丁字沈縫	縫11b+1a	波状口縫	
6	K-7(d)	I	口 縦 部	深鉢 II B	「山形突起」輪形+直疣縫+直筋系文	縫11b	——	
7	O-6(b)	II	口 縦 部	深鉢 II B	横付 L R 縄文+斜付沈縫脇唇縫縫文	縫1a	——	
8	K-8(b)	II	口 縦 帯	深鉢 II B	直疣+横付沈縫 X+逆L R 斜付沈縫縫涌文+斜縫(口縫25)	縫5a+1a	波状口縫	

第117図 第Ⅳ群土器(2)



区	地 区	層位	器 形	施 文	調 整	分 類	備 考
1	1.-7(b)	Ⅲ	口縁部～侈部 深鉢ⅡB	(山形突起)輪位R捲文+部狀波線外唇沿繩文+斜状波綱内唇沿繩文	留11b+1a	—	
2	L-S(c)	Ⅲ	口縁部～侈部 深鉢ⅡB	輪位R捲文+部狀波綱外唇沿繩文+斜唇(口縁部)	留1a	波状口縁or突起	
3	K-S(b)	I	口 縁 部 深鉢ⅠA	(小山形突起)波C字状波紋外唇沿繩文+輪形柔文+沈繩文	留11b+10a	4と同一様体?	
4	K-S(c)	Ⅲ	口 縁 部 深鉢ⅠA	(小山形突起)波C字状波紋外唇沿繩文+輪形柔文+沈繩文	留11b+10a	3と同一様体?	
5	J-S(a)	I	口 縁 部 深鉢ⅠA	「8」の字状波形繩文+波唇+背孔+斜唇	留6a	—	
6	J-T(b)	I	口 縁 部 深鉢ⅠB	突起(真油孔)+地紋把手+斜唇波紋+斜唇L.R繩文	留11a	二段口縁的	

第118図 第Ⅷ群土器(3)

深鉢IV類(第119図～121図)

口縁部から体上部にかけて内弯するもの。内弯度が弱く直線的な外傾に近いものをB類、

口唇部が短かく外反するものをC類とし、それ以外のものをA類として一括して扱う。

A類：(第119図、第120図1・3・4・7・8、第121図1・2・4～7)

①口縁部から体部まで文様が連続するもの

1 a類：渦状・弧状磨消繩文(撫糸文)のもの(第119図1・8)

(1)は縦位横円形の沈線間磨消繩文で上部が一部隆沈文のもの。これは連続縦位三角形状沈線文(3 a類)と共に文様単位を構成している。(8)は口縁部に渦状沈線間磨消繩文が施文され体部に展開していくものもある。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(第119図1・2・4・7、第120図1)

(1)は縦位波状沈線文の他、1 a類と組んで口縁部の盲孔間を弧状沈線文でつないでいる。

弧状沈線文を施文後研磨されるもの(第119図2・第120図1)と地文の上に施文されるもの(第119図4～網目状撫糸文・第119図7～繩文)がある。

2 a類：渦状・弧状隆線間研磨文のもの(第121図1)

2 b類：渦状・弧状隆沈線文のもの(5)

3 a類：「X」状・三角形状・斜行磨消繩文のもの(第119図3・第120図6)

口唇部の小突起直下の輪形隆文を頂点として三角形状に並行沈線間磨消繩文が展開し連続小円形刺突文が下垂するもの。横位沈線と斜行磨消繩文がみられるものがある(3)。

5 a類：沈線間連続刺突文のもの(第119図6・7)

②口縁部と体部を区画するもの(第120図4・8・9、第121図4・5・6・7)

逆「く」の字状の屈曲により口縁部と体部を区画するもの(第120図8)、陰沈帯により区画するもの(9)、隆帯により区画するもの(4)、連続刺突隆線により区画されるもの(第121図6)がある。

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(第120図8・9)

口縁部の山形突起より下垂する「8」の字状輪形隆文に縦位に連続する輪形隆文を頂点として対称弧線間磨消繩文が配されるもの(9)があり、盲孔+縦位波状沈線文と共に存する。(8)は山形突起下の「8」の字状盲孔として対称弧線間磨消繩文と三角形状沈線間磨消繩文？が展開するものである。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(第121図5・7)

波状口縁or山形突起頂部下の盲孔+鎖状沈線に連続して対称弧状沈線文の配き

れるもの(5)。弧状沈線文の一部がみられるもの(7)がある。

4 a類：沈帯磨消繩文のもの(第121図7)

口縁部に施文されるが、充填が磨消かは磨滅等のため不明である。内弯度が強く浅鉢の可能性もある。研磨された帶状部が存在しないことから後期前葉の範囲で考えた方がいいのかも知れない。

5 b類：連続刺突文が単独で文様要素となるもの(第120図4・第121図4・6)

連続小円形刺突文が、横位鎖状隆線文の上位に2列に施文されるもの(第121図6)、波状口縁又は山形突起の口唇部の外側・端部・内面(1個)に小円形刺突文が施文されるもの(第121図4)、波状口縁の頂部と直下に盲孔・輪形隆文が連続するものも一応この類に含める(第120図4)。

6 a類：連続刺突降線文(第121図6)

横位鎖状降線文(「鎖」は三角形状の刺突による)により上位の連続小円形刺突文と下位の地文(繩文)施文部を区画している。口縁部と体部の区画帯に属する可能性がある。これは内弯度が強くあるいは浅鉢の可能性がある。

B類：内弯度が弱く直線的な外傾に近いもの(第120図2・5・6、第121図3)

B類は全て口縁部から体部まで文様が連続するという共通性をもっている。

5 b類：連続刺突文単独で文様要素となるもの(第121図3)

不整横位長方形刺突が数列にわたり施文される。第Ⅳ群土器に伴う刺突文の中でこの刺突文の単位形態は、これのみであり、あるいは、大木10式末葉までの範囲で捉えた方がよいのかも知れない。

7 a類：沈線文や継位隆沈線により方形区画文を構成するもの(第120図2)

沈線により方形区画し地文(綱目状然糸文)部と研磨部を対置している。破片のため、充填地文か磨消繩文かは不明である。120図5は、沈線文による方形区画文に近いが破片のため正確な文様構成は不明である。

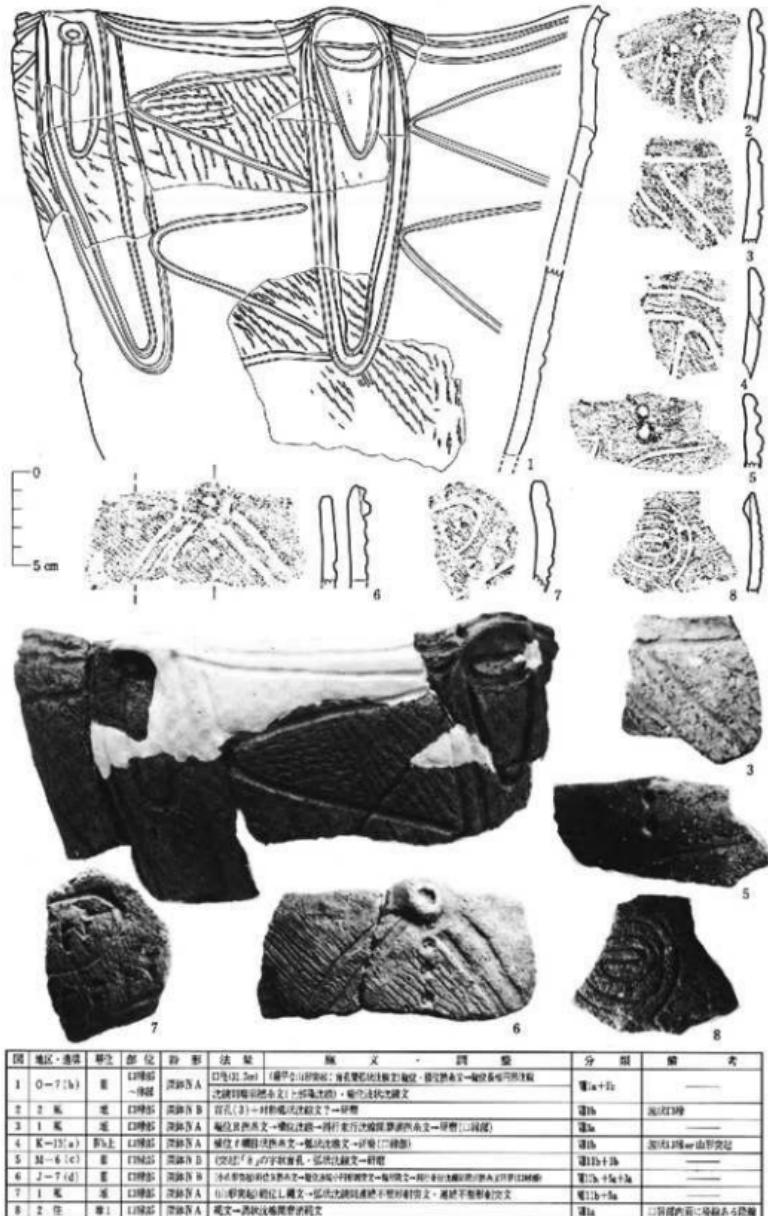
7 b類：連続刺突文による方形区画文のもの(第120図6)

並行沈線間小円形連続刺突文により「↑」状文を構成するものであるが、一応7 b類に含めた。器面は地文(然糸文)・沈線の施文後研磨されている。口唇部が尖っている点は120図5と共通する。

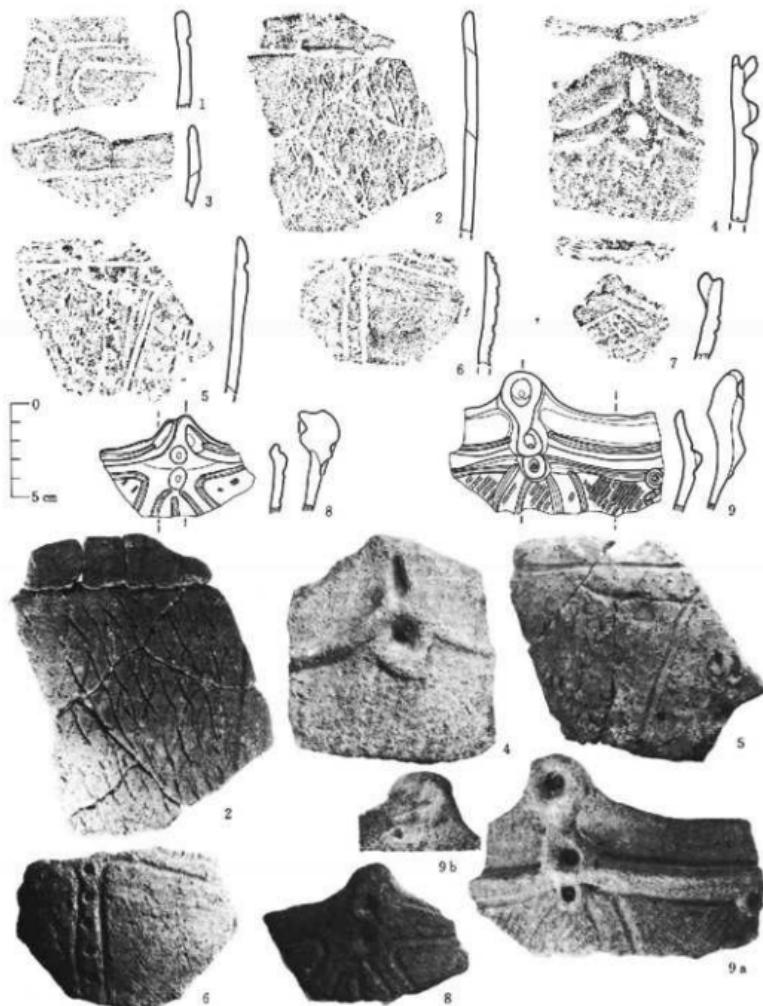
C類：口唇部が短く外反してから内寄に転じるもの(第121図8・9)

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(第121図8・9)

沈帶で口縁部と体部を区画し、わらび状沈線文と横位長梢円形沈線文を施文した後、器面を研磨しているもの(9)、口縁部と体部が段で画され、輪形隆文と長梢円形沈線文をもつものの(8)がある。



第119図 第Ⅳ群土器(4)



图号	地区	类型	特征	器形	纹饰	说明	分属	参考
1	N-7(d)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿A	锯齿状A	锯齿状A	Ⅲlb	——
2	P-II	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿B	锯齿状B	锯齿状B	Ⅲlc	——
3	K-II(a)	Ⅲb上	□ 破 部	深缺齿C	锯齿状C	锯齿状C	Ⅲld	——
4	N-7(a)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿D	锯齿状D	锯齿状D	Ⅲlb+4b	——
5	N-6(e)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿E	锯齿状E	锯齿状E	Ⅲlb	——
6	K-7(d)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿F	锯齿状F	锯齿状F	Ⅲlc	——
7	O-6(h)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿G	锯齿状G	锯齿状G	Ⅲlb+4b+1b	——
8	J-8(c)	Ⅲ	□ 破 部	深缺齿H	锯齿状H	锯齿状H	Ⅲlb+4b	——
9	35-D	磨 部	□ 磨 部	深缺齿I	锯齿状I	锯齿状I	Ⅲlb+4b+1b	——

第120图 第Ⅲ群器 (5)

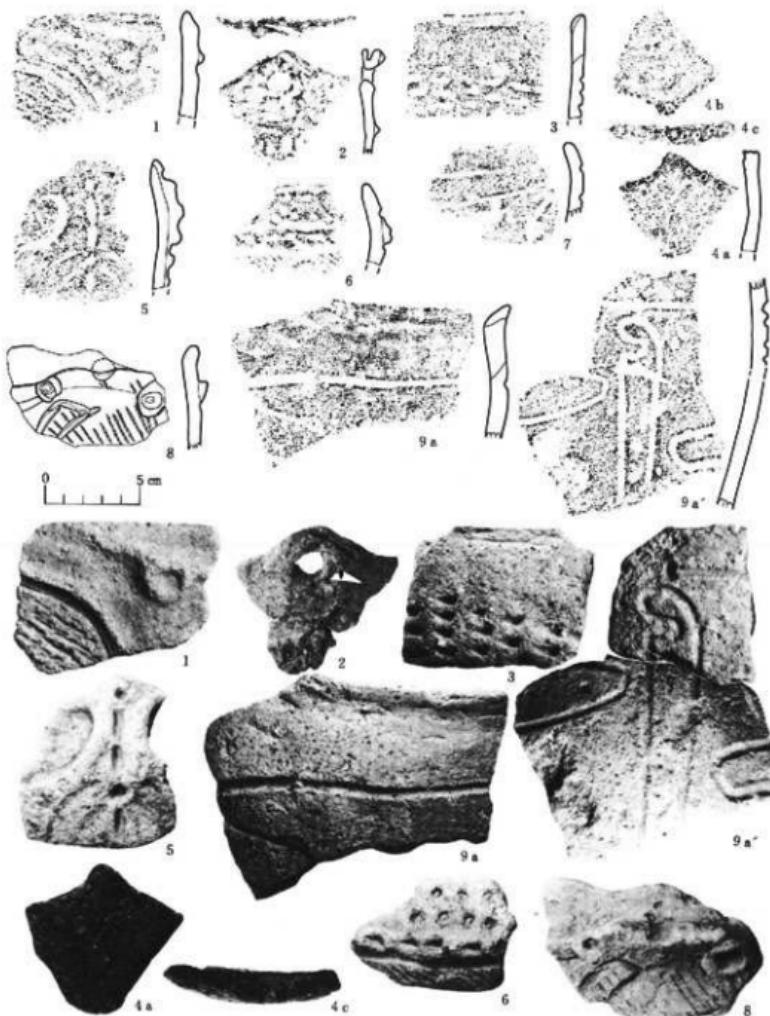


図	地区・遺跡	層位	部 位	器 物	施 文		分 類	考
					期	文		
1	N-7(d)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形A	輪形施文+長形的輪形環狀施文、弧狀切縫、横切口沿+横切口沿施文		1a	
2	2 黒 墓	Ⅲ	口 線 部	深鉢形A	(山形起立:深圓孔+圓狀施文、直通孔) + (C:弓形隨掩文+橫切溝狀輪形文)	11a ₁ +12b+5b		
3	L-7(a)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形B	横切口沿+橫切口沿+輪形		1b	
4	O-6(c)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形A	(山形起立:口部的上端+外延+連續小凹形割文: 内面には丁目)	13b+15b		
5	L-7(a)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形A	直孔+半圓孔的圓孔文+対馬式波狀施文、櫛狀輪形環狀輪形文	14a+15b	以那美起或浅灰二絆	
6	M-6(b)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形A	横切口沿+輪形環狀輪形文+縱孔+L型窓+橫切口沿施文、櫛狀輪形環狀輪形文	16a+4a		
7	M-7(c)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形C	縱孔+手孔(通孔)、圓孔+橫孔、圓孔+橫孔+輪形文	16a+7+1b		
8	L-7(d)	Ⅲ	口 線 部	深鉢形C	輪形文+圓孔+手孔(通孔)、圓孔+橫孔+輪形文	16b		
9	K-8(a)	Ⅲ	口縫部+外唇	深鉢形C	輪形文+圓孔+手孔(通孔)、圓孔+橫孔+輪形文+縫隙	16b		

第121図 第6群土器(6)

深鉢V類(第122図・第123図1~3)

口縁部から体部まで直線的に外傾するもの

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(第122図8)

8は、小山形突起下の盲孔十輪形隆文十縦位鎖状隆線文と組んで弧状磨消繩文が施文される。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(第122図1・2・4・5・7・8・9、第123図3)

縦位波状沈線文のもの(第122図1・2・4・5)。IIは斜行並行沈線文(3 a類)と連結して文様単位になっている。9は、並行沈線間連続小円形刺突文(5 a類)と組む。123図3は頂部に溝状の沈線をもつ。

3 a類：斜行磨消繩文のもの(第122図3)

3 b類：「X」状・三角形状・斜行沈線文のもの(第122図1)

縦位波状沈線文(1 b類)と連結して文様単位になるものがある。

4 a類：沈帯磨消繩文のもの(第122図6)

4 b類：横位直状沈線文のもの(第122図5)

5 a類：並行沈線間連続小円形刺突文のもの(第122図9・10)

9は口縁部に並行沈線間連続小円形刺突文が配され弧状沈線文(1 b類)に連結している。

6 a類：縦位連続刺突隆線文のもの(第122図7・8)

8は、小山形突起下の盲孔十輪形隆文十縦位鎖状隆線文(「鎖」は三角形状の刺突)と組んで弧状磨消繩文がみられる。

8 a類：沈帯により口縁部と体部を区画するもの(第122図3?)

この他第122図5・6は方形区画文になるのか明瞭ではない。第123図1は、頂部に盲孔ある小突起をもつ地文のみのもの。2は、口唇部に沈線をもつ点で深鉢I類に似るが、地文のみのものである。

深鉢VI類(第123図4~6)

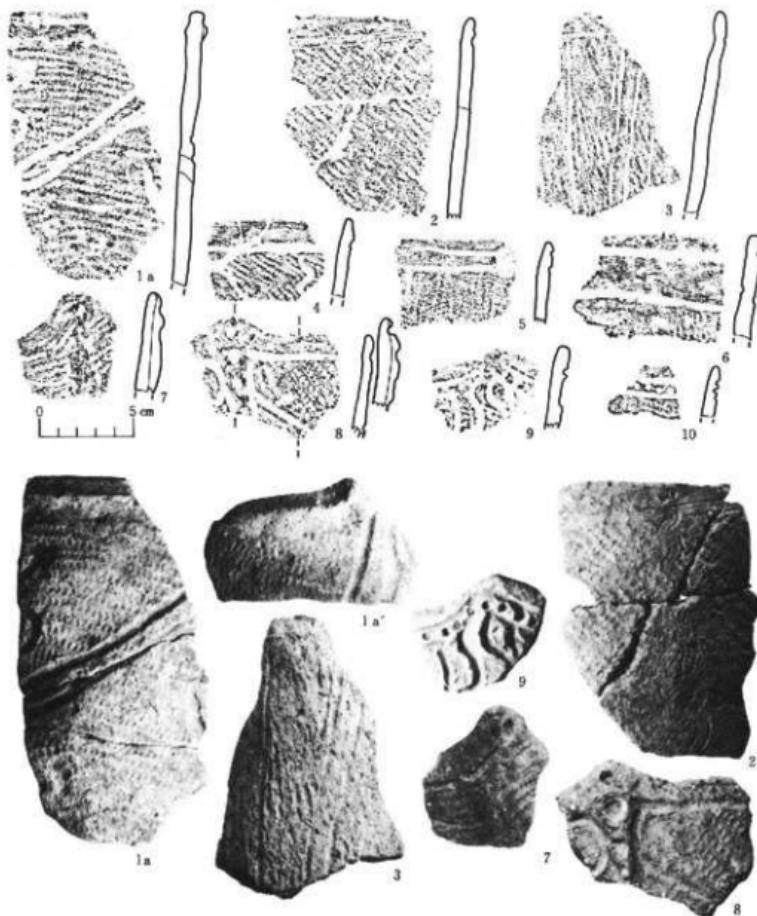
口縁部から体上部にかけては直線的であるが、体中央~下辺に最大径をもってゆるやかに内湾する大型(径20~32cm)の深鉢と思われるものである。

1 a類：渦状・弧状磨消繩文(燃糸文)のもの(5)

横位弧状鎖状隆線文(6 a類)と連結して縦位渦状沈線間磨消燃糸文(網目状燃糸文)の施文されるもの。

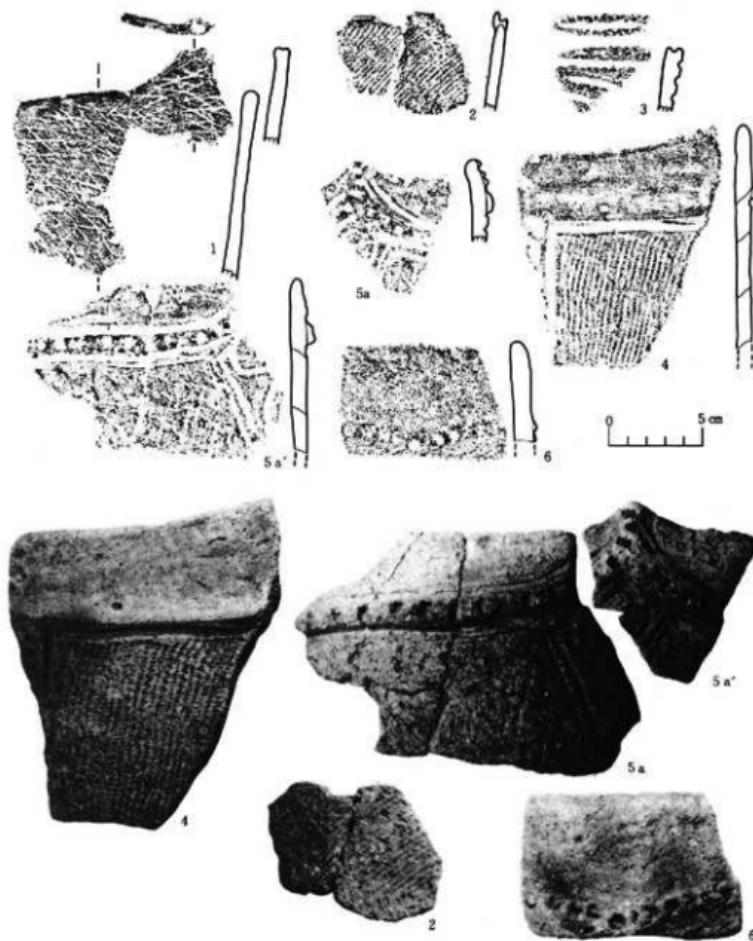
6 a類：連続刺突隆線文のもの(4~6)

横位連続小円形刺突文が口縁部と体部を区画するようであるが小山形突起に弧状に連



区	地	区	部	位	器	形	期	文	類	分	類
1	J-7 (d)	直	口	深	杯	V	隆唇(口斜面)→切込L.R.桐文→切込平行波線文→切込波状波文	桐文	1	1a-3a	——
2	L-6 (c)	直	口	深	杯	V	隆唇L.R.桐文→切込波状波文→切込(口斜面)	桐文	1b	1b	——
3	O-6 (b)	直	口	深	杯	V	切込直斜系文→切込平行波線文→切込波状波文	切込波状波文	桐文	1c	1c
4	K-12 (b)	直	口	深	杯	V	切込L.R.桐文→波状V→切込(口斜面)	桐文	1d-7	1b	
5	N-7 (d)	直	口	深	杯	V	切込L.R.桐文→横波直斜系文→切込波状波文	桐文	1e	1b	
6	O-6 (b)	直	口	深	杯	V	切込直斜系文→切込波状波文→切込波状波文	桐文	1f	1b	
7	N-7 (b)	直	口	深	杯	V	(山形突起)十輪波状波文→切込L.R.桐文→波状波状波文→切込(口斜面)	桐文	1g-1a	1b	
8	O-7 (a)	直	口	深	杯	V	(山形突起)十輪波状波文→切込L.R.桐文→切込波状波文→切込(口斜面)	桐文	1h-1a	1a	
9	L-8 (d)	直	口	深	杯	V?	(山形突起)十輪L.R.桐文→切込波状波文→切込小円対斜面文→直底(口斜面)→切込	桐文	1i-1+5a+1b	1b	
10	K-6 (b)	直	口	深	杯	V?	桐文→切込平行波線文→切込小円対斜面文→直底(口斜面)	桐文	1j	1b	

第122図 第9群土器(7)



地区・遺構	層位	場所	器形	陶文	測量	分類	備考
1 33-D	地	口縫部	深鉢形	山形文起：側邊に省孔+横孔網目状斜文		Ⅳ13b	—
2 K-II	西h上	口縫部	深鉢形	側邊直丸文(大輪文)口縫部：斜孔L、B直文		Ⅳ6b	—
3 M-T(a)	里	口縫部	深鉢形	直出捺文(大輪縫部)・側孔直輪文一印置		Ⅳ1b	—
4 I-T(e)	里	口縫部	深鉢形	側孔直輪文・側孔L、K直文・直出捺文(大輪縫部)・斜孔(口縫部)		Ⅳ6b+6a	波紋口縫
5 M-S(c)	里	口縫部	深鉢形	(山形文起)・直孔(口縫部)不整小円孔直尖底斜文+直孔(口縫部)直孔斜斜文		Ⅳ13b+6a+3a	—
6 M-S(d)	里	口縫部	深鉢形	側孔直小円孔斜對穿文+省孔+直孔(口縫部)		Ⅳ6a	—

第123図 第8群土器(8)

絡するもの(5)、縦位渦状沈線間磨消繩糸文(1a類)とも連結する。6も横位連續小円形刺突隆線文でありやや下った盲孔状の刺突が基点になっている。波状口縁で隆沈帯(8b類)で口縁部と体部を画し輪形隆文?+縦位鎖状隆線文の展開するもの(4)。破片の側縁から弧状磨消繩文の存在が予想される。

8b類：上位隆沈帯区画文のあるもの(4)

縦位輪形隆文+沈線間磨位鎖状隆線文(6a類)が下垂する。

深鉢Ⅶ類(第124図1・2)

口縁部が外傾し体上部が球形に近くふくらむもので最大径が口縁端部にあるもの、いわゆる菱形に近いものである。器形、文様構成は深鉢Ⅰ類に類似し深鉢Ⅱ類に包括される可能性がある。

1a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(1)

「8」の字盲孔を中心にして横位長楕円形沈線間磨消繩文が配されるもの。

4b類：横位直状沈線文のもの(2)

盲孔十輪形隆文の両側に横位直状沈線文がめぐるもの。輪形隆文の下には縦位鎖状隆線文(6a類)が下垂する。

6a類：連続刺突隆線文のもの(2)

縦位鎖状隆線文が「8」の字状盲孔より下垂する。

深鉢Ⅷ類(第124図3・4・5)

分類しきれなかった深鉢を括する。3・4は口縁部が短く内傾する点で共通性があるが、文様構成の上で違いがあり、今回はあえて器形・文様について言及しないが、3については、浅鉢Ⅰ類の器形、文様構成に共通する点が多い。

浅鉢

器高より口径が大であると推定されるものを浅鉢とし器形よりⅢ類に分類する。

浅鉢Ⅰ類(第124図6・7)

口縁部が短く内傾し急激に外傾に転じるもの。6には突起十把手がついている。

5b類：連続刺突文単独で文様要素となるもの(7)

内傾する口縁部と口唇頂部に連続刺突文が施されたもので口唇頂部の刺突は斜位である。

浅鉢Ⅱ類(第124図8)

内弯する口縁部がやや内傾し、稜帶を形成して急激に外傾に転じるものである。口唇部から稜帶にかけて環状の縦位把手が付されている。

5b類：連続刺突文単独で文様要素を構成するもの(8)

連続小円形刺突文が乱雜に施文されている。

浅鉢Ⅲ類(第124図9)

口縁部～体部にかけて内弯するものである。

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(9)

弧状沈線間磨消繩文が小突起の輪形隆文より下垂する。

小型鉢(第124図10・11)

器厚が4～5mmと薄く、口縁形態が直線的に外傾し、「深鉢」と分類したものより概して

小さいものを、深鉢、浅鉢から除外して小型鉢とした。

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(10)

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの。11は横位入組状沈線文である。

壺

口径が小さく、体中央部～下部に最大径があるものを壺とし、器形よりI・II類に分類する。

壺I類(第125図1～3)

口縁部が外傾し「く」の字状に体下部に最大径のある体部に転じるもの。注口をもつもの

(3)がある。1aと1a'は同一個体の可能性が高い。

5 b類：連続刺突文が単独で文様要素となるもの(1a・1a')

6 a類：連続刺突隆線文のもの(1a)

ねじり円筒突起の頂部から領状隆線文(細長いえぐるような刺突により「領」をつくるもの)が、らせん形をえがいて縦位把手に沿って下垂し、口縁部と体部の境を横走する。

10 a類：口縁部縦位隆沈装飾文のもの(1a')

小突起の頂部の盲孔と横位領状隆線文上の盲孔を結んで溝状沈線ある「I」字状隆線文('J'字状隆沈線文)が装飾される。

壺II類(第125図4～5)

口唇部がわずかに外反(4)又は肥厚し(5)体下部に最大径ある体部になるもの

1 a類：渦状・弧状磨消繩文のもの(4・5)

4には渦状沈線間磨消繩文が施文される。5も渦状沈線間磨消繩文+斜行磨消繩文(3a類)が施文されている。

4 a類：沈帶磨消繩文のもの(5)

5の肥厚する口唇部直下に並行沈線にはさまれた繩文施文帯があり上下の研磨部と対置される。充填繩文か磨消繩文(狭義)かは不明である。

4b: 類: 横位直状沈線文のもの(4)

6は、口縁部が欠損しており、器形分類できないが特徴的な小楕円形刺突文が横位隆線や体部に横位に連続して施文される(5 b 類・6 a 類)もので、盲孔+沈線文と組んで文様を構成している。

蓋(第126図1~5)

1 a 類: 渦状・弧状磨消繩文のもの(1)

長楕円形沈線間磨消繩文が円周方向に展開するもの。

1 b 類: 渦状・弧状沈線文のもの(2)

弧状並行沈線文のもの(磨消繩文の可能性あり)

5 b 類: 連続刺突文が単独で文様要素となるもの(3~5)

弧状のもの(4)アトランダムに施文されるもの(3・5)。

体部資料 (第126~129図)

1 a 類: 渦状・弧状磨消繩文(第126図6~14)

渦状磨消繩文(6・8 a・11・14)とそれに組み合うと思われる三角形状沈線間磨消繩文(8 a'・9・10)及び文様要素は完結していないが、紡錘形状磨消繩文(3と、12の)のような弧状沈線間磨消繩文がある。

1 b 類: 渦状・弧状沈線文(第126図2・15、第127図1・4、第128図2~8)

第127図1は楕円形沈線文及びその他の弧状沈線文であるが、全体構成については不明である。4は細沈線文で、類例は6分土壙にある(第51図2)。他遺跡の例としては、小名浜C地点貝塚などで出土しており「称名寺式・掘之内I式に併行して継続的に製作された」と考えられており、後期前葉の範囲で考えておいたほうがよいのかも知れない。縦位波状沈線文は磨消繩文とくむ(第128図1・3)。

2 a 類: 弧状隆線間研磨文(第127図2・3)

2は弧状沈線文、3は横位沈線文・盲孔と各々くむ。

3 a 類: 「X」状・三角形状・斜行磨消繩文(第127図5・6・8・9)

6は輪形隆文+「X」状沈線間磨消繩文と思われる縦位連続三角形隆線間研磨(3c類)とくむ。

8は、渦巻逆三角形連続磨消繩文として機能することが多く、9は六反田遺跡に類例がある。^{註23)}

3 c 類: 「X」状・三角形状・斜行隆線間研磨文(第127図6)

連続縦位三角形状隆線間研磨文+盲孔は、「X」状沈線間磨消繩文(3 a 類)とくむ。

4 a 類: 沈帶磨消繩文(第127図7)

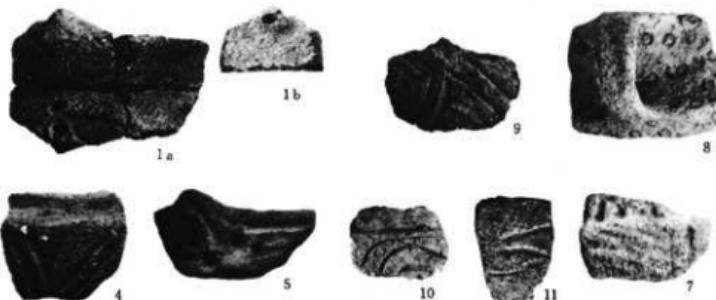
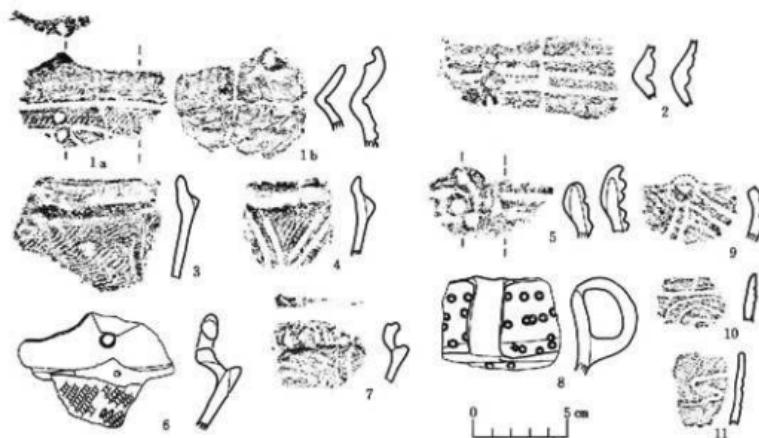


図	地区・地層	部	位	器 形	施 文	測 長	幅	分 類	標 種	
1	J-7 (e)	口	縫	縫	深鉢形	山形文+内底一背丸点+横L.R.横文+系状孔+縫文+口縫	縫1b+1a+6a	—	—	
2	K-10 (b)	口	縫	縫	深鉢形	横L.R.横文+縫文+口縫	縫6b+6a	縫底が凹深い	—	
3	K-10 (b)	口	縫	縫	深鉢形	縫L.R.横文+低状文+縫文+口縫	縫1b	深HJN?	—	
4	J-8 (d)	口	縫	縫	深鉢形	縫L.R.横文+口縫底が縫文+縫底(L.R.縫)	縫1a	縫HJN底に深HJNの付着物	—	
5	K-7 (d)	口	縫	縫	深鉢形	(小山形文點+縫) C字状背丸点横L.R.横文+縫底文+背丸+縫制横文	縫1b+10a+4b	—	—	
6	L-7 (a)	口	縫	縫	深鉢形	(縫軸+縫底肥厚+背丸孔+背丸孔L.R.横文+縫縫)	縫1a	—	—	
7	J-7 (c)	口	縫	縫	深鉢形	縫文+縫軸+縫底肥厚+背丸孔+背丸孔L.R.横文+縫縫	縫1b+4c?	—	—	
8	生 地1	口	縫	縫	深鉢形	縫底肥厚+通縫小円孔横文	縫1b	—	—	
9	K-7 (d)	口	縫	縫	深鉢形	(小山形文點+縫) L.R.横文+縫制横文+縫底が縫文+縫縫	縫1b+1a	—	—	
10	K-8	口	縫	縫	小型鉢	縫文+縫軸+背丸孔+背丸孔L.R.横文+人字縫横文+縫底が縫文	縫1a+6c?	—	—	
11	D-3	地	1	縫	縫	小型鉢	縫L.R.横文+人字縫横文+縫底	縫1b	—	—

第124図 第Ⅳ群土器(9)

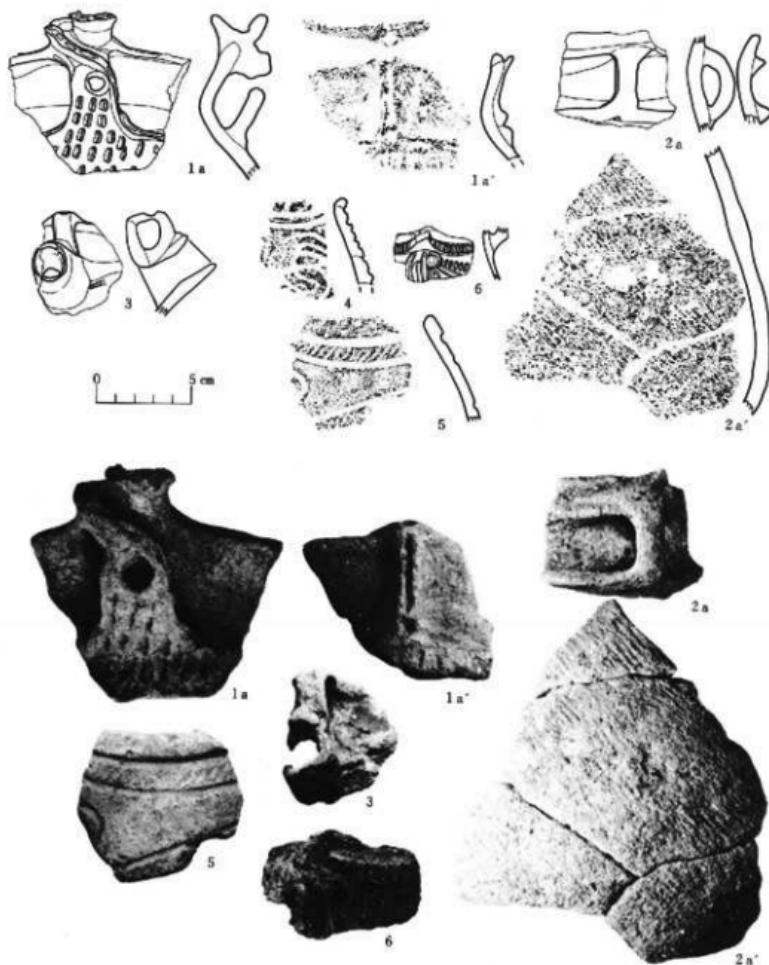


図	地区・施設	単位	部 位	器 形	施 実	圖 積	分類	備 考
1a	M-7(d)	Ⅱ	口 緑 頂	盤	右七寸円筒形斜面+輪内把手(直通)	縫合蓋内側達地斜面文	Ⅱb+Ⅲa+Ⅳa	
1a'	N-7(b)	Ⅱ	口 緑 頂	盤	小山形突起+輪内把手(直通)	字模造地斜面+横内把手斜面文	Ⅱb+Ⅲa+Ⅳa	同一施作か
2	K-7(d)	Ⅱ	口 緑 頂	盤	輪内底内側斜面+輪内把手	毎段長谷川連続斜面文	Ⅱb	
3	M-7	Ⅱ	口 緑 頂(直通)	盤	山形突起	直通+輪内把手+十字口輪内斜面文	Ⅱb?	
4	K-12(e)	Ⅱ	口 緑 頂	盤	縫合蓋斜面文+底内側斜面斜面文	縫合蓋斜面文	Ⅱb+Ⅲa	
5	J-7(a)	Ⅱ	口 緑 頂	盤	字模造斜面文+底内側斜面斜面文	縫合蓋斜面文	Ⅱb+Ⅲa+Ⅳa	
6	I	Ⅱ	口 緑 頂	盤	縫合蓋斜面文+縫合蓋内側斜面文+底内側斜面斜面文	縫合蓋斜面文	Ⅱb	

第125図 第10群土器(10)

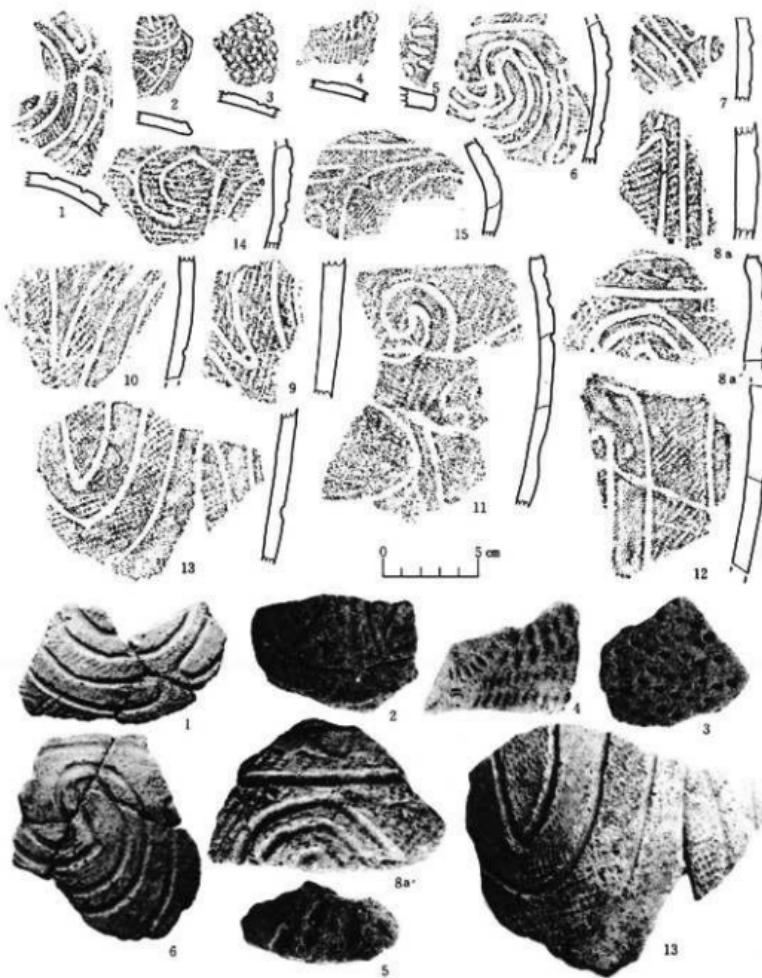


図	地名・遺跡	層位	部	形	施文	測定	分類	備考
1	O-6 (b)	Ⅲ	体	面	縦	横径1.1mm文→斜行平行波状凹槽削消施文	Ⅲla	—
2	K-8 (b)	Ⅲ	複数部	面	縦	横径1.1mm文→斜行平行波状凹槽削消施文	Ⅲlb	磨滅施文の可能性あり
3	J-7 (d)	Ⅲ	体	面	縦	横径約1.1mm文→斜行	Ⅲlb	—
4	M-6 (b)	Ⅲ	体	面	縦	複数斜み波状文(一部強状)→研磨?	Ⅲlb	—
5	M-13(b)	Ⅳb	複数部	面	縦	複数斜行平行削消文→ナメ	Ⅲlb	—
6	O-6 (c)	Ⅲ	体	面	縦	横径1.1mm削消削削文	Ⅲla	—
7	O-7 (d)	Ⅲ	体	面	縦	縦文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
8	N-7	Ⅲ	体	面	縦	縦1.1mm文→表面・底状丸頭凹槽削消施文	Ⅲla	—
9	M-7 (c)	Ⅲ	体	面	縦	横径1.1mm文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
10	31-D	Ⅲ	体	面	縦	斜行1.1mm文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
11	O-7 (c)	Ⅲ	体	面	縦	斜行1.1mm文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
12	I-7 (b)	Ⅲ	体	面	縦	縦削削文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
13	K-8 (b)	Ⅲ	体	面	縦	横径1.1mm文→複数斜行削削削文	Ⅲla	—
14	M-2 (c)	Ⅲ	体	面	縦	斜行1.1mm文→複数斜行削削削文	Ⅲla	上下逆の可逆性あり
15	N-7 (a)	Ⅲ	体	面	縦	縦文→複数斜行削削削文	Ⅲlb	磨滅がはげしい

第126図 第3群土器 (11)

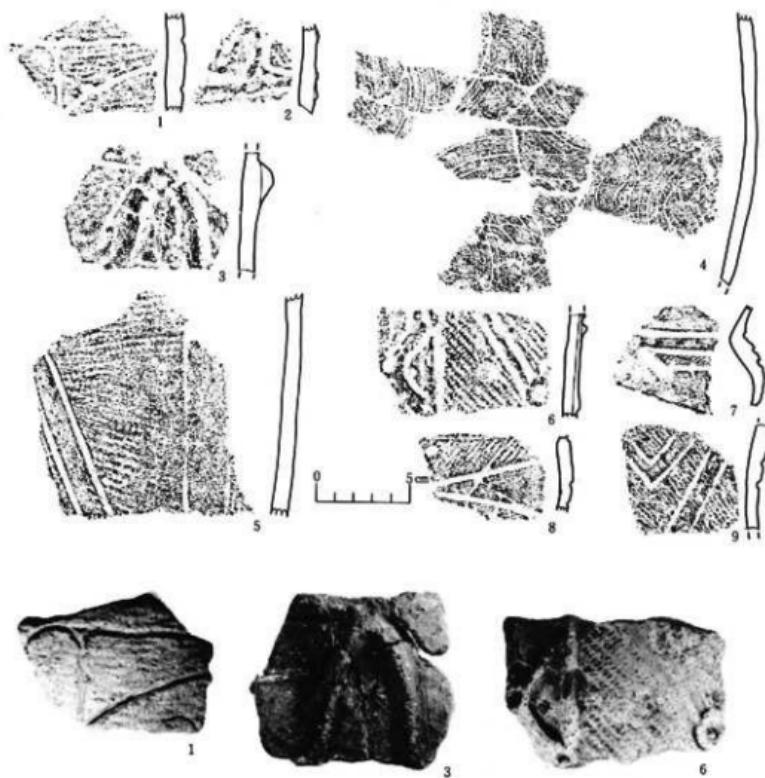
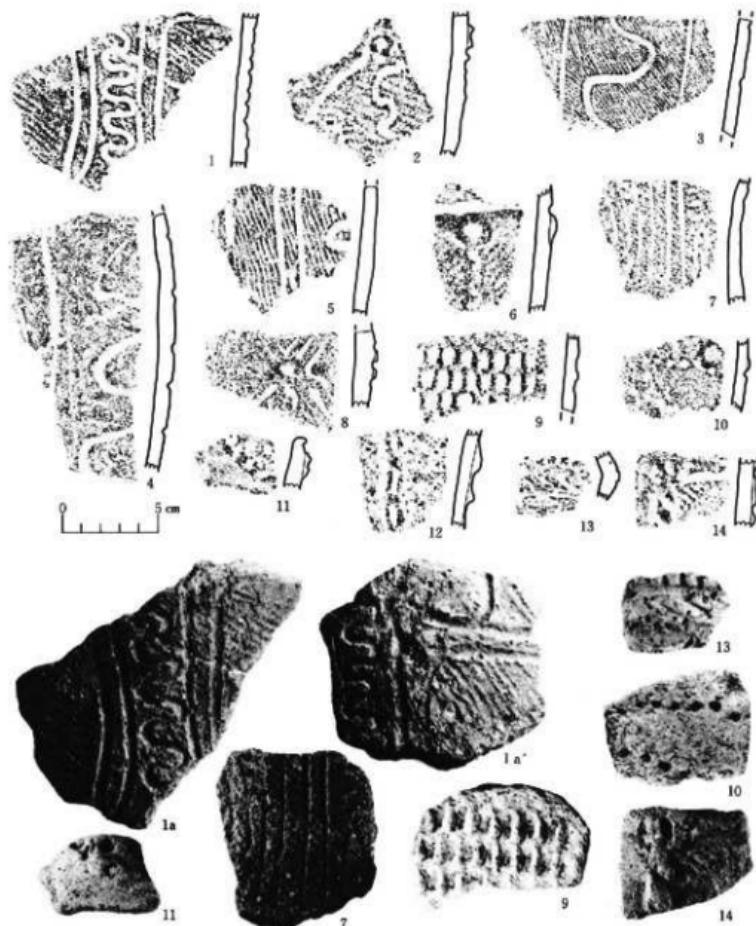


図	地区・遺構	層位	部位	鉢形	施 文	-	調 燥	分 類	備 考
1	K-7(d)	Ⅲ	体部	深	斜底しR織文→低火次織文			Ⅳ-1b	一例最高桐文の可能性
2	31 P	準	体部	深	施文有無未文→低火次織文→低火次織縫斜行織文			Ⅳ-1b+2a	—
3	M-5(b)	Ⅲ	体部	深	施文有無円筒輪開口縫文→斜孔→斜底少織文→斜縫			Ⅳ-2a	—
4	K-13(d)	N	体部	深	多角底状平行織收縮文→斜縫			Ⅳ-1b	後期前縫の可能性あり
5	J-12(c)	N上	体部	深	偏底・斜孔・R織文→一般底・斜孔並行次縫開口斜行織文			Ⅳ-3a+4c	—
6	N-7(c)	Ⅲ	体部	深	斜行沿筋三角形開口斜縫文→斜孔→斜底L.R織文→「X」状斜縫開口斜行織文+輪形隠文			Ⅳ-3c+3a	—
7	底 鋼	—	体部	深妙?	複雑な斜縫文			Ⅳ-4a	—
8	N-7(d)	Ⅲ	体部	深妙?	複底L.R織文→斜孔・三角形次縫開口斜行織文			Ⅳ-3a	—
9	K-7(d)	Ⅲ	体部	深	複底R織文→三角形次縫開口斜行織文			Ⅳ-3a	上下連の可能性あり

第127図 第V群土器(12)



地 区	層位	部 位	形 態	施 文	四 壁	分 類	備 考
1 L-7(a)	Ⅲ	体 部	薄	横粒L孔隙文→幅広平行沈積文→細粒葉理網目文	電1b+4c	—	
2 J-7(b)	I	体 部	薄	横粒L孔隙文→輪明瞭文→風化後次級線文	電1b	—	
3 K-7(c)	I	体 部	薄	縱粒葉理網目文→幅広平行沈積文→細粒葉理網目文	電1b+4c	標示は不自然	
4 M-7(d)	Ⅲ	体 部	薄	幅広平行沈積文→細粒平行沈積文→風化葉理網目文→評標	電1b+4c?	—	
5 K-12(b)	Ⅱa	体 部	薄	縱粒葉理網目文→幅広平行沈積文→輪明瞭葉理網目文?	電1b	—	
6 N-7(b)	I	体 部	薄	横粒L孔隙文→次級葉理文→輪明瞭葉理文	電5a+7b	—	
7 M-13	Ⅱb	体 部	薄	兩文一起付す糞並行葉理文(弧状のものと合ひ)連続小凹部、細粒葉理文→評標	電1b+5a	—	
8 J-7(a)	Ⅲ	体 部	薄	輪明瞭葉理文→評標1.8mm文→電1b葉理文?	電1d+1b?	—	
9 M-7(a)	Ⅲ	体 部	薄	疊層葉理網目文	電1b	—	
10 K-8(e)	Ⅲ	体 部	薄	弧状葉理文→横粒葉理網目文	電1b	開拓している	
11 K-7(a)	Ⅲ	口部	薄	弧状葉理→連続小凹葉理葉文→電1b葉理網目文	電6+5b	—	
12 J-7(a)	I	体 部	薄	縱粒葉理網目文→幅広平行沈積文	電1b	—	
13 K-8	Ⅲ	体 部	薄	横粒葉理→評標葉理葉文→連続葉理文→評標	電6+5b	—	
14 J-7(a)	I	体 部	薄	横粒葉理、輪明瞭葉理→細粒葉理葉理葉文、粗粒葉理葉文	電1b	方形葉理葉文の可動性?	

第128図 第Ⅷ群土器(13)



区	地区・遺構	壁厚	形	質	形	施文	周	記	考	
1	M-6(b)	Ⅲ	体	部	深	鉢	II	輪作RL, 周文→方折区底(?)施文→施文小円形斜文→次施文 施文複数文+側面長横凹形斜文	壁厚5-15mm	—
2a	M-6(c)	Ⅲ	体	部	深	鉢	III	錐狀突起文(方折区面文)・連續斜削文	壁厚5-15mm	—
2a	9-N(c)	Ⅲ	体	部	深	鉢	III	人頭状沈痕圓周施文文・連續凸形斜文	壁厚5-15mm	同一個体
3	1-9(a)	Ⅲ	体	部	深	鉢	III	周文→方折区底(?)施文→施文小円形斜文+文	壁厚5-15mm	—
4	J-8(c)	Ⅰ	体	部	深	鉢	III	施文→施文多孔性底(?)施文→施文周文	壁厚5-15mm	—
5	N-7(c)	Ⅲ	体	部	深	鉢	III	下凹施文→輪作RL, 周文→施文施文	壁厚5-15mm	—
6	1-Hc	總	体	部	深	体	II	施文平行斜削周面施文+側面平行斜削周面施文(方折区面文?)	壁厚5-15mm	錐狀突起文の施文, 12件
7	K-7(a)	Ⅲ	体	部	深	鉢	III	施文周文→輪作R周目斜削周文	壁厚5-15mm	—
8	O-10(a)	Ⅲ	体	部	浅	鉢?	III	施文→輪作周文・輪作周面文→斜削	壁厚5-15mm	—

第129図 第四群土器(14)

7は、縦文施文帯と研磨帯(ていねいな研磨)を対置させている。充填手法か磨消手法かは不明である。

4 c類：縦位並行沈線間磨消線文(第128図1・3・4?)

5 b類：連続刺突文(単独で文様を構成するもの)(第128図9・10・11・13、第129図2a
2a')

数列連続して器面の方形の範囲を占めるもの(9)と横位1列のものが、一定の間隔をおいて施文されるもの(10)がある。

6 a類：連続刺突隆線文(第128図11・12・13)

12の縦位鎖状隆線文の「鎖」は、短沈線状のものである。綱目状捺糸文と組む。13の横位連続斜位刺突隆線文は、縦位長方形形状の連続刺突文と組む。

11の弧状連続小円形刺突隆線文は、同様の連続小円形刺突文と連結している。

6 b類：連続刻み状隆線文(第128図14)

基本的には、6 a類の「刺突」と同じである。(隆線を横断状に刻みつける刺突を便宜的に「刻み」と呼ぶ。)

7 b類：方形区画文(連続刺突隆線文・連続刺突文によるもの)(第129図1・2・3・6?)

沈線文と連続刺突隆線文が一体になるもの(1)。沈線文と連続刺突文が一体になるもの(3)。本類が伴なう器形としては、深鉢II・壺がある。

第129図7は、縦位隆線文と沈線により方形区画文(7 a類)が構成される可能性がある。

第129図6には下位隆帯(9類)がみられる。

突起(11類)

本来口縁部資料に含めるべきであるが、体部の形態・文様が不明瞭なものを「突起」として括した。貫通孔の有無により大別、盲孔・凹孔・溝状沈線の有無、位置により細分される。

11 a類：貫通孔のあるもの(第130図1~8、131図1・2・6・9・10)

正面形態が台形を呈するもの(第130図1・2・3・8)山形を呈するもの(第130図4・5・6・7、第131図1)連続山形を呈するもの(第131図2)がある。盲孔をもつものが多く、盲孔間沈線文をもつ130図1の他、130図1・2・3・5・6・7、第131図1・2がある。又、頂部に盲孔又は凹孔をもつもの(第130図1・2・7・8)と溝状沈線をもつもの(第131図1)又、両者をもつものがある(第130図3)。131図9・10は、破片のため正面形態は不明であるが、貫通孔直下より多条並行沈線間磨消繩文の下垂する点で、他の突起と区別される。^{追付}131図6は門前式特有の「中空突起」に近似するものである。^{註5)}

11 b類：貫通孔のないもの(第131図3~5・7・8)

正面形態が山形を呈するもの(3・5)円筒形を呈するもの(4・8)がある。頂

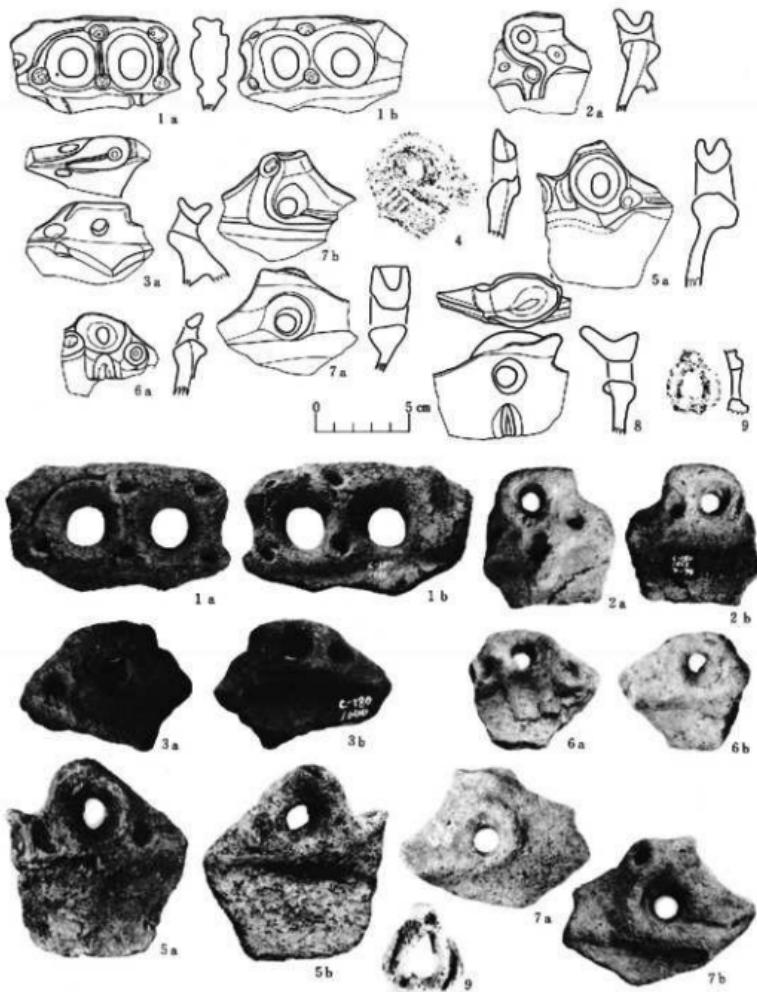


図	地区・遺構	層位	部 位	形 形	地 文	調 整	分類	備 考
1	M-6(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(台形突起+貫通孔)、背孔周囲複文(外側)・會孔周囲複文(内側)、背孔+圓孔(複屈)	複1a+2	牛頭複文?	
2	M-7(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(台形突起+貫通孔)、背孔、(内側)背孔+圓孔(複屈)+會孔+(複屈背孔+貫孔)	複1a+2	—	
3	L-7(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(台形突起+貫通孔)、背孔、(内側)背孔+溝状複文(複屈)	複1a+2	—	
4	O-7(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(山形突起+貫通孔)、背孔+十字状複文+複屈、背孔?	複1a	—	
5	M-7(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(山形突起+貫通孔) + 十字 + 橫在複文+複屈複文	複1a+2?	—	
6	J-8(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(山形突起+貫通孔)、背孔+十字状複文+複屈複文	複1a	—	
7	K-7(1)	Ⅲ	突起(口縫部)	深 鍼	(山形突起+貫通孔)、FC(李状複文)+背孔(内側)・背孔(複屈)	複1a+2	—	
8	1	III	突起(口縫部)	深 鍼	(台形突起+貫通孔)、圓孔+(背孔+複屈複文)複屈複文	複1a+2	—	
9	4 D	III	突起(口縫部)	?	圓孔背孔+複屈複文	複11	突起の一部	

第130図 第1群土器(15突起1)



図	地区・遺構	部位	部 位	器 形	施 文	分 類	備 考
1	貴 墓	—	櫛狀口縫形	深 鋸	山形文起、其底孔、背孔(内底)裏赤松(頭面)→鋸歯?	■1a	—
2	J-1(e)	目	櫛狀口縫形	深 鋸	渾身山形突起、背孔孔、背孔、櫛狀口縫形	■11a	—
3	I-1 地	尖起口縫形	深 鋸	山形文起? C字形底孔(外底)、渾身山形文+櫛狀口縫形	■11b	—	
4	K-12	1	櫛狀口縫形	深 鋸	渾孔、底孔(外底)→鋸歯鋸子	■111a	—
5	K-12(b)	1	櫛狀口縫形	深 鋸	山形文起、渾身山形(頭部)十開丸十横筋の波瀾文	■111b	—
6	K-8(a)	目	深 鋸	中空文起? 一弧一凹波瀾文(外底)	■11a+5a	—	
7	35 D	櫛1	尖起口縫形	深 鋸	山形文起+櫛狀突起文、櫛狀口縫形(外底)背孔(頭面)	■11b+5b	—
8	P-9(a)	1	突	鋸	圓錐孔+櫛狀突起文+櫛狀口縫形+櫛狀突起文+櫛狀口縫形文	■111a+5b+5d	1-3mmの段段を多量に含む
9	35 D	櫛1	尖起口縫形	深 鋸	背孔孔、背孔(外底)櫛狀口縫形孔、背孔→複数多角波瀾筋の波瀾文	■111a?	瓦砾土層の可能性
10	K-12(e)	目	櫛狀口縫形	深 鋸	背孔孔、背孔(外底)櫛狀口縫形+櫛狀多角波瀶筋の波瀶文	■111a?	瓦砾土層の可能性

第131図 第Ⅴ群土器 (16突起2)

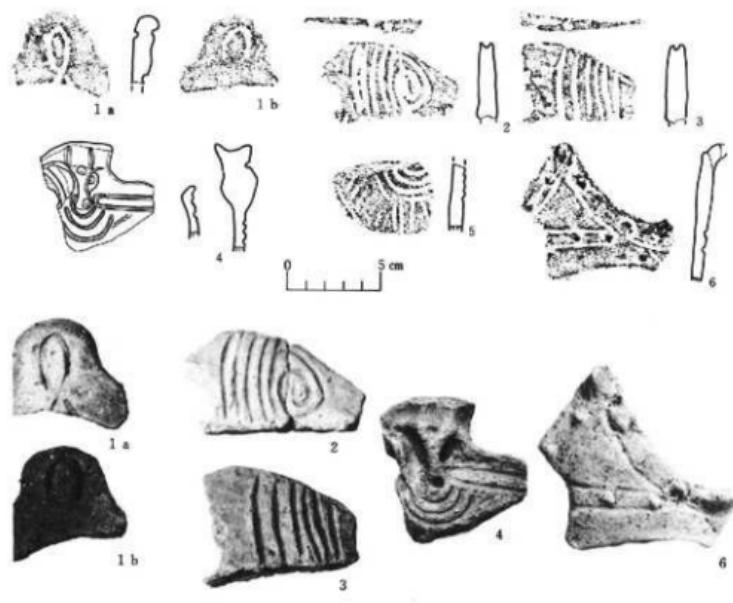


図	地	風	部位	部	形	施	文	調	整	分類	備
1	M-7(d)	里	口縁	口縁部	深	突起	S字状沈線文	外壁	内壁	五	—
2	P-7(a)	里	突起	口縫部	深	突起	複数の多角形並行沈線文	→斜壁	内壁	五	同一
3	P-7(b)	里	突起	口縫部	深	突起	複数の多角形並行沈線文	→斜壁	内壁	五	同上
4	K-10(e)	里	突起	口縫部	深	突起	内孔(直孔) + 山口	内孔 + 多角形並行沈線文	内孔門形沈線文 + 口縫	五	—
5	M-7(d)	里	体	部	深	突起	内孔文 + S字状沈線文	内孔多角形並行沈線文	内孔多角形並行沈線文	五	—
6	M-13	里	口	縫	部	深	突起	内孔沈線文	内孔小突起文 + 斜壁	大	大沈孔口縫

第132図 第IX群・第X群土器

部に盲孔・凹孔などの空間をもつもの(3・4・7・8)と溝状沈線をもつものがある(5)。

田中則和

- 註1 馬日 雄一「福井C地点貝塚の発掘」『小名島』いわき市教育委員会編城出張所 1968
 2 田中 則和「繩文時代後期初頭土器の文様」『六反田遺跡発掘調査報告書』P.134~P.155 仙台市教育委員会
 3 同P.233
 4 多条並行沈線網透視圖文である点で既存土器に属する可能性がある。
 5 及川 浩他「出土遺物1~土器・石器」『前前貝塚』陸前高田市教育委員会 1974

第IX群土器(第132図)

広義の後期前葉(初頭~前葉)の土器に属し、①突起や口縫部の文様基点に多条弧状並行沈線文の施されるもの。②突起より縫位「S」字状沈線文の下垂するものを後述する事由で(考察307頁参照)第Ⅸ群土器より分離して後葉前葉(狭義)の土器とし、前者を1類、後者を2類とした。復示資料1点・破片資料13点出土している。口縫部破片10点、体部資料3点であるが体部資料に関しては、細片が多いなどのために、Ⅸ群土器から分離しきれず、第Ⅹ群土器に含まれてしま

^{註1)}
また可能性がある。本群土器は、I・III・IV層中に他群土器と混在している。

1類：縦位「S」字状沈線文のもの(第132図1)

突起よりいわゆる縦位「S」字状沈線文が下垂し、内面に「S」字状沈線文の上端のみをとったような弧状沈線文が施文されているものである。仙台湾岸に特有の文様パターンであるが1点出土したのみである。

2類：多条弧状並行沈線文のもの(第132図2～5)

突起部分に施文されているもの(2・3)、突起に連続する縦位把手の盲孔を中心に施文され、横位長楕円形沈線文と組むもの(4)、体部上半で、斜位多条並行沈線文と接続して、文様要素となるものがある(5)。

田中則和

註1 91頁(1)の遺物のように單一の群土器のいづれにも断定し難く、便宜的に該群土器に含めたものが若干ある。

2 後藤 聰彦「繩文後期宮城1b式周辺の時代」「東北の考古・歴史論集」1974

第X群土器(第132図6)

後期後葉の土器でⅢ層より1点出土しているのみである。かなり磨滅している。

6は大波状口縁で波状の頂部と谷部に水平方向に突出する突起が配される。大波状口縁のプロボーションに対応して三角形状の沈線がひかれ三角形の頂部の両側やその中央間隔の点に瘤状の小突起が配される。大波状口縁の三角形部分の破片であるが、沈線間等に繩文は観察されない。やや外傾する器形と思われる。類例としては、松島湾岸の台皿貝塚出土土器に、大波状口縁である点、瘤状の小突起が配される点が共通する。磨滅のためか、繩文の施文は観察されないが前述の台皿貝塚出土土器を標準とする「西ノ浜式」の範疇で捉えておきたい。田中則和

註1 後藤 聰彦「陸前宮戸島里浜台貝塚出土の土器について」「考古学報誌」48巻1号 1962

第XI群 粗製土器(第133～137図)

中期から後期に属する粗製土器(「地文」のみの土器で文様のない突起をもつもの及び下位隆帶をもつものを含む)。

I～IV層及び造構内堆積土で他群土器と混在して出土している。復元資料3点の他、破片資料179点である。分類基準(39～40頁)に示すとおり口縁部の断面形態により4類に大別し、地文の種類により14類に細分した。

1類：口縁から体上部にかけて内弯する深鉢(第133図4～14、第134図1～3、第135図1・2)

a：繩文のもの(第133図3・5・7・8、第135図2)

斜位L繩文のもの(第133図5)、斜位LR繩文のもの(9)、横位RL繩文のもの(第135図2)、縦位RLR繩文のもの(第133図8)の他、横位LRL繩文で二段三條と思われるも

のがある(3)。

b : 繩文十綾絡文のもの(第134図3)

R L 繩文を結節し縦位に回転し綾絡文を示すものがある。

c : 格子状沈線文のもの(第133図13)

研磨した後で斜位細沈線を組みあわせて格子状沈線文を表現したものがある。

d : クシ目状沈線文のもの(第133図6・7)

6は5~6mの間隔で幅3cm以上の単位が二重に施文され、7も数回の単位同士の切り合いが認められる。同一弯曲を示す弧状の単位は幅約1.5m、長さ4cm以上である。

e : 摊糸文のもの(第133図4・10~12・14、第134図1・2)

全てRの摊糸文のもので、縦位回転のもの(第133図4・12、第134図1)、縦位回転・斜位回転併用のもの(第133図14)、横位回転のものが多く(第133図10・第134図2)がある。第134図1は下位隆帯をもつ。

f : 綱目状摊糸文のもの(第135図1)

2類：口縁部が直線的に外傾する深鉢(第136・137図1・2)

a : 繩文のもの(第136図5~9)

全てL R 繩文で縦位回転のもの(7・8)、斜位回転のもの(6)、横位回転のもの(5)、横位回転・斜位回転併用のものがある。

b : 内外繩文のもの(第137図1)

外面に斜位L R 繩文が施文され、内面の口縁部に横位、体部に縦位のL R 繩文が施文されるものである。

c : 摊糸文のもの(第136図1・2・4・10、137図2)

縦位R 摊糸文のもの(1・2・10、137図2)と縦位L 摊糸文のもの(4)がある。

d : 綱目状摊糸文のもの(第136図3)

e : 繩文十綾絡文のもの(第137図10)

3類：口縁部が外反する深鉢(第137図4~7)

a : 繩文のもの(7)

縦位L R 繩文のものが1点あるのみである。

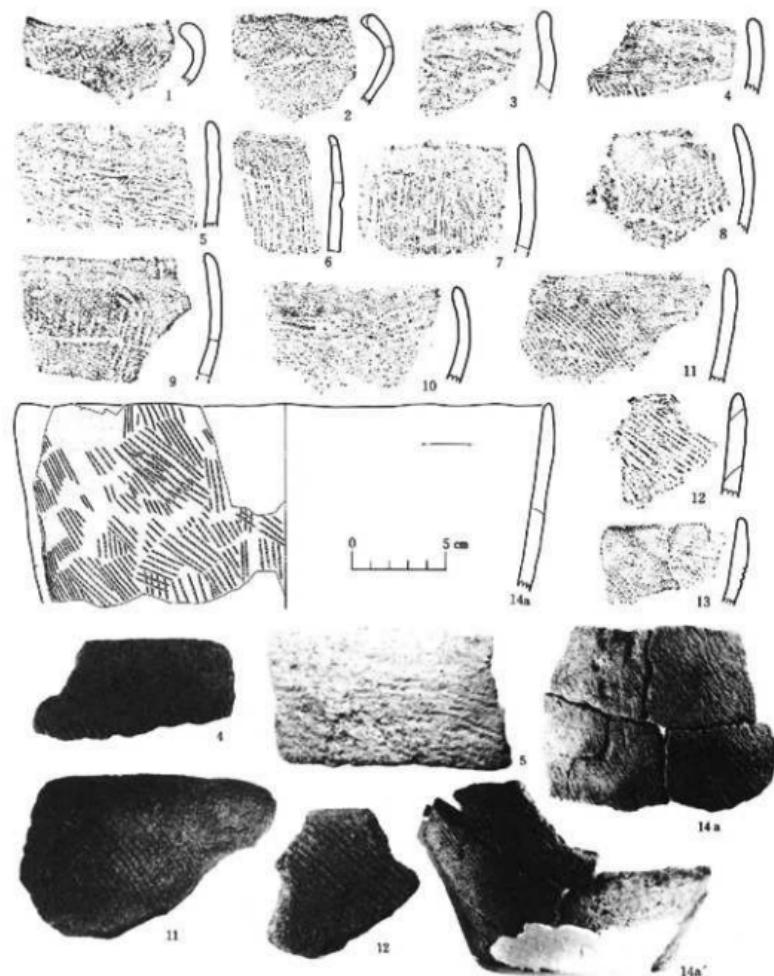
b : 摊糸文のもの(4~6)

縦位R 摊糸文のものがある。

4類：内寄する浅鉢(第52図3、第133図1・2)

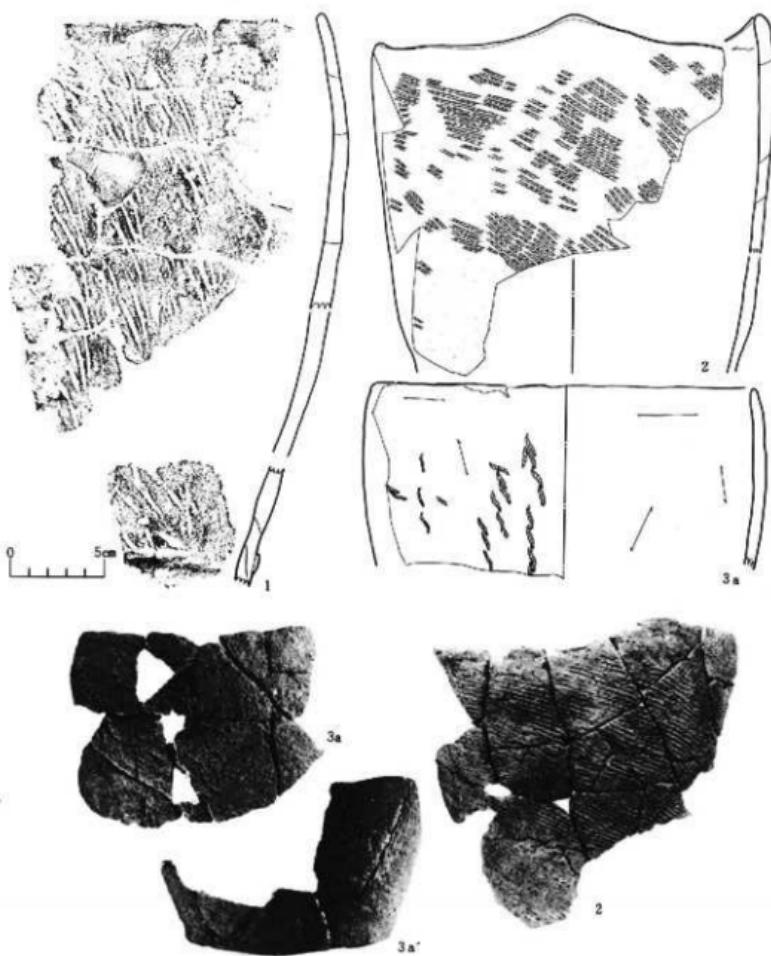
a : 繩文のもの

横位L R 繩文のもの(第133図1・2)縦位R L 繩文のもの(第52図3)がある。



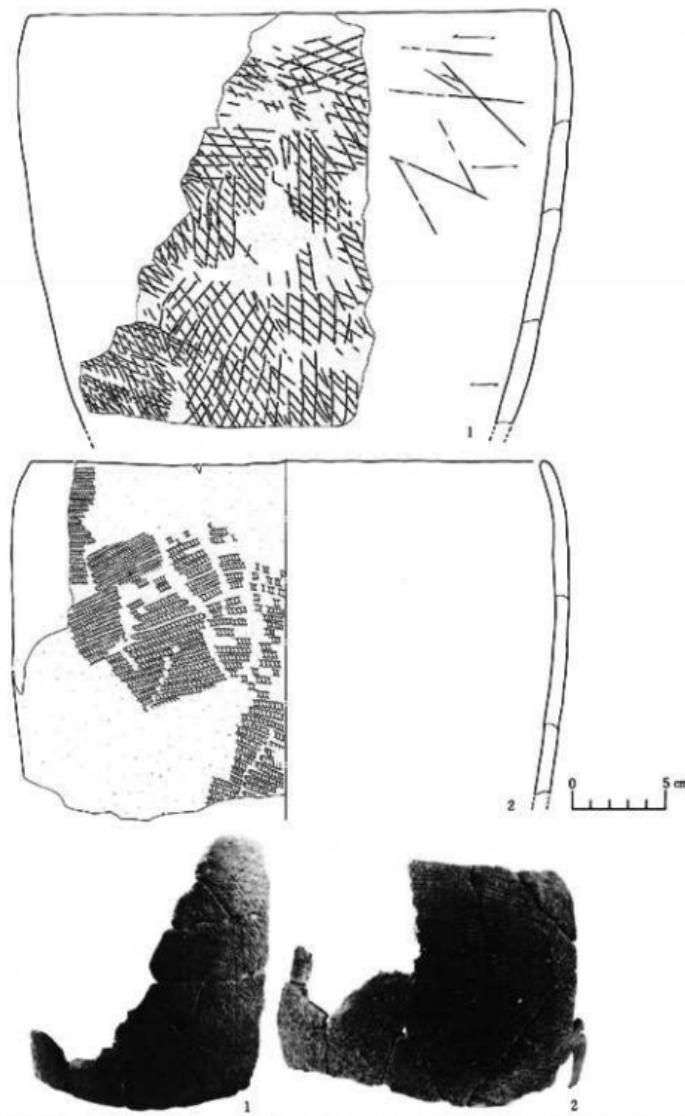
文	地区・遺跡	層位	部	形	施文	測定	分類	備考
1	M-7 (e)	Ⅲ	口	縫	深	縫合しR側面→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲa	口縫合外側肥厚する。
2	K-12(b)	Ⅴb	口縫合・深浅	縫	縫合しR側面→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅴa	口縫合外側肥厚・体面内面に平行の斜面	
3	J-2	Ⅲ	口	縫	縫合しR側面(二段差?)→頭部(口縫合)	Ⅲb	輪廓に全縫合を含む。	
4	2-12	Ⅲ	口	縫	縫合	頭部(口縫合)→輪廓(上部より9.5cm)	Ⅲc	—
5	O-6 (b)	Ⅲ	口	縫	縫	縫合し縫又→縫合ノギ状縫合	Ⅲd	—
6	L-8	Ⅲ	縫	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲd	1)厚壁はでいいを特徴である。
7	O-7 (e)	Ⅲ	口	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲd	—
8	N-7	Ⅲ	縫	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲd	—
9	I-9	Ⅲ	縫	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲd	—
10	J-9 (a)	Ⅲ	口	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲd	—
11	N-7 (b)	Ⅰ	口	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲe	—
12	2 (E)	Ⅲ	口	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)	Ⅲe	—
13	K-12(b)	Ⅴb	口	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)・完全な研磨のため削文残存	Ⅴa	縫合は写真のみ。
14	— (e)	Ⅲ	口縫合・深浅	縫	縫	縫合ノギ状縫合又→リヤフ頭部(口縫合)・完全な研磨のため削文残存	Ⅲd	—

第133図 第X群土器(1)



地 区	器化	部 位	基 質	施 文	測 長	分 類	備 考
1 K-7(一)	■	口縁部・体部	深 細	下位箇等→高位共通文→網目(口縁部)	—	XIIe	—
2 M-6	■	口縁部・体部	深 細	高位共通文→網目(口縁部)	—	XIIe	深次口縁
3 I-14(a)	■	口縁部・底部	深 細	網目共通文→網目(口縫部) ナメ状研磨(体部)	—	XIIb	—

第134図 第13群土器(2)



区	地	区	層位	部	位	形	類	文	記	筆	分類	考
1	N	-7 (d)	Ⅲ	口縁部	一	体部	深	鉢	縦凹・横位R縫目決済系文→研磨(口縁部)		XII	—
2	K	-8	Ⅲ	口縁部	一	体部	深	鉢	横波目L縫文		XIIa	—

第135図 第XI群土器(3)

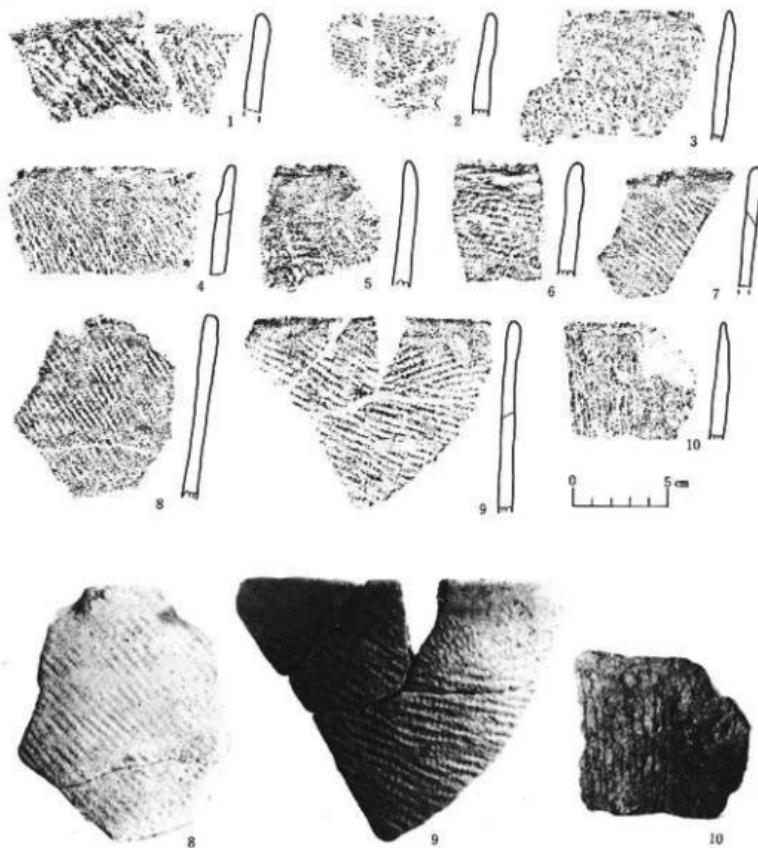
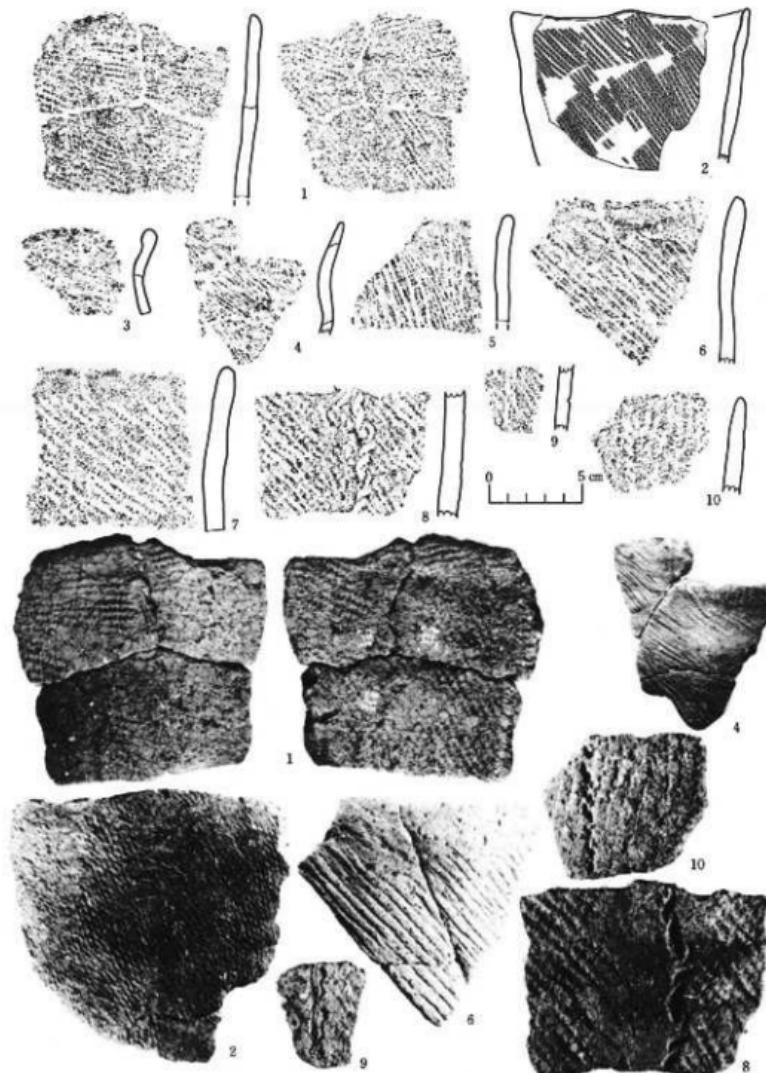


図	地区・遺構	層位	部 位	断形	施 文・調 整	分類	備 考
1	K-6(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位自然系文→研磨(口縁部)	X12c	—
2	M-6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位自然系文?→研磨(口縁部)	X12c	—
3	K-12	Ⅴ b	口縁部	深鉢	輪位自然系文	X12d	磨滅している
4	L-6	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位+自然系文→研磨(口縁部)	X12c	—
5	K-7	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位L R相文→研磨(口縁部)	X12a	—
6	2 住 地1	地1	口縁部	深鉢	輪位L R相文→研磨(口縁部)	X12a	—
7	2 住 地1	地1	口縁部	深鉢	輪位L R相文→研磨(口縁部)	X12a	—
8	2 住 地1	口縁部	深鉢	輪位L R相文→研磨(口縁部)	X12a	—	
9	N-7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位+輪位L R相文→研磨(口縁部)	X12a	—
10	O-7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	輪位自然系文→研磨(口縁部)	X12c	—

第136図 第13群土器(4)



第137図 第 XI 群 土 器(5)

図	名	地質	位置	大きさ	説明	図	名	地質
1	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	1	石器	白雲母+石英
2	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	2	石器	白雲母+石英
3	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	3	石器	白雲母+石英
4	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	4	石器	白雲母+石英
5	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	5	石器	白雲母+石英
6	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	6	石器	白雲母+石英
7	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	7	石器	白雲母+石英
8	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	8	石器	白雲母+石英
9	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	9	石器	白雲母+石英
10	石器	白雲母+石英	泥炭	中等	外側: 開口部直隣、内側: 開口部直隣、(右側)一端付近に横溝文、(左側)	10	石器	白雲母+石英

第XII群土器(第138図)

中期から後期に所属するミニチュア土器である。底径4cm以下のものをミニチュア土器として取り扱った。この群に属する可能性はあるが、余りにも細片である為断定が下せないものは当群より除外した。出土数量は7点で、内復元資料1点、底部資料5点、台部資料1点である。出土層位は、表掲の台部資料1点を除き、他は全てⅢ層内出土である。遺構内よりの出土は認められなかった。

器形を推し測れるものはほとんどないが、体部が外反する鉢形のものが多いと思われる。これらには、若干ひらき端部に面を持つ低い台が付く場合がある。体部外面は無文研磨されており、内面も調整されているが、底部と体部の接合面付近には指頭圧痕が内外面に明瞭に残る場合もある(底径の小さいものほど明瞭である)(3)。体部の器厚は4mm前後のものが多い。

1は体部が外反する器形で、口縁部を欠失する。体部、底部外面は無文研磨されている。底部端の対角線上には焼成前の刻みが一对入れられている。一方の体部下半には沈線が認められる。刻み内の使用痕については不明瞭で判断が付かない。

これらミニチュア土器は無文の為、所属細時期は不明であるが、当遺跡の群別資料の出土量から推し測れば、第V群土器から第XII群土器の時期に所属する可能性が高い。 佐藤甲二

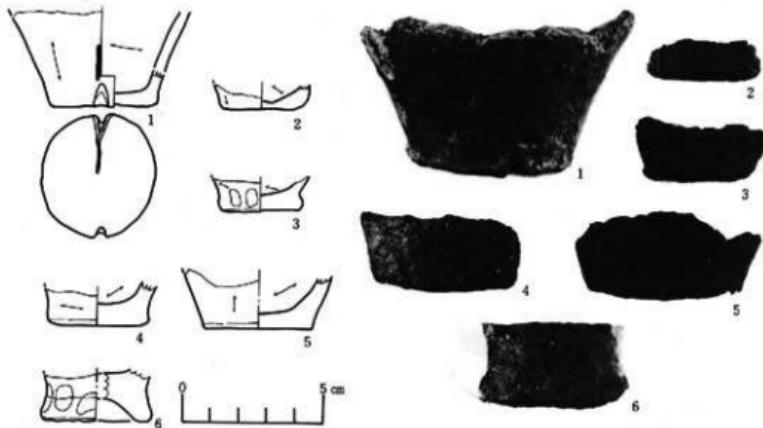


図	地 区	層位	器形	部 位	文様	調 整		体部厚 (mm)	底 部		分類	備 考
						外 面	内 面		外 面	内 面 径(mm)		
1	J-8(a)	Ⅲ	鉢	体部~底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	4~5	無文	平底	3.8	Ⅲ 底部に孔
2	P-11(c)	Ⅲ	鉢?	体部下半~底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	3~4	無文	丸底	2.8	Ⅲ —
3	P-9(a)	Ⅲ	鉢?	体部下半~底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	3~4	無文	平底	2.8	Ⅲ —
4	J-9(d)	Ⅲ	鉢?	体部下半~底部	無文	指頭圧痕、磨き	磨き	5	無文	丸底	3.0	Ⅲ 外側削減
5	P-11(d)	Ⅲ	鉢?	体部下半~底部	無文	磨 き	磨 き	5~6	無文	平底	4.0	Ⅲ —
6	表 掲	—	鉢?	台 部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	—	—	平底?	3.5	Ⅲ —

第138図 第XII群土器

第XIII群土器(第139~142図)

本土器群は晩期後葉に属する。出土層位は基本層第I~IV層、及び遺構内堆積土である。復元資料7点、口縁部資料63点、体部資料111点、底部資料10点である。うち復元資料、器形のわかる口縁部破片を対象に形態的な特徴により以下のように分類した。

第1類 深鉢形土器

a 1類(第54図1、第139図1・2)

無頸であり、口縁部直下(体部上端)に文様帶を有するものである。第54図1は内寄氣味の小形深鉢である。口唇部に刻み目と沈線を施している。体部上端の文様帶には4条の沈線が施され、中央の2条の沈線の一部を円形に彫去している。口縁部の残存部が少ないため全体の文様構成は不明である。文様の下は撚糸文(R)である。第139図1は体部上端が内寄氣味になる。内面に2条の沈線、口唇部に刻み目、体部上端に5条の平行沈線、下位に繩文(L R)が施文される。2は小波状口縁で、体部上端には2条の平行沈線がめぐり、下位の沈線の一部を彫去しているが、小破片のため全体は不明である。

a 2類(第60図1)

無頸であり、体部上端に文様帶のないものである。第60図1は体部のふくらむ大形深鉢である。体部には斜行する結節繩文(R L)が施文されている。

b 1類(第139図3~6)

有頸で、頸部が無文となるものである。頸部は直立ないし外反する。3・4・6は小波状口縁であるが、3は口唇部に沈線がめぐる。いずれも繩文(L R)が施文される。

b 2類(第139図7、第140図1・2)

有頸で、頸部文様帶の上下を沈線で区画しその間が無文帶となる。頸部は直立ないし外反する。7は体部に最大径をもつ。1の口唇部には刻み目が施文される。

b 3類(第63図1)

第63図1は頸部が内傾し体部上端付近に最大径を有する。頸部には5条の平行沈線がめぐる。体部には繩文(L)が施文されている。

第2類 鉢・深鉢形土器

a 類(第56図1、第140図3~6)

無頸で体部から口縁部へ直線的ないし外反気味で立上がるものである。第56図1は口縁部まで変化なく立上がる。文様帶の上下を沈線で区画し、3単位の工字状文が施文される。反転する沈線の内部を末広がりの台形状に彫去し、その直下の沈線の一部も逆台形状に彫去している。さらに各単位の間隙を左下りの2条の沈線で充填している。第140図3にも工字状文が施文されているが全体の文様構成は不明である。4~6は2~5条の沈線がめぐっている。

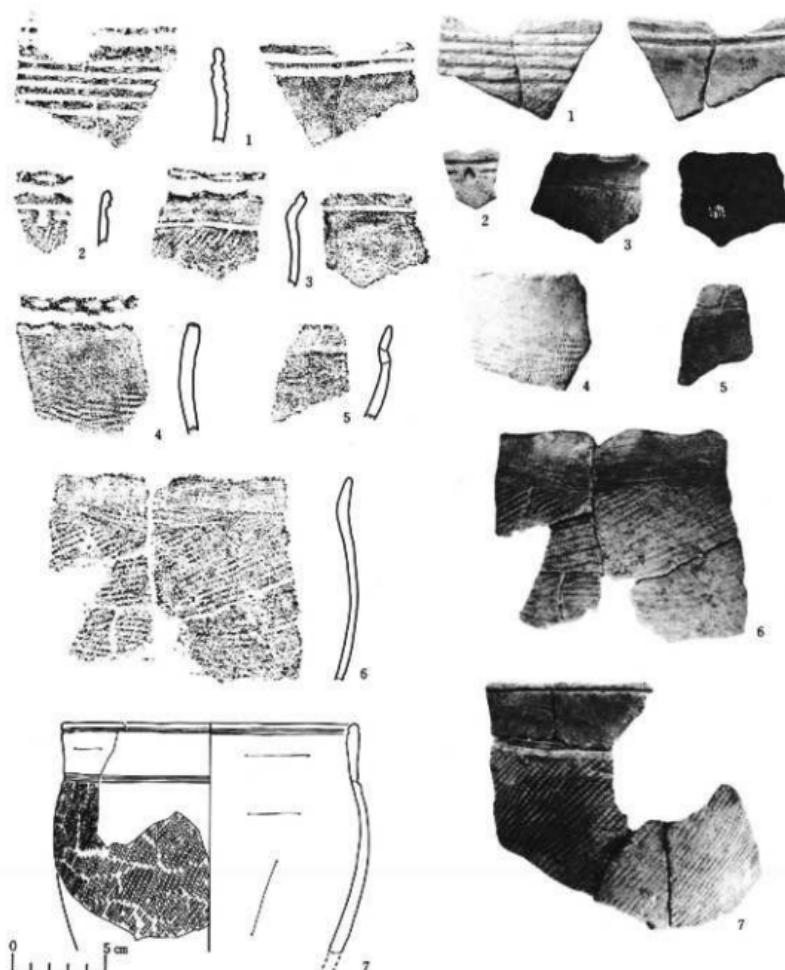


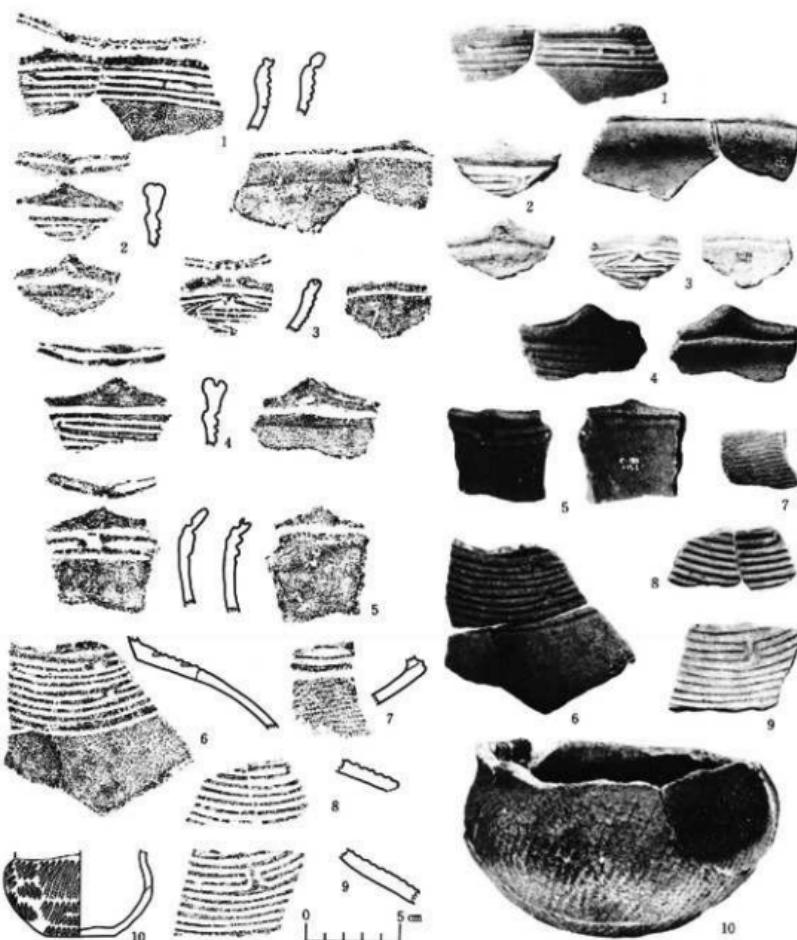
図	地 区	層位	施 文 · 調 整	胎 土	分類	備 考
1	M-13(a)	III	内面沈縫2条、口唇部刻み目、外面沈縫4条、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIa1	—
2	K-13(a)	I	小波状口縫、体部上端工字状文、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIa1	—
3	Q-12(d)	I	小波状口縫、口唇部沈縫、頸部研磨+1条沈縫、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIb1	内面炭化物付着
4	K-13(d)	Nb	小波状口縫、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIb1	—
5	K-13	Nb	頸部研磨、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIb1	外表面炭化物付着
6	K-13	Nb	小波状口縫、頸部削り、体部横位斜位L.R繩文	砂粒多	IIIb1	—
7	K-13(d)	II	内面沈縫2条、頸部口縫沈縫2条、沈縫間研磨、体部横位L.R繩文	砂粒多	IIIb2	外表面炭化物付着 磨成痕

第139図 第3章群土器(1)



回	地区・遺構	層位	施文・割裂	胎土	分類	備考
1	K-13(a)	Nb上	内面沈縫1条、口唇部刻み目、頸部区画沈縫2条、沈縫間研磨	砂粒多	XIII 1b2	—
2	K-13(a)	Na	内面沈縫1条、頸部区画沈縫2条、沈縫間研磨、体部横位LR縦文	砂粒多	XIII 1b2	—
3	K-13(d)	Nb上	内面沈縫1条、体部上端平行U字状文	砂粒少	XIII 2a	—
4	2 一住	堆1	内面沈縫1条、口唇部刻み目、体部上半平行沈縫2条	砂粒少中少	XIII 2a	内外表面色顔料
5	K-13(d)	Na	内面沈縫1条、体部上半平行沈縫5条	砂粒少	XIII 2a	—
6	J-13(d)	II	内面沈縫1条、体部上半平行伏縫3条	砂粒多	XIII 2a	—
7	I-14(a)	II	内面沈縫1条、頸部区画沈縫3条、丁字状文、体部横位LR縦文	砂粒少	XIII 2b1	—
8	K-13(a)	I	内面沈縫1条、頸部区画沈縫3条、丁字状文	砂粒多	XIII 2b1	—
9	K-13(d)	II	内面沈縫1条、頸部区画沈縫2条、丁字状文	砂粒多	XIII 2b1	—
10	K-13(c)	I	内面沈縫1条、口唇部沈縫+B状突起、丁字状文	砂粒少	XIII 2b1	—
11	M-13	II	内面伏縫1条、口唇部沈縫+类起	砂粒多	XIII 2b1	—

第140図 第3群土器(2)



番号	地 区	層 位	施 文	調 整	胎 土	分類	備 考
1	M-13b	Ⅲ	内面沈縞 1条、口唇部沈縞+突起、頭部区画沈縞、工字状文、体部横位LR織文	砂粒多	XⅢ 2b1	—	
2	K-13	表 横	内面沈縞 1条、口脣部沈縞+突起、工字状文	砂粒多	XⅢ 2b1	—	
3	M-13d	Ⅳ b	内面沈縞 1条、口唇部沈縞+B状突起、頭部区画沈縞、工字状文	砂粒多	XⅢ 2b1	—	
4	K-13d	Ⅱ	内面沈縞 1条、口脣部沈縞+突起、頭部区画沈縞、工字状文	砂粒多	XⅢ 2b1	—	
5	K-13a	Ⅳb上	内面沈縞 1条、口脣部沈縞+突起、頭部上端工字状文	砂粒多	XⅢ 3	—	
6	K-12b	I b	体部上手工字状文	砂粒多	XⅢ 3	—	
7	K-13c	Ⅳ a	司部沈縞 2条、体部斜位LR織文	砂粒少	XⅢ 2b2	—	
8	K-12b	Ⅳ a	体部上半工字状文	糊	XⅢ 3	白色對狀物質を含む	
9	K-13d	Ⅳ a	体部上手工字状文	砂粒少	XⅢ 3	—	
10	J-13d	Ⅳb上	体部横位LR織文	砂粒少	XⅢ 3	—	

第141図 第3群土器(3)

b 1類(第140図7~11、第141図1~4)

7~10は頸部が内弯するものである。内面には沈線が施文される。いずれも文様帶の上下を沈線で区画している。7は長梢円文と斜沈線が施文される。8は1条の沈線を含む長梢円文が施文される。9は平行沈線の一部が下方へ彫去され、10は平行沈線の一部を上下逆向きで台形状に彫去している。

11、1~4は突起を有し頸部が外傾するものである。内面と口唇部に沈線がめぐる。1~4は文様帶の上下を沈線で区画している。1は平行沈線の一部を台形状に彫去している。2・4は1条の沈線を含む長梢円文が施文される。3は反転する沈線の内部が三叉状に彫去されている。これらはいずれも小破片であり全体の文様構成は不明である。

b 2類(第141図7)

7は頸部が幅広く、くびれ部を有する鉢形土器の体部破片と考えられる。

第3類 壺形土器(第55図1、第141図5・6・8~10)

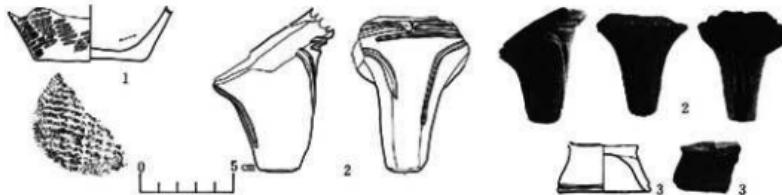
第55図1は無文の壺である。底径が大きく体部はほぼ球形で頸部は直立する。体部中央の対称位置に穿孔箇所がある。5は沈線の一部を台形状に彫去している。6・8・9は肩部片で、8・9は平行沈線の一部を台形に彫去している。9は1条の沈線を含む長梢円文が施文されている。10は小形の壺で体部には縄文(L R)を施文している。

底部(第142図1~3)

底部の形態は、平底・台付・脚付の三種ある。1は平底で網代痕がみられる。3は台部で下端に1条の沈線がめぐる。2は脚部で縦位の沈線が施文されている。

本土器群の特徴を文様から挙げれば2種類の工字状文——①平行沈線を台形状に彫去するもの(兀字文)②1条の沈線を含む長梢円文——が存在するという点である。これらの工字状文を含む土器群の類例は、宮城県内では山王遺跡、巻掘遺跡、鍾沼遺跡、梁瀬浦遺跡、鹿野遺跡、宮沢遺跡などにある。これらの土器群は大洞A式あるいはA'式に比定されている。しかし本土器群を両型式のどちらかに比定するには資料に質的・量的限界がある。従ってここでは晩期後葉の土器群と捉えるに留めておく。

吉岡恭平



区	地 区	層位	施 文・調 整	部位	分類	区	地 区	層位	施 文・調 整	部位	分類
1	K-12(b)	I b	体部斜位LR縄文、底面網代痕	底部	XIII	3	M-15(d)	III	台部下端沈線1条	台部	XIII
2	J-13(d)	IV a	脚部上端工字状文+縦位沈線	脚部	XIII						

第142図 第XIII群土器(4)

註

1. 須藤一郎「土器類成論」『考古学研究』1973
2. 一泊町教育委員会「春掘遺跡」1977
3. 志賀泰治「龍沼遺跡」『東北電力株式会社宮城支社』1971
4. 角田市教育委員会「塗灘市遺跡」1976
5. 万賀寿幸「船沼ニュータウン地内遺跡調査報告—鹿野遺跡」1976
6. 宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ 古沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第69集』1980

(2) 土 製 品

土製円盤(第143、144、145図1~6)

土製円盤は105点出土している。I層からIVb層の基本層位から84点、遺構内より14点、風倒木痕より7点出土している(第10表)。基本層位の中ではIII層から最も多く出土している。

完形品94点、破損品は11点ある。中央に穿孔のある土製円盤や周辺部に挟りの入ったものは出土していない。土器のU縁部を利用したものが2点、底部を利用したものが3点(ミニチュア土器の底部を利用したと思われるもの1点含む)、輪積旗を利用したものが4点ある。その他は土器の体部を利用している。

完形品の94点について、大きさ、重量、形態、加工について分類した。

1) 大きさ

小型…長径と短径がそれぞれ3cm未満のものとした。…12点

中型…長径と短径がそれぞれ3cm以上5cm未満のものとした。…69点

大型…長径か短径のいずれかが5cm以上のものとした。…13点

土製円盤の大きさは、最小が長径23mm、短径21mmで、最大が長径68mm、短径64mmである。中型が最も多く73.4%を占める。

2) 重量(第11表)

5gごとに分類した。最も軽いものが4.1g、最も重いものが51.4gであった。5g以上20g未満の間に集中している。特に10g以上15g未満のものが多い。

3) 形態(第12表)

おおよそ円形、楕円形、方形(隅丸方形)、不定形に分類した。

円形…41点、楕円形…15点、方形…10点、不定形…28点

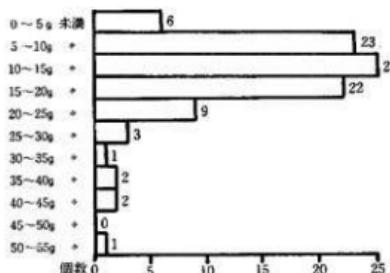
円形が最も多く43.6%で、次いで不定形29.8%である。

4) 加工(第13表)

第10表 出土層位と遺構内出土の土製円盤

I層	II層	III層	IVa層	IVb層	2住	31P	19D	20D	35D	1号廻	3号廻	5号廻
9	2	60	3	10	1	1	2	6	4	3	1	3

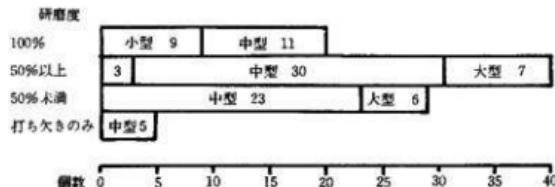
第11表 土製円盤の重量分布



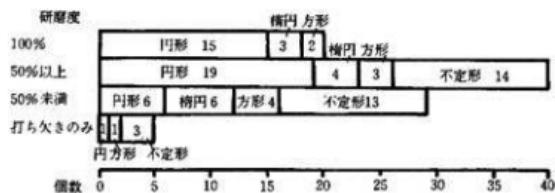
第12表 形態分類



第13表 土製円盤の加工度と大きさ



第14表 土製円盤の加工度と形態



a) 土器片から土製円盤に加工する際に周辺部を打ち欠いた回数

回数	4	5	6	7	8	9	10	11	不明
個数	1	3	16	29	15	9	9	4	8

b) 打ち欠いた後に周辺部を研磨している割合

周辺部が全部研磨されたもの…20点

周辺部が50%以上研磨されたもの…40点

周辺部が50%未満の研磨のもの…29点

周辺部が打ち欠きのみのもの…5点

50%以上研磨の土製円盤が42%、50%未満のものが31%、全周研磨のものが21%、打ち欠きのみのものが6%を占める。全周研磨の土製円盤を含めると50%以上の研磨度の高いものが多い。また、大きさや形態と研磨度についてみると、全周研磨の土製円盤は小型と中型だけで、形態は円形が多く不定形はない。50%以上の研磨のものは中型が多く、形態では円形と不定形が多い。50%未満のものは中型と大型だけで、不定形が多い。(第14表)

周辺部の加工度が高い場合、すなわち研磨度が大きいほど、円形、楕円形と形が整い、小型中型と形が小さくなる。これに対して、加工度の低い場合は不定形が多く形も不ぞろいのままで小型のものはない。

5) 土製円盤の所属時期について

一般に土製円盤は縄文時代全般にわたって出土している。当遺跡のものは出土況状より時期が断定できるものはない。しかし、施文より時期の判明できるものは中期後葉が2点、後期初頭が7点だけであった。当遺跡の出土遺物は後期初頭が最も多く、中期後葉がこれに次ぐ。この点より時期不明の土製円盤の多くは、中期後葉、後期初頭の時期に所属するものと思われる。

土錘(第145図7)

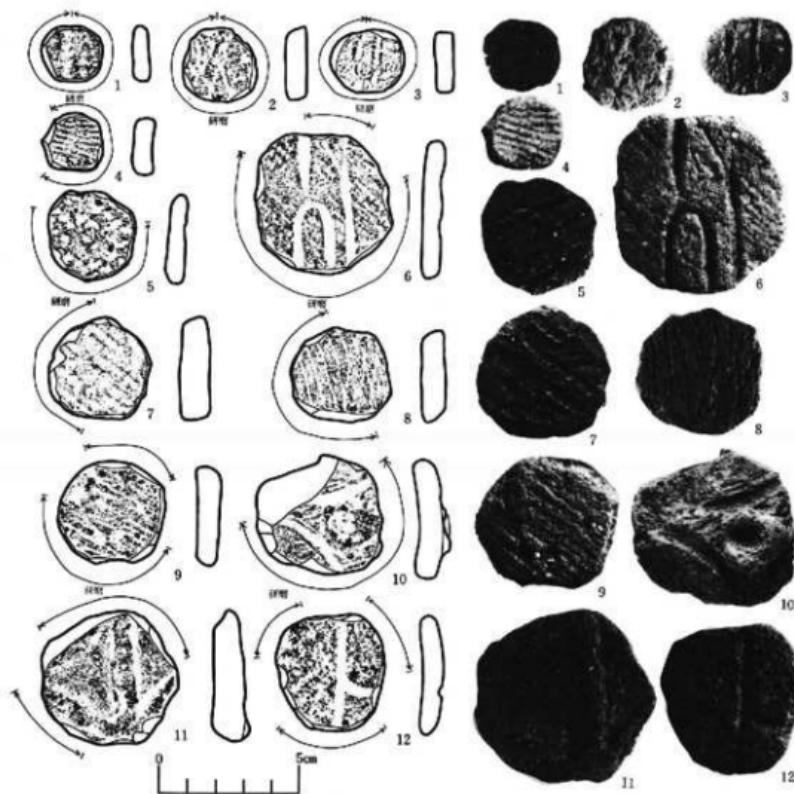
土錘はK-12b)グリッドのⅣa層から1点出土している。長径4.7cm、短径1.9cmで厚さ1.3cm、重量が25.3gである。幅2mmの溝が長軸方向に一周した上に短軸方向に一周している。

渡辺誠氏の分類によれば「第1種C類」に相当し、時期は「縄文後期中葉から晩期」にわたり、分布は「関東・東北地方と北陸地方」に分布すると言う。当遺跡の後期中葉以後の出土遺物では晩期が圧倒的に多いという点より、この土錘は晩期の時期に所属する考算が高い。

佐藤美智・佐藤幸子

1. この中には周辺部の一部が剥落したものがあるが、周辺部の観察により明らかに100%研磨と認められたものがある。
なお、実測図中の研磨範囲は現存周辺部の研磨範囲を記している。

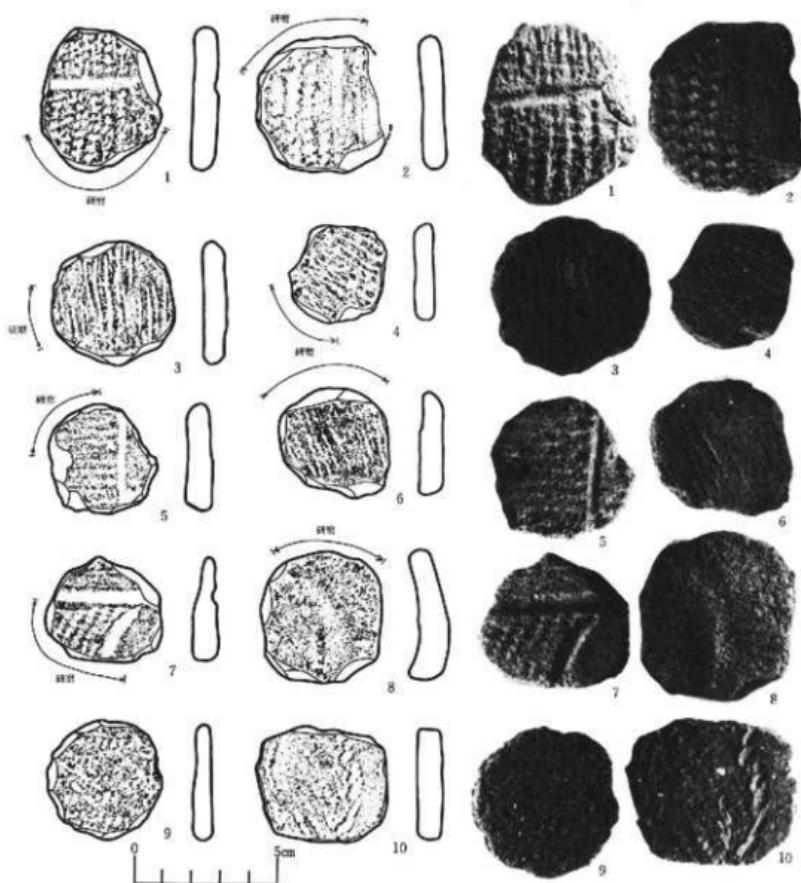
2. 渡辺 誠「縄文時代の漁業」『考古学選書』雄山閣 1973 P.36~P.47



鋳 素 表

区	地 区	層位	大きさ mm	厚さ mm	重量 g	形 態	打欠回数	研磨率	部 位	時 期
1	J - 13(d)	IV b	小型	26×24	6	2.9	円 形	—	100% 体部	—
2	K - 13(b)	I b	小型	26×25	8	5.3	円 形	7	100% 体部	—
3	M - 13	III	小型	24×20	6	3.7	椭円形	—	100% 体部	—
4	N - 7(b)	III	小型	23×21	7	3.5	方 形	8	50%以上 体部	—
5	K - 12(b)	IV a	中型	33×21	8	6.9	円 形	8	50%以上 体部	—
6	K - 7(a)	III	中型	49×48	7	21.1	円 形	9	100% 体部	後期初頭
7	K - 12(b)	IV b	中型	37×37	10	6.4	円 形	8	50%以上 体部	—
8	K - 12(b)	IV a	中型	34×33	6	11.7	円 形	8	50%以上 体部	—
9	L - 7(d)	III	中型	49×45	8	19.9	椭円形	7	50%以上 体部	—
10	O - 7(b)	III	中型	45×42	9	19.8	不定形	7	50%以上 体部	後期初頭
11	O - 7(b)	IV b	大型	51×48	11	28.8	円 形	6	50%以上 体部	中期後半
12	L - 7(a)	III	中型	39×36	8	16.1	椭円形	7	50%以上 体部	後期初頭

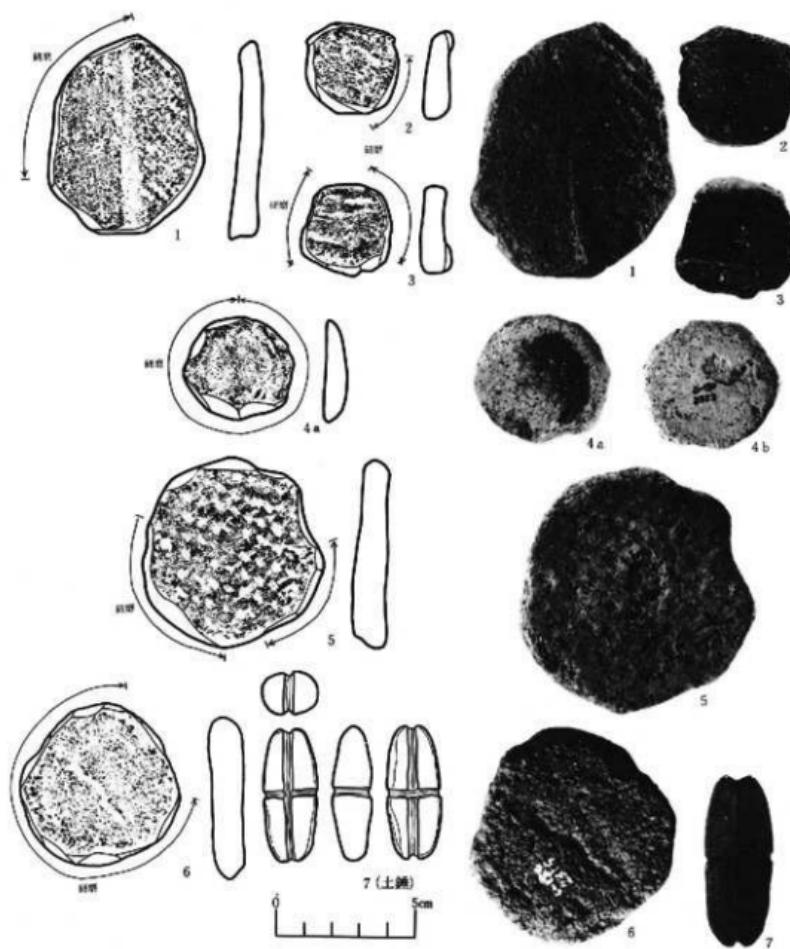
第143図 土 製 円 盤(1)



観察表

図	地 区	層位	大きさ mm	厚さ mm	重量 g	形態	打欠回数	研磨率	部位	時 期
1	K-7(d)	Ⅲ	大型 51×42	9	22.1	橢円形 円形	9	50%未満	体部	—
2	O-7(d)	Ⅲ	大型 51×—	8	21.8	円形	—	—	体部	—
3	L-7(b)	Ⅲ	中型 44×43	8	18.1	円形	8	50%未満	体部	—
4	K-7(b)	Ⅲ	中型 36×34	7	10.1	不定形	7	50%未満	体部	—
5	L-7(d)	Ⅲ	中型 39×34	8	15.3	橢円形	7	50%未満	体部	—
6	K-7(d)	Ⅲ	中型 41×38	9	15.3	不定形	7	50%未満	体部	—
7	J-7(e)	Ⅲ	中型 41×36	9	14.7	橢円形	8	50%未満	体部	後期初頭
8	L-7(a)	Ⅲ	小型 46×42	10	25.5	方形	8	50%未満	体部	—
9	K-13(d)	Ⅳa	中型 42×41	6	13.3	円形	10	打ち欠きのみ	体部	—
10	N-7	Ⅲ	中型 46×40	8	20.2	方形	11	打ち欠きのみ	体部	—

第144図 土製円盤(2)



観察表

団	地 区	層位	大 き さ mm	厚さ mm	重 量 g	形 動	打 欠 回 数	研 磨 率	部 位	時 期
1	K-6(b)	Ⅲ	大型	63×55	8	38	橢円形	8	50%以上	体 部
2	K-12(b)	Ⅱ b	中型	32×31	9	11	円 形	6	50%未満	体 部
3	L-6(b)	Ⅲ	中型	31×30	9	11.1	方 形	6	50%以上	口縁部
4	K-13(a)	Ⅱ b	中型	39×36	8	9.4	円 形	—	100%	底 部
5	K-8(b)	I	大型	68×64	10	51.4	円 形	7	50%以上	底 部
6	Q-12(d)	I	大型	55×54	12	44.3	円 形	8	50%以上	底 部

第145図 土製円盤(3)・土鍤

(3) 石 器

I. 石器の出土数量および出土状況

石器の出土数量は、第15表に示した。全出土点数は4169点で、そのうちⅠ～Ⅳb層出土石器は全体の72%、造構及び造構堆積土が20%、風倒木痕が3%を占める。また、石器のうち打製・磨製石器は1231点(剝片・チップ・石核は2783点)、礫石器は153点、石製品・砥石各1点である。

第146図は、Ⅰ～Ⅳb層出土の石鎌・石錐・「スクレイバー」・「二次加工がある石器(S・F)」「微細な剝離痕がある石器(M・F)」・石斧・礫石器・剝片・チップ・石核に限定し、各グリッド内の出土状況を示したものである。この図では、特にK-13グリッドを中心とした地区がほぼ前記の石器全てにわたって出土点数が最も多く、次いでK-7グリッド・M-13グリッド・K-8グリッド・J-8グリッド・L-7グリッド・P-11グリッドが各石器の出土割合に差異は有りながら、量的には他の区に比べ多い。以上の出土状況は住居跡・土壙・ビット等の造構の分布状況と符合している。本遺跡は風倒木痕の存在、緩傾斜という地形、後世の耕作等による遺物包含層の擾乱等が予想されたが、以上の石器の出土状況は、遺構と遺物の関係が不充分ながらも保持された状態で保存されていたことを示している。

II. 出土石器

1. 打製石器

(1) 石鎌 (第154図2～8・12、179図1～3)

232点出土しているが、形態分類が不可能なほど著しく破損しているものが33点ある。ここでは残りの199点を分析の対象としたが、これらの中で定形品は125点、他は破損品のうち基部の片側もしくは両側が破損しているものが45点で全体の22.9%を占める。

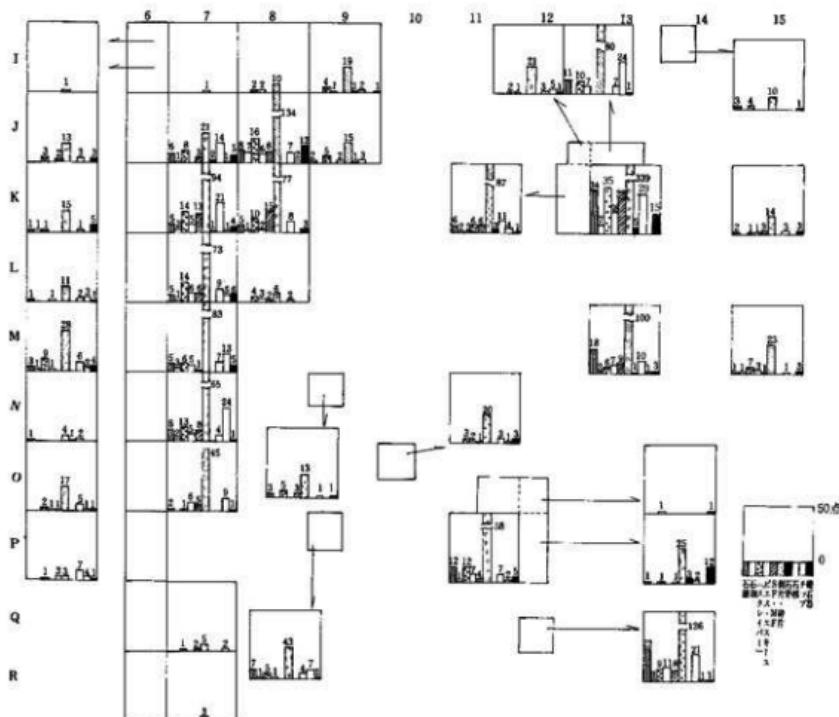
第147図の左図は、第1表(19頁)を図化したものであり、右図は各細分型式の数量を示したものである。この図から、本遺跡においては種々の型式が出土している中で、特にw類が138点と全体の69.3%を占め、坪倒的に多く出土していることが理解できる。さらに第148図は、石鎌とポイントの長幅関係と、それに類型を付加したものであるが、Aのまとまりが石鎌である。石鎌は長さ43mm前に分布するものもあるが、幅8～22mm、長さ10～30mmの範囲に集中する。Ⅰ～V類(○)はこの範囲にまばらに分布し、w類のうち圓錐類(▲)は幅8～15mmの範囲に、IX類(●)は幅10～18mm、長さ10～25mm、VII類(○)は幅12～18mm、長さ17～28mm、VI類(◆)はしいて言えば幅13mm、長さ18mmの位置に集中する傾向がある。他にアメリカ型石鎌が1点(第91図7・152頁)、先端部が丸味をおびているものが2点出土している。

尚、アスファルト(?)が基部に付着しているものが18点ある。

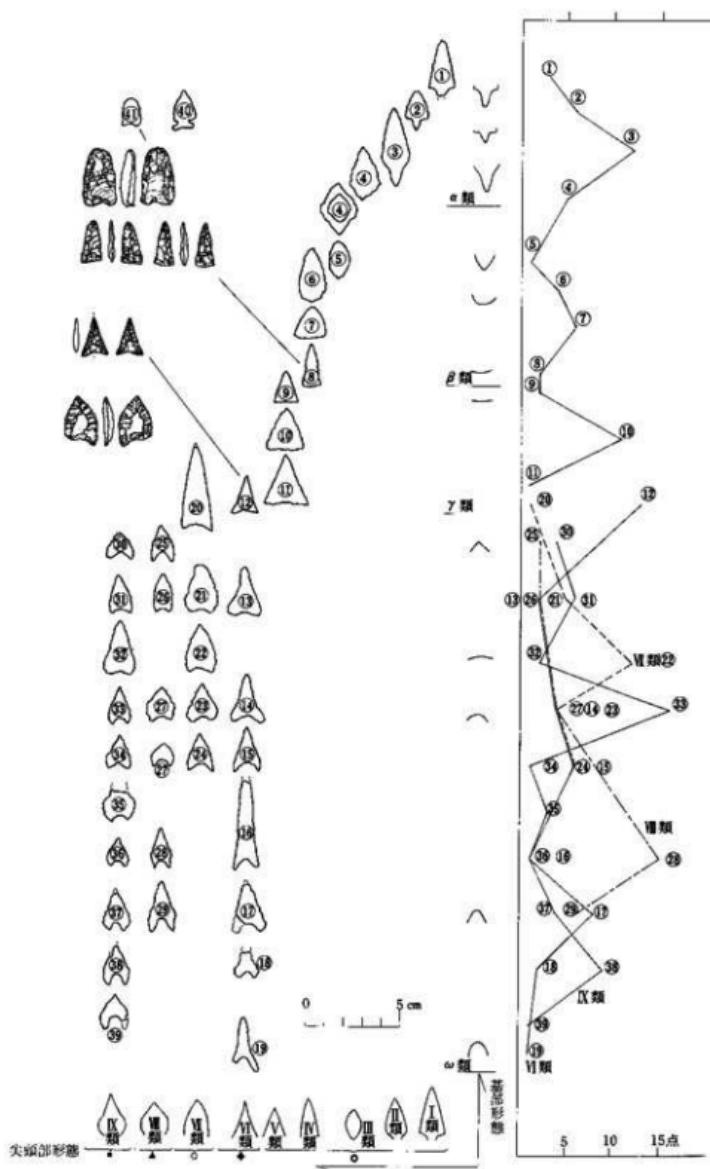
出土地點 番号	石器の種類					ピエス 状 石 器 エスコニ	スクレイバ...			刮 削 チ ブ 片	チ 子 石 核	石 核 片	磨 石 器	合 計		
	石 錐	石 錐	石 錐	ボ イ シ ト	鉋		不 規 則 形 石 器	S ・ F	M ・ F							
	錐	錐	錐	錐	錐		錐	錐	錐							
I - IV b 壁	172	41	18	26	7	108	125	9	110	29	221	1698	115	201	17	112 3009
IV c 壁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0 0 3
造側 浜側堆積上	29	7	4	5	3	30	26	0	39	9	35	389	202	18	4	26 826
風倒木痕	6	4	1	3	0	7	1	1	15	0	23	42	6	8	0	4 121
表面採集	25	9	1	3	1	7	21	1	5	4	14	81	13	7	0	11 203
合 計	232	61	24	37	11	152	173	11	169	42	293	2213	336	234	21	153 4169
																{ 7 }

* (7)はテンティキュレイト4、ノッヂ1、石製品1、砥石1
チップは長幅1cmの範囲内におさまるもの。

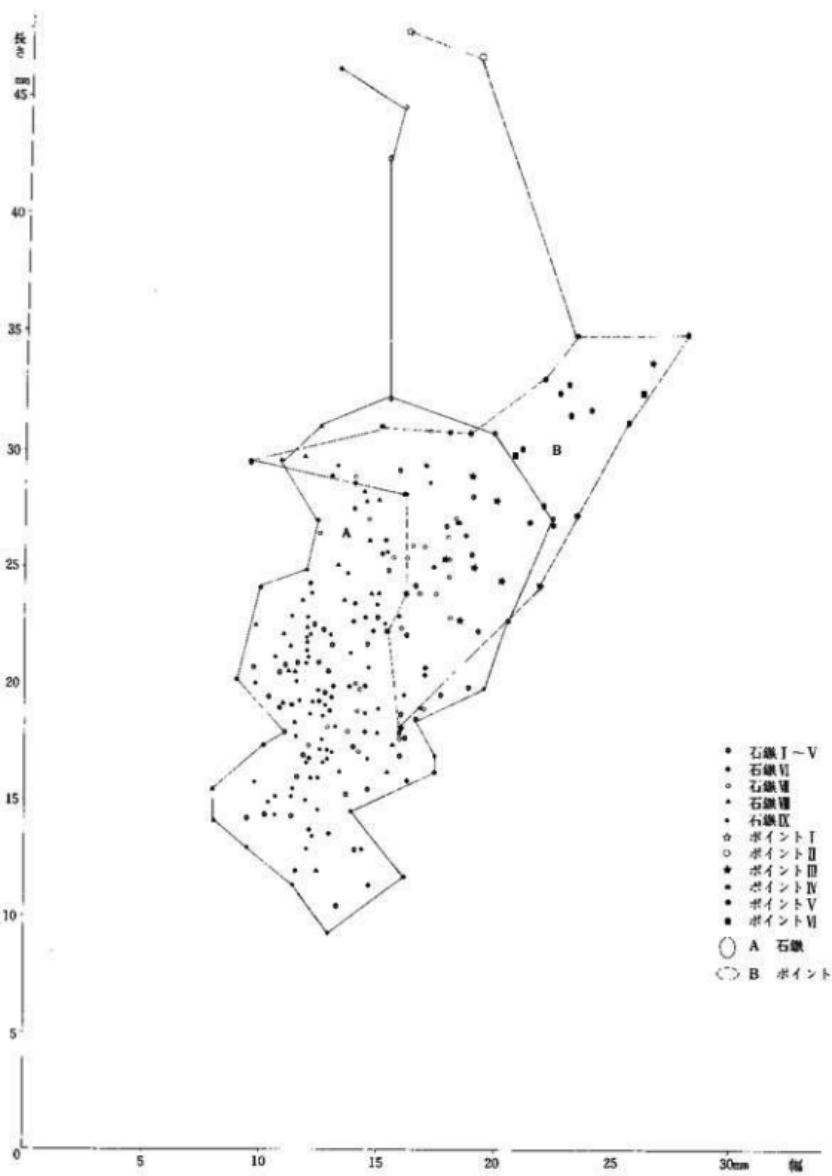
第15表 石器出土数量表



第146図 各グリッド石器出土状況



第147図 石器の型式分類及び出土数量



第148図 石鏃とポイントの長幅および型式相関図

IV. 青銅時代の遺構と遺物

(2) 石錐 (第154図9~11、155図1~3、179図4・5)

61点出土した。その型式分類と属性観察結果は第16表に、各型式の長幅関係は第149図に示した。この図から長さ2~4.2cm、幅0.8~2.4cmに集中して製作されていることが理解できる。この範囲からはずれるのは、IVb類・IIa₁類でも特異な型式である。集中範囲内においてもIIIa類は長さ3.0~4.5cm、幅1.8~8.5cm IIIb類は長さ2.6~4.0cm、幅1.7~2.3cm、IIb₁は長さ2.3~3.5cm、幅1.8~2.3cmの範囲に、IVa類は最も広範囲に分布する傾向がある。

破損品は61点中18点あり、全体の30%を占めるが、特定の型式に破損が限定されるような傾向性は特別認められなかったが、量的に最も多いIVa類に破損品が少ないので注目される。

石材は全て珪質頁岩である。

第16表 石錐観察表

分類	出土点数	破損品	先端部の崩壊
I類	1	1	0
IIa ₁	10	4	0
IIa ₂	2	1	0
IIb ₁	8	4	0
IIb ₂	1	0	0
IIIa	11	3	0
IIIb	6	3	0
IVa	20	2	1
IVb	2	0	0
合計	61	18	1

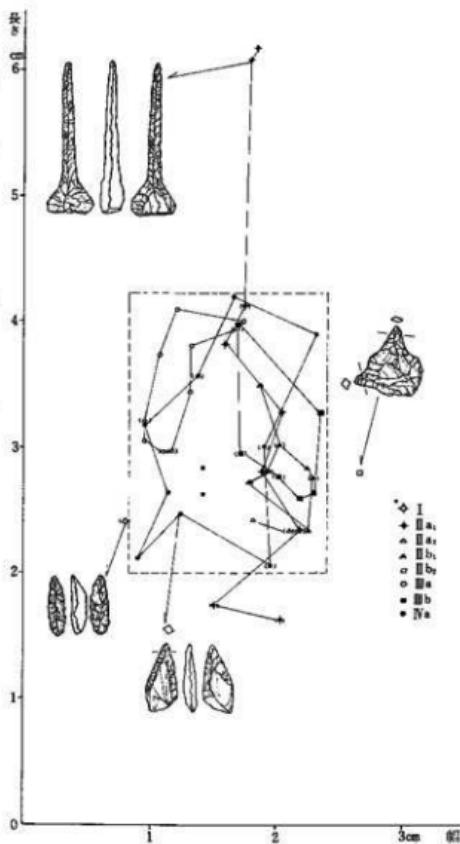
(3) 石匙 (第156図、157図1~3)

24点出土した。I類が8点、II類が11点、III類が5点である。I・II類に二重バティナが認められるものが各1点(第156図1、第157図1)、つまみ部の最も狭りの深い部分を中心にアスファルト(?)が付着しているものが1点(第156図4)である。刃部の形状は平坦もしくは凸状を呈するが、1点のみ凹状を呈するもの(第157図2)がある。

石材は全て珪質頁岩である。

(4) ポイント (第154図1、155図4~11、161図1、179図7)

37点出土した。破損が著しく、形態分類が不可能なものが3点ある。ここでは残りの34点を分析の対象とした。完形品は32点ある。第148図は石錐とポイントの長幅関係図であるが、Bの



第149図 石錐の長幅関係図

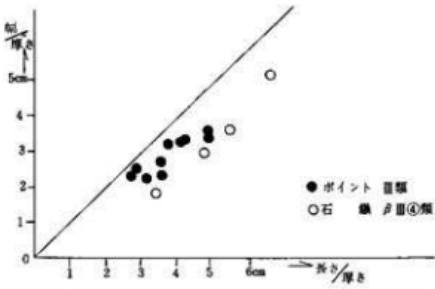
まとめがポイントである。ここで、A群とB群がオーバーラップする範囲内特に形態的に類似しているポイントⅢ類と石鐵Ⅲβ④類との相違点が問題になる。第150図はこれらの型式の幅/厚・長/厚相関図であるが、この図ではこれらは形態的には類似するが、石鐵Ⅲβ④類がより細身で、より薄手であることが理解できる。

本遺跡出土のポイントの特徴としてⅢ類・V類・VI類などの、素材に未調整部分を残したもののが20点と全体の57%を占めることがあげられる。尚、火熱痕とアスファルト(?)が付着したものが1点(第154図1)ある。

石材はめのう1点、玉髓1点、珪化木1点、他は全て珪質頁岩である。

第17表 ポイント観察表

類	出土点数	破損品	火熱痕とタマゴの付着
I類	1	0	1
II類	2	1	0
III類	12	1	0
IV類	8	0	0
V類	4	0	0
VI類	7	0	0
合計	37	3	1



第150図 ポイントⅢ類と石鐵Ⅲβ④類の幅/厚・長/厚相関図

(5) 篦状石器 (第163図1~3、179図10)

I類が4点、II類が3点、III類が4点出土した。基部が欠損しているものが2点ある。

石材は全て珪質頁岩である。

(6) ピエス・エスキュー (第157図4・5、179図6)

I類が3点、II類が59点、スパール、未製品が90点出土した。I類に二重バティナが認められるものが2点(第157図5)ある。

石材は玉髓が3点、黒曜石が5点、チャート23点、他は珪質凝灰岩、頁岩である。

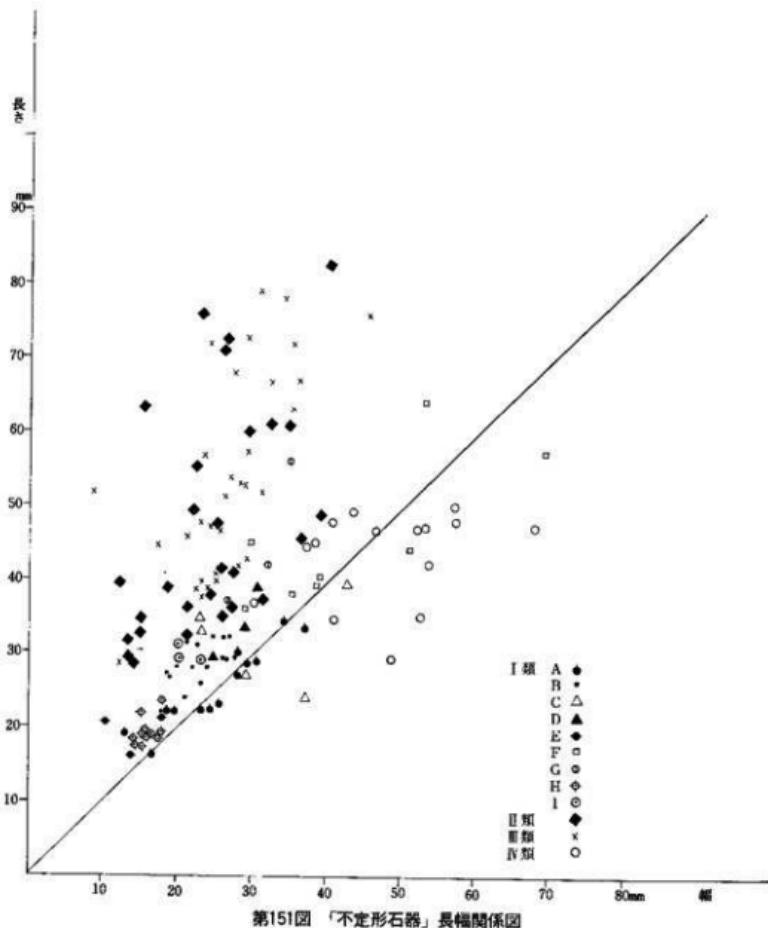
(7) スクレイバー (第158~160図、161図2~7、162図1・2・4~6、163図4~6、178図1~5、179図8・9・11)

出土数量及び「不定形石器」の長幅関係は、第18表、第151図に示した

第18表 スクレイバー出土数量表

類型	「不定形石器」										S·F	M·F	「スクレイバー」			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	II類						
出土点数	15	20	5	3	4	9	3	11	3	46	36	18	11	169	42	293

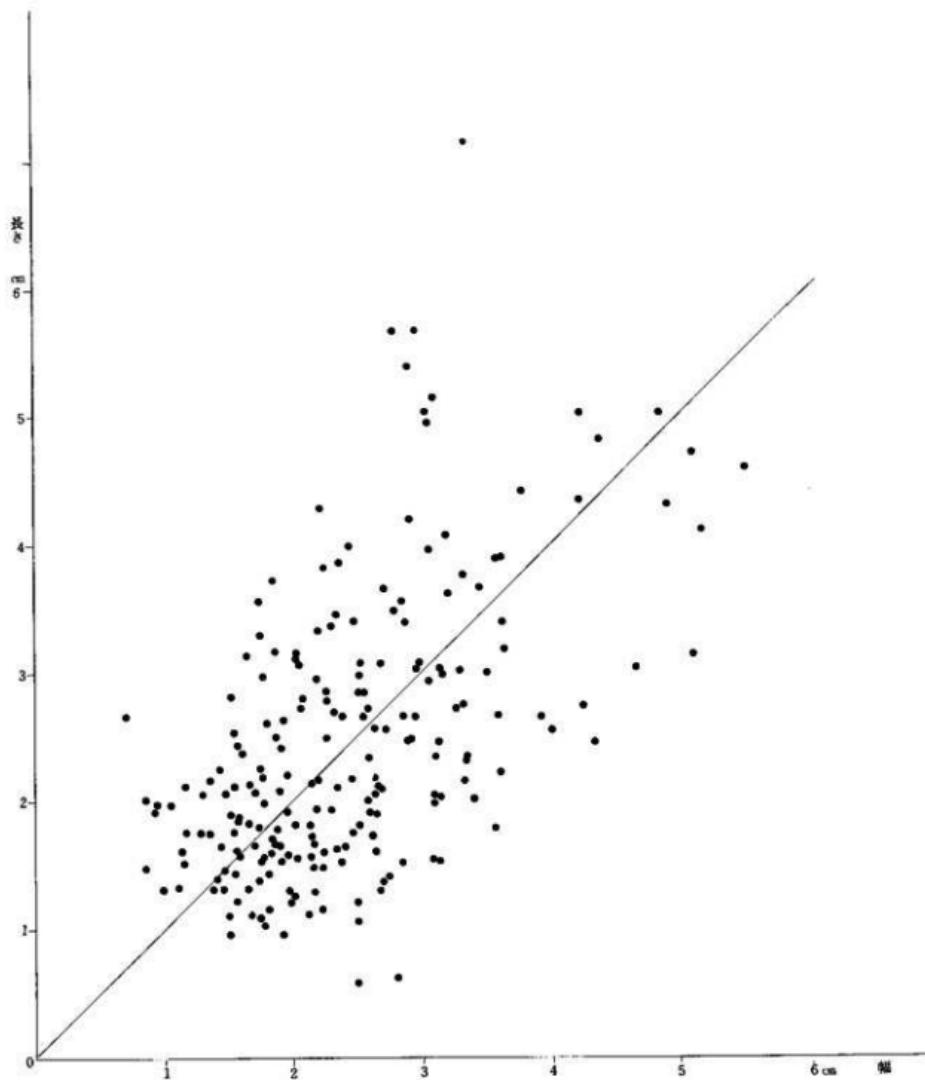
(以上の他にデンティキュレイト4、ノッヂ1がある)



(8) 剣片

2213点出土したが、このうち次の調査区のI～IVb層出土の完形資料に限定して下記の属性観察を行なった。K-13、O-7、M-7、L-7、L-8、N-7、K-7、J-12、J-13、K-12グリッドの総計210点である。

打面の形状は、平坦打面94点、調整打面50点、自然面51点、節理面10点、その他5点で、平坦打面と調整打面が全体の68%を占めた。第152図は長幅関係図である。長さ1～8cm、幅1



第152図 刺片の長幅関係図

～5cmに分布し、特に長さ、幅とも1～4cmに集中する傾向が認められた。以上のこととは、長さ、幅がほぼ等しい剥片が多く生産されていることを示している。厚さは固定しなかったが、1.5～11.5mmに分布する中で、特に3～10mmに特に多く集中している。

(9) 石核

234点出土しているが、特に分析は行わなかった。

2. 磨製石器

(1) 石斧 (第165～167図、168図1・2)

I類が4点、IIa、IIb類が各4点、型式分類が不可能なものが9点、合計21点ある。そのうち20点が破損している。破損の有り方は、刃部9点、基部6点、刃部と基部両者の破損(側部の一部破損を含む)が5点ある。この中でI、II、III、IV部(第1図 24頁)という破損の有り方が5割を占める。

使用痕としては打痕が9点に認められた。打痕は浅いもの(深さ0.5mm前後)～(A)と深いもの(深さ0.5～1mm前後)～(B)に分類できる。敲打の範囲は、基部、基部周辺、刃部、刃部周辺、側面中央部、側面中央部に分布している。破損と打痕の時間的関係は、恐らく石斧としての機能が失われた後に敲打に用いられたものと、打痕の分布状況から推定される。石材は内亜鉛鉱(?)・硅質岩(堆)各1点、蛇紋岩、砂岩、凝灰岩質砂岩各2点、他は安山岩である。

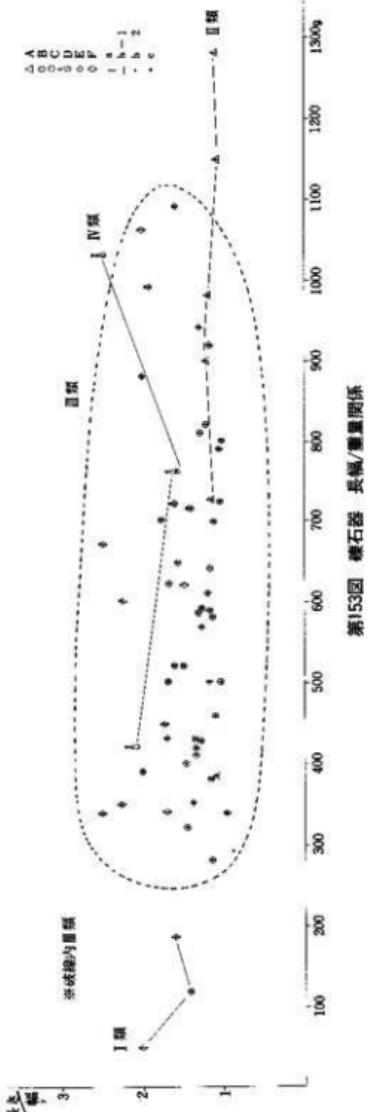
3. 碓石器 (第169～175図、176図3・4・6・8)

153点出土した。その属性は第153図、第19～21表に示した。礫の形態はC類が最も多く全体の30%を占め、次いでF類・G類が各約25.6%を占める。使用痕の組み合わせは14あるが、このうち磨痕(a)のみのものが全体の31%、磨痕(a)と打痕(b-1)と凹痕(b-2)の組み合わせ、及び磨痕(a)と凹痕(b-2)の組み合わせが各約25%を占める。特に凹痕(b-2)のみに注目し、その数を抽出すれば85点あり、全体の約半数を占める。以上を総合して礫石器の分類を行なったが、III類が92点と最も多く全体の約60%を占める。なお、このうちC-a類・F-a類を除く98点の礫はB・C・E・F類と分類されていても、幅7cm、長さ10～15cm、厚さ3～5cm前後と共通している。第153図は、G・H類を除くA～F類の完形資料の長幅指数と重量との関係を示したものであるが、III類のまとまりを中心にI類・II類・IV類が分布している。このまとまりの他に2～10kgのG類のまとまりがあり、大別的には、I類・II～IV類・V類・VI類と四つに分類できる。尚、石材は安山岩・溶岩・凝灰岩・石英安山岩・修岩等であるが、安山岩が130点と全体の約85%を占める。

3・4. 石製品・礫石 (第176図7、168図4)

各1点出土している。4は打製石斧様石器を製作後、礫石に転用したと考えられる。

柳沢みどり



第153圖 樂石器 長幅/重量關係

表第21 線の形態及び使用歴・石材の関係

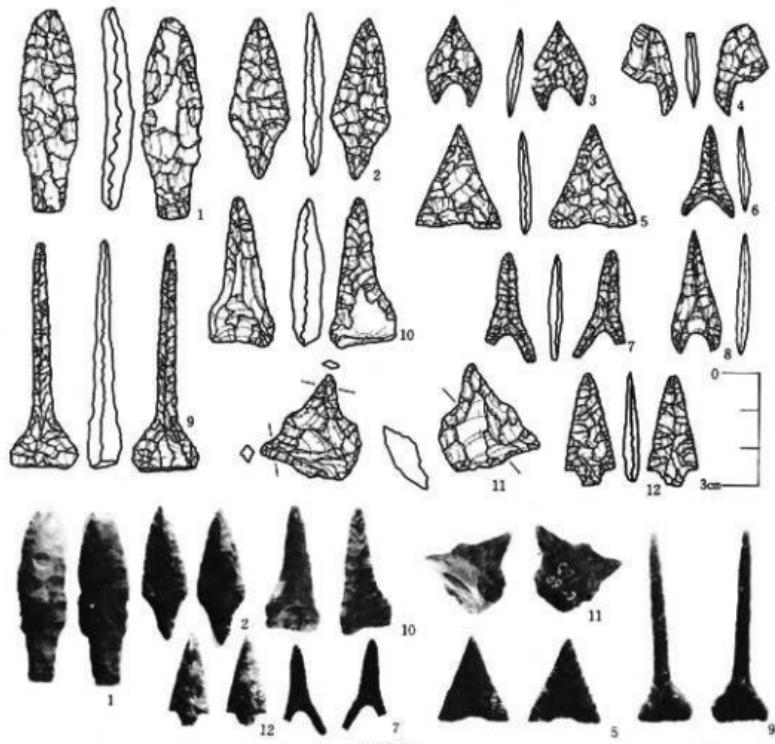
蝶の形態及び出土点数

第22表 接合および同一母岩資料

・ 接合 地盤土		地 区	連 構	層 位	名 称	石 材	同番号
1	2245	O-10(a)	—	Ⅲ	石 刻 片	珪質細粒 凝灰岩	第1786-8
	2245	—	—	Ⅲ	石 刻 片	珪質粗粒 凝灰岩	—
2	2245	O-10(a)	—	Ⅲ	石 刻 片	珪質細粒 凝灰岩	—
	2245	—	—	Ⅲ	石 刻 片	珪質粗粒 凝灰岩	—
3	302	K-7	35号土壁	堆 1	刻 片	珪質細粒 凝灰岩	第1786-7
	302	—	—	—	—	—	—
4	692	J-6(b)	—	Ⅲ	刻 片	チャート	—
	316	K-7(c)	—	Ⅲ	刻 片	チャート	—
5	2001	P-11(a)	—	I	欠損した刻片	珪質岩	—
	2354	Q-12(d)	—	I	—	珪質岩	—
6	2800	表 地	—	—	欠損した刻片	珪質岩	—
	2385	K-13(a)	—	N b	刻 片	珪質岩	—
7	2323	K-13(a)	—	Ⅲ	刻 片	珪質岩	—
	814	J-8(b-c)	—	Ⅲ	刻 片	黑曜石	第1786-6
8	575	J-8(e)	—	Ⅲ	刻 片	—	—
	934	M-7	6号土壁	堆 1	刻 片	珪化木	—
9	248	N-7(a)	—	Ⅲ	刻 片	珪化木	—
	302	K-7	35号土壁	堆 1	欠損した刻片	流紋岩	—
10	226	J-8	—	Ⅲ	—	—	—
	862	N-7(a)	20号土壁	堆 3	石 植 片	—	第9104-9
11	862	N-7(a)	20号土壁	堆 3	刻 片	チャート	* 8
	431	N-7(d)	—	Ⅲ	*	—	10
12	2455	P-11(e)	—	Ⅲ	石 植 片	チャート	—
	82	N-7(b)	—	I	S F	チャート	—
13	2323	K-13(a)	—	Ⅲ	—	欠損した刻片	チャート
	2165	K-13(a)	—	I	—	—	—
14	2357-8	P-11(d)	12号土壁	堆 2	刻 片	—	第7704-1
	2315	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 3
15	2356-16	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	第7704-2
	2357-9	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	—
16	2356-16	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	第7704-5
	2351	P-11(d)	12号土壁	堆 1	石 植 片	珪質岩	第7704-4
17	2314	P-11(d)	12号土壁	堆 2	刻 片	—	—
	2356-16	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	—
18	2356-16	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	—
	2354	Q-12(d)	—	I	刻 片	—	第7604-6
19	2357-13	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 2
	3003	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 3
20	2357-11	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 1
	2356-1	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 4
21	2356-1	P-11(d)	12号土壁	堆 2	*	—	* 5
	316	K-7(e)	—	Ⅲ	刻 片	流紋岩質岩	—
22	215	L-7(b)	—	Ⅲ	*	—	—
	294	M-7	—	Ⅲ	刻 片	—	—
23	271	M-7(a)	—	Ⅲ	*	—	—
	294	M-7	—	Ⅲ	*	—	—
24	271	M-7(a)	—	Ⅲ	*	—	—
	2405	P-11(e)	—	Ⅲ	刻 片	珪質細粒	—
25	2265	P-12(d)	—	Ⅲ	スクリイバー	珪質岩	—
	2241	O-10(a)	—	I	刻 片	—	—
26	2348	Q-12(d)	—	I	S D	グリーン・タフ	—
	2636	K-13(a)	2号住居跡, P-11	堆 下部	刻 片	流紋岩質岩	—
27	2610	K-13(c)	7号土壁	堆 下部	刻 片	流紋岩質岩	—
	2088	K-13(b)	—	Ⅲ	刻 片	珪質細粒	—
28	2317	K-13	—	N b	刻 片	珪質岩	—
	304	L-7(b)	—	Ⅲ	*	—	—
29	2138	K-15(b)	—	Ⅲ	*	—	—
	2350	P-11	9号土壁	堆 上面	*	—	—

分類番号	登録番号	地 区	透 横	層 次	名 称	石 材	開 勘
21	2357 2354	P-11(d) Q-12(d)	12号土壤	堆 2	剥 片	珪質頁岩	
22	274 2196	M-7(b) M-13	—	Ⅲ	S F	珪質頁岩	
23	516 79	O-7(b) J-7(c)	—	Ⅲ	剥 片	グリーン・タフ	
24	125 2441 2354	I-9(e) P-11 Q-12(d)	9号土壤	堆 2	スクレイバー 剥 片	流紋岩	
25	16 982	I-9 N-6(c)	—	Ⅲ	石 棒	頁 岩	
26	214 2488 157 38 2057	J-7(a) J-13(d) K-7(d) N-7 M-13(a)	—	Ⅲ	剥 片	珪質頁岩	
27	2068 271 2416 2293 2315 1019	K-15(b) M-7(a) K-13(a) K-13 Q-12(d) M-6(b)	5号土壤	堆 2	スクレイバー 剥 片	流紋岩質岩	
28	2124 2048 2038	K-15(c) M-13 M-13	—	Ⅲ	剥 片	凝灰岩	
29	2194 2269	M-13 M-13(a-b)	5号風倒木	堆 b	剥 片	珪質細粒 凝灰岩	
30	2269 2269 2194 2194 2194 2194	M-13(a-b) M-13(a-b) M-13 M-13 M-13 M-13	5号風倒木 5号風倒木	堆 地	剥 片	珪質頁岩	
31	1100 573 2362 261 330	表 採 J-8(c) Q-12(d) M-6(e) K-6(b)	1号風倒木	堆	剥 片	スクレイバー 剥 片	第162回-1 第178回-3
32	2071 310 88	M-13(c) L-7(a) K-8(a)	—	Ⅲ	剥 片	珪質頁岩	第163回-4
33	276 303	K-7(b) I-7(a)	—	Ⅲ	剥 片	珪質頁岩	
34	2001 82	P-11(a) K-7(h)	—	Ⅲ	剥 片	珪質頁岩	
35	2269 2194	M-13(a-b) M-13	5号風倒木	堆 b	剥 片	珪質細粒 凝灰岩	
36	2269 2192 2269 2267 394	M-13(a-d) M-13 M-13(a-d) M-13(a-d) M-13	5号風倒木 5号風倒木	堆 地	剥 片	珪質細粒岩	
37	2357 2359	P-11(d) P-11(d)	12号土壤 12号土壤	堆 2 堆 1	剥 片	流紋岩	
38	73 777 420 345	I-7(a) P-6(c) M-7(d) N-7(a)	—	Ⅲ	ピラミッド・スクレイバー 剥 片	珪化木	
39	2588 *	P-12(a) P-12(a)	1号風倒木 1号風倒木	堆 地	剥 片	チャート	第13回-1 第14回-2

分類番号	登録番号	地 区	遺 墓	層 位	名 称	石 材	調査年
39	2588	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	剥片		第13回-3
	*	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	石核		*-4
	*	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	*	チャート	*-5
	*	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	S-F		*-6
	*	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	剥片		*-7
	*	P-12(a)	1分住居跡P _a	堆	石核		*-8
40	2679	K-13	2分住居跡石籠土壌内	堆イ	剥片		
	2681	K-13(2)	2分住居跡伊賀方	B	剥片	鉄石英	
41	552	K-7(b-c)		堆	剥片		
	170	J-b(c)		堆	スケレイバー	珪質頁岩	
42	2682	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	剥片		第42回-1
*	-2	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	*		*-2
*	3	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	剥片		第43回-3
*	-4	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	*		*-4
44	*	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	剥片		第44回-5
*	-6	K-13(d)	2分住居跡伊賀方	堆ハ	*		*-6
45	ネ	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		第68回-1
ナ	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-2	
フ	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-3	
P.39	K-6(b)	6号ピット	堆	スケレイバー		*-4	
P.18	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		*-5	
P.61	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-6	
P.3	K-6(b)	6号ピット	堆	スケレイバー		*-7	
ソ	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		*-8	
P.31	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-9	
P.1	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-10	
P.54	K-6(b)	6号ピット	堆	*		第69回-11	
P.13	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-12	
レ	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-13	
P.50	K-6(b)	6号ピット	堆	スケレイバー		*-14	
P.30	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		*-15	
P.16	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-16	
タ	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-17	
P.27	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-18	
P.43	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-19	
P.47	K-6(b)	6号ピット	堆	石核		*-20	
ソ	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片			
P.28	K-6(b)	6号ピット	堆	スケレイバー			
P.48	K-6(b)	6号ピット	堆				
P.9	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		第70回-1	
P.25	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-2	
P.24	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-3	
P.46	K-6(b)	6号ピット	堆	M-F		*-4	
P.38	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片	頁岩	*-5	
P.14	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-6	
P.36	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-7	
P.59	K-6(b)	6号ピット	堆	S-F		*-8	
二	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		*-9	
P.63	K-6(b)	6号ピット	堆	M-F		第69回-22	
P.55	K-6(b)	6号ピット	堆	S-F		*-24	
P.8	K-6(b)	6号ピット	堆	*		*-25	
P.40	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片		第68回-28	
ツ	K-6(b)	6号ピット	堆	スケレイバー		*-27	
P.45	K-6(b)	6号ピット	堆	剥片			
P.60	K-6(b)	6号ピット	堆	*			
P.19	K-6(b)	6号ピット	堆	*			
2486	K-6	6号ピット	堆	スケレイバー	流紋岩質岩		
2357	P-11(d)	12号土壤	地2	*		第77回-6	

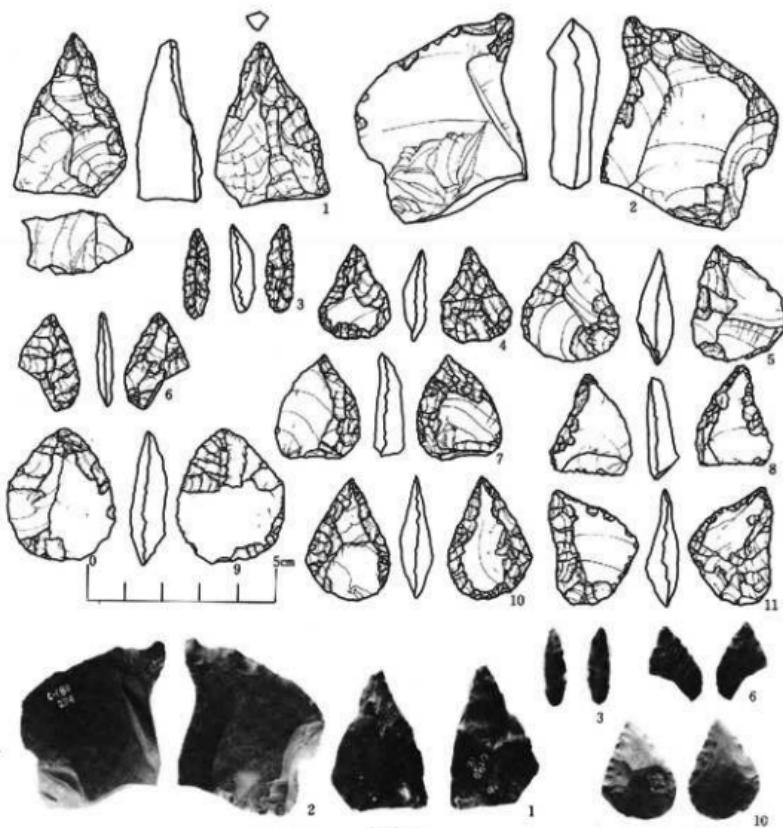


観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	K-13(b)	Ⅳb	ポイント	54.0	15.5	7.0	火熱痕とアスファルトの付着	I	珪質頁岩	2381
2	M-13	Ⅲ	石 鏽	43.0	15.5	5.0	—	II α ②	珪質頁岩	2025
3	M-13(d)	Ⅳb	石 鏽	23.5	15.0	3.5	—	II α ③	珪質頁岩	2055
4	J-9(d)	Ⅲ	石 鏽	24.0	14.5	3.0	先端部と脚部欠損	—	珪質頁岩	193
5	K-6・7	Ⅲ	石 鏽	28.0	23.0	3.0	—	V γ ⑪	珪質頁岩	333
6	N-7	I	石 鏽	24.0	14.0	2.7	—	V α ⑩	珪質頁岩	59
7	M-7	Ⅲ	石 鏽	29.5	(11.0)	3.5	脚部欠損	V α ⑨	珪質頁岩	273
8	M-7	Ⅲ	石 鏽	33.0	13.2	3.2	—	V α ⑧	珪質頁岩	184
9	M-13(b) 北東コーナー	Ⅳb	石 鏽	60.0	18.0	9.0	—	II a ₁	めのう	2116
10	N-7(c)	I	石 鏽	39.5	17.0	8.2	—	II a ₁	珪質頁岩	380
11	J-7(c)	Ⅲ	石 鏽	28.5	25.5	8.0	—	II a ₁	珪質頁岩	163
12	N-9(a)	Ⅲ	石 鏽	29.2	13.0	4.0	—	I a ①	チャート	2413

第154図 出土石器(1)

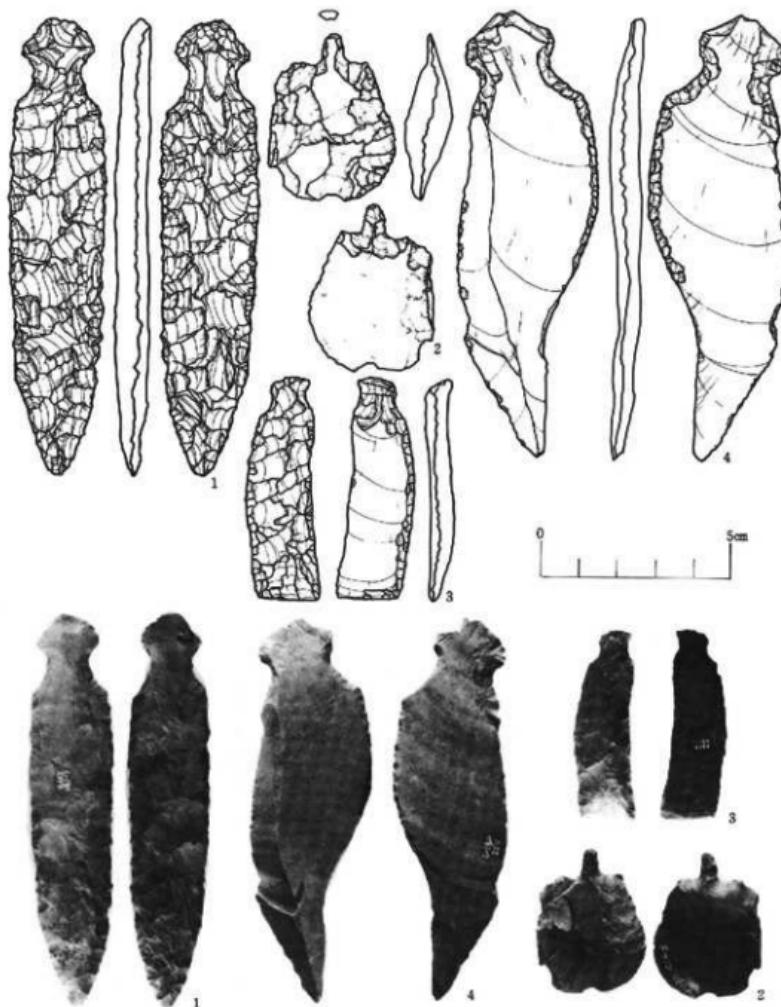


観察表

単位:mm

図	地 区	層 位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	M-7	Ⅲ	石 鋸	44.0	30.0	17.0	—	Ⅳ a	チャート	12
2	M-7 (d)	Ⅲ	石 鋸	44.0	51.0	13.5	—	Ⅳ a	珪質頁岩	274
3	K-13 (b)	Ⅱ	石 鋸	24.0	6.2	4.2	—	I	珪質頁岩	2074
4	Q-12 (d)	I	ポイント	25.5	18.0	7.0	—	Ⅲ	珪質頁岩	2327
5	N-7 (e)	I	ポイント	32.0	26.0	9.3	—	Ⅲ'	珪質頁岩	467
6	K-12 (b)	Nb 上	ポイント	26.0	17.0	4.0	基部欠損	Ⅲ	珪質頁岩	2640
7	M-7	Ⅲ	ポイント	28.2	22.0	8.0	—	Ⅳ	珪質頁岩	57
8	N-7 (a)	I	ポイント	27.0	21.5	8.0	—	Ⅳ	珪質頁岩	303
9	N-7 (a)	Ⅲ	ポイント	36.5	29.0	9.0	—	Ⅲ'	珪質頁岩	199
10	K-13	Nb上	ポイント	33.0	12.5	8.5	—	Ⅲ	珪質頁岩	
11	K-7 (d)	Ⅲ	ポイント	32.0	24.5	8.5	—	Ⅳ	珪質頁岩	

第155図 出土石器(2)

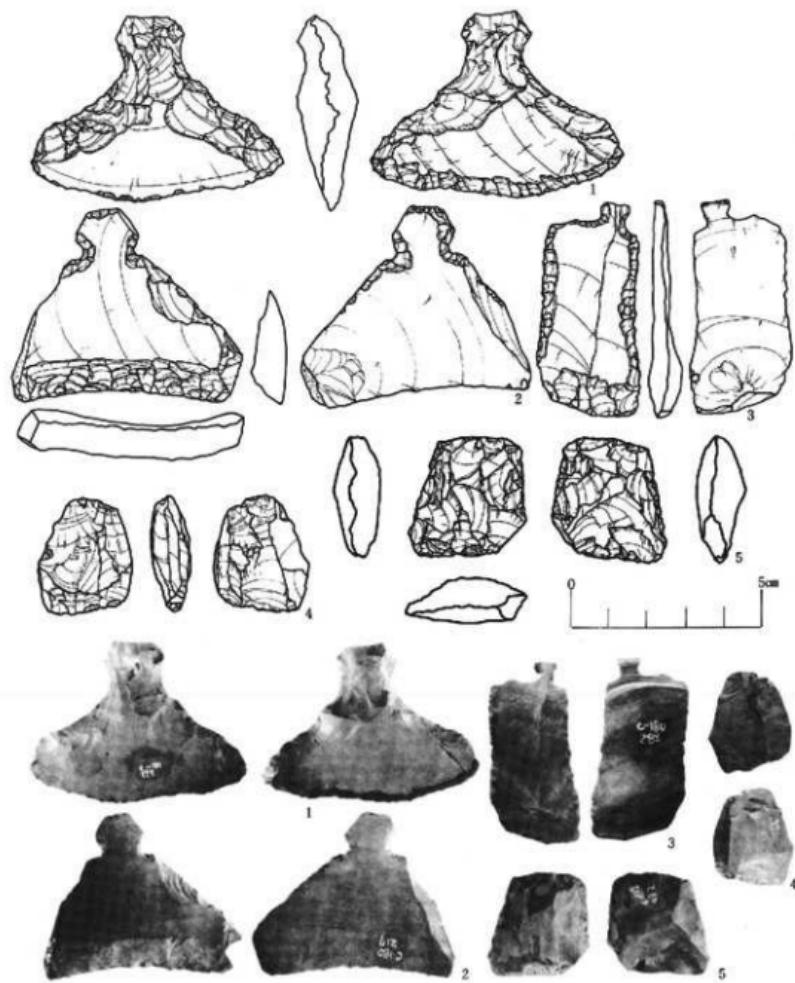


観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	K-15(c)	Ⅲ	石 鞍	120.0	25.0	9.1	二重バティナー・刃調整	II	珪質頁岩	2148
2	O.P.Q-12	I	石 鞍	119.0	37.0	8.0	—	III	珪質頁岩	2143
3	M-13(d)	Bb	石 鞍	45.0	33.2	12.0	—	II	珪質頁岩	2054
4	K-13(d)	Ba	石 鞍	60.0	18.0	6.0	つまみ部のくびれ部分にアスファルト付着	II	珪質頁岩	2511

第156図 出土石器(3)

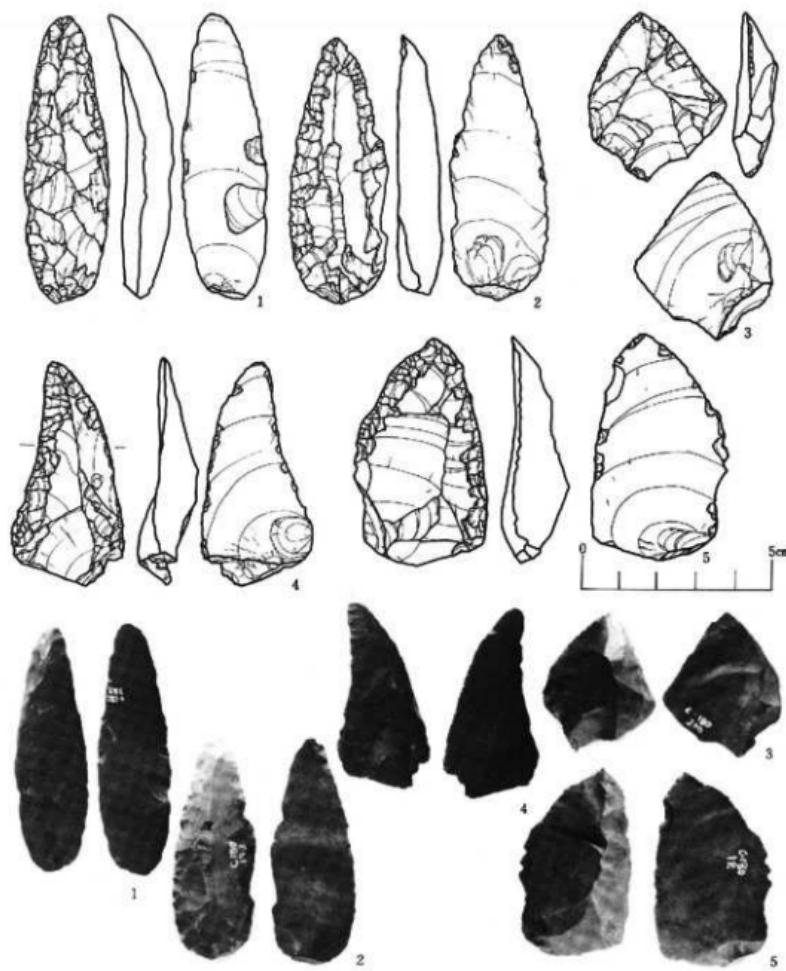


観察表

単位:mm

図	地 区	居位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	J-8(a)	■	石 砧	50.0	67.0	16.0	二重バティナー再調整	I	珪質頁岩	179
2	L-7(d)	■	石 砧	51.8	61.0	12.0	四次の刃部をつくり出している	I	珪質頁岩	217
3	K-7(b)	■	石 砧	57.0	27.4	8.0	—	I	珪質頁岩	288
4	J-8(d)	■	ピニス・エスキュー	30.5	25.2	10.3	上下から調整出す。両面打刃が認められる	II	珪質頁岩	184
5	N-7(c)	■	ピニス・エスキュー	32.0	31.5	11.6	四方から削した調整が付與せられ、後述 バティナー式調整	I	珪質頁岩	492

第157図 出土石器(4)

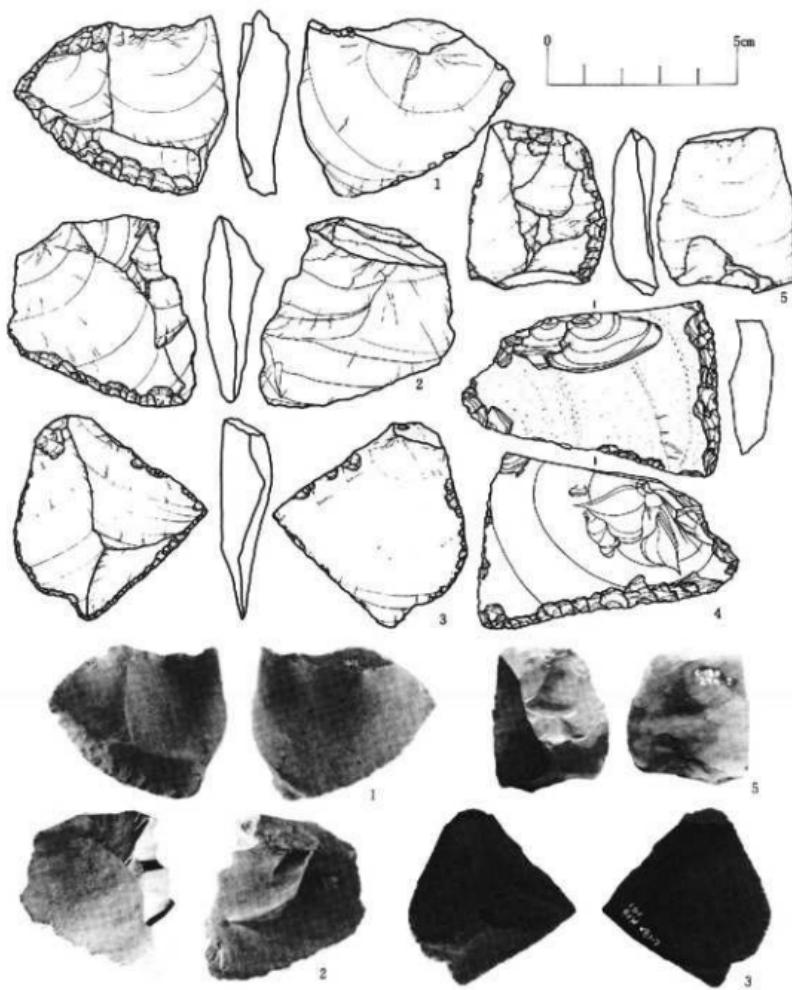


観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	K-8(d)	■	スクレイバー	72.2	23.0	10.8	—	V	珪質頁岩	380
2	K-7	■	スクレイバー	70.5	26.0	12.0	—	V	珪質頁岩	143PS-1
3	J-7(e)	■	スクレイバー	45.0	35.8	10.0	所調斜軸ポイント的	V	珪質頁岩	300
4	J-7(b)	■	スクレイバー	60.0	29.5	10.0	—	V	珪質頁岩	163
5	M-7	■	スクレイバー	60.5	34.5	18.0	—	V	珪質頁岩	12

第158図 出土石器(5)

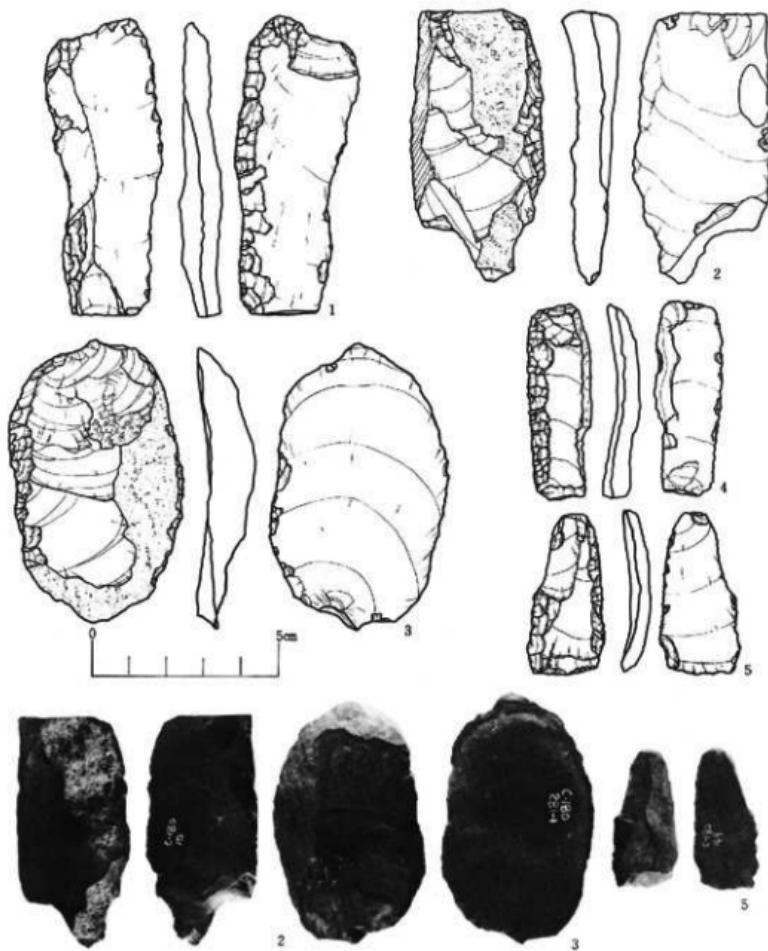


観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	P-12(d)	I	スクレイバー	47.0	56.5	13.2	—	IV	珪質頁岩	2284
2	I-8(サブトレ)	II	スクレイバー	48.0	57.0	12.0	—	IV	珪質頁岩	359
3	K-? (e)	III	スクレイバー	47.0	45.0	13.0	—	IV	珪質頁岩	141
4	79年 藤 樹	—	スクレイバー	47.0	67.5	13.0	—	IV	珪質頁岩	
5	M-7 (d)	III	スクレイバー	43.0	37.0	11.0	—	III	珪質頁岩	274

第159図 出土石器(6)

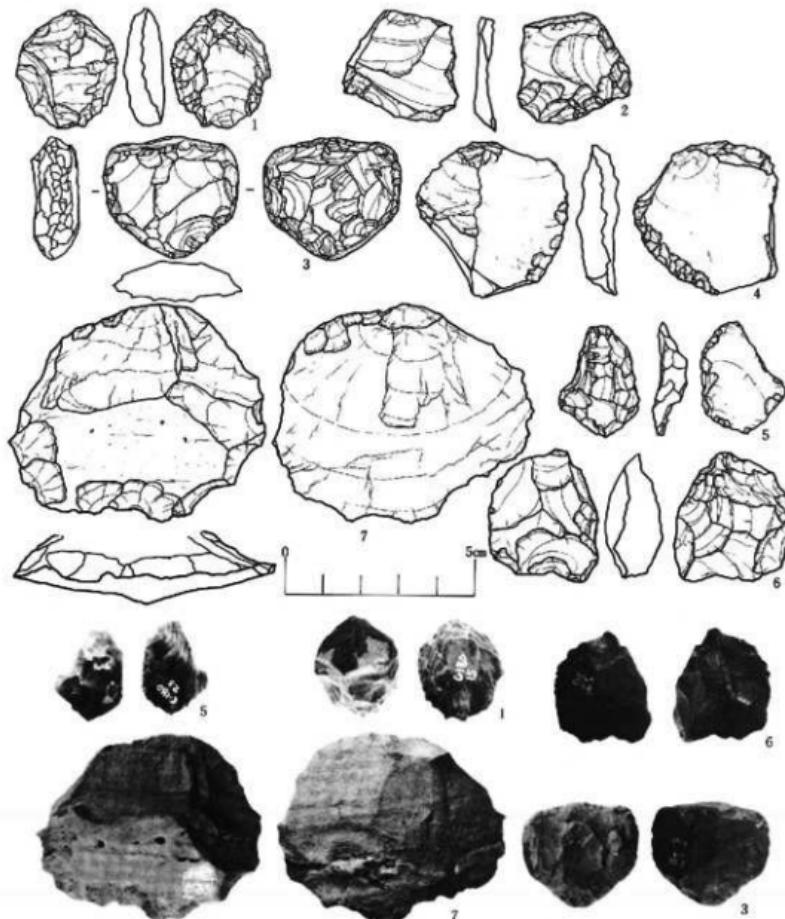


観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	K-8(b)	■	スクレイバー	80.2	30.0	11.5	—	■	珪質頁岩	233
2	O-7	■	スクレイバー	72.3	35.0	15.0	—	■	珪質頁岩	10
3	J-7(d)	■	スクレイバー	76.5	45.0	12.3	—	■	珪質頁岩	281
4	L-7(d)	■	スクレイバー	51.5	17.0	7.5	—	■	珪質頁岩	217
5	L-8	I	スクレイバー	44.0	21.0	5.0	—	■	珪質頁岩	49

第160図 出土石器(7)

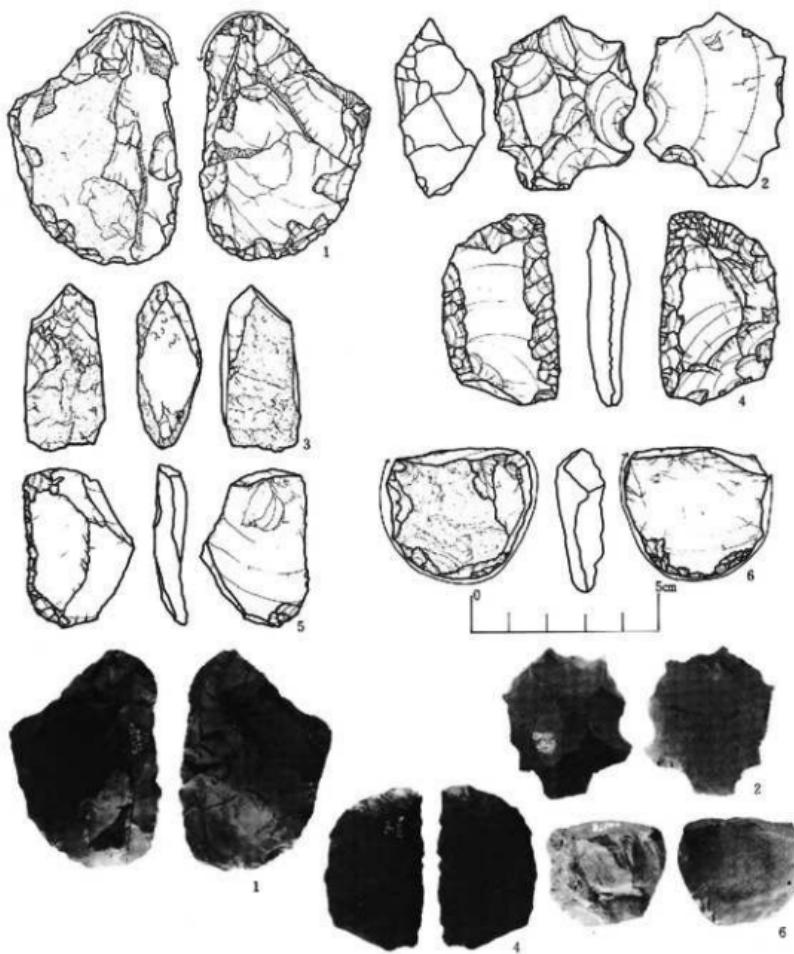


観察表

単位: cm

団	地 区	層 位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	Q-7	I	ポイント	32.0	27.0	10.5	—	Ⅴ	珪化木	15
2	N-7(c)	III	スクレイパー	28.0	30.5	4.0	—	ⅠA	珪質頁岩	512
3	K-13	IVb上	スクレイパー	32.5	36.0	12.0	敲打による刃こぼれが全周をめぐる	ⅠC	珪質頁岩	2212 PS-105
4	Q-7(d)	III	スクレイパー	41.0	40.0	11.0	—	ⅠF	珪質頁岩	774
5	J-7(c)	I	スクレイパー	28.0	22.5	7.0	—	ⅠY	珪化木	79
6	L-7(a)	III	スクレイパー	34.3	29.0	15.0	—	ⅠB	チャート	303
7	K-12	IVb 上	スクレイパー	57.0	68.5	17.2	—	ⅠD	珪質頁岩	2663 PS-26

第161図 出土石器(8)

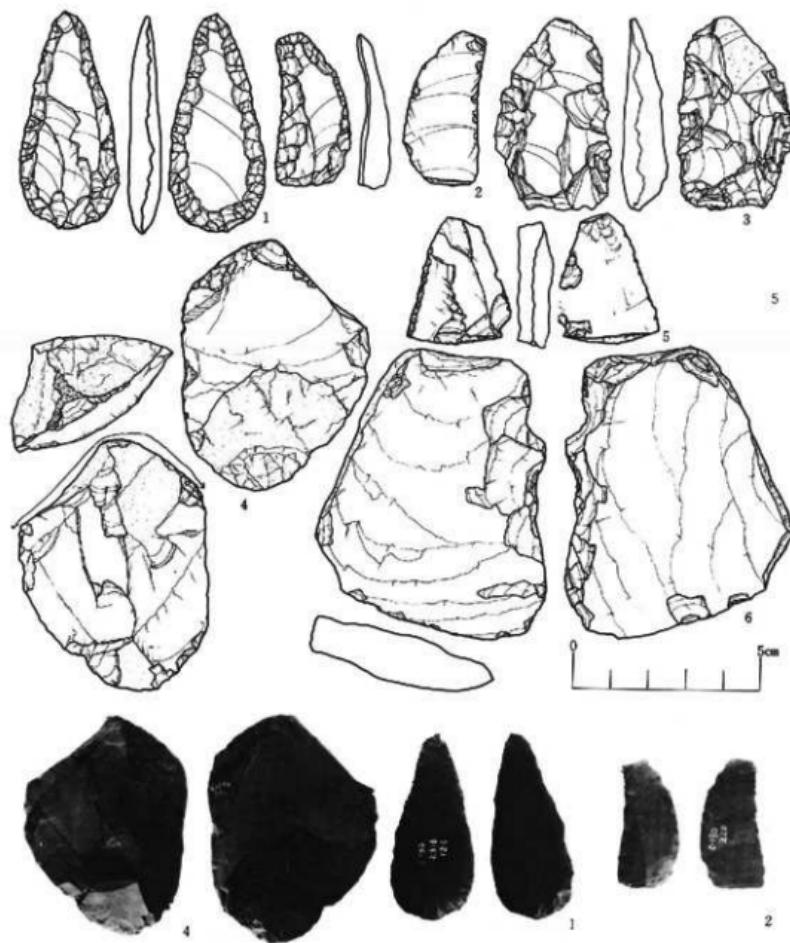


観察表

単位:mm

区 地 区	名 称	長 さ	幅	厚 さ	備 考	分 類	石 材	登 録 番 号
1	80年表採 スクレイパー	65.3	44.0		←→敲打による刃こぼれ	X	珪質頁岩	1100
2	81年表採 スクレイパー	46.3	37.5	23.0	—	I D	珪質頁岩	
3	81年表採 ピエスエスキュー、又はコア	44.0	20.2	16.5	側面に打撃痕が認められる	II	チャート	
4	79年表採 スクレイパー	51.5	31.5	10.3	—	III	珪質頁岩	
5	80年表採 スクレイパー	42.0	28.0	8.4	—	X	珪質頁岩	1088
6	80年表採 スクレイパー	35.0	38.0	13.0	←→敲打による刃こぼれ	I C	珪質頁岩	

第162図 出土石器(9)

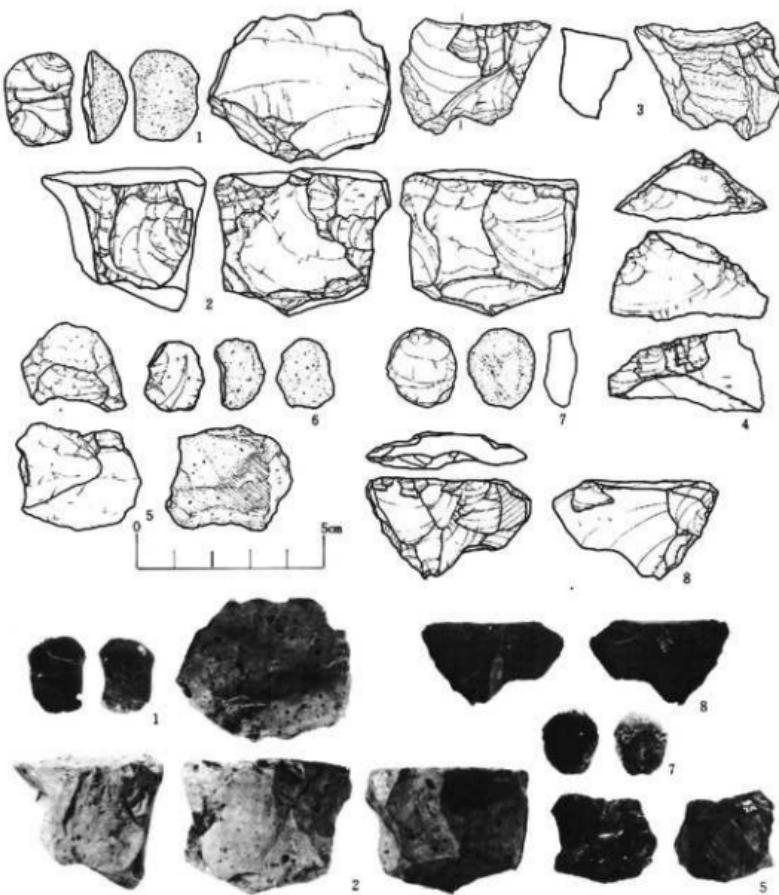


観察表

単位: cm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分 類	石 材	登録番号
1	K-13	III	塊状石器	58.2	26.0	9.0	—	Ⅲ	珪質頁岩	2316
2	L-7(b)	III	塊状石器	41.0	20.0	8.0	—	(I)	珪質頁岩	220
3	K-7(e)	III	塊状石器	51.2	39.5	12.5	—	I	珪質頁岩	1005
4	K-6(b)	III	スクレイバー	67.0	49.3	28.5	→敲打による刃こぼれ	X	珪質頁岩	330
5	N-7	I	スクレイバー	34.5	22.5	9.0	—	X	珪質頁岩	38
6	J-12(c)	I	スクレイバー	75.0	62.0	20.0	同一母岩(分類番号No.50)	X	泥質頁岩	2485

第163図 出土石器(10)

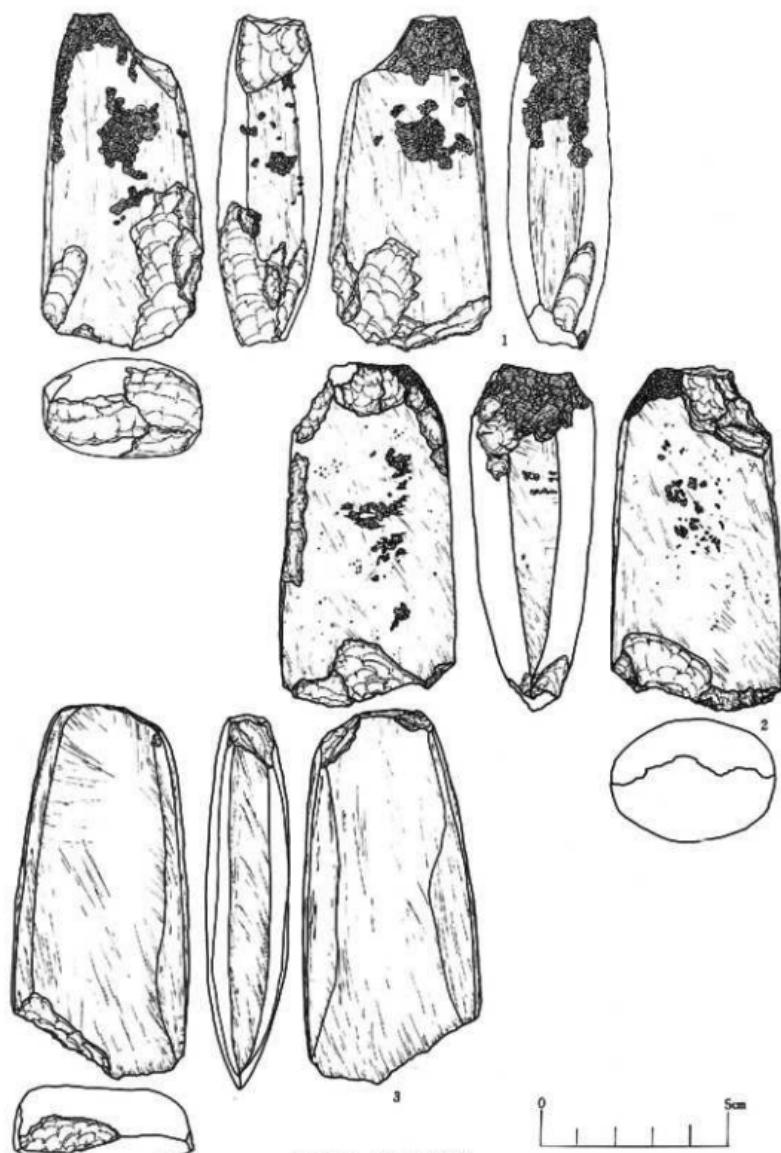


観察表

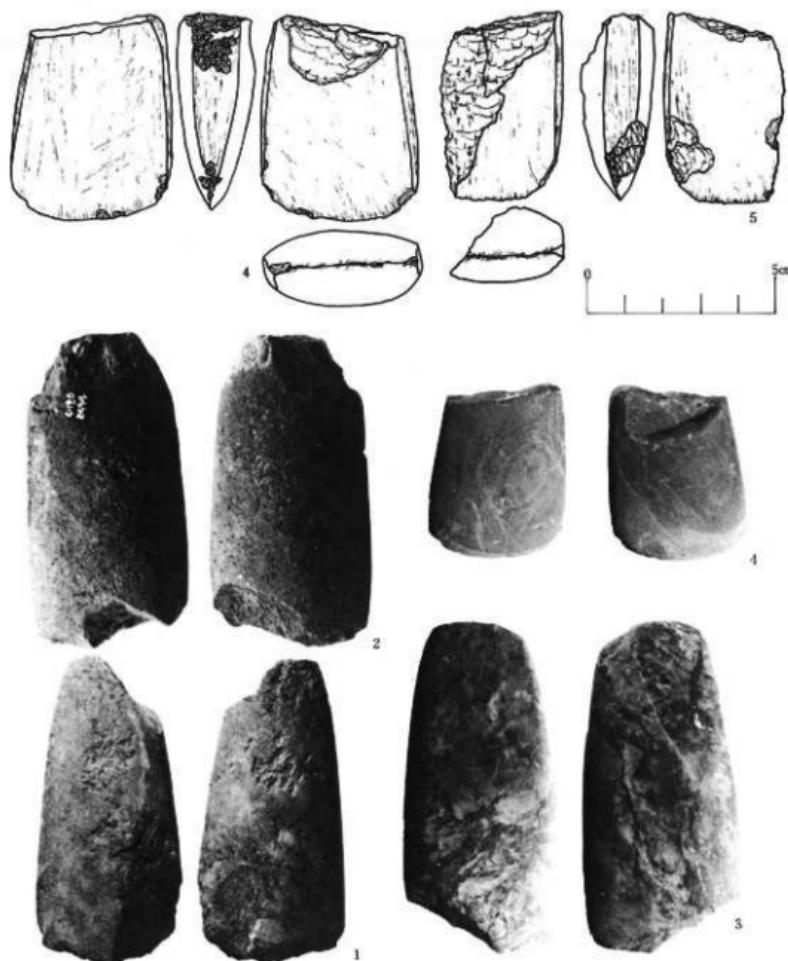
単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長 土	幅	厚 さ	備 考	石 材	登録番号
1	K-7(e)	Ⅴ b	石核	25.0	18.0	11.5	—	黒曜岩	599
2	K-7(d)	Ⅲ	石核	38.5	46.5	40.0	—	珪質灰岩	208-②
3	K-12	Ⅳ b	石核	31.0	40.0	19.5	—	珪質頁岩	2571
4	J-6(c)	ⅠⅢ	石核	23.5	40.0	19.0	打面に打撃痕がある	珪質頁岩	641
5	L-7(a)	Ⅲ	石核	28.0	34.0	22.5	—	黒曜岩	214
6	M-7	Ⅲ	石核	19.0	16.0	12.5	—	黒曜石	293
7	I-14(a)	I	石核	21.5	18.0	9.0	—	黒曜石	2167
8	Q-12(d)	I	石核	22.0	43.0	10.0	—	珪質頁岩	2362

第164図 出土石器(11)



第165図 出土石器(12)

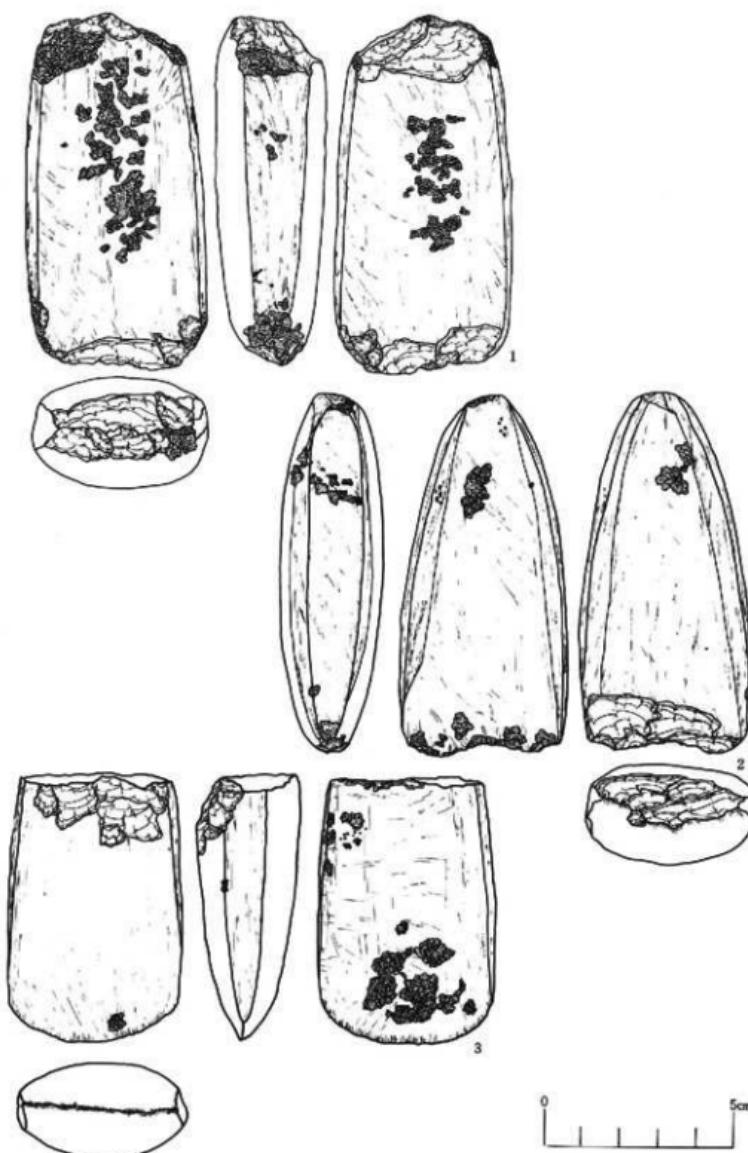


観察表

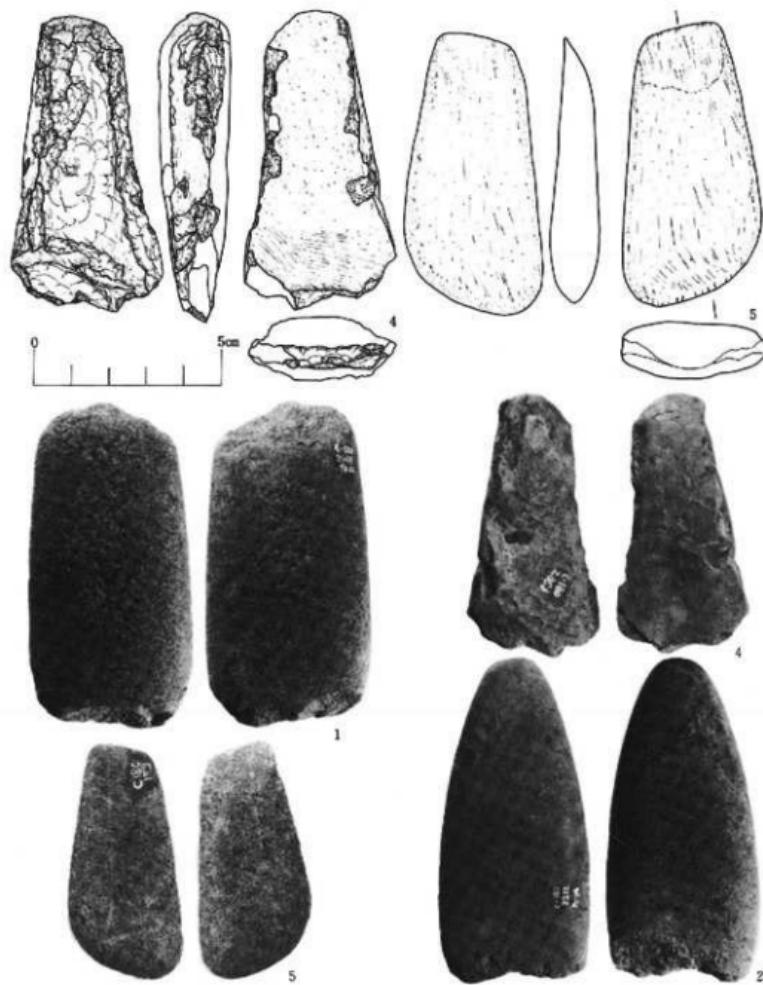
単位: cm

団	地区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	破損部	備 考	分類	石 材	登録番号
1	J-7(a)	■	磨製石斧	(90.0)	(43.0)	28.0	基部、刃部	基部の片側面、刃の背 面に敲打痕(Ⅲ)	II a	安山岩	164
2	K-12(b)	I	磨製石斧	92.8	46.7	33.2	—	基部の片面に敲打痕(Ⅲ)、 刃の両面に擦打痕(Ⅰ)	II a	安山岩	2494
3	P-12(a)	I	磨製石斧	(79.4)	(40.8)	16.9	基部の一端、刃部の一端	—	I	硅質岩(塊)	11
4	N-6	I	磨製石斧	(54.0)	(41.3)	(26.6)	I, II	刃の片側面に敲打痕(Ⅲ)	—	凝灰質岩	39
5	J-7(a)	■	磨製石斧	(52.0)	(32.2)	(20.0)	I, II, III	—	—	安山岩	162

第166図 出土石器(13)



第167図 出土石器(14)

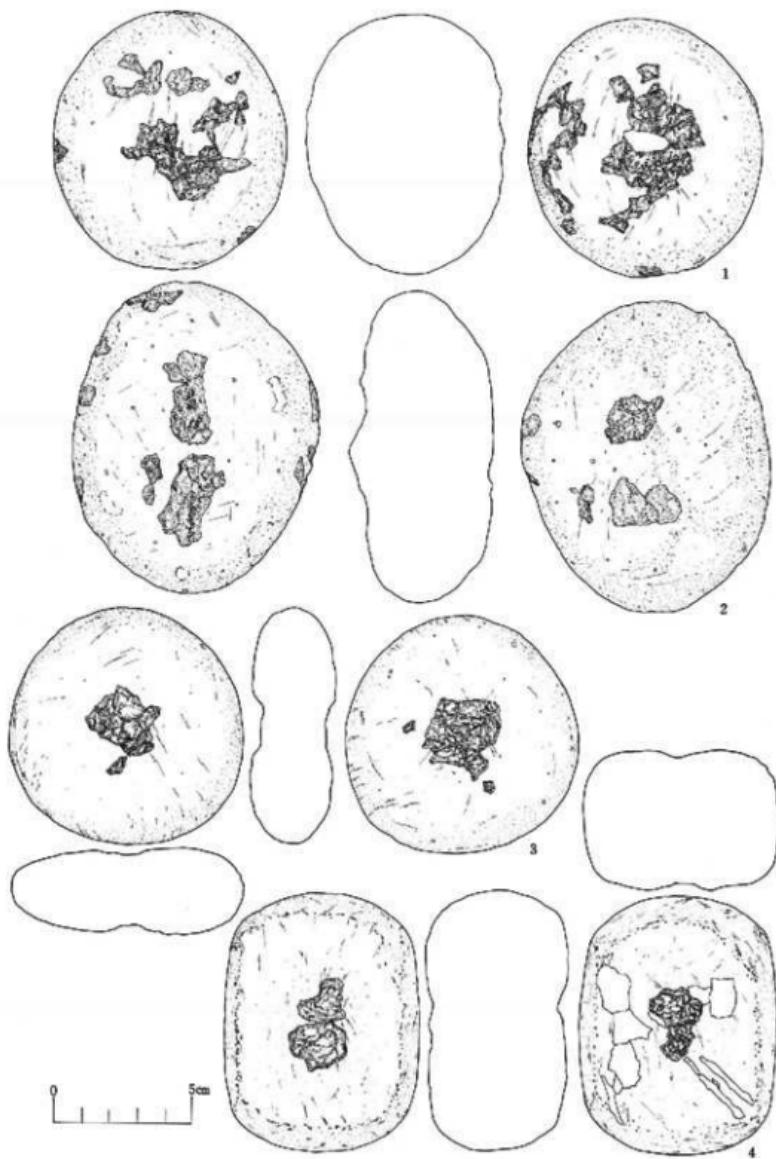


観察表

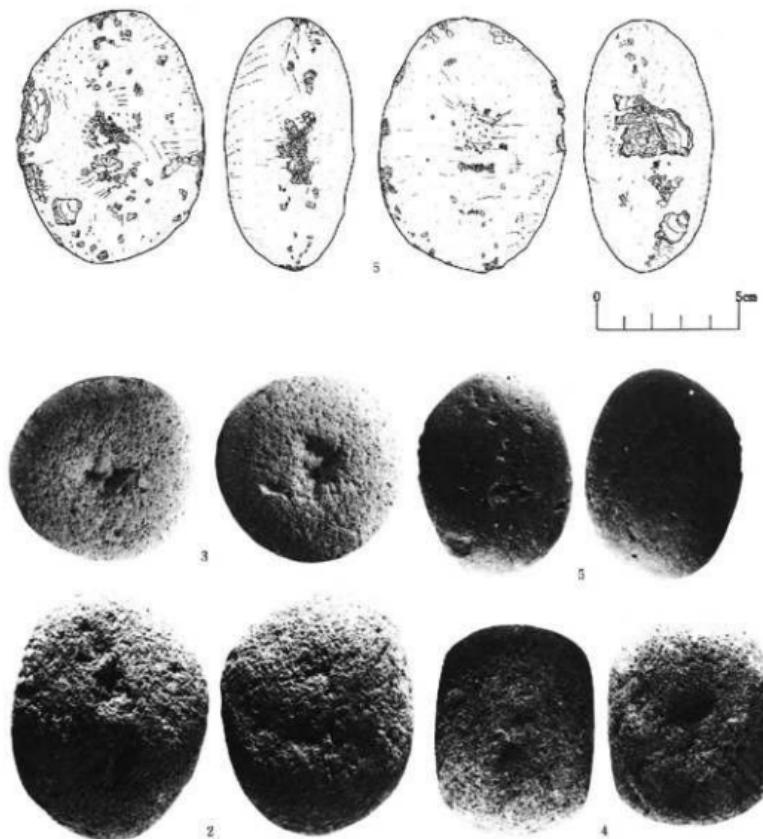
単位:mm

固	地 区	層 位	名 称	長 さ	幅	厚 さ	破 指 部	備 考	分類	石 材	登録番号
1	K-12(bc)	Ⅱ b 上	磨製石斧	96.8	47.8	30.6	船部、刃部	刃の斜面に骨刺溝と骨打痕(A)、刃の側面に骨刺溝と骨打痕(B)	Ⅱ a	安山岩	P S-24
2	P-12(d)	I	磨製石斧	(98.7)	(44.0)	25.0	I、刃部の一側	基部と刃部とに敲打痕(A)	Ⅱ b	安山岩	2284
3	K-12(bc)	Ⅱ b 上	磨製石斧	(71.5)	46.3	(25.6)	I	刃の側面に敲打痕(A-B)	Ⅱ	安山岩	P S-23
4	P-12(a)	↑	石斧	79.4	40.8	15.9	—	打製石斧(?)様に製作後、成石に起因	—	不明	2363
5	J-6 (e)	III	(磨石)	75.0	37.0	13.0	—	自然端の断面になる部分を表すに神々	—	—	173

第168図 出土石器(15)



第169図 出土石器(16)

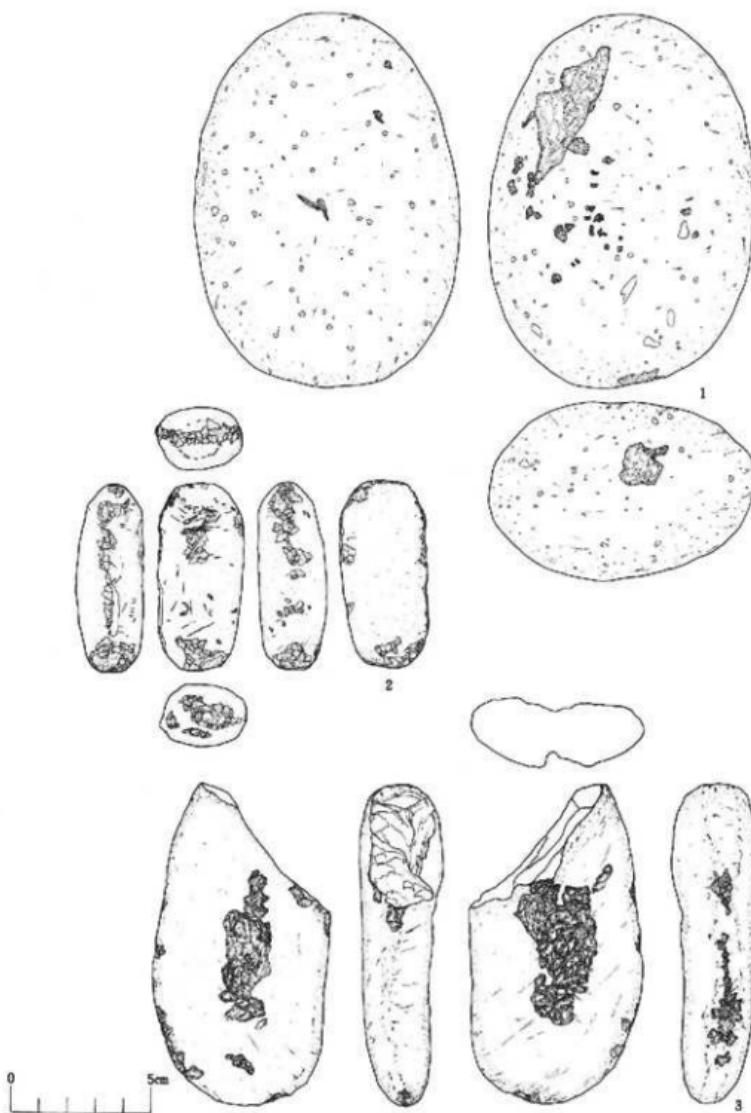


観察表

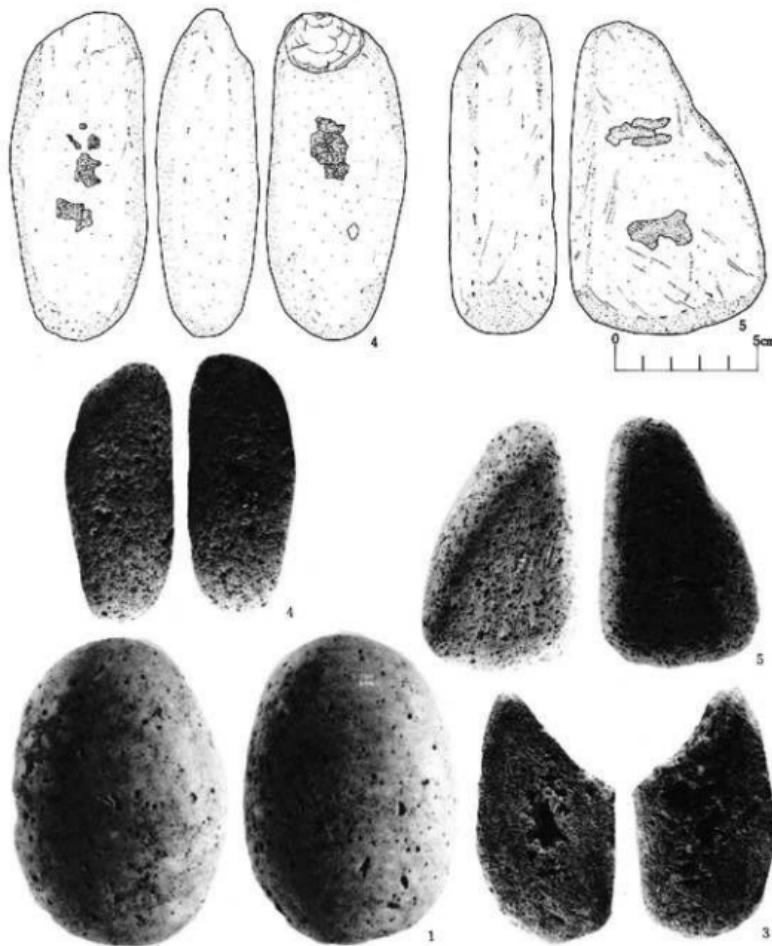
単位:mm.g

図	地 区	層位	長 き	幅	厚 さ	重 量	標の形態	使 用 痕・他	分類	石 材	登録番号
1	L-6	I	92.6	79.7	70.5	725	A	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	95
2	K-12(b)	Ⅳb 上	110.7	86.7	50.9	570	C	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	2698
3	O-b(b)	Ⅲ	63.8	85.2	31.4	340	B	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	834 PS-55
4	P-12	I	91.0	68.9	50.6	590	C	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	2747-8
5	K-7(c)	Ⅲ	90.0	66.0	45.0	445	C	両面に磨痕(a) 両面側面に敲打痕(b-1)	III	安山岩	649

第170図 出土石器(17)



第171図 出土石器(18)

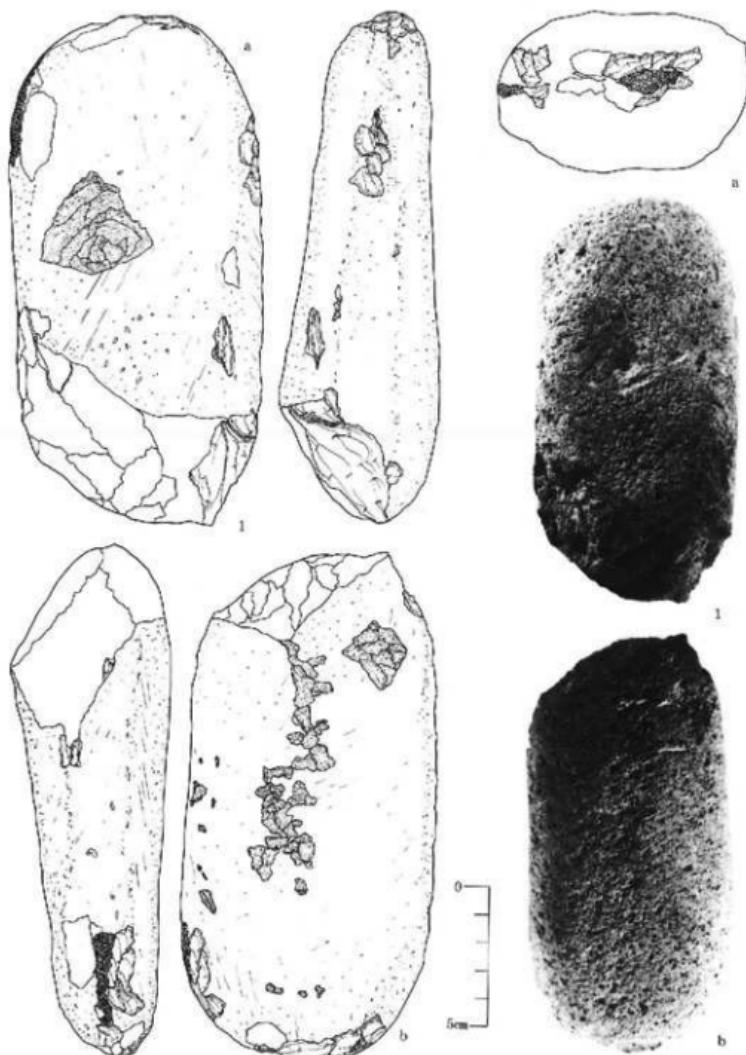


観察表

単位: mm.g

図	地 区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	種の形態	使 用 様・他	分 類	石 材	登録番号
1	I - 7(d)	II	133.0	92.0	61.8	120	C	全面に磨痕(a) 裏、黒色の付着物が一部に有り	■	安山岩	306
2	P - 9(a)	I	67.0	30.0	25.0	85	C	両面に磨痕(a) 側面に敲打痕(b-1)	I	不明	2218
3	P - 11(a)	III	115.6	61.8	22.5	190	E	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	■	安山岩	2280 P-S-9
4	K - 13(b)	I	116.8	47.8	34.6	260	E	両面、両側面に擦痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	■	安山岩	2462 ①
5	K - 10(b)	I	114.2	66.8	37.2	450	F	両面、一側面に磨痕(a) 片面に敲打痕(b-2)	■	安山岩	2462 ②

第172図 出土石器(19)

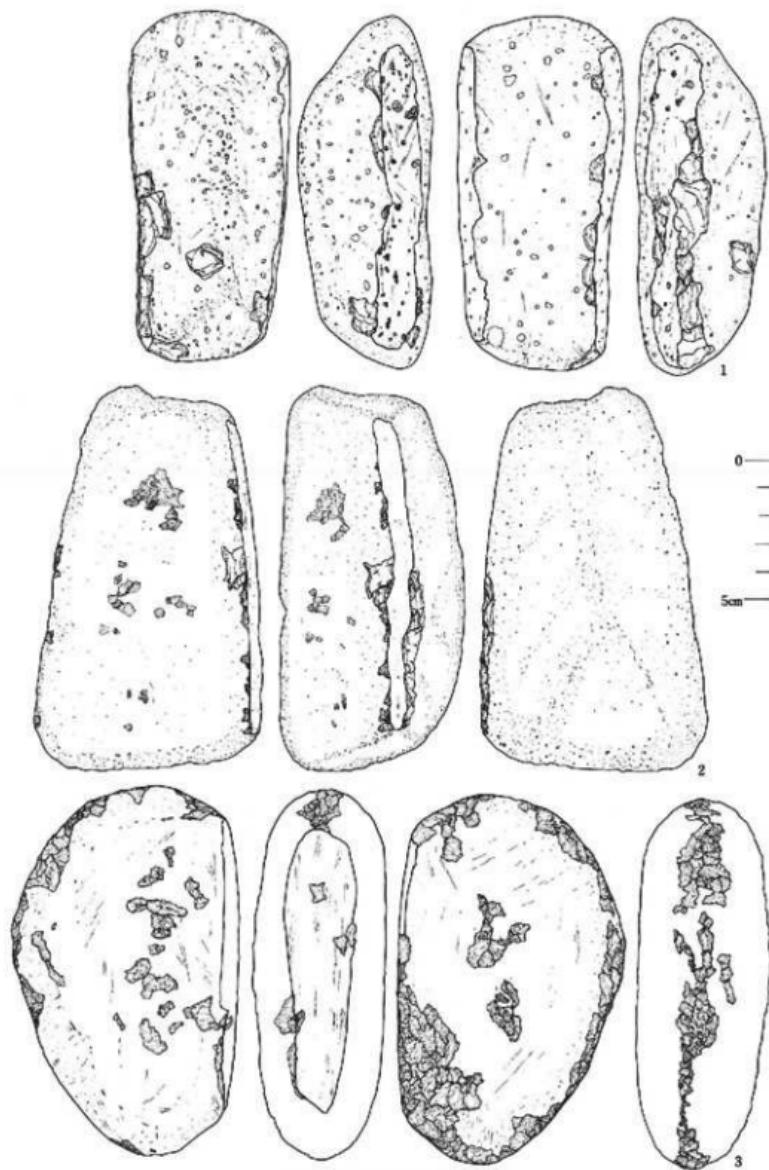


観察表

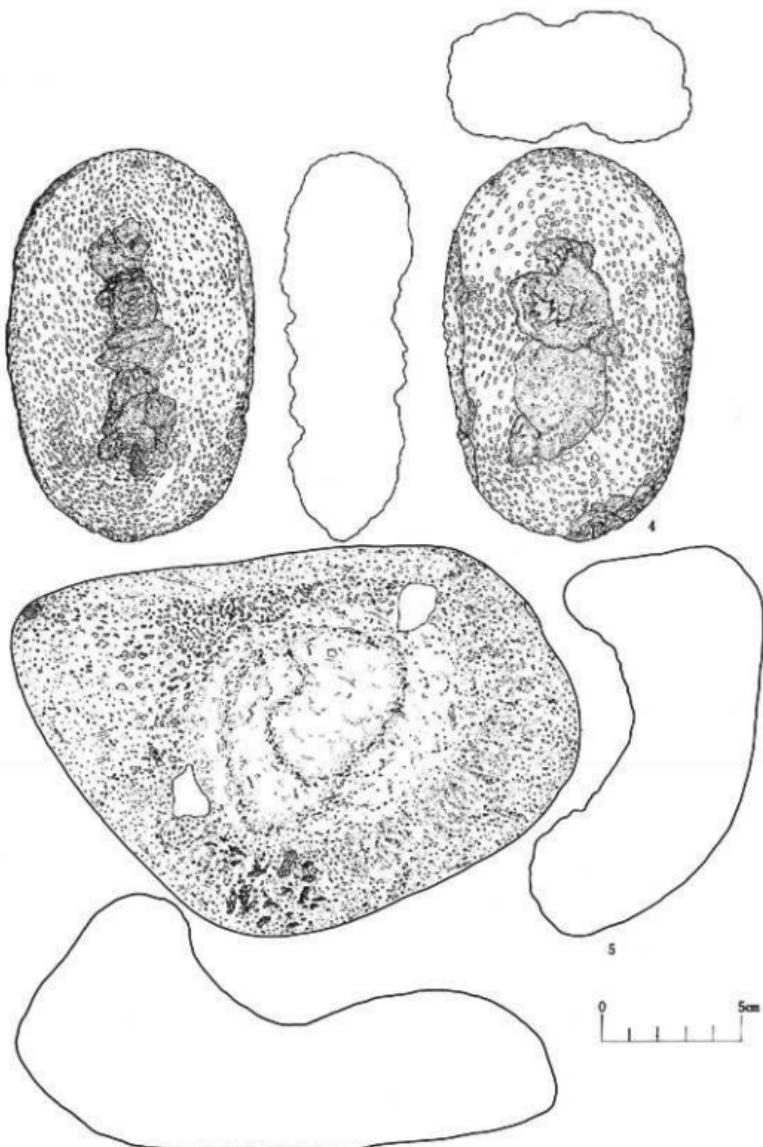
単位: mm. g.

図	地 区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	理の形態	使 用 領 域・他	分 類	石 材	登録番号
1	K-13	Nb上	181.0	89.0	57.0	1150	F	a・b両面にスス状の付着物	(Ⅲ)	安山岩	2323

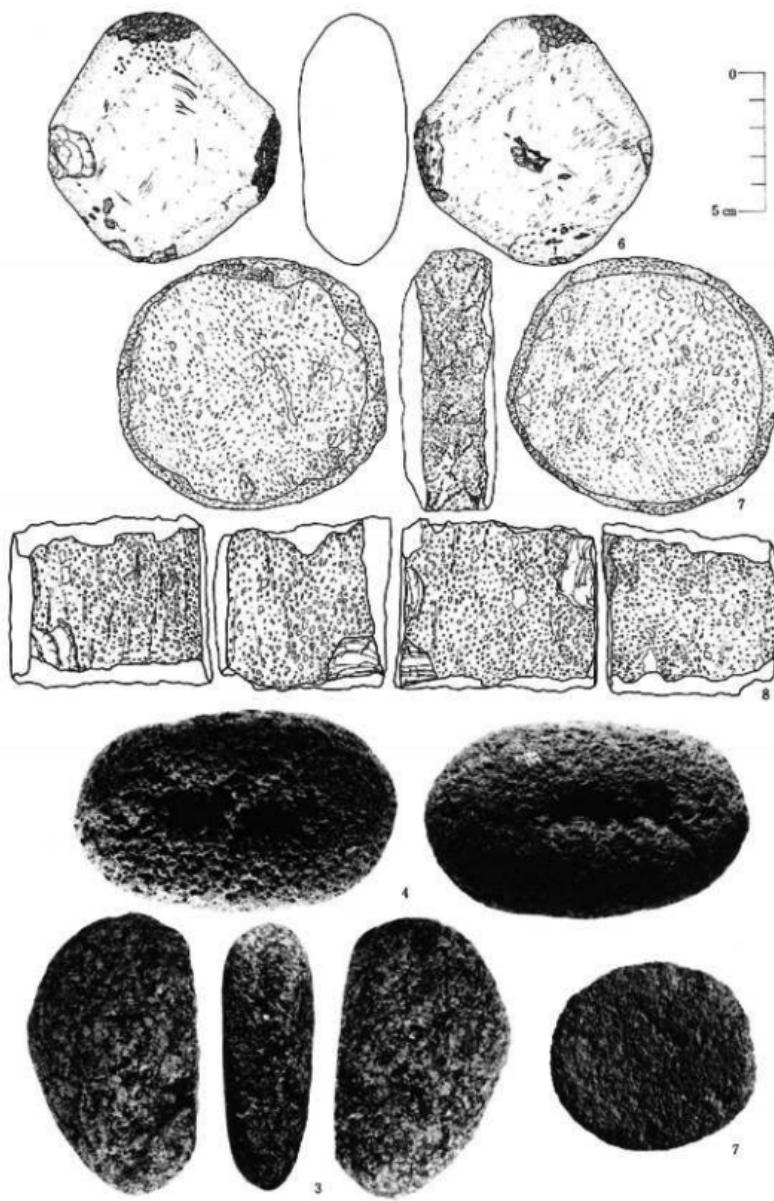
第173図 出土石器(20)



第174図 出土石器 (21)



第175図 出土石器(22)



第176図 出土石器 (23)



観察表

単位:mm

図	地 区	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	重 量	邊の形態	使 用 痕・他	分類	石 材	登録番号
1	表 採	—	磨石器	126.0	57.0	47.0	420g	D	両側縁に「擦痕」(c)	IV	石 黒 安山岩	349
2	M-6	III	磨石器	137.0	80.2	65.0	760g	D	両側縁に「擦痕」(c)	IV	石 黒 安山岩	1036
3	K-13(a)	IIb 上	磨石器	132.0	80.0	47.5	720g	C	片面側縁に「擦痕」(c) 裏面に敲打痕	IV	石赤内 緑 砂岩	2212 PS-112
4	K-7(d)	III	磨石器	140.0	89.0	47.0	700g	C	片面側縁に「擦痕」(c) 裏面に敲打痕	III	滑 岩	199
5	M-13	III	磨石器	300.0	213.0	134.0	10kg	G	圓というより圓状の 四部	V-1-b	安山岩	2749
6	M-13(d)	I	磨石器	89.0	82.0	39.0	370g	F	赤い付着物が裏面に ある	III	安山岩	2013
7	K-13	IV b 上	石製品	95.0	90.0	33.0	350g	—	両面に磨痕(a), 角部に敲打痕(b-1)	—	滑 岩	2316 PS-130
8	M-13(d)	I	磨石器	72.0	61.0	62.0	490g	H	四面に磨痕(a)	H	安山岩	2013

第177図 出土石器(24)

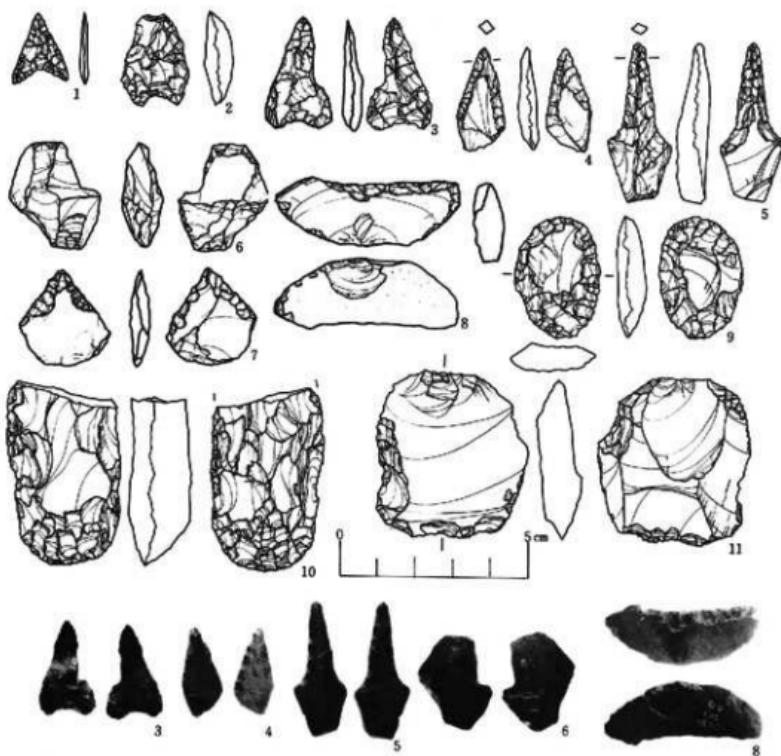


観察表

単位: cm

図	地区・遺構	層位	名 称	長さ	幅	厚さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	J-8(c)	Ⅲ	スクレイバー	19.0	19.0	7.5	—	I E	黒曜岩	742
2	J-8(c)	Ⅲ	スクレイバー	31.0	26.0	8.0	—	I A	黒 曜 岩	730
3	1 瓶	地	スクレイバー	25.0	16.0	6.0	—	—	精 质 石	573
4	1 風	堆	切削調整石器	37.5	34.0	5.4	—	V	精 质 石	218
5	1 瓶	堆	スクレイバー	40.5	39.0	10.0	—	I F	質 石	601
6	J-8(c) J-8(b+c)	Ⅲ	刮 削 器	19.0	14.0	9.0	—	—	黑 曜 岩	579 614
7	35D	堆1	片	13.6	15.0	2.5	—	—	精 质 石	302
8	O-10(a)	Ⅲ	石 制 片	23.0	44.0	32.0	—	—	精 质 石 質 石	2245 + 2246
							接合資料 (分類番号No. 7)			
							接合資料 (分類番号No. 3)			
							接合資料 (分類番号No. 1)			

第178図 出土石器(25)



観察表

単位: mm

回	地 区	名 称	長 さ	幅	厚 さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	79年表探	石 鋸	19.0	15.0	2.0	——	II a⑫	珪質頁岩	
2	79年表探	石 鋸	24.2	17.6	8.0	先端部欠損	II a⑬	珪質頁岩	
3	79年表探	石 鋸	30.0	17.5	5.0	側縁部一部欠損	II a⑭	珪質頁岩	
4	79年表探	石 鋸	27.5	13.0	5.0	——	II b	珪質頁岩	
5	79年表探	石 鋸	43.0	17.0	8.2	——	II a⑮	珪質頁岩	
6	81年表探	ピエスエスキュー	29.0	24.0	11.0	——	II	珪質頁岩	2092
7	80年表探	ポ イ ン ト	26.5	23.6	5.0	——	V	珪質頁岩	1012
8	80年表探	スクレイバー	16.5	49.0	7.5	——	IV	珪質頁岩	549
9	79年表探	スクレイバー	32.0	22.5	7.5	——	I B	珪質頁岩	
10	79年表探	範状石器	49.0	30.0	16.0	基部欠損	III	珪質頁岩	
11	79年表探	スクレイバー	44.0	40.0	11.0	——	(I A)	珪質頁岩	

第179図 出土石器(26)

V. 古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構と遺構内出土遺物

古墳時代の遺構としては、土壙1基（35号）が検出されたのみである。

35号土壙（第180・181図）

K-7グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層上面で検出された。2号風倒木痕を切っている。上端長軸規模約4m、上端・下端平面形とも不整長楕円形、深さ約50cmを呈する大型の土壙である。長軸が非常に長く、底面は若干凹凸状態で、北東側では1段高くなっている。堆積土は3層から成る。

土壙中央よりやや北西側の上部より完形の土師器の甕が1点ほぼ横位の状態で出土した。他には堆積土1層中より土器片を中心とする縄文時代各時期の遺物が多量に出土したのみである。

当土壙は、Ⅲ層上面で検出されている上、縄文各時期の土壙と形態が異なるという点、加えて土師器の甕が土壙上部に置かれていた可能性が強いことより、所属時期は土師器の年代より古墳時代中期と考えられる。

佐藤甲二

2. 出土遺物（第181・182図）

土師器 甕2点があるだけで、35号土壙（第181図1）、T-9グリッド第Ⅲ層（第182図1）より出土している。

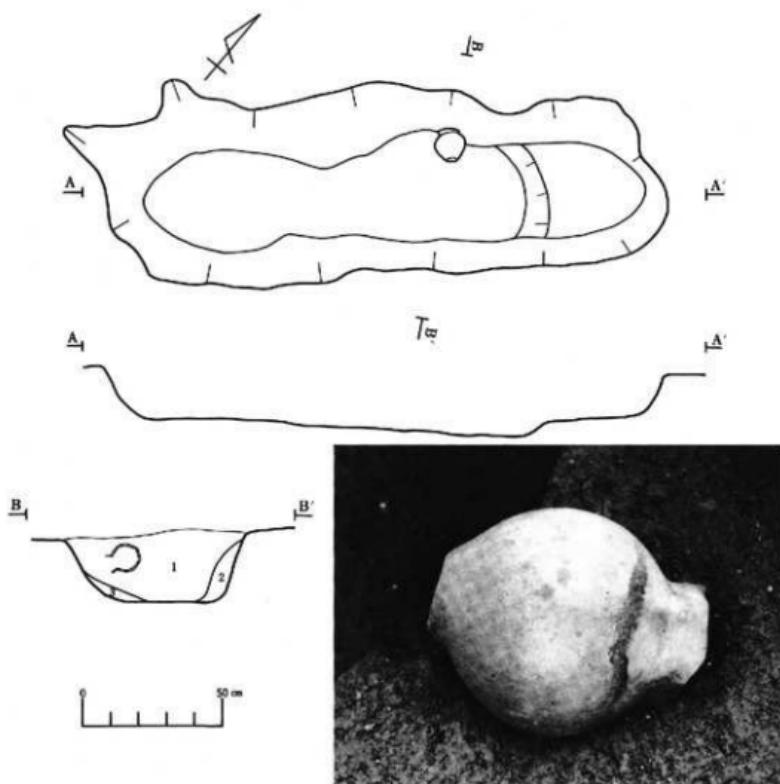
第181図のものは、体部がほぼ球形のもので、口縁部はやや外傾し、端部は丸く、器面全体は厚手である。器高は口径よりも大きく、最大径の位置は体部中央にある。器面調整は口縁部外面が横ナデ、体部外面が刷毛目後ヘラミガキされ、内面は胎土・焼成が不良のため一部にヘラナデが残るだけである。口縁部には指の圧痕、体部内面には輪積み痕が見られる。さらに外面の体部上半には、黒褐色の炭化物が付着している。

第182図1は、口縁部から体部上半の破片のため全体の器形は不明である。口縁部は外傾し、端部は丸く、器面全体は厚手である。器面調整は、胎土・焼成が不良のため口縁部外面では一部にヘラミガキ、ナデ、内面に横ナデが施されている。口縁部・体部外面に第181図と同様の炭化物が付着している。

いずれも、個々の出土であり、共伴する遺物はない。氏家和典氏の土師器の編年では、体部が球形となる甕は、古墳時代全般を通じて見られる。栗園式のものは口縁部と体部との境に段の形成が見られることから35号土壙出土の甕とは区別され、この甕は南小泉式の範疇に含まれると考えられるけれど、共伴する他の器種がなく、明確な時期は明らかでない。ここでは古墳時代中期と位置づけておくが今後の類例の増加に注目したい。

篠原信彦

35号土壇



35号土壇観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態	平面規模 cm	深さ cm	號角	底面状態	上端長軸方位	備考
K-2b)	墨層上面	3	長椭円	296×134	358×80	27	120°~130°	若干凹凸	N-45°-E 2風を切る

35号土壇土層註記表

層	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト	やや強い		小礫多量。炭化物。
2	7.5YR 5/6 褐色	粘土質シルト			黄色粒。炭化物少量。
3	10YR 5/6 暗褐色	粘土質シルト		やや良	

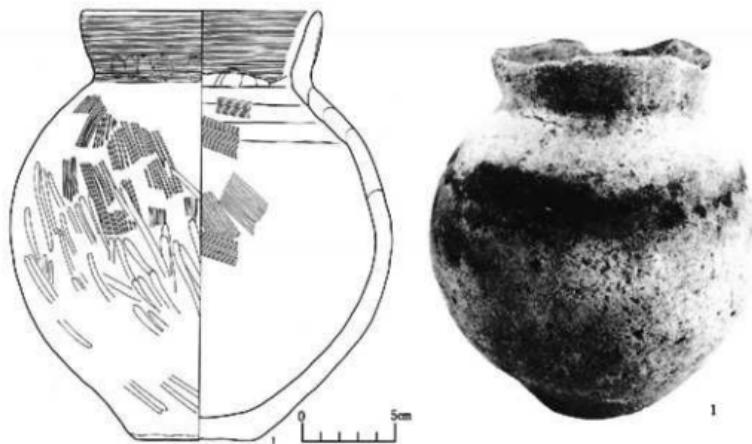
35号土壇出土遺物数量表

堆積土	遺物	馬文土器							石器							備考						
		完形	口縁部	体部	群別				石製門類	石器			チップ	石片	礫石器							
					I	V	VI	II		S	M	F										
	1	1	45	268	23	3	19	7	22	9	276	4	2	5	3	1	42	1	1	1	2	堆積土2・3層は無機物質

第180図 35号土壇平面図



20. 35号土壤完掘状況

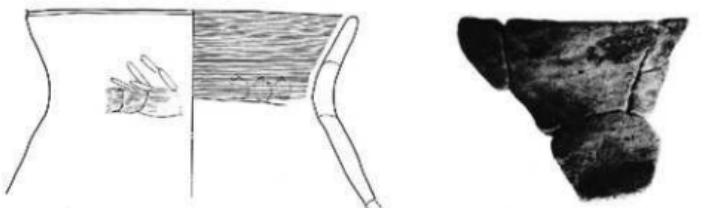


土器觀察表

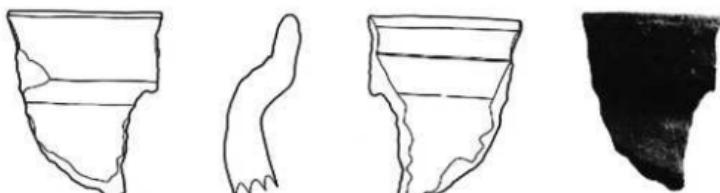
単位: cm

図	造構	地質	口径	底径	器 高	最大径	外 面 調 整	内 面 調 整
1	3SD	I	12.8	6.3	23.0	20.4	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、ヘウミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ハラナデ、輪摺み痕

第181図 35号土壤出土土器



1. 土師器塊



2. 中世陶器塊

観察表

単位: cm

図	地区	層位	口 種	底 種	高(残存高)	最大径	外 面 調 整	内 面 調 整
1	I - 9	Ⅲ	(17.6)	—	(10.2)	—	ヘラミガキ、ナデ	ヨコナデ
2	吉井		—	—	(6.6)	—	ロクロ	ロクロ

第182図 土師器・中世陶器

VII. その他の遺物 (第182図)

その他の遺物として、土師器、赤焼土器、中世陶器の小破片がある。

土師器・赤焼土器は、第Ⅰ・Ⅱ層よりわずかに出土している。製作に際してロクロ使用のものである。土師器壺には、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整の底部片1点がある。

中世陶器は、甕口縁部小破片1点(第182図2)が表採されている。口縁帯をもつもので、口縁帯の幅は広い。この破片は県内産のもので室町時代(橋崎彰一氏の御教授)のものである。

篠原信彦

VII. 考察

縄文時代の遺物と造構の分布

—出土土器を中心として—

I 土器の層位の分布(第23~25表)

第23表は基本層位出土の縄文土器口縁部資料1628点(復元土器7点を含む)の各層の出土数量及び割合を出したものである。表24は基本層位出土の土器群別資料1363点(復元土器13点を含む)の各層の割合である。口縁部資料の割合はⅢ層→Ⅰ層→Ⅳ層→Ⅱ層の順となり、Ⅲ層は実に60%以上もの出土量がある。しかし、Ⅲ層はⅠ・Ⅱ層同様群別資料の割合を見る限り各群が混在しており、Ⅳ層の擾乱層的・二次堆積層的な様相を帯びている。Ⅳ層は口縁部資料の割合では10%と出土量が少ないが、これを細分層内(Ⅳb層の上面資料はⅣb層とは区別した)の群別資料の割合でみると、Ⅳa層中では第Ⅲ群土器(晚期後葉)の占有率が高く、Ⅳb層中では第Ⅱ群土器(早期末葉)の占有率が高い。第Ⅲ群土器はⅣb層上面を境にしてⅣb層中では占有率が極端に低くなる。Ⅳc層になると第Ⅱ群土器の占有率が100%となる。また第Ⅴ群土器(中期後葉)、第Ⅵ群上器(後期初頭)、第Ⅶ群土器の各群について、Ⅳ層内出土数量を細別層別の割合でみると(第25表)、Ⅳa層の占る割合は第Ⅴ群土器では少なく、第Ⅲ群土器では反対に多くなり、第Ⅶ群土器ではその中間的な割合を示す。第Ⅲ群土器中では、Ⅳb層上面を除くⅣb層出土のものはわずか6%しか占めない。以上の点よりⅣ層中に於いて、Ⅳc層は縄文時代早期末葉の包含層として認定出来、Ⅳa層からⅣb層上面にかけては、Ⅳb層中に若干の第Ⅶ群土器を含んでいる点より、縄文時代晚期後葉の包含層と連続出来ないが、その可能性を十分含むと言える。

II 土器の平面的分布

1. 接合関係(第183図1)

第183図1は6m以上離れた土器、石器の接合関係を示したものである。基本層Ⅲ層間では4例、Ⅰ層と他層・造構間のもの6例認められる。Ⅲ層間では15m以上も離れる1例(No.2)、Ⅰ層と他層・造構間のものは3例(No.6・7・9)認められ、その他のものは10m内外である。Ⅲ層間の接合に限って見るならば、No.2を除けば、Ⅲ層中の遺物には多少の移動はあっても大きな移動は認められない。従ってⅢ層は群別資料の割合関係では、二次堆積層的・擾乱層的様相を呈しているが、Ⅲ層中の遺物は原位置より平面的には大きさではなくと考える。Ⅰ層と造構間の接合No.7は約40mと非常に離れている。No.7の造構が埋設土器で原位置を保っている点、P-11グリッドの方が埋設土器より標高が高く、埋設土器からの流出は考え難い点より、耕作等によって運ばれたものであると考える。従ってⅠ層中出土の遺物は、平面的にも原位置からかなり